爪

柴田富佐子

ＪＲの高架沿いに、勾配はそれほど急ではないが、かなり長い坂がある。まだ鉄道が開通しなかった明治の初めには高架になっている所は土手で、一本大きく枝を張った松が生えていた。それでこの坂は「一本松坂」と言い慣らされ、今はつまって「一松坂」と呼ばれている。

この「一松坂」を下りきって左へ曲がり、少し行った所に「稲田酒店」はある。

店主の耕三は、若い頃にはビール函を積んでさえこの坂を自転車で上りきれたものだが、今は空荷でも自転車を押して上る。

（無理をするこたあない）

線路と反対側の歩道を、ゆっくりゆっくり上っていくのだが、少し荷が重いと、一気には上れなくなった。途中で休む度に、体力の衰えを身に染みて感じながら、

（ああ、もう坂の上の配達は止めよう）と思う。

息子の良夫なら、車で一分とかからずに上ってしまうのだから、良夫に任せておけばいいのに、良夫の留守に急ぎの配達が入ると黙っていられず、つい、立ち上がってしまう。

「いいじゃないの、待たせておけば。すぐ持って来い、なんて、言う方が悪いんだから、良夫が帰って来るまで待って貰いなさいよ」

妻の康子はそう言って止めたのだが、

「なに、大丈夫だ。ゆっくり行って来るから」

「本当に貧乏性なのねえ」

若い頃と同じサイクルで一日中動いている夫を、六十過ぎてもそれほど衰えているとは思えなかった康子は、自転車の荷台にビール函を載せて出ていく耕三を黙って見送った。

それから三、四十分して，若い男が店へ飛び込んで来た。

「大変だ、大変だよ、小母さん」

冷蔵庫に缶ジュースを補充していた康子は、冷蔵庫の扉を開け放ったまま店先へ駆けつけた。

「小父さんが、坂の途中で倒れた。救急車はもう呼んだけど、煙草屋の小母さんが、すぐ来てくれって」

「直美さん、店、頼んだわよ」

奥にいる筈の嫁に声をかけて、康子は若い男の後を追った。

坂の中途に人垣が出来ていた。

「どいて、どいて」

若い男が立っている人々を押し退けて康子を前に送り出してくれた。煙草屋の小母さんが、かがみ込んでいた体を起して康子を見た。

小母さんの膝の前に、耕三が横向きに倒れていた。すぐ脇の車道には、横倒しの自転車が投げ出され、ビールビンの破片があたり一面に飛び散っている。

「動かしちゃいけない、と思ってね」

小母さんは体をずらして、康子に場所を譲った。名前を呼んでも、耕三は何の反応も示さなかった。康子も何故か動かさない方がいいような気がして、耕三の肩にかけた手を引っこめた。ただ、路上にじかに顔を押しつけている耕三が哀れで、前掛けを外し、耕三の頭をそっと浮かせてその下に滑り込ませた。煙草屋の小母さんが向う側を引張ってくれたので、前掛けは耕三の肩の下まで進んだ。

若い男は、坂の上にある専門学校の学生であった。学校を出て坂を下りかけた男のすぐ脇を、自転車が一台通り過ぎた。と思ったら、急ブレーキをかける音がし、同時に自転車が横倒しになった。荷台の函に入っていたアキビンが投げ出され、激しい音をたてた。

坂を歩いていた人々が駆け寄った。自転車から転がり落ちた男は、両手で胸を抱えて倒れたまま動かなかった。

誰れかが「救急車」と叫び、誰れかが学校の前にある電話ボックスへ走った。そこへ坂の下にある煙草屋の小母さんが駆け上って来た。

「ちょうど用事で店を出た時、上の方でガラスの割れる凄い音がしたのよ。何だろうと思って上って来たら、酒屋さんが倒れているんだもの。もう、びっくりしちゃった」

耕三の脚の上に落ちて来た街路樹の縮れた落葉を取除きながら小母さんは呟くように言った。しゃがんだまま康子は街路樹を見上げた。車道の上に伸びた枝の先の方にだけ、茶褐色の葉が五、六枚垂れ下っている。その中の一枚が、また耕三のまるめた背に柔かく舞い下りて来た。康子は右手でそれを摑みとり、力一杯握り潰した。

枯葉は軽い手応えを残して粉になった。

不意に涙が溢れた。

遠くで聞えていたサイレンの音が、坂を駆け上って来

た。担架で運ばれる耕三の後について、康子も救急車に乗った。

耕三は心筋梗塞だと言われ、緊急集中治療室へ運び込まれた。意識のないまま丸二日、人工心臓の助けを借りて辛うじて生命を繋いでいた耕三は、三日目の朝、呼吸を停めた。

枕元のテレビの画面に写しだされた心電図の波が、その瞬間、すっと一直線になった。

心臓の発作は今回が初めてではなく、これまでにも小さいものが何回かあった筈だ、と医者に言われたが、康子は、

「さあ、気がつきませんでした。申訳けありません」

と頭を下げるほかなかった。

耕三はもともと我慢強い性格であったし、医者嫌いであった。多少の胸苦しさや痛みは、仕事の手を止めて茶の間で一休みすれば治っていたのだろうか。忙しさにかまけ、耕三と病気を結びつけて考えるなど、康子には思いも寄らない事であった。

（何で言ってくれなかったの。言ってくれなきゃ、判らないじゃないの）

表情を失った耕三の顔は、見慣れた顔よりずっと老けてみえた。

火葬場の建物は、新築されて間もないようだった。入口を入ると広いエントランスがあり、頭上の眩いシャンデリアや二階に真直ぐ通じるエスカレーターは、ホテルと見紛うばかりで、凡そ火葬場とは不似合いの豪華さであった。

紺の制服姿の案内係に先導されて、人々は二階の待合室へ入った。すぐビールやジュースの飲み物とアラレやさきいか、ピーナツを盛合せた皿が配られた。ゆったりした椅子に腰を下すと、ここ六日間の疲れがじわじわと腰に集まって来て、康子は自分の体が尻から柔かいソファに沈みこんでいくような気がした。

「疲れた顔して、大丈夫かい」

遅れて入って来た良夫が康子の顔を覗きこんだ。

「組合や町会の人達には、俺が挨拶しとくから、少し休んでいなよ」

「うん」

テーブルの上のビールビンを片手に、良夫は奥の方にかたまっている町会の人達、同業組合の人達の方へ行った。

余りに急な耕三の死だったので、話題はその事に集中しているようだった。

「でもまあ、こんな立派な跡取りがいるんだから、後の心配がなくていいよ」

組合長の声が聞えた。

老眼がすすんで、細かい字を見るのは億劫だと言って、

耕三は帳面をすっかり良夫の手に渡していたし、自分は店へ来る問屋やメーカーの外交さんの相手や康子と交替に店番をする位で、体力のいる仕事は大方良夫が受持っていた。だから急に耕三がいなくなっても、店の仕事にさして支障はない。

すっかり一人前に、人々の間をビールを勧め酒を注いで短かい会話を交している良夫の姿を、遠くから頼もしく嬉しく見守っているうちに、康子の頭は比重の重い気体のように、ゆっくりゆっくり拡がる眠気に次第に覆われていった。

どの位の時間が経ったのだろうか。

「可哀相に、よっぽど疲れたんだね、いいから少し寝かしといてやんなさいよ。今度お母さんが倒れたら大変だ」

「すいません」

声をひそめて交わしている話声が、康子の意識を少しずつ目覚めさせた。

体がだるかった。着慣れない喪服のせいか、肩が張って痛みさえ感じる。座り直してから、康子は疲れた時にいつもするように、右手で左肩を摑み、指に力を入れた。それから手を替えて右肩を揉んだ。いつか隣りに座った良夫が、体を横に向け、後から手を伸して康子の肩を摑んだ。

「いいよ。いいよ。人前でみっともない」

康子は肩をずらしたが、良夫は手の動きを止めなかった。

「もう治ったから、大丈夫だってば」

両手で良夫の腕を押え、その手首を促えた。良夫のやさしさが素直に心に染みていた。

仕事がら節くれだった良夫の手の感触が、耕三のそれに似ていた。体の割に短かい指の関節と関節の間の肉が、いかにも柔らかそうにふっくらしている。

「あんたの指、お父さんにそっくりだねぇ」

「指でもさあ、そうしげしげ見られると恥しいよ」

良夫は手を引っ込めようとしたが、康子は離さなかった。

「爪の形まで、そっくりだよ」

爪の生え際にも、爪の先にも丸味がない。

その角張った爪の先が、良夫が手を引こうとした拍子に康子の手の甲を掻いた。

「いたっ」　口の中で康子は叫んだ。その傷みは、思いがけず古い記憶を掘り起した。人差指の爪には、小さな割れ目がいくつか出来ている。

「ビール函のせいかなあ、いつの間にかそんなギザギザになっちゃうんだよ」

康子は邪険に良夫の手を押し戻した。

硬ばった体の底から吹き上げてくる熱気で血管が膨れ、ぐんぐん速まる鼓動が顳顬に響いた。

上気した顔を隠すように俯向いて康子は立上った。

「どうしたの」

良夫が聞いた。

「暖房が利き過ぎてる」

ドアの方へ行きかけて、康子は戻って来た。

「手の爪ぐらい、いつもきれいにしとくもんよ」

良夫の耳元で囁き又歩き出した康子は、初めて耕三の死を実感していた。

マンション管理人（二）

太田和貞

私の予感は当った。
パトカーから降りたふたりの男は、真直ぐに管理人室に向ってきた。私は受付の窓ガラスを開けた。
「五階の佐伯さんの部屋にいかしていただきます」
と私に名刺を差し出した。
「はい、どうぞ。そこのエレベーターを使ってください」
私は椅子から立ちあがって、両手で名刺を受け取った。その名刺には柴田義雄、盗犯捜査第一係長、警視庁警部補と印刷されていた。
「帰りに、管理人室に寄らせていただきます」
刑事たちはエレベーターに乗った。

「部屋には盗られるような物はなんにもありません」
といっていた佐伯に、私はまんまと一杯食わされたような気がしてならなかった。
「佐伯さん」と私が呼び止めたのを無視して、エレベーターに入ってしまったことや電話を掛けても、電話口に出てこないことから佐伯は私を避けているようだったが、私は佐伯と今回のことで話がしたかった。
（盗んだ奴は誰なんだろう）
ガス工事終了後、工事で汚れた廊下を綺麗に掃除をしていったあの三人が人の物を盗むとは私には到底、考えられなかった。
マンションの前の通りに停っているパトカーをぼんやり眺めているうちに、
（私も容疑者のひとりだ）
と、気付いて愕然とした。
佐伯の部屋に入ったのは、私とガス工事をした三人の合計四人だった。その四人のうち、私は佐伯から部屋の鍵を預っていたから自由に部屋に出入りすることができた。考えようによっては、私に濃厚な嫌疑がかかっても不思議ではなかった。
そう気付いて、私は慌てた。
佐伯から鍵を預ったとき、まさか、こんなことになろうとは思ってもみなかった。
私の無実を証明できるのは、私しかいなかった。その上、下手をすれば折角務め始めたこのマンション管理人も辞めさせられるかも知れなかった。
私はノートに書いていた日誌を読み始めた。務め始めということもあって、私としては珍しく、日誌をやや詳しく書いていた。その日誌を読み返しながら事件当日のメモをつくった。
そのメモができあがっても、刑事たちは降りてこなかった。
私はドアのかげに、椅子を二つ用意した。ここに座わって貰えば、受付の窓ガラスから中を覗き込まれない限り、刑事たちの姿を見られる心配はなかった。
刑事たちがエレベーターから降りてきた。私はドアを開けて管理人室に刑事たちを入れた。
刑事たちはお茶をうまそうに飲んだ。
「管理人さんは、ここに務めて何年になりますか」
係長が聞いた。
「先月の二十八日から務め始めたばかりですから、まだ一週間も経っていません」
私は苦笑しながら答えた。
その苦笑の中に一週間もならない内に盗難事件に私を巻き込んだ佐伯への皮肉をこめていた。
「その前のお仕事は」
係長は畳掛けて聞いてきた。
「巣鴨スポーツセンターで五か月間、清掃員をしていました。その前は教育委員会の文化財係で五年間、文化財保護指導員として務めていました。その前は、区立中学校の校長でした」
私は一気に私の経歴をしゃべった。
校長と聞いて、係長の表情が変った。
「校長先生をなさった方がなぜ……」
係長が絶句して、私の顔をみた。
「本の出版資金が欲しかったからです」
私は正直に答えた。五か月前、清掃員になって、さんざん苦労したのも、『江戸川区の古文書をよむ』の続編を出版するためだった。五か月間、務めたスポーツセンターが改装工事で休館になるので、清掃会社の所長が私

をマンション管理会社に推薦してくれたのだった。
「最初の出版のときは、私の退職金を使いましたが、今度は自分の汗で自分の本を出版しようと決心したので、清掃員も管理人も平気です」
私は係長の顔を見詰めて答えた。
「先生の経歴をメモして、私にいただけますか」
係長は、私を先生と呼んだ。
「ええ、いいですよ」
私はメモ用紙に経歴を書いて渡した。
「校長先生をなさっていて、いろいろとご苦労が多かったことでしょうね」
「そうですねえ。学校が荒れたときは、校長がいちばん、つらい立場にたたされます」
と答えてから、
「一体、何が無くなったんですか」
と聞いた。
「佐伯さんから署の方へ盗難届が出されましたから」
係長はことばを濁した。
「私には、盗られるような物はなんにもありませんと、いっていたんですよ」
私は佐伯に対する不満を係長にぶつけた。
「ええ、大事な物がなくなったといっていましたが」
係長は、そう答えるだけだった。
「ところで、先生が知っていることをお話していただけますか」
係長は、いよいよ本題に入ってきた。私は、日誌とメモを見較べながら、佐伯から、「点火ランプがつかない」と部屋に呼ばれたときからガス工事が終って、佐伯の部屋のドアの鍵をしめたときまでを詳しく話をした。
ただ、廊下の奥の部屋に二つ敷かれてあった布団を見て、一瞬なまめかしさを感じたことは黙っていた。
私は寝室を覗くために、廊下を歩いていったのではなかった。私が部屋に入ったのも知らずに、奥の部屋で佐伯が休んでいたのでは、申し訳ないと思ったので、「佐伯さん」と声を掛けながら覗いたのだった。
二つ敷かれている布団を見て、私はドキッとした。
赤い枕カバーを掛けた小さな枕が、いかにも扇情的に私には見えた。
私は慌てて廊下を引き返し、風呂場で水を出していた工事人に、「どうですか、お湯になりますか」と声を掛けたのだった。
私の話が一段落したとき、係長は、
「その日誌を見せていただけますか」
と聞いた。
「ええ、どうぞ」
私は係長に日誌を渡した。
「このように、日誌を書くようにと会社からいわれているのですか」

と係長は重ねて聞いた。
「いいえ、私が教頭だったとき、学校日誌を記入していましたから、その習慣からだと思います。何かあったときという思いも、ない訳ではありませんでしたが、こんなに早く役に立つとは思ってもいませんでした」
「たいへん、参考になります。コピィーしたらすぐお返ししますので、しばらくお貸し願えませんか」
係長は手にした日誌を離さなかった。
刑事たちが帰ったあと、私はしばらくぼんやりしていた。私がただの管理人ではなく、元校長だったことを話せたのは（よかった）と思った。
「校長や教頭の経歴を書いては、どの会社も雇ってくれないと思いましたから、私が管理職だったことは伏せてあります」
とも係長に話をした。
「工事にきた三人のうち、部屋でひとりになったのは誰でしょうか」
係長から聞かれても、私には答えようがなかった。最初の工事人を部屋に入れてから管理人室に戻ってきたとき、二人目の工事人が管理人室の前に立っていた。その人を再び佐伯の部屋に案内したのだった。
そのたかだか、二分間か、三分間の短い時間、最初の工事人がひとりだったことは分かっていても、そのあとのことは何も分からなかった。
エレベーターから降りてきた佐伯が、私の視線を避けるように、足早に玄関から出ていった。
背が高く、すらっとしているその後姿から、
（もしかしたら、佐伯はバレーの選手だったかも知れない。そうだとしたら、大事な物というのは、佐伯がバレーで優勝したときのカップか）
と思ったりした。
（しかし、あの三人はバレーをやるような体格ではなかった）
と私は思い返していた。
佐伯の部屋のダイニングキッチンのテーブルの上に、文庫本が一冊載っていたことや食器棚の左の隅に文庫本が五、六冊重ねて置いてあったことが記憶に残っていたが、私には何が盗まれたのか、見当もつかなかった。
刑事が来たことを報告するため、本社の小山に電話を掛けた。休暇と聞かされて
（なんだ、また休みか）
と、私は舌打ちした。
翌朝、家を出るとき、教育委員会から出版して貰った「古文書にみる江戸時代の村とくらし」シリーズの『鷹狩り』、『街道と水運』、『黒船来航』と自費出版した『江戸川区の古文書をよむ』の四冊を私は鞄に入れた。
いつもより、ずっしりとした鞄の重みが手に掛ってきた。この重みが私の無実を証明してくれるのだと私は信

じたかった。
管理人室に着き、私は小山に電話を入れた。
私の事情説明に、小山は
「鍵を預かるのは、まずかった。鍵は預からないことになっている。それに、ガス工事が終るまで、部屋にいたらよかったのに」
とまで言った。
「鍵は預からないことなっている」といわれても、私は小山から何も指導されていなかったし、工事が終わるまで部屋にいたとしたらマンションの掃除はどうするのかと反論したかったが、私は黙っていた。
私が予想した通り、マンションの掃除が終ったとき、小山は管理人室にやってきた。
もう一度、事件の経過を説明したあと、
「会社にも、小山さんにも隠していましたが、私は中学校の元校長です」
私が言った一瞬、小山の表情がとまった。
「この四冊の本は、文化財係に務めていたとき、私が書いた古文書の本です。『江戸川区の古文書をよむ』の続編を出版したかったので、私は清掃員になったり、マンションの管理人になりました」
私は中学校の元校長から清掃員やマンション管理人に変身した理由を説明した。
『江戸川の古文書を読む』のあとがきを開いて、私は小山に手渡した。
「ここに、数学教師だった私が、なぜ古文書にのめり込んでいったかが書いてあります」
「会社も、私も管理人さんが盗んだとは、ちっとも思っていませんよ」
あとがきを読んだ小山は、私に言い訳を言った。
「私が中学校の校長だったことを話すつもりは毛頭ありませんでした。しかし、今回は盗難事件ですので、私を信用していただくために、お話ししました」
「校長先生からマンションの管理人になるのには、随分と決心がいったでしょうね」
「ええ、まあ。退職校長の中で、清掃員やマンション管理人になったのは、きっと私ひとりでしょう」
と、私は笑った。
私が元校長と聞いて安心したらしく、小山の表情は、管理人室に入ってきたときの険しさが無くなり和らいでいた。
「刑事さんが、きのうきたばかりで事件が今後、どう展開するか分かりませんが、その都度ご連絡します」
と私は小山を送り出しながら言った。
「何が盗まれたのか、分かるといいですねえ」
小山は、そういいながら帰っていった。
私は、小山にお茶を出さなかった。
「鍵は預からないことになっている」と言ったり、

「工事が終るまで部屋にいればよかったのに」と言ったりした小山に、
(私ならこんな言い方はしない)
という反発があった。
小山を見送って管理人室に戻ろうとした私を、「管理人さん」と四階の水産会社の兄弟が呼びとめた。
「きのう、マンションの前にパトカーが停っていたけど、何かあったんですか」
「いいえ、なんにもありませんよ。最近、屋上からの投身自殺が増えているから、屋上への出入口の鍵を掛けて置くようにと指導されて、屋上を見せただけです」
私は、しらを切った。
「あっ、そう。このマンションに泥棒が入ったのかと思った」
兄弟は顔を見合わせて笑ったあと、エレベーターに乗った。
(マンションの人たちは、見ていないようでも、ちゃんと見ているんだ。だから、今回の盗難事件は絶対に、そとに漏らさないようにしよう)
と私は心に決めた。
刑事や小山に、私が元校長だったことを思い切って話したので、私に対する容疑は一応はれたものの私の心は浮かなかった。
元校長だったと話したことが、私には不本意だった。
さらに、私が立会った部屋で盗難が起ったということが、私には不愉快だった。それに、(犯人は誰だろう)とあの三人を疑うのは、私には悲しかった。
(やめた。やめた。考えるのはやめた)
私は頭を振って、頭の中に巣くっている盗難事件を追い払おうとした。
受付の窓ガラスから見える通りの状況が急にあわただしくなった。小型自動車から降りてきたふたりの婦人警官が違法駐車している自動車の間を小走りに駆け回り、チョークで路上に何か書き始めた。
私は兄弟の水産会社に電話を掛けて、
「違法駐車の摘発をしていますよ」
と教えた。
兄弟がエレベーターから降りてきた。兄が「ありがとう」と右手を挙げた。兄弟は通りに飛び出していき、駐車してあった冷蔵車を運転して、通りから消えた。
車輛移動班という黄色い標識を立てたレッカー車に吊り下げられた自動車がマンションの前を通った。
(間に合ってよかった)と私は思った。
築地魚河岸に近いこの通りでは、違法駐車が絶えなかった。日に二、三台の自動車がレッカー車に引かれていく姿を私は窓ガラスから見ていた。兄弟が運転していた冷蔵車も違法駐車だった。
兄弟の冷蔵車が無事だったので、私の気持ちもなんと

なく晴れた。
そこへ、「管理人さん」とおどけた口調で、橋口が受付のガラス窓を覗き込んだ。
「管理人さん、陶器はお好き」
と、私に聞いた。私は無言で、うなずいた。
「これ、三千円はするのよ。それをバーゲンで八百円で買えたので、私嬉しくて」
私にひさご形のお銚子をみせた。やや小振りの姿のいいひさごは全身を藍色で粧い、くびれた腰と注ぎ口を金色の線で飾っていた。
「これで飲むと、お酒もうまいでしょうね」
と私は褒めた。
「そうなの。主人はお酒が好きだし、私も飲めるの」
橋口は、いたずらぽく笑った。
「ご夫婦円満で結構です」
と私は茶化した。
「私、嬉しくて」
橋口はお銚子を顔の前にかざしながらエレベーターに乗った。
「チャリンコ」と言って私を驚かせた橋口は、
(案外、淋しがりやで、人が恋しいのかも知れない)
と私は思った。
部屋に入れば、ひとりぼっちになる淋しさに、酒器を買い求めたことが嬉しくて管理人の私に声を掛けたのだろうと私は思った。
管理人室の受付の窓ガラスは小さかった。しかし、その前を通る人の姿と心とを私はしっかりと見詰めたいと思った。そうすることが、前任者が「格子なき牢獄」と酷評した、この管理人室を「人間劇場の特別席」に変えることができる唯一の方法だと思っていた。
管理人室の前のエレベーターの扉が開いても、誰も降りてこないことがあった。
最初、そのことに私は気付かなかった。エレベーターの扉が開いて静かに閉じるのは、妙に無気味だった。
そのうち、マンションの入居者の顔を見覚えるにつれて、からのエレベーターが降りてきて、扉を開閉するのは特定の人がエレベーターに乗ったときだけだと気が付いた。
驚いたことに、あの橋口がエレベーターに乗ったとき、必ずエレベーターが降りてきて扉が開いて、そして閉まった。
三階の新井が乗ったときも、同じだった。
橋口と新井はエレベーターから降りるとき、一階の表示ボタンを押して、エレベーターを下に降しているようだった。一階の表示ボタンを押すか、押さないかは、ほんの些細なことであっても、心のやさしさは大きく違っていた。

あの橋口に、そのようなやさしさがあるのを知って、私は橋口を見直していた。
新井は物静かな中年女性で、築地のがんセンターに通って放射線治療を受けているようだった。
「主人が倒れたとき、前の管理人さんに救急車を呼んでいただいたことがあります。主人が弱いのでご迷惑をお掛けすることもあるかとも思いますが、どうぞ、よろしくお願いします」
と丁重に挨拶されたので、新井の顔を見る度に私は救急車を思いだしていた。
ご主人が病弱、新井自身もがんを患い、子供もいないようなので、どんなに心細い毎日だろうかと私までが悲しくなった。
私が玄関の掃除をしている頃、新井はエレベーターから降りてきた。きちんとした服装を身につけ、私に丁寧に会釈をしてがんセンターに出掛けていった。
その髪型が余りにも整っているので、
(放射線治療で髪の毛が抜けているのかも知れない)
と思ったりした。
十一時頃、新井は帰ってきた。マンションの斜め前の横断歩道をそろり、そろりと足を運ぶ新井の姿を見つけて、私は管理人室を飛び出していき、新井の手をとった。
「ありがとう」
新井の声は弱々しかった。
「放射線治療を受けて制がん剤を飲むので苦しくて」
新井は喘ぎながら言った。
「ご主人は奥さんを頼りにしているんですよ。元気を出さなくちゃ」
私は、わざと陽気に言った。
「そうですね。私が倒れたら、主人と共倒れになりますものね」
新井は私の顔を見て笑った。
「部屋までお送りします」
という私のことばを遮って、新井はただひとりでエレベーターに乗った。私は玄関に立ってランプが1、2、3と右に点滅して移っていくのを見詰めていた。3のランプが消えて順次2、1と左に点滅しながらエレベーターが戻ってきた。扉が開いた。誰も乗っていなかった。扉が静かに閉まった。
(お大事に)と、扉の閉まったエレベーターに私は頭を下げた。
その日の午後、柴田係長が日誌を返しにきた。係長の顔を見て私はすぐ、「パトカーは」と聞いた。
「先日、先生からお電話をいただきましたので、きょうは自転車に乗ってきました。その自転車も離れた所に停めてあります」
係長のことばに、私は安心した。
「今度、パトカーでくるときは、マンションから離れ

た所に停めてください」
私は係長に電話を入れて、パトカーを見た水産会社の兄弟から、
「泥棒が入ったんですか」
と聞かれたことを話ししていた。
「日誌をありがとうございました。ある窃盗事件で、管理人さんの日誌が役に立って犯人を逮捕したことがあります。今回も先生の日誌という有力な資料がありますので、犯人逮捕といきたいところですが、三人とも知らぬ、存ぜぬとがんばっています。なに、今におとしてみせます。ポリグラフにかければ三十万という大金を盗んだことは隠しようもありませんからね」
係長は夢中で、私に話し掛けていた。私は係長の口許を見ていた。係長が一息いれて、お茶を飲んだとき、私は口を挟んだ。
「私は耳が悪いので、係長さんが言ったことは聞こえませんでした。三十万円盗まれたということも聞えてはいません」
「いやぁ、喋っていて、しまったと思いました」
係長は頭を掻いた。
私に、「しまった」という表情を見せれば、「三十万という大金を盗んだ」ということばに私が気付くのを恐れて、係長は延々と話を続けていたのだった。
「お金の窃盗事件を調べにきた係長さんに、『お金が欲しかったからです』といった私もまずかったですね」
私は苦笑しながら言った。
「いや、いや。そんなことはありませんよ。いくら、お金が欲しかったと言われても、お金を盗む方か、そうでないかは、すぐ分かりますよ。きょうは話に夢中になって失言してしまいました。どうか忘れてください」
「ええ、勿論ですとも。私も元教師でしたから、職務上、知り得た秘密は漏らしてはならないということは知っています」
その後、しばらく雑談してから係長は帰っていった。
「お送りしませんから」
と断って私は係長を見送らなかった。係長と一緒にいるところをあの兄弟に見られて、
「きょうは、なんですか」
と聞かれたとき、先日のように咄嗟にうまい嘘がつけないことを私は恐れた。
「一緒に捜査に当っていた相棒が転勤になりましてね。これには、ちょっと弱りました」
帰り際にいった係長のことばが、私には気になった。
それにしても、「部屋には盗られるような物はなんにもありません」といって置きながら三十万円もの大金を部屋に置いていた佐伯の神経が私には分からなかった。
「猫に鰹節」。鰹節に手を出したネコも悪いが、ネコの前に鰹節を無造作に放り出して置いた佐伯の方が、もっと悪かった。
佐伯が私に顔をそむけたことや電話のベルが鳴っても、電話口に出てこようとしない佐伯の態度が私にもようやく理解できた。
「部屋には盗られるような物はなにもありません」
と言ったことばの重みを、佐伯は佐伯なりに感じとっているに違いないと私は思った。
佐伯の部屋で三十万円の大金が盗まれたことが噂になって広まれば、佐伯の恥になるばかりでなく、このマンションにとっても悪い評判になるので、なんとしても、秘密のうちに問題が解決されることを私は望んだ。
小山にも（三十万円が盗まれたことは黙っていよう）と私は思った。
エレベーターの扉が開いた。
扉にダンボール箱を一個、つっかい棒がわりに置いて兄弟がエレベーターの中のダンボール箱を玄関に運び始めた。私は管理人室から出て、兄弟を手伝った。
ダンボール箱には、オヒョウと大きな字で印刷されていた。玄関に積みあげたダンボール箱を通りに駐車してある冷蔵車に運び始めた。
「うちは給食用の材料の卸をしているから、あまり景気のよしあしには関係しない」
私と並んでダンボール箱を運んでいた兄の方が私に言った。
「その代り、景気がいいときも、うちは変らない」
という兄に、
「商売って難しいんですね」
と私は驚いて見せた。
「ありがとう」と兄弟は私に礼を言って、冷蔵車を走らせていった。しばらく、その冷蔵車を見送ってから、私は管理入室に戻った。
管理人室の前に、ひとりの中年女性が立っていた。近付いていく私に笑顔を見せて
「先日は本当にありがとうございました。電話をいただいたお陰で、うちの車は捕まらないですみました」
と礼を言われた。顔が兄弟と似ているので（母親だ）と私は思った。
「早くお礼をと思いながら、ついつい遅くなって申し訳ありません」
と言いながら、私に紙包みを渡そうとした。
「お礼なんて」
と私は辞退したが、
「ほんの私の気持ちですから」
と言って、母親はエレベーターに乗ってしまった。
私が管理人室の椅子に座わって、紙包みを開けようとしたとき、エレベーターが降りてきて、扉が開いた。誰も降りてこなかった。
（ああ、あの方もボタンを押していたんだ）

と思ったとき、扉が閉まった。

その日は朝から雪が降っていた。

「長靴を履いていった方がいいわよ」

という家内に

「銀座を長靴で歩けるか」

と反発して私はいつものように革靴を履いて家を出た。

路上に積もった雪に足をとられて、私は何度も転びそうになった。その度に、（長靴を履いてくればよかった）と私は後悔した。

家内に黙っていたが、五日程前から両膝が痛み出していた。秋葉原駅と有楽町駅の階段を降りるとき両膝が痛くてつらかった。その痛さから階段を降りるときに、体重が両膝に掛かることを私は改めて思い知らされた。

銀座には雪が十センチ程、積っていたが、高いビルディングの前の舗道には雪が積もっていないところもあった。私は雪が積っていない舗道を選んで歩いた。

（両膝が痛むのは、日本で一番、地価が高い銀座の街を歩いているからだ）

私は自嘲気味に、そう思っていた。

雪に足をとられて、私は舗道に両手をついた。

舗道に四つんばいになったとき、両膝の痛みの原因が分かった。雨の日、マンションの廊下の掃除に、堅い床に両膝をついて、長靴の黒い靴跡を拭き取っていたからだった。堅い床に両膝と両手をついて黒い靴跡を拭き取る姿勢では体重が両膝に掛り、そのために両膝を痛めたのだと気が付いた。

転ばないように、注意しながら銀座の通りを歩いた。

ようやく、管理人室の椅子に座わった途端に汗がドッと噴き出してきた。

マンションの廊下は雨の日と同じように、長靴の靴跡で汚れていた。私は水を濡らしたモップと乾いているモップを持って廊下の掃除を始めた。痛めた両膝をかばうためでもあったし、四つんばいになって掃除をする自分の姿に、屈辱感を感じていたからでもあった。

黒く汚れた靴跡を濡れたモップで根気よくこすって消し、乾いたモップで床の水分を拭きとった。

雪の道でエネルギーを使い、廊下の靴跡の汚れをおとすのにてこずり、掃除が終って管理人室の椅子に座わったとき、私にはもう何をする気力も体力も残っていなかった。ただ、ぼんやりと受付の窓ガラスから雪が降り積もるのを見ていた。

水産会社の弟が外から玄関に駆け込んできた。私の顔を見て、笑いながらコツコツと窓ガラスを叩いた。

窓ガラスを開けた私に、

「管理人さん、退屈じゃないの」

と聞いた。

唐突な質問に、私はめんくらった。

「いいえ、退屈じゃありませんよ」

「そうやって、一日中、狭い部屋にいて、よく退屈しないね」

と、重ねて言った。

（そうか。そんなふうに私を見ていたのか）

私は、私なりに玄関を通る人たちを人間劇場の登場人物と見立てて観察していたのに、その登場人物は、私を管理人室という檻に入れられて、

（さぞかし、退屈しているだろう）

と、見ていたようだった。

「車が雪でスリップして大変だよ」

そう言い残して、弟はエレベーターに入っていった。

午後になっても、雪は降りやまなかった。

受付の窓ガラスから見える景色が白一色になった。自動車がノロノロと動いていた。

橋口が帰ってきた。自慢の雨傘に積もった雪を傘を閉じたり、開いたりして払い落としてから真直ぐに管理人室にやってきた。

「管理人さん、きょうは大雪になるんですって」

といってから、

「電車が動いているうちに帰った方がいいわ。主人の会社も女性社員は帰宅させたのよ。私は主人のために、会社に長靴を届けて帰ってきたところ。私が理事長さんにお電話しましょうか」

「あっ、いいえ。私が電話します。ラジオもありませんので、雪で交通機関が止まるとは思ってもいませんでした」

「お家に帰れなくなったら大変でしょ。早くお帰りになった方がいいわ」

とまで言ってくれた。

橋口が乗ったエレベーターが動いてから、私はすぐ西川に電話を掛けた。橋口の名前を伏せて、マンションの人から、

「大雪になるので電車が止まらないうちに、帰った方がいい」

といわれたことを話した。

「ええ、そうして。雪で電車が止まるそうよ」

と、すぐ承諾してくれた。

マンションの巡回を手早くすませて、私は管理人室を出た。

風に煽られた雪が顔に吹きつけてきたが、思い掛けず早く帰れる嬉しさに、私の顔は笑っていた。

（檻から出られた）

という思いが強かった。

きのうの大雪は交通機関を麻痺させ、都会の人を転倒させて骨折による入院患者二十五名という新聞の大きな見出しをつくった。

私も舗道に積った雪を片付けるのに、殆ど一日かかっ

てしまった。雪の片付けが終って、顔を洗っていたとき柴田係長が管理人室に入ってきた。
「きのうは大変な雪でしたねえ」
「ええ、子供の頃は楽しかった雪も大人には楽しいものではありませんね。雪片付けが仕事となると、なおさら、つらくて悲しくなります」
私がお茶をいれようとするのを係長はとめた。
「先生からお聞きしたことを書類にしてきましたのでお読みいただいて、よろしければ署名と押印していただけますか。いや、これは決して調書というのではありません」
係長は、やや早口で言った。
私は係長に椅子をすすめ、書類に目を通した。
先日、私が話した状況が要領よくまとめられていた。
「はい、これで結構です」
私は係長の顔を見て、うなずいた。係長の言う通りに署名し、押印して書類を返した。
「新聞でご承知のように、管内で発生した強盗事件に手を取られて、なかなかこちらの方に手が回りません」
係長は、ぼやきながら帰っていった。
（私の出番は終った。あとは警察に任せるだけ）
そのとき、私はそう思った。
玄関に向って真直ぐに入ってくる男たちの姿を見て、私は直感的に、（刑事だ）と思った。
男たちは管理人室に寄らずに、そのままエレベーターに乗った。エレベーターのランプが四階で停まったので
（やはり、佐伯のところに来たんだ）
と私は思った。
小一時間程して、男たちはエレベーターから降りてきて、通りに出ていった。
私も管理人室から出て男のあとを追った。ちょうど、魚河岸から帰ってきた斉藤が自転車から降りるところだった。
横断舗道を渡った男は、こちらに向き直ってうちのマンションの写真を撮り始めた。
「写真を撮るのはやめろ。なんで、うちのマンションの写真を撮ってるんだ」
斉藤は男に向って怒鳴った。
「警察だ。このマンションで盗難があったので、捜査のため写真を撮っているんだ」
と、男が怒鳴り返した。警察と言われて、ひるんだ斉藤は太った体を左右にゆすって玄関に入っていった。
驚いたのは、私だった。盗難があったことを秘密にしていたのに、通りを隔てて、
「盗難があった」
と大声でわめく男に腹が立った。
横断舗道を渡ってきた男を、

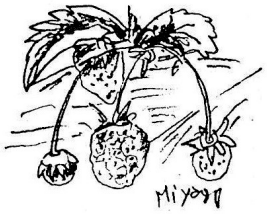
「大きな声で盗難があったと、なぜ言うんだ」
と怒鳴りつけた。
「私は管理人さんに言ったんだ」
男は私に怒鳴り返した。
「管理人は私ですよ。ちょっと、管理人室にきて」
私は男の腕をとった。
「私は管理人さんだと思ったから、言ったまでだ」
男は私の手を振り払った。
ふたりの男を管理人室に入れ、「座わって」と私は命令口調で言った。
「通行人がいる道路で、しかも、道路の反対側にいる私に聞こえる位の大きな声で、このマンションで盗難があったことをなぜ言ったんですか」
「私は管理人さんだと思ったから、話をしてしまった。それについては謝る。それ以上、私に何をしろというのだ」
と男は反論してきた。高飛車に私を押さえつけようとする男の態度が、私には気に入らなかった。
「うちのマンションと関係のない人は、写真を撮られても怒ったりしませんよ。このマンションに住んでいる人だから、なんだと怒鳴ったんでしょ。それなのに、相手の確認もしないで捜査上の秘密をペラペラしゃべっていいんですか」
「管理人さんとしては、このマンションに泥棒が入られたら困るだろうが、泥棒に入られたと知れば、マンションのみなさんも防犯に注意するでしょう」
と男は詭弁を吐いた。
「盗難に遭ったことが近所に知れたら、その人は困まるでしょう」
と私は思わず机を叩いた。
「暴行されたという破廉恥な犯罪と違って、盗難ぐらいでは迷惑になることもないだろう」
と男は平気で言った。
「私は管理人の神保と言います。あなたの名刺をください」
私は男の顔の前に手を出して、名刺を催促した。男は名刺の右肩に、きょうの日付を書いて私に名刺をくれた。
巡査部長だった。
「あなたの失言は絶対に許しません。今、あなたが言ったことを係長さんに電話します」
と断ってから係長に電話を入れた。係長は留守だった。
私は連れの刑事の顔をしっかり見詰めて言った。
「あなたが聞いていた私とこの刑事さんとのやりとりを係長さんに正確に伝えてください。係長さんから電話があって、すこしでも違う点があれば、私は署長に抗議します」
と脅しを掛けた。連れの刑事は黙って、うなずいた。
「あなたも警官としての成績が良かったから刑事にな

れたのでしょうが、残念ながら刑事としては失格です。
私はあなたが今回の事件で調べにきても、今後一切、協力しません」
と、一気に言った。
ふたりの刑事は無言で帰っていった。
「盗難事件って、なんですか」
と斉藤に聞かれるのが心配だったが、斉藤は私と廊下で会っても何も聞かなかった。
刑事から、「警察だ」と怒鳴り返されたのを怖がって黙っているのか、それとも八十歳は越している斉藤に記憶として残っていなかったのかも知れなかった。
翌朝、係長から電話があって、私がお茶の仕度をしているうちに、係長が管理人室に入ってきた。
「昨日は本当に申し訳ありませんでした。私の指導不行き届きで、深く反省しております」
係長に深々と頭を下げられて、私は困ってしまった。
「けさ、本人から事情の説明がありまして、きびしく叱って置きましたので、今後は十分に注意すると思います。本人からも私と一緒に謝りに行きたいと言っておりましたが、ひとまず、私がお詫びしてからと思い、私ひとりで参りました」
そう言って、係長はもう一度、頭を下げた。
「マンションの方に、うっかり盗難事件のことを言ってしまったのは申し訳ないと謝ってくれたら、なんでもなかったのに、謝ろうとしなかったんですよ」
私は係長にお茶を出しながら言った。
「そうなんです。謝れば、なんでもないことを謝ろうとしないで、それをカバーしようと、こじつけた言い訳をするから、ますます傷口を広げてしまったのです。本人も深く反省しておりますし、私もこれからは、いっそうきびしく指導していきたいと思っております」
と係長は言って、もう一度、私に頭を下げた。
「先生ですからお話ししますが、実は」
係長は巡査部長が再調査に見えた事情を説明してくれた。
「最初、佐伯さんから届が出たときには、話のなかったある男が出てきたのです。それで、現場の再確認ということで、きのうふたりがこちらに来た訳です。そのとき、先生に挨拶にこなかったそうですね。それも、きびしく指導して置きました。先生に挨拶さえしていれば、きのうのような重大なミスはなかったと思います。まあ、私が一緒にこなかったのが、いけなかったのですが、私は先日、逮捕した窃盗犯の取調べで手があいていませんでした」
係長の話を聞いているうちに、私は部屋に敷かれていた二つの布団を思い出した。
佐伯の年齢から考えて、あの布団は母と娘のものと考えていたが、女と男の布団だったのだ。二つの布団につ

いては、私は係長になにも話していなかった。女性用の小さな丸い枕に、なまめかしさを感じた私には恥しさが先に立って、どうしても話せなかったのだった。
「最初から正直に話ししてくれればよかったのですがねえ」
係長は溜息をついて見せた。
「しかし、ポリグラフにひとりだけ反応が出ているので、それを追及していますが、俺は気が小さいからだと言い張っています。なにか証拠が出てくるといいんですが」
私に何か思い出して欲しいという表情だった。
「国賓の警備に、私たちも動員されて捜査どころではないんです」
と、ぼやきながら係長は帰っていった。
東京で国際会議が開かれ、各国の首相が来日するので私が通勤する銀座界隈もパトロールの警官でいっぱいだった。
それから、しばらく係長から何も連絡がなかった。
二人一組になって銀座の通りをパトロールする警官を眺めて、
(今頃は、係長も忙しいだろうな)
と思っていた。
係長から電話があったのは、一月程してからだった。
「お願いしたいことがあります」
という係長の電話に、私は昼休みの散歩を止めて管理人室で待っていた。
係長はいつものように、そーっと管理人室に入ってきた。
「無事に国際会議が終って、私たちも、ほっとしているところです」
係長は私に白い歯を見せた。
「お願いというのはポリグラフを受けていただけないでしょうか。ポリグラフに反応が出た奴が、もうひとり部屋に入った者がいると言ってきかないものですから」
係長は、すまなそうに頭を下げた。
「はい、いいですよ」
私は簡単に承諾したが、心の中では、
(さすが係長だ。私に断われないように、ちゃんと予防線を張っていた)
と感心した。
「そうですか。これで私も安心しました。いつがよろしいでしょうか。先生のご都合もあるでしょうから」
「はい、いつでも結構です。でも、二、三日前に連絡してください」
「ええ、勿論ですとも。四、五日前には連絡します」
と約束して係長は帰っていった。
「ポリグラフか」
と私はつぶやいた。ガス工事をした三人のうちの誰か

に、反応が出て係長から問い詰められたとき、
「もうひとり、部屋に入った奴がいる」
と大きな声で怒鳴ったに違いなかった。
私はあの二つの布団を母娘のものと思っていた。
娘が母親の三十万円を盗んだのかも知れないと思ってもいた。
女性用の小さな枕に、なまめかしさを感じたので係長に布団のことを言い出せなかったのも事実だったが、もし、娘が母親の金を盗んだのであれば、余り事件を大きくしない方がいいとも考えていた。
（佐伯に男がいて、その男にガス工事があることを知らせてなければ、金を置き忘れても不思議ではない）
と私は思った。
佐伯の郵便受けには、ちらしや広告が入っているだけで、郵便物が一通も入っていないことを私は思い出した。
あの部屋は、佐伯にとって愛の秘密の部屋だったのだ。
（女社長さん、なかなか、やるじゃないか）
私は勢いよく椅子から立ちあがって、係長と私の湯呑み茶碗を片付け始めた。

（つづく）



唐人館同窓譚（四）

鈴木昭三

応召した滝川先生の部隊はすぐに大陸に派遣され、揚子江中流域の前線にいる時に敵の夜襲を受けました。この戦闘で、滝川先生は追撃砲の破片を、腹部と両手等に受けました。
野戦病院から名古屋の陸軍病院に移され、昭和十三年の春、小田郷村の最初の傷病軍人として、見馴れない白衣と軍帽で帰還しました。
悌三と私が小学校の三年生になったばかりの五月、こんどは、担任の中年の教師が応召され、急遽、滝川先生が小学校に復帰して、再び私達を受け持ちました。
教壇に立った最初の日、滝川先生はあの赤紙のきた日と同じ、くりくり坊主でしたが、顔は日やけし、かん骨が左右に張り出て、おまけに頬や口唇の周囲に豆つぶ程のこげ茶色の傷跡が三つ四つもあって、それらが軟体動物のように平らに光っていました。半年の間に浦島太郎のように老人くさくなっていたのです。
「やあ、みんな、ひさしぶり」
滝川先生はこう言ったつもりだったのでしょうが、聞きとりにくい発音でした。開いた口の中には、上下の前歯が五、六本見えただけでした。先生は上着の袖をまくりあげると、ワイシャツの手首のボタンをはずしました。あらわれた手首にも数カ所、傷跡がありました。生徒達は、先生の仕種にじっと瞳をこらしました。先生も又、観客の生徒に笑顔で答え一瞥すると、突然両腕を萬歳す

るように差し上げ、握っていた拳を、ぱっとひらきました。

「ひやあ」

生徒から期せずして吐息とも嘆声ともつかない、悲鳴に似たどよめきがおこりました。

滝川先生の左手は、人さし指と中指が、右手は小指と薬指がないのです。私達は、先生が手品でもしているのではないか、今に欠けた指が、にゅっと突き出てくるのではないかと、期待したのです。でもいくら見つづけても出ませんでした。

指のなくなった掌のそれぞれの切り株は、赤い餅のように肉が盛り上り気味の悪いものでした。

やっと服装をなおし、表情も昔の滝川先生らしく、やわらいだ頃、前の席の誰かが、質問しました。

「先生、とれちゃった指は、どうしただ、拾ってくればよかっただに」

「うん、拾おうと思ったけど、どっかへふっ飛んじゃった、たぶん、野良犬がたべちゃったと思うな、いたかったぞ」

「泣いたづらねえ、先生だって」

「ああ、ナイタ　ナイタ　ワタシハ　ナイタ」

先生は他人事のようにとぼけてみせましたが、私はこの時に戦争というものは痛くて、おっかないものだと心にやきつきました。

この日以来六年生迄、不自由な手つきで黒板に文字を書き続けた滝川先生の授業を受けたわけです。

昭和十六年四月、悌三と私は隣町の県立中学校に入学しました。悌三も私も小田郷村から自転車通学でした。

私達が二年生の時に、講堂で海軍の下士官の軍事講演がありました。ところが、聴講は三年生以上で、私達低学年は、その日、近隣の村の出征農家の稲刈の勤労奉仕に出掛けていました。帰宅して夕食をすました私は、川ノ前の唐人館に悌三を尋ねました。明日提出する宿題の代数の問題が解けないでいつものように悌三に教えてもらうつもりでした。ところが、あてにした悌三はいませんでした。顔なじみの女中さんは、家の人は隣町のハイヤーが迎えにきて皆留守だと言い、行先も聞いていないそうでした。

翌日、悌三は学校に欠席届けが出してありました。結局、宿題をやらずに登校した私は、代数の教師がいつもやる、運動場一周の罰を覚悟していたのですが、この日は、いつもと違っていたのです。彼は宿題はうち忘れてしまって、授業はそっちのけで、昨日の軍事講演の受け売りを始めたのです。土浦海軍航空隊での、予科練の訓練や生活の素晴らしさを、殆ど一時間語り続けて、すっかり、自分で感激してしまっているのです。尤もこの予科練の宣伝も、この教師だけではなくて打ち合せずみの

学校の方針だったのかも知れません。ともかく、この教師を有頂天にさせた講師は、隣町出身で而も中学校の先輩でもある滝川二等飛行兵曹でした。

この滝川二等飛行兵曹は、當ってのやまんわらべの敵、隣町の花廼家の太郎、あの時に悌三と私を送りとどける道中で、飛行機のりになるんだと熱っぽく語りかけたあの太郎だったのです。私は迂闊にも滝川二飛曹と花廼家の太郎が、この時頭の中で結びつかなかったのです。隣町にも滝川姓は珍しくはありませんでしたから、フルネームではない滝川二飛曹だけでは、別に気にもとめなったのです。ましてや、昨夜、悌三一家が隣町のハイヤーで出掛けたのは太郎と関連があるのでは等と詮索はできませんでした。

昭和十八年の暮でした。土曜日であるのに午後から、海兵出の士官で、艦爆搭乗員の講演がありました。彼も又中学校の先輩でした。

「滝川のたろちやんとは、所属する航空隊は違ったが、勤務上、時たま顔を会わせたんだ。生きていたかよが挨拶だ。私は中尉、たろちやんは一飛曹。でも同級生はいいもんだ、一緒に酒を飲んで中学時代を話したよ。ここからは秘密だ。たろちゃんは二式大艇という世界一の飛行艇で哨戒飛行中、ブーゲンビル島付近で、一週間前、消息をたったままだ。」

士官は南海の地図を指しながら状況を説明しました。

この日の下校時、自転車で並んだ悌三が、滝川のたろちゃんは、あの花廼家の太郎であることを、更に太郎は、戦死だと断言したのです。

「おれは、滝川太郎の仇をうつぞ」

悌三は突然自転車のスピードをあげると、あっけにとられている私を置き去りにして、小田郷村の入口の隊道の中に姿を消しました。

同じ暮で、二学期が終って冬休みの始まった頃でした。

夕方、飯を食べに来いと、唐人館の悌三から電話を貰いました。二三日前、小田川の上流で大きな猪がとれたという噂を聞いていましたので、久しぶりにしし鍋にありつけると喜んで出かけました。

唐人館の手前までくると、案の上、しし鍋のにおいがしました。悌三が案内したのは、店ではなくて乙松爺さんの住むはなれでした。

囲炉裏の、大きな鉄鍋をかこんで、主賓客は、どうも滝川先生と母堂のようです。後は唐人館の乙松爺さん、悌三、悌三の二つ年下で隣町の女学校一年生の妹、その隣が母親のソノの順でした。

「今夜はおれの味方だぜ」

悌三が耳もとでささやいて、私を隣に座らせました。反対側の隣は滝川先生です。

「ほら牛乳だ」

滝川先生が一升ビンのドブロクを、私にもたせた湯のみに音をたててついでくれました。私は、なんとなく皆の顔を一わたり見回してから、湯のみに口をつけました。その時、はなれの外で、女同士の話し声がしました。一人は、聞き覚えのあるしわがれ声でした。誰だったかなと考えている中に、

「花廼家がきたらしいな」

乙松爺さんが立ち上がりました。ハイヤーがなかったので人力車できたと、花廼家は、雪国の女のように布で顔をおおっていました。

生いき盛りの私は、大人達にまじって、さも飲みなれた風をよそおって、湯のみをあけました。冷たくて、甘ずっぱくて、すえた香りのドブロクを咽に流し込むと、その後口直しのように肉をほおばりながら、ふと、今夜の光景はどこかたで見覚えがあるような気がしました。

その時の場所もここで、人間もこの人達で。

「そうだ、この部屋でみたあの写真。滝川先生の出征の駅前の写真だ」

私は、五年前を思い出し、舞台こそ違へ今夜も全く同じ配役に、驚きながら、彼等は、私だけが知らないシナリオどおりに、演技しているのだと、薄うす気づきはじめました。

唐人館の板前で婿養子だった父親と小さい時に死別した悌三は、滝川先生を父親がわりにいつも何かと相談をかけているのですが、悌三を含めて、唐人館、滝川家、花廼家の互いの話しっぷりを聞いていると、どうも、そんな単純な関係ではなくて、もっと深い所でつながれているような感じがするのです。つまり、一族といった雰囲気なのです。私は今夜の趣向がだんだんわかってきました。悌三の予科練志願が主題です。ここにいる人達は、本人を除いて、全員予科練反対のようです。私も予科練はいやです。県内のどこそこの中学校では、クラス全員で予科練を志願したなどという記事が美談として、連日のように新聞紙上を賑わしています。私のクラスでも、がき大将が予科練志願を暴力で強制しています。いつかは、私も彼等の標的になるのではと、おびえているのです。彼等は又、配属将校に躍らされているのだという噂もあります。今夜は味方だぜと宣言された私でも、悌三のいう通りにはなれません。

「お前は、悌三とちがって、軍関係は嫌いだったな」

滝川先生は急に矛先を私に向けました。軍隊嫌いで臆病者の意見を引き出して、悌三の翻意に利用しようとしているようです。私が口ごもっている間に、悌三が威勢よくまくしたてました。ドブロクが景気づけているようです。

「お前のように、軍隊は嫌いだなんて、今はもうそんな選択の時じゃない。死ぬ勇気の、ある奴も、ない奴もお国の為に身を挺する時だ。我われは、どこにいても死ぬのだ、早いか遅いか、場所がどこかの違いだけだ」「だからといって、悌三、死に急ぐこともあるまい。中学校に未だ授業があるという事は、国家が、中学生に勉学を続けて欲しいと願っているからだよ。予科練の願書が既に出してあるなら、試験問題にはでたらめの解答をして、不合格になれ。一年がんばって、四年生になれば、大人に近い分別もつくものだ。その時、陸士でも海兵でも受ければよい」

滝川先生が終ると、以外にも母堂が悌三に頭を下げました。そして手を合わせました。

「そうです。その通りです、龍之進のいう通りです。悌三さは未だ若いだで、必ず死ぬ予科練だけは、やめておくれ。死ぬ事だけがお国の為ではないだで」

悌三は立上りました。

「おれは、飛行機に乗って戦う。お前も、先生も、お袋も、おじいも、みんな、卑怯者だ」

滝川先生も立ち上りました。私の頭上で、先生の平手打ちが鳴って、悌三が私の後に倒れました。先生は悌三の胸ぐらを片手で摑むと、たてつづけに二発程なぐりつけました。

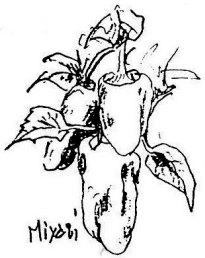
「ばかもん、太郎を殺されて、又悌三まで殺されて、たまるもんか」

滝川先生は、立ったままの涙声でした。ソノは坐ったままで目をとじていました。

周囲の者の説得、懇願も効を奉せず、結局、悌三は昭和十九年の春、予科練に入隊しましたが、二十年六月、福知山の柴電改基地で戦死してしまいました。悌三の母親ソノは大変気丈な人で、戦時中は村の青年学校の、体育と、なぎなた、竹槍を教えていましたが、悌三戦死の報にも取り乱す様子もなく、平常通り学校に勤務し、うわべはいつも爽快としていましたから教え子の女子挺身隊員に大へん人気がありました。一方滝川先生のショックは大きく、ぼう然自失、暫く学校を休んでしまいました。（未完）

「まんじ」季刊発行内規

	（発行日）	（原稿締切日）
春季号	二月一日	十二月三十一日
夏季号	五月一日	三月三十一日
秋季号	八月一日	六月三十日
冬季号	十一月一日	九月三十日



自作自解

わが作品余話

—選集第第十二巻「桃李庵のアルバム」所収作品—

（その　五）

大和禎人

「桃李庵のアルバム」

この作品には＜父真人＞というサブタイトルを付している。したがって明らかな私小説作品である。

平成改元後間もなく、新天皇の人となりに触れる朝日新聞の記事に愛読書として鳥山喜一「黄河の水」をあげられるということがあった。さらに年を越え、平成四年十月二十四日付の、これも朝日の朝刊では天皇夫妻訪中の折の記事として、

ご夫妻を乗せた日航特別機は、中国大陸にさしかかってまもなく機首を下げ、速度を落とした。左手に揚子江、皇后が小学生のとき、音楽の時間に教わった歌のとおり、秋深き大陸の野をゆったりと流れている。やがて黄河。天皇が学生時代、この本で中国の歴史を学んだという鳥山喜一の「黄河の水」が見えてきた。

と、ふたたびこう見える。あとのほうの記事は同年一月に刊行した作品集にこの作品を収録後のことで、前橋の井上二三男氏が気づいて送ってくれた紙面によるものである。総合第十二版とあり、同日の東京版では見られない記事であった。同氏の好意は大変ありがたかった。

さて、記事に伝えられる鳥山氏の「黄河の水」こそはわが家の歴史にかかわり、計らずも面目をほどこすに足る出来事になるのであった。「黄河の水」の初刊は大正十五年、父の真人が書肆経営に手を染め、その第二弾として刊行された書籍なのである。つとに定評をうけて、今日なお文庫本として版を重ねる名著なのである。

日ごろ、市井の逸民などと自任していた父だったが、脱サラを企て出版業に手を染め、「弥円書房」を唱え、本郷区上富士前町三番地にあった、私の生誕の家でもある陋屋を営業拠点とし、出版界に挑む成り行きをたどったのである。いまほどの普及を見ない当時とはいえ、電話一本あるでなく、言わば素人の商法の無謀を免れぬ経緯であった。処女出版は早稲田大学の西村真次氏による「鳴く虫の観察」で、織田一磨氏の挿画に飾られるものであり、そして第二出版が「黄河の水」であった。

「黄河の水」の著者鳥山喜一氏は父の仙台二高いらいの友人で、京城大学教授を経て後に四高校長、富山大学長などを歴任されるのだが、「黄河の水」著作の往時は新潟高等学校教授であった。この初版本は今日ではもはや稀覯本に値しようか。総布表紙、挿画、地図を豊富に入れ、当時の定価二円八十銭はかなり贅沢な本である。

ヒストーリアンをもじり（桃李庵）を号とした父は歴史好きで、大学は法科に籍をおきながら、史書を渉猟、耽溺した人であったから、この「黄河の水」を手始めに少女向けの日本史、西洋史の続刊をさしあたりプログラムに持ったのであった。筐底から発見できたメモによると、企画の夢はさらに膨大におよび、学術、教養の書目の羅列に出会う。作品のほうにその詳細を写したが、言ってしまえば誇大妄想、しかし、至極大真面目に大風呂敷を広げている。

資力なく、商売の才覚もない人間が目論んだ企業だから、早晩の破綻を免れない成り行きであった。創業三年にして資金枯渇に陥り、わが家は貧窮の時代を迎えている。「黄河の水」の版権は刀江書院に譲られ、その際に得た収入のなにがしはあっても、たちまち米塩に変えられたことだ。

「鳴く虫の観察」のほうは譲渡の対象にはならなかったので、織田さんの精緻をきわめた挿画、口絵、装丁の原画そっくり、ともなう凸版のすべてがわが家の歴史的遺産として今に残っている。凸版は今日の印刷手法とは異なり台木を使った時代であり、表紙箔捺しの場合は重量をかける鉛台を使用してズッシリと重いものである。父が脱サラして手にした退職金の重さそのものに思われる。（出版業のことを避けては父の像を描いたことにならない）、と作品のほうに書いているが、ここでも同じことを繰り返し書きとめておきたい。

作品の表題を「アルバム」としたが、父の遺品となった数冊のポストアルバム、つまりは絵はがきアルバムを指すのである。歌舞伎を愛し、美術に深い関心をもち、さらにその他にわたる広い趣味に生きた父の残した絵はがきアルバムを繙き、これを軸として語りを展開する作品という意味合いから表題に定めたものだ。明治人で、農家の出である父は自分の生涯をあとづけるに足る写真をほとんど残してない。士族の家に生まれた母とは対照的なのである。代わるものとして絵はがきアルバムがあり、その内容に父の精神生活はすべて投影されている。折にふれ綴られて残る断簡の類よりも雄弁なのだ。

わけても歌舞伎に耽溺する立見席の常連で、菊、吉、左の舞台に酔い、遅い帰宅をした夜もたびたびで。待ちわびる幼な心に父をそれほど魅する歌舞伎とは一体なんであろうかと思ったことだ。プロマイドは当然芝居関係が多くを占め、往時来朝した相対性理論のアインシュタイン、バイオリニストのハイフェッツ、京劇のメイランファンに及ぶ。前職で恩顧をうけた横浜の大谷嘉兵衛翁に扈従した旅先の風景写真、また美術展の絵はがき、第一次世界大戦ポスター絵はがき、関東大震災絵はがきなどなどにおよぶのだ。事業に失敗し逼息の時代は昭和初頭の不況時代に重なって、わが家は貧窮のドン底を経験している。

苦境は十年ほど続いている。本編末尾に引用した友人Kの手紙に云う「怪物」は他から言う言辞としては不用意なものだったが、父に対する親愛を示すものとして引用させてもらった。固陋を貫いた父の一面を語らずにはこの一編は成り立たなかった。あえて兒孫に伝えておきたいと思うのである。晩年の父は友人の情けで窓際的雇用に甘んじる時代を迎えているが、やがて昭和の大戦に遭遇する。疎開、そして終戦、せめて平和回復を謳歌し得る一時期を経験したが、晩年を飾る何ものをも記録することなく生涯を閉じた。出版を業とし、名著という世評をかち得た「黄河の水」こそは明治人の不屈に生きたわが父真人にとって唯一、せめてもの栄誉であった。

「利狂人銭形捕物控」

この作品はたまたま「新潮45」という雑誌に掲載された「日本に（綱紀粛正）はない」というジャーナリスト高野孟という人のエッセイに共鳴するところにあり、ヒントを与えられた作品で、一人称の独白体の手法を用い構成している。「利狂人」はリクルートと訓じ、折から世上を騒がせていたリクルート事件を風刺する皮肉なアテ字の妙が面白く、拝借することにしたものだ。

警察官、自衛官などの前歴をもつ人々の再就職はもとの階級にしたがい、さまざまであろうが、大方はその前歴上武道の有段者であることを見込まれ、金融機関などの警務職に採用され、店頭に出てフロアをガードするといった部署を与えられるか、または金銭授受の使い走りに甘んじるケースが多いようだ。かれらはとかく平素髀肉の嘆をかこち、やがては辞めていくという成り行きをたどる、そうした人生のペーソスを描きたかった。

こども向けのTV番組に「ルパン三世」というのがあり、銭形警部が登場するが、作品上の主人公は丸の内あたりのさる証券会社に第二の職場を得た元警部補ぐらいの設定である。

ある日のこと、仕事上訪れた代議士事務所で秘書の男

に揶揄され「おぬし銭形だろう」と喝破される。

かれの仕事は紙切れ一枚に過ぎぬ預かり証と引き替えに数字の末尾に0の沢山ならんだ小切手を受け取る、大口取り引きの使いだった。他聞に漏れぬ政治家たちの楽屋うらを垣間見て、しかも若い秘書の高笑いに出会った不快、おのれのみじめさをかみしめる羽目にも出会ったのである。

かろうじて同じ職場の若いOLのP子とのふれ合いに慰められ、過去、武骨の世界に生きたかれは慣れぬなりりオフィス生活にも満足し、年甲斐もなく恋情に近い思いを抱く。だが、そのP子が近々結婚をしおに辞めると秘かに打ち開けられ、自分もまた辞めようと決意する。十手、捕り縄、投げ銭で活躍する、平次親分とは似てもつかぬこれは現代版の捕物不在の「捕物控」である。

「ミニ・カメレオン伝」

サブタイトルを（水溜まり交友記）とした謂れは荒川の小台の渡しがいまの橋梁に変わる以前、つまり昭和のはじめのこと、今日に健在する尾久操車場の地下道をくぐり抜けて、渡船場に向かう少年グループがあった。船が向こう岸につくと、芦原突っ切り、放水路の土手を江北橋まで、その橋下に江北プールと呼ぶ水溜まりがあった。長い夏休みともなれば、通いつめ交友に格好な場所になっていた。葭簀を囲いめぐらせ、粗末な脱衣所、トイレもあったはずだが、なによりも入場料が安く一日泳いでもかまわない気安さを珍重したものである。今ほど学校プールの普及を見ない時代だったし、学校の夏期施設で霞ケ浦に合宿の水泳教室に参加するなぞ望めない貧しい家庭の連中の泳ぎ場所として愛用されていたものだ。

そのかれら一統を率いたのがカメレオンこと、すなわちYなのであった。かれはわれわれの中学校へ三年生のときに新潟から転校してきた、言わば外様であったが、たちまち頭角をあらわすに至った秀才である。そして、やがて気のあう仲間に君臨したのだった。外様のかれを囲むあたり、一種の野党的傾向のグループであった。群れたがるメダカのグループであったかも知れない。あたかも河川敷芦原の水溜まりにはまだメダカの棲息を見た時代だった。

カメレオンのニックネームは英語の教師によってつけられた。生徒が教師の綽名をつけるウイットの逆をいく珍しいケースだ。その命名由来をプロローグとして、大戦前夜というべき時代、つかの間の青春は、あの巷をあげて浮かれた「東京音頭」に象徴され、また神田の学生街に（新天地）と呼んだ喫茶店が軒を連ねた時代に重なる。（君臨）という言葉を用いたが、かれは天真爛漫、

少しも憎めない性格の持ち主であったことも認めねばならない。つねに君臨をほしいままにするとしても、誰も文句のつけようがないのであった。数々のエピソードを叙してワンマンを写し、描写をしながら、一向に唾棄の情を今にもよおすことがない人物像に触れる。そのかれが昭和十六年早春、戦時軍需産業の花形だった三菱重工業の激務の中に死を迎える。客地名古屋で病を得ての早逝だった。大戦突入を知らぬ無念の他界だった。青春無残を描いて作を了わっている。

「噴火島に生きる」

＜青ヶ島や絶海浩渺の間なる一頃の孤島＞という志賀重昂さんの名著「日本風景論」の緒論はあまりにも有名である。また井伏鱒二さんは「青ヶ島大概記」という作品で天明五年のすざまじい同島の爆裂を叙している。今日なお（命令航路）として月一回しか船便のない島、絶海、しかも噴火のマグマ上にある危険な島、その青ヶ島小中学校へ任命をうけ、島にとって十年も空席だった校長として赴任した高取巧先生の物語である。

思わざる時の人となった高取さんは、新聞記事はもちろん、写真週刊誌のグラビアページでも脚光を浴びたものだった。東京オリンピックに先立つ三年前、夜は学校の先生がディーゼル発電機を回して役場と駐在の電灯をともすといった事情だから、テレビなぞまだなく、自家発電機を備える店がようやくできて子供たちがアイスキャンデーの味を知ったという往時だ。

すべる突堤にしがみつき、ゆれる船から上がった港湾のない島へ赴任の第一歩から苦難がはじまる。そして、

島にはクルマが一台もない。新校長の荷物も中学生のひく牛の背で運ばれた。

「先生は島を売り物にしないでほしい」

という、島民から最初の要請があった。Tという校長代理を勤めた前任が「黒潮の子ら」という本を書いて島の事情を世間にさらすという事実があったからである。

定年まであと二年、校長登用は残り三年をカド番としており、高取さんの場合はそれを過ぎて、僻地への特別選考というケースなのであった。だから赴任は少なからず悲壮を免れない事情におかれていた。東京都下とはいえ土地台帳すらない0番地への赴任だった。竹芝桟橋の見送りはさながら出征兵士の壮行を見送る風景そのものであった。

「新校長の抱負のまことに旺んなることにうたれました、どうか離島新興のため、任期二年と言わず、全力の投球を期待申し上げたい」

他人ごとだから、なんとでも言える、最初の夏休みを

帰京した高取さんを励ます会では体よく当の主賓を他区へ放り出した校長がぬけぬけとスピーチを行った。高取さんを離島とはいえ栄進にとりつけたのは転勤先のK校長だったのだ。噴火島に生きる道を選んだ高取さん周辺の人情の機微あれこれをテーマとした作品だった。

「北の門口」

北国の雪を車両の屋根に上り列車が、そしてまた雪深い北の地方にこれから向かう下りの列車が出ていく。なぜか東京北の玄関口上野は冬の季節こそが似つかわしい。この駅に雑踏している人間たちの多くが北国に縁をもつからだろうか。主人公の堂園さんの出身は北国、だからことさらそう思う。

実はその＜北の門口＞の舞台で、手を振って別れた娘が走り出した列車から飛び降りるという珍事があった。その血の凍るような瞬間の出来事がやはり冬場のことである。

単身赴任の父親堂園さんのもとに学校の冬休みを上京していて、見物の日を過ごさせ、娘は母親のもとにその日、帰るはずであった。戦後間もなくで、まだ家族を疎開先に残す二重生活中の出来事だった。父性が母性にまさるという思いもかけないなりゆきだった。

さて、この作品のモデルの近況を書いておこう。

父親の懐を選んで、列車から飛び降りた娘さんは。当然それからの歳月を経て、いまは嫁して近郊に住んでおり、そのほうの孫息子が遊学中で、堂園さん老夫婦の家に間借りしている。歳月は人を待たない現実である。

堂園さんもいよいよの老境に入り、愛玩していたマルチーズとホメラニアンの二匹の小犬も先ごろ前後してあの世におくった。小犬たちは堂園さんの旅行の折、娘さんに預かってもらう慣いで、病気がちの妻女のほうはショートステイに預け、日ごろ家事一切を男手でまかなう苦労を抜け出すための旅行に出るのだった。

子犬たち失って気落ちした堂園さんの姿ははた目にも痛々しいものがあったが、そうした父を見るに忍びず、気遣って娘さんが近ごろマルチーズの贈りものをした。男子の兄弟がありながら、かれらは平素まったく疎遠のところを、＜北の門口＞での列車飛び降り事件のかの女だけが親身を尽くしてくれている。

「まかり行かむ」

わが家の改築に際し、地鎮の神事が施工の会社側の手配で行われた。早朝にかかわらず、あらかじめ打ち合わせの刻限に、仮住まいから現場に行くと、すでにマイク

ロワゴン車が敷地前に停められており、神職が神事の準備を整えているところであった。小竹をさし立て、注連縄を引き回し、砂盛りに鍬が添えられ、みずからは身支度にかかっているところであった。施主側で地元の神社を訪ね、依頼するまでもない手軽さに感心させられた。供物、神酒まで一切がワゴン車に積みこまれていた。

建築会社も大手ではこうして万事手順の端々遅滞なくことを運べるチームワークが存在していることに感心するばかりであった。

名刺は八王子市小宮在「諏訪大地主神社」とあった。なんと遠く八王子から車を駆って定刻に来ていたことを知り、驚きをもって若い禰宜さん見直したことだった。

それからしばし後日、わたしは持ち前の好事の気持にそそのかされ、名刺をたよりに、その節の祝詞を所望の旨電話をかける仕儀におよんだ。電話の相手はこちらの地区を尋ねると、担当のものに連絡をとり、要請に応えたいという返事であった。やがて、手に入れることのできた、「地鎮祭祝詞」は畳紙におさめられて、うやうやしく、わたしに満足を与えるものであった。電話をした折の感触に作品のヒントをうけとって、「神職連合」の発想は浮かんだのであった。神道、仏門のやる手、引く手のあれこれ知識のかぎり注ぎこんで戯画風刺をこめて書きあげたフィクションの多い作品になった。

「葬送記」

雑誌仲間であり、かつての同職という関係でもある、山口健二氏の葬送の始末を書いた作品である。依頼があり、当日は弔辞を捧げている関係もあり、作中にそれを織り込んで首尾をととのえた。

山口氏は旧制弘前高校、太宰治や鈴木健二アナらとは同窓、東北大に学んだ教職の世界では異色の人であったが、わが文芸同人誌「まんじ」にあっても特異の存在であった。その作風は無頼派ともいうべき型破りの作品を連ねている。つまり、別に言うなら天衣無縫、腰をすえて苦しい持病を抱えながら、創刊いらい、三十五号まで欠かさず個性的な作品を書いた。

「なんぞきみを知ることの遅かりき」

とその死を惜しんだ維持会員の言葉があったほどだ。きみの書かれたものは滅裂する部分があろうと、すべて本物だった。体当たりで書かれているから、人の心を打った。八方破れなりに立派なスタイルを形成して拍手をうけたのである。余人のとうてい模倣できるものではなかった。だから、その死は大方に惜しまれたのである。弘前の同窓はきみを目して＜文豪＞と呼んだ。一周忌の折には、その人々により寮歌の斉唱をきみに捧げられるのを聞いた。きみはエンダビー沖海戦では海に投げ出され、生死の境を漂う数奇を生きた人であった。それらを物語ろうとしながら、余韻をのこし中道で倒れられた。

「午後の肖像写真」

この作品は少々風変わりで、点鬼簿を繰りくり、誰彼の葬儀に飾られた肖像写真の出来具合を点検吟味して、葬儀屋が一夜の手配で間に合わせた肖像写真のまことに粗末、ときには滑稽であったり、死霊の怨念にゆがむかのものまでもあり、死別に飾られるにはあまりにも適当でないものが多いことに言及し、己が場合はあらかじめ周到な用意を思いつき、「寿像」のためしに倣いあらかじめ写真館を訪ね。腕の良い写真師と相談し、「寿像」ならぬ「寿影」を撮ることにする話である。

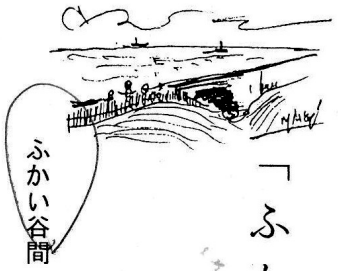
そんな話まで小説の材料になるのかと呆れる声が合評会の折に聞こえたが、これも小説であると、作者は少しもたじろがないだけの度胸を待ち合わせているつもりである。ただし、これは小説というジャンルの上だけの話であることは言うまでもない。生地の作者はそのような不遜、傲慢を冒すつもりはさらさらない。

「童子寸描」

たなあげぼうやの巻、頑駄無の巻、パワーアップの巻の三編は前巻に収めた同名の作品の続編である。幼稚園年長組までの、内孫の生態を写している。スケッチだろうぐらいに読まれたのでは救われない。ナマに身近かなモデルを描くことの困難を察して頂けないとすれば、すこぶる残念である。身近かであることで、捉えて作品に仕上げるにはよほどに客観の眼を見ひらくことを必要とするからである。知り過ぎて作品に取り込めない、知り過ぎてうっかり大切と思われるシーンをついつい見逃しているからである。子供達の遊び一つをとっても変幻自在、今日と明日ではまったく違う場合するらあり得るのである。子供の成長は瞬時、瞬間に目まぐるしく発達を遂げていることを思い知らされるのである。雑誌で好評を得たモデル本人の描いた童画を刊本のほうでも採用させてもらった。これぞ爺い馬鹿の遺産として将来には珍重されるであろうか。

「ふかい谷間」ほか

青木昭成



ビルと　ビルが
さえぎる風のふかい谷間

目的がある人も　ない人も
渡るとき　貧弱な腕と　貧弱な足を
戸惑いながらも巧みに操ることを知っている

人はむろん野鳥ではない
ましてや　人は家畜ではない

それがふと　遠くをみつめる顔で
誰かと啼きかわしたい欲求にかられるのだ
寄せては返す追憶の木霊のせいだろうか

はれた日の飛行機雲
鏡にぬられたクリームいろの破線

谷の底から　あおぐ空は
人の呼気をどこまでも拡散させる　あわてて
人は悔恨の情をふところ深く仕舞いこむ

人にとって日向は　おおよそ　善意
人にとって日陰は　それとなく　悪意
ない交ぜて　人はおのれの視線を街路樹の
梢のあたりに外して散策する

いつか谷間は黄昏れる　ビルと
ビルが　さえぎる風が消滅し

人が夜を耐える

残響

組曲は
拍手から　一刻おいて
ひよわな弦の音ではじまった
人々の息遣いそのままに

やがて曲は　人々が望むとおり
指揮者のゆれる肘のむこう側で
管を共鳴させる　太鼓に答えさせた

それは陶酔の　あわい光の底の
ゆらめく黒い海草
オーケストラの海　音の群落よ

人々は　おのれの情緒の
ツチ骨　キヌタ骨　アブミ骨に
何がどう残響したかを刻みつける

予感は予感のなかで造られる
タクトがふたたび三たび振られ
肘は静止し　曲は終止する

ようやく　拍手が拍手を追ひ
人々は獣のように反芻する
さらに拍手をもてあそぶ

それは響きが　呼びとめる響きの環
振り返って一人目が席をたち
思い返して二人目が席をたち

うすれゆく残響　沈黙の
舞台がついに崩れはじめ
出口にいそぐ人々をしりめに
哀愁が席につく

かも知れぬ

わたしは独り言する
「いわば詩はロゴス」
そう　わたしが私のなかへ語りかける

それがわたしの唯一の詩かも知れぬ
詩は点描　詩は知覚の組曲
あるいは　わたしを絶景の対岸へといざない
繋ぎとめようとする一本の吊り橋かも知れぬ

湖上に身づくろいしているカイツブリ
その波紋はわたしへ近づくほどに　薄れる
いまここに　窯だししたばかりの陶器を
肩の高さから投げ落としつづける人がいる

たとえば　その幽けさ　その祈りが詩かも知れぬ
詩は喘ぎながらする束の間の判断
詩はじわりと　わがままをとおす持続
一回きりの心の調べにちがいない

詩は浮雲　変幻しながら詩は実存し
わたしは独り言する
「いわば詩はパトス」
そう　わたしのなかの私が燃える

闇

夜の始発駅に電車がいる

車輪のしたに漆黒の闇を押さえこみ
人々は明るい上着を来て
座席にいる

せい一杯の努力を背負った恰好だが
ほんとうは宇宙船の船酔いのように
明るい闇に包みこまれて　勝手には
身動きならないのだろう

それぞれの恣意のままに
発車するわけにもいくまい
だが　人々は明日もおなじ時刻に
おなじ座席に乗りあわせて　おのれが
失うものをおなじ恰好で考える

車輪のしたに漆黒の闇を押さえこみ
電車が停止したままいる

風が走って

さやかに風が走って
ふと　父は想う
はるかに西の方にすむ息子よ
夾竹桃の花もそろそろおわりだね
いまでも「二十世紀」と呼ばれている季節の
梨など味わってみる暇なんぞ　持っているかい

さやかに風が走って
ふと　母も想う
はるかに東の方にすむ息子よ
庭の　夏くさが萎えて渇いた土がみえるでしょう
三年目の「丹波」の毬が染まりはじめているのなら
その土いろの上に　もうじき実が弾けて落ちるでしょう

そうだ　それがカンタンの鳴く音いろ
そうだ　これは野葡萄の蔓のいろ
父と母と　あれから古い崖のある村を離れて
この町に移りすんで　もう三十五年
古録天の祠があり　椎の梢のもりあがる空があり
今しも　鳩たちが
みえがくれの宙返りをくりかえす

ふたたび　風が来ている
ここ　葛飾の　よもぎ茂る運河の岸辺づたいに
語りつぐべき何ほどの　歴史はないが
「めにはさやかに」と古今に
歌われた風が　いまも透明に
目には見えぬままに

その時

降りそそぐ光のなかで
弟は　運河のおもてで反射するさざ波に
立ちどまり　いそぎ前をひらき
手をそえて放ったものだ
オオバコの平たい葉たちの
そのかぼそく青く小さな種の穂のうえに
それらをぬらして鳴るさやかな音
「止めろよ」　と父は一言
それは男の子の
快感をおもんばかる含み笑いで

行き過ぎがてに釣りこまれ　いそぎ
兄も前をすらき放ったものだ
「お止しなさい　あなたまで」
それはおくればせな　母の一言
「やんま」が近づき　「やんま」が遠のき
その飛翔に目をうばわれながら
けれど　より高くより遠くへ
ならんで競う兄と弟と
そのたかぶりに風は迅やく
大人が　ふといだく羨望を
かき消す上空のきらめき

夏のあいだ

車が渋滞していた国道の橋
運河のみち汐のおもてに翳りを落として
影絵のうえを揺れながら疾走する影絵
その音が消えて　渇いた遠景がうすれて
たちまち父と母の記憶はいりまじる
それは　槙かこいの家　橙が一本
実をやや黄ばみさせはじめ
それは　石垣のうえの鶏舎　背に
すずなりの柿の実が照りかり

だが　ここに
この信号の四つ角にあるのは崇福寺
この水道道路に沿っているのは理昌院
そのさらに先にある寄せ棟の農家
すっかり街区にとり残されて
ヒサカキの生垣と板塀に囲まれて
しかし　かすかに教会の音楽がもれてくる

かの詩人ならば　それを
「グレゴリアン・チャントか」
と期待したにちがいない
がそれは　間違いなくバッハのカンタータ
誰が　どうして　と矛盾を問うのはやめよう
納屋に耕うん機のハンドルが光る

もう永いこと　それを聴かすべきレグホンも
ホルスタインも見かけないゆえに

もはや運河の汐がひきはじめた　そこが
いちめんの葦原であったころ
防人が舟をあやつって通ったころ
渦巻くこともなかった水脈が
いま速く崩れる
ここはお前たちの生まれた土地
ここがお前たちのふりかえる故郷

父と母が
古い崖のある村から来たように
お前たちはそれぞれに　背広を着て
電車にのって移っていった
古録天の祠の鳩の群れのようには
帰ってくるまい
ふたたび　さやかに風が
走っても

漢詩

潮哢録（八）

鯨遊海

賀丙子春　　平成八年元旦

星替廻來丙子春
周章堪感遂耆人
豈期名利有詩友
戯鳥拈花微笑新

韻字・春人新

＜丙子の春を賀す＞
星替りめぐり来たる丙子の春
周章(1)感に堪えたり遂に　耆(2)の人
あに期さん名利を詩友あれば
鳥と戯むれ　花を拈り微笑(3)新たにせん

〔口語訳〕
星座の位置も変り六十一年振に丙子の春が巡り来た。
周章狼狽、感慨無量だ。私も遂に還暦を迎えた。
何を今さら名誉や利益を求めようか。私には幸い詩を理解しあえる友達がいるのだ。
彼らと共に時に鳥と戯むれまた花を拈っては佳句を作り以心伝心微笑を新たにして楽しむとしよう。

〔補　足〕
(1)慌てふためくさま。「周章狼狽」
(2)禮記「六十歳をいう。十歳から順に幼弱壯強艾耆老、八十～九十歳を耄、百歳を期頤という」
(3)拈花微笑＝以心伝心。五燈會元「お釈迦様が黙って蓮の花を拈ったところ迦葉という弟子だけがその意味を理解し微笑で応えた」という故事。

☆はるばると来つるものかな六十年
いよよ拈らん燃ゆるおもいを

祝渡邊一男兄昇進旭日銀行船橋支店長　平成六年仲秋

嚴寒不厭汲清水
炎暑先鞭拾枯薪
道義漸成愈國主
今宵應醉汝城春

韻字・薪　春

＜渡邊一男兄があさひ銀行船橋支店長に昇進せらるるを祝す＞

厳寒いとわず　清水を汲み(1)
炎暑せんべんして枯れし　薪を拾う(2)
道義ようやく成りていよいよ国主
今宵まさに酔うべし汝が城は春なれば

〔口語訳〕

厳しい寒さもいとわず君は皆の為に清水を汲み、また炎暑のさなか卒先して枯れた薪を拾った。道理が漸やく通っていよいよ支店長、一国一城の主となったのだ。今宵はまさに酔うがいい。君の城はもう既に春なのだから。

〔補　足〕

(1)(2)薪水の労。南吏・陶潛傳「薪を取り水を汲む苦労」炊事の苦労。広瀬淡窓・桂林莊雜詠示諸生「休道他郷多辛苦　同袍有友自相親　柴扉暁出霜如雪　君汲川流我拾薪」袍は綿入の着物。同袍＝同僚。

☆薪水の労いとわざるますらおの
城主となりて誰よりもうれし

送別森嶋茂兄退職　平成七年晩秋

熱海送君孤月青
杯廻酒温汐聲寧
悠悠天地爲誰有
去矣鵬鯤夢勿醒

韻字・青寧醒

＜森嶋茂兄の退職するを送別せらるる＞

熱海に君を送れば孤月青く
杯めぐり酒あたたかく汐声やすらかなり
悠々たる天地誰が為に有らんや
去けよ　鵬鯤(1)の夢醒ますことなかれ

〔口語訳〕

熱海で君を送別すれば一片の月が青く照っている。杯は廻って酒あたたかく、汐の音はやすらかだ。この悠々たる広大な天地は誰の為にあると云うのか。去けよ大人物の君。あの志の高い鵬鯤の夢を醒ます

ことなく何時迄も抱き続けて欲しい。

〔補　足〕

(1)巨大で志の高い想像上の鳥と魚。転じて大人物、大事業の喩え。荘子・逍遙遊「北冥有魚其名為鯤　鯤之大不知其幾千里也　化而為鳥其名為鵬」

☆月蒼く唯聞こえくる汐の音
人みな優し君送る宴

舟出（青年）・芳山人先生作詩漢譯一　平成七年七月

青雲浮四海
舟出汐風宜
岸上踏歌起
豈還非錦衣

韻字・宜　衣

＜舟出（青年）・芳山人画伯作詩の漢訳一＞

青雲(1)四海に浮かび
舟出すれば汐風よし
岸上踏歌(2)起こり
あにかえらん　錦衣(3)を着ずして

〔口語訳〕

希望に満ちた青雲が世界中の海に浮かんでいる。纜を解き舟出したが潮流も風も順調だ。岸上に私の舟出を祝福し足踏みしつつ踊り歌って見送ってくれる人達の声が起こった。錦の衣を着ずしてどうして故郷に帰れようか（必らず立身出世して故郷に錦を飾ってみせるぞ）

〔補　足〕

(1)白雲が仙境隠者の象徴なのに対し高位高官、立身出世の象徴。また青は東、春、希望を意味する。
(2)足ぶみ唄。李白・贈王倫「李白乗舟將欲行　忽聞岸上踏歌聲　桃花潭水深千尺　不及王倫送我情」
(3)南吏・柳慶遠傳「卿衣錦還郷」立身出世して故郷に帰ること＝故郷に錦を飾る。

☆芳山人先生の原詩・舟出（青年）

里の舟出は夢のせて　時の流れも雨風も　誰も知らない港から　松風積んで旅に出た　森の向うの灯台を　過ぎれば外は荒海ぞ
夢一パイに帆を張って　あしたをのせた若い舟
誰も知らない海原に　恋風求め旅に出た　眞西に沈むオリオンが　朝焼け告げる一人旅

日本橋之欄杆・東京百景九

平成六年師走

典雅欄杆日本橋
青銅獅子眼寥寥
道神何爲空咆吼
月照故園千里遙

韻字・橋寥遙

＜日本橋の欄杆・東京百景九＞

典雅ならんかん日本橋の
青銅の獅子まなこ寥々たり
道神なんすれぞ空しく咆吼するや
月が照らす故園の千里はるかなれば

〔口語訳〕

優雅で均整美を誇る日本橋のらんかんの、
青銅の獅子の眼は何故か寥々と寂しくうつろだ。
この道祖神は何を訴えて空しく吼えているのだろう。
それはきっと月に照らされた故郷が千里も遠い遙かな彼方であるからだろう。

☆日本橋三十二頭の獅子吼ゆる
君聞かざるや望郷の声

初詣金龍山淺草寺・東京百景十

平成七年正月

淺草伽藍正月晴
摩天重疊萬波甍
讀經隱隱惡童遁
不動舗頭玩具横

韻字・晴甍横

＜金竜山浅草寺に初詣す・東京百景十＞

浅草の　伽藍(1)正月晴れて
天を摩す重畳たる万波のいらか
読経　隠々(2)として悪童のがれ
舗頭うごかず玩具の横を

〔口語訳〕

浅草寺大伽藍。正月の快晴の下。
天に迫る大屋根の無数にたたなわり波打つ甍。
読経が隠々と響き始めると悪童は退屈して逃げ去り、
仲見世の店頭にある玩具の横を動かない。

＜補　足＞

(1)寺院の大きな建物。寺院僧坊の総称。「七堂伽藍」
(2)①かすかなさま。②大きな音。③盛んなさま、多いさま。④悲しむさま。ここでは②③④。

☆春陽にいらかまばゆき浅草寺
玩具にらみて童児うごかず

通勤時地下鐵有感・東京百景十一

平成七年孟春

一點光芒隊道中
無聲急迫起微風
忽然流麗銀龍現
黙黙群羊地底充

韻字・中風充

＜通勤時地下鉄に感有り・東京百景十一＞

一点の光芒ずいどうの中
声も無く急迫して微風を起こす
こつぜん流麗な銀竜あらわれ
黙々たる群羊地底にみつ

〔口語訳〕

遠く唯一点の光が暗いトンネルの中に見える。
闇の空間を音も無く急迫して微風が起った。すると、
忽ち流れるように美しい銀色の竜（電車）が現われ、
黙々と歩む羊の群のようにサラリーマンが地底に充ち溢れた。

☆幼なき日胸おどらせしメトロ今
羊の群は悲しげにみゆ

送阿娘千春之新西蘭

平成七年四月

去矣阿娘雲海先
將翔千里迴南天
好文志操熱於炎
尚學一心深似淵
蕾發神州花草軟
霜降彼國雪冰堅
可爲青鳥運親善
願告逢春後幾年

韻字・先天淵堅年

＜阿娘千春の新西蘭へ之くを送る＞

去矣(1)阿(2)娘雲海の先
まさに翔ばんとす千里はるかなる南の天に
好文の志操ほのおより熱く
尚学の一心深きこと渕に似たり
蕾ひらきし　神州(3)花草やわらかなれど
霜ふりし彼の国雪氷かたからん
青鳥(4)となりて親善を運ぶべし
願わくは告げよ春に逢うは幾年の後ぞ

〔口語訳〕

いざゆけよ、可愛い娘よ、雲海の彼方へ。
今君は千里も迥かな南の空へ翔ぼうとしている。
文学を好む節操かたき志は炎より熱く、
学を尚ぶ一心は深きこと渕のようだ。
蕾が発きかけた日本は今花も草もやわらかいけれど、
霜が降り初めたあの国は雪も氷もいよいよ堅い厳し
い冬が来るというのに。
彼の崑崙山の仙女、西王母の使者だったといわれる
「青い鳥」となって両国の親善を運ぶがいい。
せめて告げて欲しい。又春に逢えるのは何年後かを。

〔補　足〕

(1)子規・送夏目漱石之伊豫「去矣三千里　送君生暮寒　空中懸大嶽　海末起長闌　僻地交遊少　狡兒教化難　清明期再會　莫後晩花殘」
(2)大切な。美称の接頭語。大切な人を親しんで呼ぶ。
(3)自国の美称。ここでは日本。漢語では中国のこと。
(4)使者、手紙のこと。青い鳥が崑崙山に住む仙女西王母の使者であったという故事より。

☆いざ去けよ雲路迥けき新西蘭へ
　青鳥となれ向学の徒の

《漢詩の常識6》平仄について（二）

一句の平仄の配列の規則について前回は①二四不同二六対にすることを述べたが今回はその他の規則を述べる。

②下三連同韻禁について

各句の下三字、七言句では五、六、七言めの字、五言句では三、四、五言目の字が平字ばかりが三字、又は仄字ばかりが三字続くことは禁じるという規則である。

即ち平字ばかりが○○○、或は仄字ばかりが●●●と続けることは不可なのである。仮に平字が三字も続くとノッペラボーだし、又仄字ばかりが続くと語調の変化が強すぎごつごつして了う。何れもリズム感を欠くことになるからである。平仄を適当に混在させるのが正しい。

③四孤平禁（五言句は二孤平禁）について

各句の四言め（五言句では二言め）の平字については仄字で挟んでは不可という規則。即ち三（一）言めと五（三）言めの両方か少なくとも片方どちらかを平字にして四（二）言めの平字を孤立させないということである。●○●は不可。○○●、●○○、○○○なら可である。

④冒韻禁について

韻字として使った同じ字及びそのグループの字を一詩の中ではなるべく使うな、各句の頭には特に使うな、起句の頭には絶体に使うなということである。これも一句七音（又は五音）しかないのに冒頭と末尾の響きが同じではリズム感や調和がみだれ平板に流れるからであろう。

すずかけの並木道（三）

伊澤　敏久

高校を卒業してから、十八年目の同級会である。裕恵は大学の友より、何か違った懐かしさを感じた。

ロビーの受付近くに、同級生が三々五々と集まり、入学時の様な雰囲気で、笑い声と、奇声の中で時間を忘れかけていると、幹事の室町康秀が、

「皆さん、御苦労様です。会を始めたいと思います。エレベーターで三階迄行き、右に行った十二号室です。お願いします」

とアナウンスした。その声で裕恵は初めて、康秀も来ていることを知った。彼は昔ながらの面長な顔に、落ちついた態度で、皆に心よい印象を与えていた。

裕恵はエレベーターに乗り、会場に行くと、そこには三十人余りのフランス料理が並べられていた。裕恵は入口と反対側の、窓を背にした席に座った。

全員そろったところで、小川信子の司会で会が進められ、まず康秀が挨拶した。

「高校卒業して十八年の歳月が流れました。クラス会を前から計画しておりましたが、ようやく今日開くことが出来ました。飯室勝義さんが仕事の関係で外国にいる為参加出来ない他は三十七人全員が出席されています。時間が許すかぎり、ゆっくりくつろいで下さい。十八年の歳月は長くて短かい様な感じがします。それぞれの人生を語り合いましょう」

裕恵の右隣には藤本雪枝がいた。雪枝は卒業後しばらくして結婚し、今は二人の子供がいた。

雪枝は、

「私、信用金庫に務めている時、同職の今の主人と知り合ったの……」

裕恵の中に、高校時代、テニス部にいた頃の、二人の青春時代が甦がえってきた。雪枝の生活の変化を驚いているとき、康秀が、

「南側の席から自己紹介をお願いします」

最初に始めたのが、横井芳男であった。立ち上り一礼して、

「私は卒業後早稲田を出て、現在名古屋のK機器製作所の係長をしており、まだ独身です。よろしくお願いします」

裕恵も独身である。背広姿の芳男を見て、顔には学生当時の面影が残っているのを感じたが、最後の言葉がいやに心をとらえた。

二人目は秋山幸子である。

「卒業後間もなく母親が亡くなり、父親の経営する酒店の家業を手伝っております。配達で忙しい毎日です。よろしくお願いします」

裕恵とは卒業間際まで、大学進学とか将来について話し合った仲であったので、感無量であった。

次に立ったのが小山恵子で、

「私は現在、松高屋百貨店に務めています。洋服、金属類等、何んでもございますからお立寄り下さい」

あの目立たなかった恵子が、はでなスカーフを首にまいて、ひときは目立った存在で、店員が板についていることを感じた。

四番目に立ったのは、朝岡勝己で、

「私は大学受験を失敗し、皆さんにお話出来る様な仕事をしていません。ほんとに情なく思っております。これから頑張っていきますので宜しくお願いします」

「朝比奈茂子です。私は幼稚園の保母をやっています。毎日小さな子供達と楽しい毎日を送っています」

次ぎ次ぎと現況や、紹介を行なうたびに、拍手が起こり、笑いや、ひやかしの声等、和気合々のうちに会が進められていった。

裕恵の番になった時、やゝ緊張ぎみに、

「私は高校教師で、歴史を担当し、三年生を受持っています。よろしくお願いします」

簡単にすませてしまったが、その間、注視の的であった。話をすることは職業柄なれてはいるものの、何か勝手が違うのを覚えた。

最後に室町康秀が立ち上がり、

「私は長野と静岡の県境にある小さな分教場の中学教師で、社会科と、他教科を若干担当して、職員住宅に単身赴任をしています」

裕恵は康秀が教師をしていると聞いて、何か同職であることに心強さを感じ、彼の容姿を注視した。高校時代の頃とは、ずいぶん変ったなと思った。

会は時間と共に膝を交えての話がはずみ、自分の境遇とか、現在の様子等、それぞれの話題に熱中した。

裕恵のところへ、康秀が杯(さかずき)を持って話しかけてきた。

「裕恵さんですね」

「そうです。幹事さん御苦労様です」

と返事を返すと

「一ぱいどうですか」

「有難うございます」

と杯を取り、口に持っていき、杯を返した。

康秀は無造作に受けとり

「先生の高校教師の感想はどうですか」

「そうですね、歴史を教えていますが、専門教科ですから、思いのまゝやっています」

「私は小さな中学なので、四教科を受持って、山の中で、のんびりやっています。生徒は教師を尊敬しています」

と言いかけて、

「中学教師にもう一人居ますから呼んできます」

裕恵の所に康秀と来たのが、大阪の大学を出た上野正明だった。正明は裕恵に軽い会釈をして、

「私は裕恵さんの高校から、西の方向にある中学に居ます」

裕恵は正明の勤務校はよく知っていたが、まさか正明がいるとは、思いもよらなかった。

裕恵は、

「あなたの学校はどうなの」

「私の学校は大変です。『いじめ』も『校内暴力』もあって、生徒指導とが交錯している最中です。『いじめ』で、先週の火曜日だと思いました。一年生の一人が、居なくなったのです。職員室の先生方が、学校内を隈なくさがしてもいなかった。すると夕方になり、学校から少しはなれた農家の主人が学校にきて、『レタス栽培のビニールホースの袋に穴が開けられ、中をのぞいて見ると、生徒が奥の方に入っていた。『レタスの被害が若干出た』と文句を言ってきました。また、二ヶ月前には校内暴力があり、教師が大分やられまして、数名の警官により学校の平静さをとりもどしましたが、教師と生徒の関係が好ましくない状態です」

と正明が口調を強めて教育について論じ始めると、康秀が、

「何か狂っている様ですね……」、

裕恵も、

「大変ね。私の学校はそんな問題はありません」

「そうでしょうね。中学は義務教育で個性のある生徒が多いからかもしれません」

と康秀が言った。

裕恵は正明の気持がわからないでもなかった。

芥川龍之介の「羅生門」の世界の様に、何かが乾ききっていて、平安時代に逆のぼった感に打たれた。

野良犬がのさばり歩き、人間の肉を食いちぎっている

幻想的な社会が浮んできた。
戦国の世の、「すずかけの並木道」にも出没した雲助や追はぎの弱い者いじめである。
正明の話の中のいじめは、各グループ（班）で課題が一人でも出来なければ、そのグループ全員が出来る迄帰校出来ない。そのために出来ない一人をいじめるという、能力意識のいじめである。人間本来のエゴがそれぞれの人間社会に出てくるのだろうか。
時間のたつのも忘れて互いに境遇や現況等の話題に熱中していると、小川信子の声が耳に入った。
「皆さん、まだまだ懇談を続けていたいとは思いますが、遠方の方もおりますので、一応閉会とします。機会がありましたら再会を企画したいと思います。楽しい一日でありました。有難うございました」
一斉に拍手が起こり、人々は立ち上がり、握手をしながら、会場から姿を消していった。

翌日、裕恵が「すずかけの並木道」にさしかかり、
「これより先姫街道」
と書かれた立札が眼に入ると、彼女の心は再び「姫様」に変身していた。
後から来る高校生の靴の音が、石畳を走らせてくる信玄のひきいる一隊の足音の様に思われた。徳川勢は西方へ西方へと武田勢に追われたのだろう……。この「すずかけの道」は、戦国の世の戦場のように裕恵の中で浮かんでは消えた。
元亀三年（十二月）、二俣城は信玄の手中となり、信玄は追分で全軍をまとめ、金指街道を北進し、浜松城を囲んだという。
裕恵は、元亀三年（十月）信玄が青崩峠を越え、信州街道を下って遠州に入り、袋井から磐田に現われたことなどを、康秀と話合いたいと思っていた。すると、その矢先、康秀から、数日後に、正明の学校へ出張するため南下する、との手紙を受け取った。同級生である気軽さもあって、土曜日の午後「すずかけの並木道」で待つという返事を出した。
十一月四日の午後は、晩秋の西日が熟した柿に美しく映えた。康秀と並んで歩く「すずかけの並木道」は、二人にとって何かほのぼのと感じさせる午後であった。
「十月五日はごくろう様でした」
と康秀がいうと、
「ほんとに楽しい一日でしたわ」
と裕恵が答えた。
「高校時代は昔になりましたね」
裕恵はうなずきながら、高校生を受持つ自分の年令をかみしめてみた。
雪枝の様に結婚して二人の子供もある人もいるというのに、自分はまだ独身である。

並木道の紅葉が、一段と夕日に映え、美しさを、二人に投げ掛けていた。一本の古い松の木の下の腰掛に腰を下ろし、裕恵は、
「『すずかけの道』は歴史街道なのよ」
と言って話を続けた。
「『すずかけの道』の続く姫街道は不思議な道だわ。お堂もあれば、寺もあり、山のロマンが生まれる道でもあるのよ。姫街道といっても、姫だけが通ったわけではないの。奈良・平安から江戸まで、旅人の喜びや哀しみを知っている松並木や、防人たち、万葉の詩人たちが歩いた道の風情も、時代と共に消えていくと思うけど、でも、何かは残っていくと思うの。私は残したいの。わたし『すずかけの道』にほれてしまったのよ」
康秀は、裕恵がこの道に愛着をもっていることを感じたのか、だまって聞いていた。裕恵と康秀は、戦国時代の戦いや、人間の生きざまを、時のたつのを忘れて話した。
夕焼けが西を染め、二人をつつんでいた。
道行く人は家路へと急いでいた。
夕日が落ちる頃、康秀は裕恵を駅まで送り、自分も電車に乗り、西の自宅へと向った。
新しい年を迎え、学校も最後の学期に入り、卒業が間近になって忙しい毎日を送り、二人は会うことも無かった。
卒業式も終り、春休みになり、康秀は信州から南下することを裕恵に知らせた。手紙は、「裕恵の家を訪問したい」と書かれていた。
桜咲く春の始め、康秀は裕恵を訪ねた。
裕恵が応対に出て、
「お待ちしていました。どうぞ、家がせまくて……」
二階へ案内した。
康秀が案内された部屋は、天井の低い暗い部屋で、ぎっしり入った本箱と、側に机が置いてある、せまい部屋だった。二人は腰掛けに座って、向い合った。
母親が下からお茶を持って上って来て、
「よくおいで下さいました。せまい所で、裕恵も嫁に……」
と云いながら顔を出した。母親は嫁の口を考えている様な感じがした。しかし、康秀には、
（裕恵は、ひたすら教師になる為に生まれて来た女）のように思えたが、それは言葉には出さず、
「大変な努力家の様ですね」
「私は歴史の中に生まれて来た様な女で、世間のことは何も知りませんの」
「でも、それで職業が務まればよいではありませんか。私も世間知らずで同じことですよ」
「私はほんとに本の中で育って来た様な人間で……」

たしかに裕恵は学者のような印象であった。
信玄が甲斐の国から「すずかけの並木道」の姫街道へ、何故信州街道を南下したのかなどと康秀と会話ははずんだ。初めての訪問だった為に、「その先の話はこの次ぎにしましょう」と、早々に家を出た。
新学期が始った。「並木道」の往復は、裕恵を姫街道の「お姫様」として歴史の中の人物に変身させ、学校の授業をますます楽しいものにした。
康秀も信州から南下する度に、裕恵と会い、なにか心の満足を感じていた。月日のたつにしたがい、母親と会話を交す中に、母親の口から嫁の話を聞くことが度々あった。
裕恵とも次第に気持がとけあって、ついに康秀は、
「お嫁さんに来てくれませんか」
と言ってしまった。すると裕恵も
「そうね。私あなたの奥さんになるのね。うれしいわ。考えておきますわ」
と答えた。

しかし、結局、康秀との結婚は実らなかった。
康秀のところには、別の女性との結婚話が持ち上がり、その年の秋に校長の仲人で結婚したのである。
結婚後康秀は裕恵とは会うことをしなかった。
再び春が訪れた或る日、康秀のところへ、裕恵から本が送られてきた。開けて見ると「今ひとたびの」という単行本であった。
十年余りの年月が過ぎた秋、同級会の知らせを、上野正明から知らされた。
康秀にはすでに二人の子供があった。そして長女がこの四月、高校に入学したが、思いがけなくも、受持が森川裕恵であった。彼女は相変らず「すずかけの並木道」を往復して通学していた。
彼女は本当に教師になることだけで生まれてきた様に、康秀には思えた。
上野正明を学校に尋ねた初秋の日の午後、康秀は「すずかけの並木道」を歩きながら、
「森川裕恵は同級会に出席するだろうか」
と思いつゝ、夕焼に映える並木道を見上げながら、
（彼女がそれで幸福（しあわせ）であれば、それでよいのだ）
と思った。

幻妖城異聞（六）

三戸岡道夫

（二十三）

古城の復活に金をかけるというのなら、わからないことはないが、わざわざ金をかけて、新しく廃城を造るなことは、前代未聞のことだった。
「殿の気はたしかか」
という風評が、いつのまにか流れはじめていた。
しかし、晃長自身は、廃城の建設に大満足であった。
廃城を造ろうとした動機は、幻の武者行列の鎮魂のためであったが、計画しているうちに、その目的がいつのまにか、
（廃城の美の追求）
という迷路にまよいこみ、そのほうが主目的になってしまっていた。
できあがる廃城は、みやびやかなものが崩れたあとの、あわれさと、はかなさと、残酷さが、郷愁のようにただよい、廃城の鬼気が、冷たく笑みを浮かべてたちこめている、幽幻なものでなくてはならなかった。
世のなかには、
（こんなすばらしい美もあったのか）
と、廃城の美の粋を集めたものを、造りたいのである。
晃長のなかに、遠い記憶がよみがえってきた。
いつか、馬で遠乗りしたときのことだった
秋が深まっていた。山の木々は黄葉紅葉に色づき、森

の下草は枯れはじめて、黄金色にかがやいていた。
晃長は、二、三の近習をつれただけで、枯草を踏みしだき、落葉をけ散らして、森の奥へ、山の奥へと、わけ入った。
そろそろ隣国との国境に近いと思われるところへきたとき、晃長はひとつの廃城を見たのである。
廃城というよりも、廃墟といったほうが、よかったかもしれない。
それは、深山の国の城なのか、それとも隣国の城なのか、わからなかった。いずこの国のものともしれぬ古城の廃墟が、人々から忘れられ、世間から隔絶されて、ひっそりと、秋の黄葉のなかに捨てられていた。
なかば朽ちくずれた城郭の板壁の一部や、低層部の屋根の曲線はのこっており、石垣の残骸が、死体の群のように身を横たえていた。
荒れるにまかせた雑草が、古城の残骸にからみつき、放縦に枝をのばした木々が、中空をおおっていたが、陽に照った黄葉紅葉が、あまりにあざやかな彩りなので、その、すさまじいほどの荒れようは、
（これぞ華麗なる悲惨美だ！）
と、晃長の胸をうった。
このようにすさまじい悲愴美を、いまに残す城は、そもそもどんな城だったのかと、晃長は、その生前の姿を想像してみた。
それは、天から舞いおりた白鷺のような、とびきり優雅な城でなくてはならなかった。
晃長は、そのとき、
（この廃城を、持って帰りたい）
と切望した。だが、そんな願いが、実現できるはずはない。
そのときの願いが、こんどの廃城の新築で、かなえられるのである。
晃長の心は、おどる。
しかし、山境の廃城を、そのまま模したのでは、芸がない。
理想の廃城を作ろうとすれば、廃城の粋を集めねばならない。
さいわい、参考になる文献があった。
（奇城秘聞）
と称する、和綴じの古本である。
それは、笛川の古い手箱のなかから出てきたもので、それには、城にかんする、奇怪で、悲しい、おそろしい、さまざまな話がのっていた。
城主をはじめ、兵士全員を炎にのみこんで、焼け落ちた城、
兵糧攻めにあって、飢死して果てた城、
横暴な城主の手にかかり、つぎつぎに殺された女が投げこまれた、深井戸のある城、

そのほか、数えきれない、城にからむ奇怪な話が記されていた。
そのなかに、攻め亡され、山中に放置された、ある廃城の話がのっていた。
長年、風雨にさらされたその廃城から、おびただしい人骨が、発見されたというのである。
落城時そのままの姿の武士が白骨化して、城内に散乱していたのである。
この白骨の話は、はげしく晃長の幻想癖を刺激した。
晃長の金属的な大きい眼が、異様に光った。晃長が、なにかに憑かれたときの現象である。
晃長は、古本を持つ手を、わなわなとふるわせながら、
「笛川、笛川……」
と呼んだ。
笛川は、まるで部屋の陰から湧き出たかのように、すっと寄ってきて、
「なにかいい着想が、ございましたか」
「あったぞ、これじゃ」
晃長が「奇城秘聞」の、白骨の廃城の頁をさし示すと、笛川の瞳にも、奇怪な色が浮かんで、
「よい着想でございます。さっそく、古鏡にお伺いをたててみましょう」
笛川はいつものように、古鏡の前にひれ伏した。
晃長もかたずをのんで、鏡面に見入る。
笛川のひくい祈りの言葉がながれると、鏡面がぼっとかすみ、やがて、ひとつの廃城の形が結実した。
そして、廃城の大広間や、奥座敷、階段の途中や、櫓や石垣の上などに、おびただしい人骨が、散乱するのが見えてきた。
城が落ちたとき、城内で戦っていた兵士たちが死に絶え、それが片付けられもせず、そのまま白骨化して、散乱しているのだった。
敵兵が攻め寄せて、城内の兵士は斬り殺され、城主は切腹し、女たちは喉を突きあって自害し、その死体が、その形のまま白骨となって、残ったという形であった。
刃を片手に持ったまま、無念の形でたおれている白骨、座した形で背をおり曲げている白骨、二人で抱きあっている白骨など、凄惨をきわめた。
肉体は白骨化しても、衣類や鎧は、なかば、その名残をとどめている。
さびついた鎧の残骸や、朽ちても色彩だけはあざやかに残った衣が、白骨にまとわりついているのは、凄惨といおうか、奇怪といおうか、背筋がぞっとする光景だった。
そのなかに、抱きあった二つの白骨が、一方が男で、一方が女という、組み合わせがあった。その白骨の抱きあう形は、尋常でない。落城の死屍累々のなかにあっての、男女の営みのすさまじさに、晃長は眼のくらむ思い

がした。
笛川の祈りがおわると、鏡面から、廃城と人骨は消えた。
晃長の頭のなかで、いつか見た国境の廃城と、いま古鏡に映った人骨の廃城とが、ひとつに結合した。
（よし、この二つをいっしょにした、理想的な廃城を造るのだ）
そう着想を得ると、晃長は一刻の猶予もしなかった。
さっそく、普請奉行の相良助之進と、築城担当の久米武助をよんで、白骨の着想をつたえた。
聞いた二人は、おどろいた。
古城の美の追究のために、役にも立たない廃城を造るということさえ異常なのに、その廃城へ白骨をばらまくなどということは、異常をこえて、狂気としか言いようがない。
しかし、晃長の命令を拒否できないことが、二人にはわかっていた。
武助はさっそく人を各地へ走らせて、散在する廃城の美を、調査、研究させた。
それを、絵に、何枚も描かせる。
資料がそろうと、晃長のところへ持ちこんで、あれこれと廃城の美を追究する。
いったん興が乗ると、晃長の眼の色がかわり、ときには夜を徹して論じられることもあった。
その姿を見て、家臣たちのあいだには、
（軍備の拡充や、兵力の強化に、あれくらいの情熱を示してくれたらいいのに）
と、冷やかな眼で見るものもいたが、どうすることもできなかった。
晃長の関心がとくに高かったのは、白骨であった。
話が白骨のくだりになると、晃長の眼はいちだんと光をました。
いつもは、遠くを見つめて焦点の定まらない瞳が、にわかに濡れ濡れと光って、鮮明にかがやきだすのだった。
「男と女の骨の区別はつくのか」
などという、とんでもない質問がとび出してくる。武助はしかたなく、
「骨になってしまうと、区別がつきにくいのですが、まあ、頑丈な骨格が男で、華奢なほうが女といえましょうか」
とでも答えるほかなかった。
「何体ぐらいの白骨を作るのじゃ」
「天守閣に五、六体でしょうか。大広間には三十体。廊下のあちこちに二十体……」
武助が目分量でそう言うと、晃長の眉が癇性動いて、
「それでは足りぬ。そうだな、男の白骨を五百体、女の白骨を二百体、作るがいい」

（えっ、そんなにたくさん、無茶な！）
と、あわててみても、もう遅い。
晃長のほうで、勝手に決めてしまうのだった。
しかし、人骨の模造は、言うほど簡単にできるものではなかった。
まず、そんなに細工師がいない。
たとえ、いても、気味悪がって、作りたがらない。
また、材料のほうが、そんなたくさん、すぐ集められなかった。
しかし、廃城の完成までに、白骨はまにあっていなくてはならない。
ただちに、馬や牛の骨が集められ、いやがる細工師を督励し、人骨を模して、牛馬の骨がけずられた。
だが、それだけでは、とても足りそうになかった。
そこで、やむなく、戦場の跡へでかけて、草むらから人骨をひろい集めたり、また、墓をあばいて、人骨を掘りだすようなこともした。
すると、そうした情報を聞きつけて、他国より人骨を車に積んで、売りこみにくる者もあらわれる始末だった。
晃長は、白骨ばかりではない。白骨の散乱を効果的にする、小道具の研究にも、熱心だった。
白骨にまとわりつく、朽ちかかった男の着物、女の小袖。鎧や、さび槍の破片などにも、晃長はこまかい注意をあたえた。
こうして、いよいよ廃城ができ上り、天守閣や大広間に白骨を並べるときには、晃長がわざわざ現場に出向き、白骨の配置を指示してまわるという、熱の入れようであった。
廃城の奇怪美のために、わざわざ白骨を作ったと聞いたとき、婉姫は、
（まあ、気味がわるい）
と、心の震えがとまらなかった。
だから、夜、褥（しとね）のなかで晃長に抱かれるときも、婉姫の気持は安まらなかった。
ある夜、婉姫は晃長に抱かれたまま、とつぜん、びくっと身体をのけぞらすと、
「あーっ！」
悲鳴をあげて、晃長の腕のなかから、のがれようとした。
婉姫は、一瞬、髑髏に抱かれている錯覚に、陥ったのであった。

（二十四）

こうして廃城のほうが、天神平城よりも、はやく完成したのである。
あとから計画した廃城のほうが、先にできたのは、晃

長の執念があまりにすさまじかったので、天神平城の工事を一時中断し、労力を廃城のほうへまわして、突貫工事をしたからである。

出来上ってみると、それは見事なものだった。

廃城とは、そもそも、城の残骸である。その残骸が見事に出来上ったというのは、おかしな表現であるが、人工の廃城は、本物の廃城以上の廃城を思わせた。

その廃城完成の祝いが、さる吉日をえらんで行われた。

廃城落成の神事のあとには、祝いの能楽が上演されることになっていた。そのために、廃城の庭に、仮設の能舞台が作られた。

神官をむかえて、廃城落成式がおわってから、能楽がはじまるまでのあいだ、参列者には廃城見学の時間があたえられていた。

見学には、晃長がみずから、観客を誘導した。

見学者がどんな反応を示し、どんなに驚嘆するか、その姿を、晃長は見たいのだった。

晃長のあとに、築城担当の武助がしたがい、それに婉姫、笛川、家老の定国、染の井、大勢の家臣たちがつづいた。

廃城は、無気味といおうか、鬼気せまるといおうか、荒廃が人工的にみがきをかけられた荒廃をみると、婉姫は幽界にさそいこまれるようで、気分が重く沈んでいった。

婉姫が石垣のあいだを通り、くずれた廻廊の一角に足をふみ入れたとき、

「キャッ」

小さい悲鳴をあげて、立ちすくんだ。

廻廊の暗がりに横たわる白骨を、婉姫が踏みそうになったからである。

婉姫のほうに顔をむけた髑髏の暗い眼窩から、銀色のすすきの穂がのびあがっていた。

それは、晃長のじまんの工夫だった。

「は、は、は…、おどろいたか。これは趣向じゃ。本物の骸骨ではない。つくり物じゃ。だが、よくできているであろう」

「本物でなくても、恐しうございます」

婉姫は晃長の袖にすがったまま、しばらく動けなかった。

一行は荒れはてた城郭へ入り、くずれ落ちて半分ほどしか残っていない、天守閣へのぼった。

急な階段も、半ばくずれて、足でふむのさえ危げである。

のぼるにつれて、荒廃した大広間、居間、天守の間などに、くりひろげられた光景は、すさまじいものだった。

荒れはてた暗がりに、おびただしい白骨が散らばっている。

それは、晃長が、「奇城秘聞」と、「古鏡からのお告

げ」によって、作りあげた幻影である。

とても人工のものとは思えない、おそろしさと、悲惨美であった。

ある白骨は、さびた太刀を握ったまま、あおむけに倒れ、ある白骨はおり重なって、うつぶせになっていた。

切腹した白骨は、そのままの形で柱にもたれており、たがいに喉を突きあって死んだ白骨もあった。

そのなかには、朽ちた着物や、帯の断片が、まとわりついた白骨もあり、着衣の骸骨のほうが、気味悪さをきわだたせていた。

城主一族の居間と目される場所では、最後の饗宴でもやっていたのか、十数人の骸骨が、車座になってすわっており、多くの器などが散らばっていた。

四散する白骨のあいだに、ぼろになった男の着物、女の小袖、鎧や、太刀や、槍、虫にくわれて形だけのこった床几などが、ころがっている。

奥座敷の一隅に、まだ華麗な色彩をのこした小袖をまとった女の白骨のうえに、骨ばかりの扇がひらいていた。城主の奥方の白骨なのでもあろうか。

男と女の白骨が、抱きあって、交合したものもあった。

死を前にして、愛する男と女がひそかに情を交わしたのか、それとも、死を前にした男が、逃げまどう女を犯したのか、それはわからない。

女の腰骨に巻きついた花模様の小袖の切れはしと、男の足の骨にまきついた赤い褌が、奇怪ななまめかしさで、ゆれていた。

見学者は、その形から、生前の抱きあった姿を想像して、慄然とするのだった。

そんなすさまじい光景は、たとえ人工のものだとわかっていても、婉姫には見るにたえられなかった。

婉姫は顔も蒼ざめ、ほとんど失神寸前であった。

それで、侍女にささえられるようにして、階下へもどっていった。

見学者がさらに歩をすすめると、広間のはしや、階段、廊下に、真紅の椿の花弁が、点々と散っているのが見えた。

その落椿も、もちろん造花である。奥女中たちが動員され、紅の布で椿の花弁を作り、白骨のまわりに散らしたのである。

白骨の白さと、落椿の紅との対比が、あまりにあざやかだったので、落椿は、白骨から流れ出た血の跡かと、見まちがえるほどだった。

天守閣をおりて、裏庭へまわると、見学者は、あっと、おどろいた。

椿の巨木の下に、血の池が拡っていた。

しかし、血の池と見えたのは、落椿の海であった。

これも、自然の落椿ではない。造花の椿である。それが無数にまき散らされ、うずたかく積っているのが、一

瞬、血の海に見えたのである。
その血の海にも、数体の白骨が浮いていた。

廃城の見学がおわると、祝いの能楽がはじまった。
すでに時刻は、夜になっていた。
廃城を背景にした庭には、あかあかと松明がたかれ、仮設の能舞台は準備が完了して、いつでも花阿弥が舞えるようになっていた。
晃長が正面の座につくと、婉姫も蒼ざめた顔で、その横にすわった。
花阿弥は、まず、祝いの演目として、〝翁〟を舞った。
深山の国の天下泰平と、国家安泰を祈る演題である。
白骨の散乱する廃城の舞台での、天下泰平、国家安泰は、そぐわない感じがするのだが、晃長にとっては、そうではなかった。
晃長にとって、廃城は、荒廃ではない。
美の極致なのである。
長い歳月の風雨に洗われて、表面の生臭さが洗いながされ、城のいちばん内側にある本質だけが洗いだされて凝固した、純粋な城の姿だと、晃長は思うのである。
いわば、城の精とでもいうべき、美の極致なのである。
城の純粋美の結晶といっていい。
夜がふけていく。
篝火は天をこがすほどに燃えあがり、あたりを輝くばかりに照らした。
さながら空いちめんが、強烈な夕焼に染ったかのようだった。
そのとき、廃城の天守のあたりから、
わっ、
と黒いものが、空にむかって、羽ばたいて舞った。鴉の群が、なにものかにおびえて、西の空へ飛びたったのである。
（なにか異変が起きなければいいが）
見上げる笛川の胸を、不安がよ切った。
能の舞台が、最高潮に達しようとしたときであった。
それまで静かに舞台を見ていた婉姫が、とつぜん、くずれるように倒れた。
舞台の花阿弥の顔が、一瞬、黒ずんだように見えたかと思うと、それが婉姫には、髑髏に見えたのである。
婉姫は侍女たちの手によって宴の席からはずされ、ひと足さきに、奥御殿へもどった。

夜が更けた。
婉姫は奥御殿で、ひとり寝ていた。
奥御殿の庭にも、椿の大樹が、まるで闇のかたまりのように茂り、梢から、
ぽたり
ぽたり

と椿の花が落下し、その音が、婉姫の枕もとまでとどいた。
しめって、重たげな落椿の音は、婉姫の心を幽界へさそいこむようだった。
耳をすますと、闇のかなたから、夜のにぎわいが、潮騒のように聞えてきた。
廃城落成祝いの能楽がおわると、一行は深山城へもどって、酒宴がはじまり、それが、まだつづいているのだった。
そのとき、落椿の音をぬって、誰か人の近づいてくる音がした。
板戸が外からたたかれて、婉姫は夢うつつに、人の声を聞いたように思った。
板戸をたたく音は、聞きなれた叩きかただった。
婉姫は、身体をかたくした。
「もうし、婉姫さま」
ため息のような、花阿弥の声。
「お見舞いにあがりました。ここを開けてくださいまし」
婉姫は、
（逢ってはならない。戸をあけてはならない。笛川との約束がある）
と思うのだが、花阿弥の声をきくと、もうだめだった。
婉姫は起きあがって、板戸へ手をかけた。
すると、板戸は外からあけられ、そのすきまから、花阿弥の白い顔がのぞき、
「婉姫さま……」
「入ってはなりませぬ」
婉姫は、つよく花阿弥を押しもどした。
「中に、誰かおるのですか」
「いいえ、誰もおりませぬ。でも、もう、お逢いできないのです」
「なにかあったのですか。お聞かせください」
そのとき、廊下のかなたに手燭の灯がゆれて、人の影が見えた。
「あっ、誰かきます」
あわてて花阿弥が婉姫の手を引き、二人はもつれあうようにして、庭の暗闇のなかへ逃れた。
椿の大樹が、黒々と茂っている。
その陰は、真の闇だった。
その木陰にかくれると、婉姫は、花阿弥の胸に顔をうめた。
「花阿弥さま、わたくしは、こわいのです。おそろしいのです。わたくしを助けてください」
「こわい？」
「ええ、廃城の髑髏が、わたくしを見つめるのです」
「あれは作りものです。細工ものです。ほんとうの髑髏ではありませぬ」

「でも、わたくしのまわりの人が、ぜんぶ髑髏に見えてくるのです」
そのとき、庭の闇に、ひらり、と黒い影が動いたかと思うと、松明の火がゆれた。
火は、二人のほうへ近ずいてくる。
二人はどきっとなって、いっそう、ひしと抱きあった。
とつぜん、二人の前へ、松明の火がつき出された。
松明をもった黒い影が、
「曲者(くせもの)ぞ！」
叫ぶと、
ピーッ
呼ぶ子の笛を吹いた。
鋭い笛の音が闇にながれると、ばたばたと足音がして、
婉姫と花阿弥は、集ってきた警固の武士たちによって、とりかこまれてしまった。
松明に照しだされた婉姫の顔を見て、
「や、やっ、お方さまではないか……」
「いっしょにいるのは、花阿弥……」
こうして婉姫と花阿弥は、染の井が巧妙に張りめぐらした網の目に、ついに捕えられてしまったのである。
警固の武士のひとりが、ただちに染の井のところへ、報告に走った。
祝いの酒宴に席をつらねていた染の井の顔に、ゆっくりとした笑いが浮かび、
「ご苦労であった」
報奨の金包みが、そっと渡された。
と同時に、この事件は、酒宴たけなわの晃長の耳へも報告された。
「なに、姫が花阿弥と通じたとな」
晃長は激怒した。
「恐ろしいことだ」
と、髪をかきむしりながら叫ぶと、
「わしをひとりにしておいてくれ」
晃長は、やぶれるほど強く、足で床をけとばし、踏みならすと、奥御殿へむかって駆けだしていった。

（二十五）

婉姫と花阿弥の処刑を、晃長は、もっとも残酷な方法でやろうと考えた。
それが二人への報復であると同時に、国主へ恥辱をあたえたことにたいする、見せしめである。
婉姫は、笛川が京からさがしてきた姫である。笛川が泣いて命ごいしたが、この件についてだけは、晃長は、笛川のいうことを聞かなかった。
火責め、水責め、さらし首、吊し斬り、籠へ押しこんで蛇責めにする…、晃長は考えられるかぎりの残忍刑を、夢想してみた。

空想の処刑のなかで、二人の罪人が、さけび声をあげながら、もだえ苦しむさまを頭に描くと、晃長は、心の奥に、こまかく震えるよろこびを感じた。
数日して。
（姦婦と姦夫を、椿の馬場にて処刑する）
という宣告が、城内へ掲示された。
馬場を取りかこむ椿の森は、ちょうど眞紅の花ざかりであった。
したたるように咲く椿の花群は、これから処刑される美男美女の、鮮血の予兆かと思われた。
処刑当日になると、馬場の中央に、二本の処刑柱が建てられた。
それを遠くからかこむように、大勢の観客が集った。
やがて馬場の一角から、警固の武士にかこまれた馬が二頭、すすんでくる。
馬上には、荒縄でしばられた婉姫と花阿弥が乗せられていた。
花阿弥は下帯一本の裸身で、縄目のふかく食いこんだ白い肌には、無数の鞭のあとや、生ま傷があった。
捕えられて、地下の石牢へ閉じこめられているあいだに、凄惨な折檻が加えられたことを物語っていた。
さしも美貌の花阿弥の顔も、蒼ざめてゆがみ、肉は落ち、思わず観衆は眼をそむけた。
それにたいして、婉姫のほうは、美しく盛装していた。
顔は丹念に化粧され、黒髪は長く櫛けずられ、装った小袖のきらびやかさは、これから処刑される女の装いとは、とうてい思われなかった。
にくい姦婦とはいえ、昨日までは、晃長にとって、最愛の妻だった姫である。花阿弥とおなじ仕打ちは、できなかったのであろう。
それとも、異様とも思われるその盛装には、なにかの魂胆が隠されているのかもしれなかった。
二匹の馬はゆっくりと馬場を一巡しながら、その裸身と、盛装を、観衆にさらした。
馬上の二人は、むごい恥辱にたえきれず、その視線を観衆からはずして、椿の花群にむけていた。
晃長は、幔幕のうちから、馬場のようすをながめながら、さかんに杯を口にはこんでいた。
（思いきり残忍な刑にしてやろう）
と、この刑の趣向を考えたのであるが、いざ、それを実行するとなると、酒の力でもかりないと、たえられないのであろう。
二匹の馬は、晃長の前までくると、そこから折れて、中央の処刑柱へむかった。
二人の罪人は、馬からおろされると、処刑柱にゆわえつけられた。
婉姫は盛装のまま、処刑柱に荒縄でぐるぐる巻きにされたが、裸身の花阿弥は高々と、逆さ吊りにされた。

処刑柱の高みから吊り下げられた花阿弥の裸身は、白魚のように揺れ、みだれた髪が海草のように垂れて、ちょうど、花阿弥の顔が、婉姫の顔の高さになるように、加減されていた。

処刑係の武士が、折れ弓で、思いきり花阿弥の裸身を打ちすえた。

「うっ」

と、うめいて、花阿弥の裸身が、そり返える。

折れ弓は執拗に打ちおろされ、その折檻のすさまじさは、

（なぶり殺しにしろ）

と命令した晃長さえも、眼をそむける、むごさであった。

最初は激痛にたえていた花阿弥も、しだいに反応をなくし、ついには死体のようになってしまった。気絶したのかもしれない。

すると、別の処刑係が、手に、まっ赤に焼けた焼鏝（ごて）をもって、すすみ出た。そして、焼鏝を花阿弥の胸に押しあてたのである。

じゅーっ

と音がして、肉のこげる臭いがすると、

「うーむ」

と、花阿弥は息をふきかえし、顔をしかめて、身体を海老（えび）状にそらした。

観衆は思わず、顔をそむけた。

そのとき、異様な動きがおこった。

もう一人の処刑係が、婉姫に近寄ると、姫の縄をといた。そして、姫の顔を、苦悶にゆがむ花阿弥の顔に押しつけ、婉姫に花阿弥の唇を吸わせようとしたのである。

婉姫は、

「いやだ、いやだ」

と、必死に顔を横に振る。

つづいて、思いもかけぬことが起った。

それは、その場の異変のように見せながら、実は、晃長があらかじめ仕組んでおいた、処刑の最後をかざる華だった。

処刑係たちは、折れ弓や、焼鏝を捨てると、いっせいに婉姫にむしゃぶりつき、やにわに衣裳をぬがせにかかった。

「なにをするのです！」

叫びにも耳を貸さず、処刑係は婉姫の帯を解き、小袖をぬがせ、腰ひもにも手をかけた。婉姫も裸にむいて、裸の姦夫姦婦を、観衆の面前で、いたぶろうという趣向なのであった。

婉姫の黒髪はみだれ、すでに下着の裾も割れて、下半身がむきだしになり、姫は半狂乱である。

婉姫のその姿を、逆さ吊りのままで見おろす花阿弥の顔は、苦痛にゆがんでいた。そのとき、

「うっ……」

低い声をたてて、婉姫の動きがとまった。

婉姫のかぼそい肩が、こまかく痙攣し、唇から、ひとすじの血が流れた。

婉姫が、舌をかみ切ったのである。

そして、そのまま、地面にくずれた。

晃長の計画は、裸の二人を観衆の面前でいたぶったのち、その場で斬り殺す予定であった。

しかし、婉姫が舌をかんで自殺するという、予想外の事態がおこると、晃長の考えが変わった。

もともと晃長は、花阿弥が憎いのではない。気に入っていた。

その能は華麗だったし、晃長の命ずるままに、能の舞台に新しい工夫を加えた。

晃長ののぞむ能を作る手腕はみごとなもので、その能が異端だといわれようと、花阿弥は意に介さなかった。

だから、花阿弥がのぞむならば、今後、深山城の専属の能楽師にしてもいい、花阿弥のための能楽堂を建ててやってもいいとすら、思っていた。

だが、その矢先に、花阿弥は婉姫と通じて、晃長を裏切ったのである。

（このまま、すんなり花阿弥を殺してなるものか）

愛は、一挙に憎しみにかわった。

（生かしておいて、苦痛を長びかせ、もっとも残忍な方法で殺してやるのだ）

そのために、花阿弥は、絶命する寸前に、逆さ吊りを解かれた。

そして、ふたたび石牢へ投げこまれた。

（どうしたら、苦痛を、いちばん長びかせることができるだろうか）

晃長は、毎日、そのことばかりを考えていた。

その頭に浮かんだのが、深山灘に浮かぶ、荒磯島であった。

荒磯島の金鉱では、大勢の男たちが、苦しい金の採掘作業にたずさわっている。

とくに、地底から涌きでる水を、たえず地上に汲みだす水替人夫の労働は、言語に絶する苦しさだという。そのために、命を落とす男たちが、後をたたない。

（そうだ、花阿弥を荒磯島へ送りこんでやれ）

晃長は金鉱の内部を想像した。

（花阿弥のやつめ、その暗がりで鞭うたれ、もぐらのように金を掘るのだ。さんざん痛めつけられて、死ぬまで苦しむがいい）

折しも、築城の資金づくりに、定国の指揮のもとで、金の増産がすすめられている。

その労働力確保のために、人狩りが行われ、多くの人夫が荒磯島へ送りこまれていた。

金堀り人夫は、ひとりでも多くほしい時期だった。

ひ弱な能楽師の肉体が、金鉱堀りの荒仕事に、たえられるか、どうか。そんなことは、どうでもいいことだった。

（たえられなければ、死んでしまえばいいのだ）

花阿弥が血を流して掘った金で、築城の資金をまかなうのだと思うと、はじめて晃長は、胸のつかえがおりる思いがするのだった。

それから十日ほどたって、花阿弥は唐丸籠へ押しこめられて、波のかなたの荒磯島へ送られていった。

婉姫は自害していたから、花阿弥のこの悲惨な末路を、もちろん知りはしなかった。

婉姫の遺体は、深山城内の、椿の大木の根もとに埋められた。

（人は死ぬと、椿の木に還る）

と昔からつたわる生命観にしたがって、深山の国では、死者は椿の根もとに埋めるのが、ならわしになっていた。

人は椿の木に再生して、この世に永久に生きつづけるのである。

だから、深山の国の椿は、あたかも死者の化身のごとく、どれも、大木、巨木で、真紅の花が、枝々を満艦色にかざりたて、血がしたたるように咲くのである。

どの家にも椿の森があり、これは誰々の椿と、一本一本に死者の名前がついており、他界した家族たちが、椿に変身して、そこに集っているのだった。

晃長の父も、母も、その習わしにしたがって、椿の根もとに埋葬されていた。

婉姫も、それにしたがったのである。

椿の根もとに婉姫を葬った夜、晃長は終夜、ひとりで、

ぽたり
ぽたり

という落椿の音を聞いていた。

が、その夜の音は、ことさら、はげしい音に思われた。

ぽたり
ぽたり
ぽと、ぽと……

しだいにその間隔がみじかく、屋根や庭のあちこちから、聞えてくるのだった。

婉姫が落椿となって、泣いているのにちがいない。

夜が明けた。

（明朝の落椿は、どんなだろう）

と晃長が夜半に思ったとおり、朝、めざめてみると、ひろい庭は真紅の落椿で埋めつくされ、奥御殿は椿の血の海に浮いているのかと、錯覚するほどだった。

奥御殿のまわりの椿の森は、婉姫の死をいたんで、一夜にして散りつくしたのである。

（つづく）

近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（九）

第一章　重蔵大空に羽搏く

五、渡島半島の見分

金子正義

（三）

翌五月二十六日大野村を辰の上刻に立ち、大野川河畔を一里半程北に溯行すると、行く手に毛無山が見え始めてきた。小半刻程行くと道は毛無山峠下で二手に分れる。

左方向の毛無山峠を越えて仁山高原を抜け中山峠に至る道は、東蝦夷と西蝦夷の連絡道で中山峠より鵜川沿いに下れは江差方面に出る、戦国時代よりの古道であるが時折羆が出る危険な道であると云う。

近藤隊は右手の白樺や樅などの繁る自然林の中の岨道に入った。

小一里程北に進むと緑の繁みに囲まれた沼の縁に出た。沼の水面は浅葱色をして静まり返っていた。

「此れがポロト（小沼）で直ぐ先の森の奥には、此れよりも二倍程大きなポント（大沼）があり、此処辺り一帯は水を呑みに集まる鹿、狐、兎などが多く、秋より冬にかけての良い狩り場であります」

と余利与助が説明した。

程なく岨道を覆う広葉樹林が疎となって次第に切れ、一面に丈余の茅葦の草原となった。

隊列の切れ目に大型野鳥が小綬鶏のように出没したり隊の先頭を突然大鹿の一群が走り去ったりした。

深草の透き間に見える駒岳を頼りに二里程北に行くと泉の湧く小部落があった。近藤隊は駒岳を眺め乍ら昼食休憩をとった。

駒岳の山容は見る方向で異なる、来る途中からは、上州の赤城山を西側より眺望するような、なだらかな山陵が豊かな山裾になっていたが、近づき見上げると、甲州路より見る夏の富嶽のように見える、正しく渡り島富士の名の通りの景観であった。

近藤隊はぐるりと駒岳の山裾を回り込んで森村に到達し、会所の宿泊棟に入った。

翌二十七日朝、夜来の雨が残っていた、森村会所詰の番役が、

「此の分では渡り船は仲々見えません、緩っくりと午後から出立なされるがよい」

と好意を示して笑顔で言った。長島新左衛門が苛立て、

「船は砂原湊から出るのじゃ無いのか」

と言うと

「左様、船は内浦湾の向う側絵鞆より海上十里程を、旅客や海産物を積んで、昨日の夕刻砂原湊に入る予定でしたが、生憎と昨日は向う側も悪天候で出航できず、今朝から向う側では日和見、潮待ちで、船は船頭の判断次第で余り当てにはなりません」

と頼り無かったが、森村の番役は昨夜近藤隊が到着すると、箱館奉行白鳥彦右衛門の通達に従って直ちに砂原湊番役所へ、幕府見分隊先鋒三十名の到着と、絵鞆渡船手配の先触れを継走していたのである。

昼近くなると天候も回復し始めた。近藤隊は森村より砂原湊へ向って出発したが、道は東に向っていた。昨日来た道を駒岳の方向に戻るように東進するのであった。

楢、楢、栗などの広葉樹の疎林の林道を三里程行くと、内浦湾の海岸筋に出た。

暫く歩くと遙か海を隔てて向い合うように絵鞆岬が突き出ているのが見え始めた。

海上には渡り船の影も漁船も見えず、薄墨色の海が渺茫として広がっていた。

近藤重蔵は、此の内浦湾内の虻田に、寛政八年八月、英船ブロートン号が突然来航し、絵鞆湊近くの海岸線の観測や海底の測量等をして去り、翌寛政九年七月再び来航して絵鞆の白鳥澗に上陸し、村人より薪炭、飲水を貰って引揚げた。未だ生々しい事件を思った。

其の時、知らせを受けた幕府の衝撃、幕閣の動揺は大変なものであった。

然し、今は何んと不思議な程に静かに長閑な展望であった。

箱館の東の亀田半島突端の恵山岬と、向い合う絵鞆岬によって外洋の荒浪を防ぐ内浦湾は、其の侭大きな港湾をなし、湾入口南の砂原湊は森村からは二里程北東の海岸に在って、東西に長く伸びて弧をなす砂浜の防波堤も必要の無い浜湊であった。

其の長汀曲浦に点在する漁師の苫屋の舟が好きな浜に留り、砂州に曳き上げられて、干されている船も見える。

其れでも冬の風と潮の流れで内浦湾に押し出された、兎の耳のような砂崎の付け根の彦澗が、連絡船や荷船が出入する港らしく、船着場や湊番所、物産取引会所、倉庫、商家や宿屋などもあるって港町らしくなっている。

近藤隊は、会所屋敷より西の度杭岬寄りの台地に、異国船騒ぎで急造された紋兵衛陣屋に入って宿泊した。

翌二十八日、重蔵が目覚めた時は昨夜半過ぎより降り出した雨は、風雨となっていた。昨日は静かだった海も終日荒れて高なす波濤が浜に打ち寄せていた。

砂原湊には連絡船は元より荷船も入らず、湊近くの舫い舟は何処かへ避難したのか一隻も見えなかった、近藤隊は終日陣屋に籠って旅装の繕い武具の手入で過した。

二十九日、夜明けと共に風雨も歇んで薄日が見え始め、浜辺に寄せる波も静かであった。

近藤重蔵は下野の源助を供に、陣屋の裏手の台地に登って構築中の港湾防備の堡塁を見に行った。

台地の段差を利用して上陸して来る假想敵を射ち落す銃眼を穿った石積の防壁が三十間程長く延びて、内側に造りかけの望楼と砲塁があったが、実戦に役立つ構えより、洋上の異国船より見て防禦の強固さを誇示せんとする為のように思えた。

望楼から砂原湊の船着場を見渡したが一隻の船も見当らず、長浜の漁師の小舟すら見えなかった、沖合は靄って見渡しがきかなかった。

陣屋に戻ると間も無く、会所大番役の青木玄之助が挨拶に来て、連絡船の未着を告げた。

玄之助に依れば長万部の会所からの連絡で、数日前内浦湾に数頭の長須鯨が現われ和人の漁師よりも早く発見したアイヌが、長万部のエカシ（長老）に急報し、忽ちコタンの乙名がカムイ、フンペ（鯨捕り）の狼煙をあげ、各地のコタンより、船足の速い板綴舟や皮舟が集って鯨を追い二頭を仕留めた。

此れを知った内浦湾の和人漁師達も総出して、勢子舟や八丁櫓の捕鯨船で、残った鯨を追って長柄の銛を投げて突き立てたり、子供鯨を陸に追い上げたりの大仕事となって人手が足らず、絵鞆からの連絡船も渡し船も来られなくなった、と云う次第であった。

重蔵は本土の南紀の捕鯨や、仙台金華山沖の捕鯨の勇壮さは聞いていたし、腕自慢の漁師が打ち込む屋号を刻んだ銛の数で獲物の分け前をすると知っていたので、此処では和人とアイヌの捕鯨の争いは無いのかと訊いた。

「内浦湾には五月頃から秋にかけて五、六頭の群れが二、三度入りますが、アイヌはどんなに鯨が多くとも二頭しか獲りません、従って和人との争いは起きません」

重蔵は、鯨は用途が多いと聞いているので不思議に思い、

「アイヌは鯨を好まないのか、使い道を知らないのか」

と重ねて訊くと、

「アイヌにとっては鯨は、宝の山のようなものです、肉を食べるだけでなく、皮も骨も、余すことなく悉く使い果します」

青木玄之助は大雑駁に答えたので、重蔵が未だ納得が出来ぬ顔をしていると見て、

「卒爾乍ら、加て申しますれば、肉はただ食べるだけでなく、乾肉や燻製にして冬の大事な食物となし、皮は敷物、天幕、衣服、袋物、何にでも使う皮紐も作ります、骨は、漁労の釣針や銛、狩猟の矢鏃となり、残骨は余さず石臼で粉にして食べます。油は燃料、灯明に使い、鯨の頭から尾鰭まで無駄にするものは全くありません。鯨は内浦のコタン全体で分け合いますが、二頭あれば充分で其れ以上は獲りません。

アイヌは鯨だけでなく他の獣、熊、鹿、狐、兎など全ての生物はカムイ（神）の恵みとして頂くので、必要以上には捕獲しません。獣を分配する時も獣の神霊送りのイヨマンテの儀式をしてから腑分けをして分け合います。

鯨を仕留めるにもアイヌは、和人の漁師達のように大騒ぎで勢子船を動員して鯨を追い立て、気の荒い長須鯨と争い乍ら取り囲み、何本も長柄の銛を投げて突刺して獲えるのでなく、鯨と一緒に競泳するように三、四人乗りの小舟で静かに近づき、曳綱のついた銛竿を鯨の頸筋の柔軟な急所に打ち込むのです。

銛にはトリカブトの毒が塗ってあるので鯨が次第に弱まると、曳綱を引いたり弛めたりし乍ら緩っくり曳いてきます、銛は勿論長須鯨の下顎の骨で作ったものです。

余儀乍ら和人の漁師は、自分達は肉は食わず油も用いずですが、会所の場所請負商人に売りますと、油などでも三斗入の樽で銭一貫文（一分）程になるでしょう、従って幾等でも鯨を追い回して刺留める訳です」

と役目柄アイヌの生活を良く知る青木玄之助は、アイヌの欲の無さに嘆息し乍ら語った。

近藤重蔵は、蝦夷地と云えども商品経済に組み込まれている和人と、未だ自然採集、狩猟生活のアイヌとは生活感情が全く違うこととは思い乍らも何にか心を強く搏つものを覚えた。

次の日三十日も連絡船は入らなかった。

会所大番役の青木玄之助は、松前よりの継ぎ送り手配の通り配船出来ない事を苦慮して、箱館奉行の白鳥彦右衛門に早馬を飛ばし船手配を頼んで、漸く六月一日朝砂原湊より向う側に渡る船を出すことになった。

重蔵は青木玄之助の手配を謝し乍らも、明日一日便々として日を過すは惜しい、近くにアイヌ部落があれば様子を見たいが如何か、と玄之助に尋ねると、

「アイヌは四季ごとに棲み小屋を替え、夏はレプンイオル（漁場）に近い海岸のコタンに棲み、冬はキムンイオル（猟場）の山懐に入ります、今は海辺のコタンですが、男共は漁りに出払って老人か女子供ぐらいでしょうが森村より一里程西の狗神岳の裾野、濁り川の川岸にあるコタンは、海山に近く秋の木実拾いや、冬に獣を追うのにも都合が良いので余り移動せず棲み着いていると思いますが、山道より岨道、獣道と混み入って分り難いので言葉の分る番役に案内させましょう、だが、公儀のお役人が大勢では、姿を隠しますから近藤様の外二、三人にして下され、」

と言って、早速会所番士に案内を命じた。

三十一日朝食後、重蔵は村上島之丞と金平、善助を供にしてアイヌ部落見分に出掛けた。長島新左衛門には、近辺の測量に参ると告げ、隊員一同には明日の出立準備後は自由行動を許して出掛けた。

アイヌ部落への道は数日前通った森村よりの道を暫く戻り西に向う枝道で乾の方向に見える狗神岳が目印であるが、榛の木や樺などの広葉樹林の岨道で迂闊に歩くと狗神岳山麓の原生林に迷い込む、案内の番士は良く心得て古木、喬木を道標に慎重に緩っくりと行く、様々の鳥の囀りが賑やかに響き合い時折大鳥が樹間に翳を落して飛び去る。

一刻程人外の森林を歩くと濁り川畔に出た、川岸に沿って北に溯行すると川岸は疎林となり、強い匂いの白い花をつけた栗の木も混ざり込んでいた。

「濁り川のコタンに出ました」

番士の指さす林の向うに茅葺円屋根の掘立小屋のような家が、七、八戸見える。番士によると掘立小屋はチセと云う、近づくと、

チセのアパシエム（入口）は莚戸が垂れ、腰高の棒が外から抑えに立て掛けてある。案内の番士は、

「棒の立て方でアイヌは出掛けた方向を示しています、殆どレプンイオルですな」

と近くのチセを見渡して言った。

コタンの中程のクチヤカラ（仮小屋）の前に、毛皮の垂れ褌の子供が二人坐り込んで平らな石臼で何にかを粉にしていた。番士が

「コタン、ヨロクル（家長）は居るか」

と手招きして訊いたが二人は大きな目を向けた侭黙っていたが、大きい方の男子が

「ハボ（母親）とフチ（婆さん）はいる」

と離れたチセを指さした。

チセはクチヤカラを三戸程合せた程の大きさで、コタンの共同作業場だった。

アパシエムも、内から支え棒で上げた窓も、天井の引き窓まで全部明け放して二、三人の女が作業していた。

「フンナ、フンナ」

と番士がアパシエムに立って、アットウシ（アッシ織）をしているフチ（老女）に声をかけた。

フチは織り手を休めず斜に番士を見上げて何にか呟くように言い、無表情に作業を続けている。

作業は左右二本の股木を老女の坐る莫座の下の横棒で結び、布巻き取棒を渡してペカ（受け糸）を巧みにカムサブ（糸開き）で捌いて布を織っている。

フチの口の周りには入れ墨があり、織り物をしている手の甲から腕にかけても入墨が見える。直ぐ横に坐っているフチより若い女も入れ墨があり、織り上ったアッシ織の縁りに柔かい鹿の鞣皮を、鯨の皮紐で縫いつけている。傍には莚のような筒袖を付けたアッシの冬の胴着が重ね置かれてある。

作業場の内側は細竹を組んで鯨の皮を張った壁になっているが、織り上ったタラペ（掛布）やエムシアツ（刀の下げ帯）などが掛けてあり、一方の壁にはウタサ紋様（花菱紋様）の女性アッシも下っていた。

其の美しい紋様を背にして入墨の無い若い丸顔の娘が大小の枡形紋様を組合せた帯を編んでいた。

重蔵は其の器用さに感じて、

「壁に掛けた、刀の下げ帯なども、その娘が織ったのか」

と番士を通して訊いたが、女達は夏の裡の冬仕澤に余念が無いとばかりに黙々と作業をしているのみだった。

其れでも、黙々とアットゥシ（アッシ織）をしていたフチが、

「ウタシパ　ウカスイ（助け合いで作る）」

と裏手を指した。

作業場の裏庭では、フチよりも老けた老婆と、下げ帯作りの娘と同じ年頃の娘が、アッシの材料のオヒョウ（藤蔓のような、春楡の皮）を剝いて、其の内皮を乾燥させ、水に浸して解かれた繊維を干かして手で縒り上げる大変な仕事をやっていた。

確かに、フチの言う通りの共同助け合い作業であった、番士は、女の腕の入墨はこうした仕事を含めて、一人前の女になった祝いに白樺の皮を焼いて作った墨を、鋭い刃で切った膚に摺り込むのだと云った。

重蔵は、アイヌの狩猟捕鯨はカムイフンペ（神よりの授り物）として無駄に獲えず、食べる前には神前に供え霊を慰めてから分け合い、女達の織物は古い伝承と共同作業で作られるのを見て、単なる習俗でない厳粛な人間の営みを感じ、探究心からとは云え不在の棲家の棒で抑えた莚戸を開けて内部を覗こうとした己を恥じた。

コタンを立ち去る時、最初に見た石臼で骨粉を作っていた二人の子供達が、黙って立ち上って円な眼を凝っと向けているので、供の善助に昼の弁当の握り飯の二包を渡させた。

二人の子供は怪訝な顔で両手で持った竹皮包を透して見ていた。

六月一日早朝、青木玄之助の手配に依って漸く入った渡り船に乗り込む直前、荷負人夫の五人のアイヌが向う側には渡らないと言い出した。

「自分達は、渡り島側のコタンの者だから東蝦夷地には行かない、始めから砂原までの仕事と言われたのだ」

と従わなかった。箱館からの行先案内となった甘利与助は、

「絵鞆に渡ってから、向う側のコタンの乙名に人夫を集めさせます」

と引き留めもしなかった。

渡し船に資材、食料等の積み込み作業時の人手不足は、砂原会所の番役下役人夫総出で手を貸し漸く出帆した。

重蔵は船に乗ってから

「五人のアイヌの手当はどうしたか」

と財務出納担当の長島新左衛門に訊くと、

「松前出発前に十日分、一人当り二升五合を先渡し致し、特に今朝、残り日数分一人一升当渡して充分です」

と言った。余りの低賃銀なので確かめると、何んと松前ではアイヌ賃銀は、一年傭で米二〇俵（八升入袋）を渡し、十日限りでは一日玄米二合五勺（二十五文）であった。和人の日傭人夫は一日で二升五合（二百五十文）である。いくらアイヌは金の使い方を知らぬとは云え、和人の十分の一とは何んとした事か。

重蔵はアイヌ差別の現状に義憤を覚えたが新左衛門は、

「急にアイヌの人夫が帰ると言い出したのは、和人の人夫頭から行く先が千島の国後島の其の先だ、と聞いて行ったことも無いと怖れての事で賃銀の不平でない」

と言ったが、賃銀の甚しい差別が根底にあるのであろうと思った。

重蔵は様々の齟齬を踏み越え漸く東蝦夷へ渡る船上に立ったが、蝦夷地改正令の実施効果を確かめる公儀見分隊の身であり乍ら、アイヌ人夫に差別賃銀を払ったとは何んたる事か、と新左衛門への不快の念が募り、其れに気付かなかった己の迂闊さを悔いた、そして、蝦夷地、千島の地理天文、アイヌ、山丹、露人に詳しい、最上徳内に期待し、其の参着を上船の直前迄待っていたのに、どうして姿を現わさないのかと不審の念が湧きおこるのであった。

（四）

最上徳内は、出羽の国村山郡楯岡村の半農半商の家に生れたが、僅かな田畑と烟草の行商の貧しさ故、生年も宝暦三年とも四年或いは五年と定かでない。

幼い頃より読本などを好んだが塾にも行けず、親の烟草の行商を手伝い近村より近郷を巡り、成長に従って遠く奥州街道筋と売り歩き乍ら、必要に迫まり読み書き珠算を身につけ、道中で書籍を求め行商によって見聞を広めて、次第に地理天文、算術の知識技能を深め、同好の友と励まし会って益々経世儒学への思いを募らせていった。

安永九年（一七八〇）父間兵衛の病没後、修学の念止み難く、家業と母を長じた弟妹に托して江戸に出て、烟草行商の縁によって烟草屋に住込奉公をし乍ら近くの私

塾に入った。徳内二十六歳である、正に晩学であったが幸い師は旧水戸藩士の斉藤定八郎で足袋屋を営み乍ら鶴磯と号し一時は湯島聖堂に学んだ秀才であったが、水戸藩学及び聖堂朱子学に合わず、独自な学を説いていた。

徳内は斉藤鶴磯に『左伝』を教授されたが飽き足らず医学を志して、官医山田宗俊（図南）の家僕として住込み二年程勉学したが、志を変え湯島の数学師永井正峯の門に入って幼少の頃より得意であった算学に励み、特に神社の奉納額に掲げる難問解答の算額修業に精を出した。

同門の友より護国寺音羽通りに音羽塾を開く本多利明の学風を聞いて、徳内は初めて我が志を得る万学の師ありと早速入門を願って許された。徳内二十九歳天明四年の春であった。

経世憂国の思想家本多利明の教える題目は、天文、数学、暦学、地理、航海術、焔硝製造論にも及び、特に日本各地の産業論を説き、窮乏日本を豊かにする殖産興業、新田干拓、蝦夷地の開発を力説し、幕府に建白していた。

徳内は忽ち利明の蝦夷地開発論の影響を受け、北方探検、国防の志を抱くに至ったのである。近藤重蔵が白山義学塾を興して本多利明を講師に招じ、重蔵もその教えを受けたのは徳内の音羽塾入門後四年を経た天明八年であった。

天明五年二月、田沼意次指令の蝦夷地見分隊遂行に、徳内は本多利明に代って隊員の竿取従者として許された。

最上徳内の北辺探検は此の時より寛政十年の今次見分に至る迄に、蝦夷地、国後島への渡海巡航は七度に及び松前で越冬する事二度、三度、択捉と得撫への巡航は二度で其れぞれ東西両側の海岸を巡航し、得撫では露人の殖民跡を確認し択捉で得撫殖民団の分裂残留の露人三人を国後島に連れ来って、北千島よりカムチャカ半島の地理天文の情報を得たり、露語を修得したりした。

更に田沼意次の罷免、見分隊の解散後も独力で松前に渡り、北辺の探索に赴かんとし松前藩に追い帰されたが、野辺地湊に逆航して留まり、其の地の廻船問屋等の子弟等に数学、天文地理等を教え、北方航路の要地に入る情報を通し、蝦夷地千島等の動静、露国の南下を察知していた。

野辺地滞在三年の間にも蝦夷地見分の記録を草し、アイヌ語、露国語も密かに自習していた。其の温厚篤実な人柄によって町の酒造業と廻船問屋を営む島谷家の清四郎に見込まれ、其の妹ふでと結婚した。徳内三十四歳ふで十九歳であった。

新婚間も無い天明九年、改元して寛政元年（一七八九）五月二十九日、蝦夷地大騒動の情報が野辺地に入った。

徳内は蝦夷地に最も近い野辺地にあって一早く詳細に状況を摑んで、早飛脚を以って江戸の青島俊蔵に送った。

国後一揆の通報は松前藩よりも早く、南部藩及び徳内が送る青島俊蔵を通しての報告が次々と幕府に達し、幕

閣を衝動した。特に先の蝦夷地見分は田沼意次の私利私欲の為と、老中を罷免し蝦夷地見分取り止め解散させた松平定信の動揺は甚だしかった。

乱は国後島場所請負の飛驛屋の支配人や、通詞、番人等の長年のアイヌ酷使と、松前藩の荷物改め役人の不正な搾取横領への積年の怨みに、漁場や漁獲物加工場賃銀の和人との格差、奴隷的労役等に耐え切れずの暴発であった。直接の原因は飛驛屋番人がアイヌ女を暴行し、抗議する夫を鮭の粕漬と一緒に大樽で殺すと威しつけた。前々より反抗するアイヌは粕漬にされていた、遂に耐え切れず一斉蜂起となった。国後島泊港を始め各地の運上所を襲い、竹内勘平等の松前藩吏、飛驛屋の支配人等七人、各地の和人三十七人を殺した。

暴動を知った松前藩は騎馬隊、銃隊等七百人を動員して急行した。

蜂起したアイヌ方は根室海峡によって国後アイヌと本島側目梨地方アイヌとの連携が旨くつかず、国後のツキノエ、厚岸のイコトイ等の総乙名や主だった乙名は蜂起に反対して説得に努めたので、松前藩の鎮圧隊が到着した時には既に乱は鎮静していた。

然し、アイヌ首謀者八人は斬首、主立った二十九人は入牢後、脱走を謀ったとして全員が銃殺された。

五月二十五日に勃発した暴動は僅か二ヶ月で鎮静し出動藩兵は七月二十七日引揚げを開始し、幕府には直ぐ様一揆暴動鎮圧と急報したが、老中松平定信は尚も暴乱の背後に露国の策謀有るを恐れ、松前藩の蝦夷地経営に難のあることをも糺さんとして、国後騒動の真相糺明の吏人の派遣を幕閣に命じた。探索は松前藩の面目を考慮して、派遣する青島俊蔵を長崎俵物御用商人とし、随員の小人目付笠原五太夫は商人常盤屋六右衛門とし密行させた。青島俊蔵は野辺地へ寄って最上徳内を案内人として同行を頼んだ。

徳内は元より望むところと喜び勇んで同行したが、松前城下で乱の真相を尋ね回るより、現地の国後目梨厚岸を見分し、直接アイヌより聞き取ろうと、東蝦夷より厚岸、根室、宗谷方面まで赴いて、親しくアイヌと語り合い、反乱一揆の原因は飛驛屋支配人等の姦悪にあり、露人の使嗾に依るものでも無いと分ったので国後迄渡る迄も無いと、松前に戻って松前藩庁を中心に調査究明をしていた青島俊蔵と、各地の運上所を隠密調査した笠原五太夫と合流して詳細な調査報告書を纏め、青島、笠原と共に船便で急ぎ帰府し十一月末日報告書を提出した。

処が、青島俊蔵報告書と、松平定信が放った隠密による飛驛屋久兵衛の不正な蝦夷地交易の調査吟味書との喰い違いが発見され、俊蔵提出の書中には不束な記述があり、剰え俵物商人の名目で派遣された隠密間者の役目を忘れ、松前藩役人に間者の衣を露わにして調査交渉をした。不届な軍中間者返忠に当る罪ありと、十二月六日付

松平定信より御直御渡の口上書が係り奉行久世丹後守へ渡され、青島俊蔵は背任罪として逮捕され、翌年正月二十三日最上徳内も同じく帰府後も青島俊蔵と同居していた関係より嫌疑を受けて入牢を命ぜられた。

青島俊蔵は八月五日遠島刑を申渡され、出帆前の八月十七日揚屋牢内で病没した。徳内も入牢中非人道的な牢獄の為に病気となったが、師の本多利明の嘆願に依り健康回復まで預かりとなって音羽塾に引取られ、牢中病の疾癘を療養して死を免かれ、八月三日、「其方儀は不埒の筋も無之候間、無構」と久世丹後守より申渡された。

徳内は師の本多利明宅に病気療養預り中より「蝦夷草子」三巻と地図「蝦夷全図」を書き続けていたが釈放後完成して本多利明を通して幕府に献上した。これに依り徳内は蝦夷地通として識者に知られるようになった。

松平定信は松前藩には重役に藩主を扶けること不充分と「三十日押込」の処断をして藩主道広に罪を問わなかったが、蝦夷地は松前藩に任せるを宜しとした見解を変え、国後一揆後の蝦夷地の調査を改めて実施することとなった。

寛政二年十二月二十二日徳内は普請役に抜擢され、堂堂と蝦夷地御用として松前、国後、択捉、得撫と巡航して露人の侵入殖民を探索し、寛政四年には東西蝦夷奥地より樺太見分に渡海、北緯四十八度強を踏査し、露国より、漂流民幸太夫等を送る使節船の来るを知って、幕府に注進報告した。

寛政五年帰府後は蝦夷地の任を離れ、川船改所出仕となり、寛政七年迄の在任中関東十州を視察して「川船役所用図」の大地図十枚を完成した。

更に転じて御材木御用として駿府焼津浜に出張中に、蝦夷地見分隊への出向の命を受けたのであった。

徳内は既に四十四歳北辺寒冷の地の見分は厳しいが、元より故郷の地に戻る心地に喜び立って、慌しく取り掛っていた仕事を処理し、漸く駿州焼津浜を五月二十日の船便で江戸に入り、大至急で旅の準備を整えて北陸街道を急行した。

途中縁故の南部野辺地で前回の蝦夷地渡りの時に伴なった下僕の長助と、鉱山師菅野助七と弟子二名に同行を頼み、野辺地湊より特別便で六月十六日松前に入った。

直ちに参着の報告に見分隊本部に行くと、今度の上司となっていると云う近藤重蔵は勿論、東蝦夷地班の大河内善兵衛の本隊も疾に出発した後であった。

然し、総指揮の渡辺久蔵が松前に留まっているのは当然としても、多くの幕府見分隊員が未だ松前に残っているので不審に思い乍ら胸を撫で下し、奥の部屋に伺候すると三橋藤右衛門成方と高橋三左衛門常成が待っていた。

徳内が遅れた到着の許しを請い、近藤隊の後を直ぐ追う旨を述べると、

高橋三左衛門常成が、

「否、否、急ぐには及ぶまい、徳内にとっては蝦夷地は我が家の庭のようなもの、蝦夷本島ばかりか国後より択捉、得撫迄も何度も巡航し、アイヌはおろか露人にも度々接し、アイヌの言葉は自由に話し、各地に親しい乙名もいるとのこと、徳内には本部に残って貰い度いくらいじゃ、

先発した近藤重蔵は蝦夷地は始めてのこともあって、気負い立ち国後択捉はおろか、得撫より更に北のクリルの島々迄探検しようとの勢いじゃった、だが、もう北海は荒れる季節に入る、重蔵には余り急がず、精々厚岸、根室の辺りを良く見分するように言っておいたが、徳内も重蔵が無理をせぬよう引き締めてくれ」

と言った。

更に三橋藤右衛門成方が

「徳内は推察して居ろうが、今回の見分は北辺の脅威に対する国防上の見分と公表してあるが、蝦夷地改正令の実施情況の見分が主じゃ、所が奥地の実情が皆目分らぬ、そこで其の方に根室や厚岸辺の交易所や、場所請負制による不正取引等を見届けて貰い度いのじゃ」

と密かに告げた。

徳内は当てられた部屋に戻り、翌日から近藤隊追及の出立準備に忙しかったが、本部に出入する見分隊の動きから、三橋藤右衛門配下の松山惣右衛門や太田右衛門政興等の財務税制に明るい勘定組頭が、福山城下の藩政庁各部門や町奉行所等に御尋ね見分に出入し、時には渡島半島内の砂金場や鉱山へも見分に派遣されているが、奥蝦夷地には手が届かず、三橋藤右衛門も焦り始めている様子が分った。

従って徳内は先発した重蔵が主として北辺防備の軍事的見分なので、違った観点より松前藩の奥蝦夷地経営の密偵的見分を三橋藤右衛門が内示したものと推察した。

徳内は幾度も蝦夷や、千島、樺太と渡っているが、其の度ごとに見分調査探索の目的内容が異なっていた事を思い起した。

徳内が始めて参加した天明五年の蝦夷地見分は、田沼意次の幕府財政立て直しの為の蝦夷地開拓、密かに北方貿易をも企画するものであったが、十代将軍家治の死に始まる田沼意次の失脚、次の老中松平定信に依り蝦夷地一件取り止めとなり、蝦夷地は荒蕪の侭として露国との緩衝地とし、蝦夷地の事は松前藩一任となった。

然し寛政元年の国後島一揆後の調査報告に基いて松前藩に「蝦夷地改正令」を出させ、国防とアイヌの撫育生活向上を期したが、其の後のアイヌの生活向上も進渉せず、寛政三年、四年の国防監察、密貿易調査、場所請負制の査察等を経て、漸く松平定信も蝦夷地非開発の見解を変え、幕閣の中でも老中本多忠籌、松平信明等の開発論もあって、宗谷、石狩等に場所請負商人に任せぬ幕府役人による、アイヌとの等価取引（御救交易）を行ない

アイヌにも悦ばれ、幕府へも其の収益は寛政三年以降年ごとに千両程を納める程の進展となった。

だが、幕府御用の日の丸の旗を掲げる船のみが御救交易をするので、幕府の船舶や交易所は未だ少なく、他の廻船問屋や場所請負商の反対や非難中傷が絶えなかった。

寛政五年七月老中松平定信の突然の辞任があったが、幕閣の蝦夷地開発方針は更に進展し、広域の蝦夷地に僅かばかりの日の丸御用船の御救交易では効果が上らぬ、場所請負商を廃し、全ての場所を幕府の直捌にせよ、との主張も高まり、更に松前藩地を召上して転封させ蝦夷地を幕府直轄地にすべきとの意見も高まってきた。

従って今次の蝦夷地見分は松前藩の蝦夷地改正令の実施状況、蝦夷地経営の実情、国防体制等の不備欠陥を発く隠密的見分が含まれているのは当然である。

徳内は国後騒動後、青島俊蔵、笠原五太夫と、松平定信の密命で松前へ隠密調査に行き、騒動一揆が露人の謀略後押しによるものでないことを確かめたが、青島俊蔵が松前藩に隠密の身分を明して報告資料を作ったものとして、陣中返忠の罪となり、徳内も入牢した、再び今度の見分で密偵調査の火の粉を被る懼れを覚えたが、見分の結果がアイヌの困窮飢餓の救済、差別の解氷に繋がるならば幸いである。と徳内は意を決して六月二十二日松前を立った。重蔵より一ヶ月遅れの出立であった。

続く

社告（内規）

☆ 同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎しております。「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆ 維持会会員へのお誘い

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出でがあり、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座　〇〇一二〇－四－九〇八一五

加入者名　作家群編集部

梔子（くちなし）の花

―ガルディニア

有香（アリカ）六月（ジューン）

ここに私が記せるのは、ただ、いつも傍らを放さない私のヴァイオリンが語りかけようとするものに過ぎない。

「私のヴァイオリンと私、私とヴァイオリンは、あまりに一体化しているので、どこまでが私で、何処までがヴァイオリンか、もはや区別がつかない。」（注1）

かの不世出の天才ヴァイオリニスト、ジャック・チボーが自分の伝記を始める冒頭に掲げたこの句がそのまま私のささやかな書きものに当てはまる。

それは百千（モモチ）の花々に混るたった一つの、つましい、目立たない花で、森の小径のかたわらに、そうっと開いて、そして又人知れず萎れて、土に帰る存在にしかすぎない。だがそんな花でも精一杯、生命の唄をその花冠から、声を張りあげて響かせているのだが……

梔子（クチナシ）、ガルディニアの花が開く頃になると私は落ちつかなくなる、というより生命の樹液が、私の体内に漲（ミナギ）ってくるのを、止めようがない。私は梔子の花となるために生まれてきたように思うから。

私の小さな庭の中に、ここに越してきた時から植えた八重梔子の灌木が、三本、丈も二メートル以上に伸び、横にも拡がり、茂りに茂って、無数の苔みをつけている。それに、どこからか採ってきた一枝が、何年も経て、一面に開花する清楚な一重の、日本伝統の一重の梔子の灌木となり、八重梔子ほど大きくはないが、元気に育っている。一重咲きのほうは六月末を待たず、六月半ばすぎ、梅雨時にいっせいに、星のような花を開く。そしてその爽かな香りは、この国本来の芸術の在り方を示している。仄かなもの、奥床しいもの、懐しいもの……

しかし私のどこかには、そういうものでは律しきれない激しい、もの狂おしいような情熱の火が走り、それがすべて体現されたような八重梔子に向う、その情熱はし

かし純粋に結晶する。それは深紅を越えて、白熱化する。このような気もそぞろになる強烈な香りを薔薇は、とうてい持ち得ない。この八重梔子の情熱的な香り、甘く熱した熱帯の果物の芳香。それは南太平洋のタヒチ島に群生する。

あるフランス人が言ったように、この北半球の島国の梅雨時に咲く清楚な花の姿とは似てもつかない。しかも一重咲きと八重咲きという差異だけの同属の花であるというのがふしぎな位である。当然、後者は近年になって欧米から移植されたものであろう。

八重咲きのほうの花は、10㎝近くにもなる花の直径をもつ。開花寸前の莟(つぼ)みは長く膨らみ、無限の魅力をもって、観る人の心を唆る、開花直後の大輪の豊満さも、開花してしまってからの妖しいような姿態も、それぞれに官能のシンボルである。薔薇の半開の莟みの姿は見事であるが、いざ全開してしまうと、何もかも、それまで、蔽っていた肢体の秘密をすべて男の目に曝けだしてしまった美女のように見えてくる。男は勝手なもので、秘めているものに限りない憧れを抱く、しかし、いったん我がものとなりきった玩具にはすぐ飽きてしまう。もし人間の営みを官能の技(わざ)に限れば、こんな白けた快楽もないかもしれない、ドン・ジュアンの退屈さが分る。

少し、私の愛する花の一つである薔薇に対して非礼かもしれない。それだけに薔薇は莟みが大事に思われる。

梔子は、その半ば萎んだ、なよやかな姿も、奇妙なほど艶めかしさがあり、その消えゆこうとする直前の呼吸の匂いもふしぎに人を牽(ひ)きつける。梔子の化身のような女人の姿をふと連想する。松林みね子さん（片山廣子夫人）、彼女は誠実な実業家の未亡人で、アイルランド文学に通じた教養の高い女性で、芥川龍之介のプラトニック・ラブの対象であった。大森に住んでいた夫人は歌人としても知られ、「翡翠集」（カワセミ又はヒスイ）を出版されている。おそらく私費出版なのであろう、この歌集を何とか探しだしたいが、今の所、国文学の先生にお願いしても、とうとう見つけられなかった。その御子孫の方がいらしたら……芥川と片山夫人の、爽やかなそれでいて切ない思慕の想いは、その身辺にいられた堀辰雄が十分に読み取って、「聖家族」と「菜穂子」の中に、描写されている。菜穂子は、片山夫人の娘で、彼女自身も、高名の作家、芥川にある想いを抱いていたか、ともかく、母とこの鬼才との間にある妙なモヤモヤを嫌(きら)って反抗的に、平凡なサラリーマンと、母の反対を押し切って結婚してしまい、あとで後悔する……

母夫人はそういう娘を案じて軽井沢の山荘で、ただ独り心臓発作で世を去る。その経緯は「楡の家」に記されている。片山廣子夫人は梔子をこよなく賞でられ、梔子夫人と呼ばれていたと知った。というのは作者の家から

バスで15分ほどのところに馬込駅（都営地下鉄）があり、まっすぐ成田まで走っているが、ある時、環七への出口と反対側の出口に、馬込の文士たちの写真展が行なわれ、横70㎝縦1m半ほどのパネルが20近く並べられ、それぞれに、かんたんな説明がついていた。馬込はすぐ大森に続く地区なので、大森近辺に居住されていた片山夫人の肖像もその中に入っていたのである。古い日本文学全集、改造社の中にある、歌集の中に、九條武子夫人と並んで、片山夫人の和歌がいく篇かのせられていた、そしてごく小さな写真が添えられていたが、それはぼやけていたし、さほど美しく見えなかった。しかし馬込駅のそのパネルは、鬼才芥川が芯(シン)から「惚れ抜いた」とされる夫人の、なよやかな優雅な面輪を見事に表現していた、そう彼女こそ「梔子夫人」だった。

昏(クラ)い常緑の葉蔭から、星のような眸を光らしている、うっとうしい梅雨の空気の中に。それはやはり日本的に一重咲きのほうがいいかもしれない。しかし夫人の秘められた内部に官能の八重梔子の、気も遠くなる香りを収めて固く封印されている宝石筥があったのでなかろうか……、日本的に清楚と讃えられる生地のその裏側に。

そして私自身、八重梔子の化身なのかもしれない。年毎に六月の末から七月に続いて開花する梔子の香りのためにだけ、私の生命は存在しているのかもしれない。私の忍耐、長年にわたる面倒な音階の練習。人生のドラマに打ちひしがれそうになるのを我慢して、夜に耐え、愛に耐えて生きてゆくのも、年にただ一回、八重梔子の香りとなって純白な姿を、ひと時見せるためかもしれない。私のヴァイオリンがそう語りかけてくれる。

少しずつ、少しずつ、私のヴァイオリンが導いてくれる。私のヴァイオリン、私の哀しみも歓びもすべてあなたと共にある。数多い名曲の中でも、私のこの心境を一番よく伝えてくれるのはヴュータンのヴァイオリン協奏曲、いくつの番号があるが、レコードになって、私の手もとに今あるのは第4番ニ短調作品31（三楽章、トリオを別に数えて四楽章となっているレコードもある）と、第5番イ短調作品37（三楽章）であり、それぞれ一枚のレコードに収められている。又同じ曲が二枚のCDに収められている。一枚はアルテュール・グリュミオー（ヴァイオリン）、コンセール・ラムルー・オーケストラ（パリ）、マニュエル・ロザンタール指揮である。もう一つのはイツァーク・パールマン（ヴァイオリン）、パリ・オーケストラ、ダニエル・バレンボイム指揮である。

この昏(クラ)い情熱を内に秘めた旋律、ことにその激しく高揚する第2楽章を私はやはりフェリシアンのために弾きたい。

フェリシアン・グラーフ
ユーリエ・シルク・グレーフィン　（注2）

決して外面に、見せつけがましく示されることのない、あくまで内部で、秘かに燃え続ける情熱。それは決して、肉身が結びつくことない故に、かえって決して涸れることなく咲き匂う梔子の花。

このようなヴァイオリンの情熱を唆る旋律に耳を傾けていると、身も心もすべて、その中に溶けこみ、ヴァイオリンと私の区別は全くつかなくなる……

小説家というものに決して私が成れないのは、そういうわけである。私には客観的に人間のドラマに登場する人物たちを精細に観察し、Aさんはこういう性格で、Bさんはこうで、Cさんはと追求する冷静な眼力がない。ぱっと直観的に人物を把握することならできるし、その心理を追うことはできる。私の場合、懸命にソロを弾いているか、又はオーケストラの一員として、百人の中の一人として、オーケストラの全ハーモニーを構成するため、自分のパートを懸命に、他のメンバーたちの音に揃えて弾いてゆくだけである。

デュエット、トリオ、四重奏、六重奏の中に入って弾くこともある。

注1．「私のヴァイオリンは語る」

注2．Felician graf Julie Sirk grafin

編集子のメモ

○何となく　今年はよい事あるごとし

元日の朝　晴れて風なし

という啄木の歌があるが、今年の元日は晴天に恵まれ暖かい日だった事が殊更私には嬉しかった。というのは、昨秋ある神社に参拝した折、「本年の八方塞がりの年」として、何と私の生まれ年もその一つに入っている大看板を見た。「そうか、八方塞がりだったのか、道理で」と妙に納得したが、気にならない筈はない。早く晴れやかな新年を迎えたいと切望していた。八方全部でなくてもいい。逃げ道として、せめて三方や四方は開けておいて貰いたいものだと思う。

新しい年は、皆さんにとって、どんな年になるのでしょうか。

○三月には同人の本が二冊、相次いで刊行される。一冊は故井上二三男氏の短篇集「浪々好日」で、高校時代の作品から「まんじ」に掲載された二十三篇の作品までが納められている。周囲の人々を見つめる氏の鋭いが温かい目が、読む者の胸を素直に打つ。心静かに再読して欲しい一冊である。

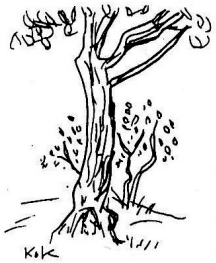
もう一冊は大和禎人氏の短篇集「相聞歌の女流」である。「まんじ」四十五号に発表された表題の作品とそれに続く七篇、更に「自作自解わが作品余話」を加えている。氏にとっては十四巻目の本で、衰えを知らぬ氏の創作意欲に心からの拍手を送りたい。

（し）

――目　次――

極楽草異変　……　三戸岡道夫　1
丸ビル恋歌　……　大和禎人　24
「彦太樓」……　柴田富佐子　32
今見えているものの奥に　……　山根三枝子　39
蔵のある小さな町の中で　……　伊澤敏久　43
漢詩　潮哢録　……　鯨遊海　48
唐人館同窓譚（五）完　……　鈴木昭三　54
マンション管理人（三）　……　太田和貞　61
「恋人たち」……　有香六月　78
近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（十）……　金子正義　91
掲載作品総目次（第五十一号～五十九号）……　103
編集子メモ　……　104

（表紙）岸田幸雄　（カット）宮城正彦・小久保勝義



極楽草異変

三戸岡道夫

（一）

さんだの村は山の中である。

江戸はここから七十里、南にそびえる山なみの、はるか彼方にある。だが、村人たちは、江戸の賑いなどはうわさに聞くだけで、生涯それに接することもなく、山の中でひっそりと暮し、ひっそりと働き、ひっそりと死んでいく。

さんだとは、三田（さんだ）、すなわち三つの田圃のことである。村には田圃が三つしかない、というほどの意味から出た名前である。村に田圃のすくないことを、

（田圃が三つしかない）

という言い方で言ったのであり、それほど、さんだの山村は貧しいということである。

田圃がすくないから、山の斜面を耕したせまい畑に、麦、ひえ、そば、芋と、作れるものならなんでも作り、山野に自然に生える、ぜんまい、わらび、ふき、筍、木の実と、食べられるかぎりのものを採りつくして、かつかつの生活をしていた。

地獄極草　閻魔（えんま）さまが睨む
ここは地獄の一丁目
赤い花なら　極楽草
極楽浄土の　花あかり、

遠くで子供たちが唄っているのを、おかん婆さんは、ひとりで、じっと聞いていた。

子供たちは、五、六人、輪になって、ぐるぐるまわりながら、地獄極楽のうたを唄って遊んでいる。秋の陽が、静かに、村のすみずみへ射し、澄みきった空気のなかで遊ぶ子供たちの姿が、おかん婆さんのところから、はっきり見えた。

うす汚れたぬれ縁に腰かけたおかん婆さんは、両足をぶらぶらさせながら、無邪気に遊ぶ子供たちに、ぼんやりした眼をむけ、

（極楽浄土の花あかり…か）

と、子供たちが唄う、うたの一節を、くりかえした。

花あかりとは、さんだの村で、老人が六十歳になると行われる。〝まつり〟のことを指した。

おかん婆さんの〝花あかり〟は、あと半年後にひかえていた。だから、子供たちのうたは、自分のことを唄っているように、おかん婆さんには聞えるのだった。

ぬれ縁から、おかん婆さんがほんとうに見ていたのは、遊ぶ子供たちではなくて、裏山の麓に生える一本の木だった。

木は大木で、ふとい幹をまっすぐにのばしていた。幹からは枝が均等に四方にのびて、それが梢にいくにしたがってすぼまり、ねぎ坊主のようないい形をしていた。

それは、おかん婆さんの〝花あかり〟の行事のために、植えられた木である。

（この木も、あと一月の寿命だな）

おかん婆さんは、その形のいい姿を満足げにながめながら、

（これで極楽往生まちがいなしじゃ）

とつぶやいた。

遠くのほうでは、子供たちの地獄極楽のうたが、まだつづいていた。

さんだの村では、誰もが四十歳になると、極楽草の苗を植えることが、しきたりになっていた。しきたりというよりも、村の掟といったほうが、よかったかもしれない。その人間が六十歳になったとき行われる。〝花あかり〟のまつりのための準備にである。

極楽草といっても、それは草ではなく、木であった。だから、極楽樹とでもいったほうが、いいのかもしれない。それなのに昔から極楽草とよばれているのは、苗のうちは、ほっそりした葉が三、四枚、なよなよと生えているだけで、とうてい木の苗だとは思えなかったからである。だが、二年目からは、苗はにわかにぴんと背すじをのばして、まっすぐに立ちあがり、あれよ、あれよというまに、木に育っていった。

むだな枝は切りとって、葉の茂みをととのえ、つねに木の姿に配慮する。十年たつと、木の丈はほぼ必要な高

さにまで生長するので、そこで木の先端を切り、あとの十年は、幹を太らせる方向へと、木に専念させる。

花は毎年咲くが、真紅で、木犀のようなこまかい花弁を、無数につけた。花のいのちはみじかくて、咲く片はしから散りこぼれ、初秋の木下陰は、いちめんの落花で、血の池のように彩られるのであった。

こうして二十年たつと、極楽草はりっぱな大木に生長し、同時に、それを植えた人間の年令が、六十歳になっているという、勘定になるのである。

すると、老人はその極楽草を切り倒して、自分の棺桶をつくり、〝花あかり〟のまつりを行うのである。

まつりのおかげで、なにも苦しまずに、ぽっくりと死ぬことができる。すなわち極楽往生ができるというところから、極楽草の名前が生まれたのである。

さんだの村人たちは、貧しい暮しのなかで、過酷に働く。だが、粗衣粗食で、働くことに生き甲斐をかんずる村人は、かえって元気で、丈夫で、長生きする者が多い。

老人たちは誰もが矍鑠としており、怪我や事故で死ぬ以外は、六十前に病死するものは、ほとんどないといってよい。

ところが、さんだの村には、六十歳以上の老人は一人もいない。不思議なことに、誰もが六十歳になると、符牒を合わせたように、ぴたりと死ぬのである。

それも、苦しまずに死ぬ。

ころりと、極楽死する。

それは、極楽草の〝花あかり〟に、ご利益があるからであった。

さんだの村の老人は、誰もが六十歳の極楽死を願っていた。

それは、同時に、さんだの村のためでもあった。食糧のすくないさんだの村で、老人たちがいつまでもむだ飯を食って生きていることは、許されないからである。

おかん婆さんは、来年の春がくると、六十歳になる。だから、おかん婆さんの〝花あかり〟のまつりは、ちょうど山桜の満開のころになるであろう。

（あと、六カ月だ）

そう思うと、おかん婆さんは、わくわくするような、切ないような、悲しいような、変な気持ちで、胸がぎゅーっと押しつぶされるような、気になるのだった。

ぬれ縁から、背戸の極楽草を見上げながら、おかん婆さんは、

（来月は、あの木を切って、棺桶づくりをはじめねばなるまい）

と思った。

すると、にわかに、せっかく育てた極楽草を切り倒すことへのいとしさが、おかん婆さんのなかへ湧きあがってきた。それは、自分のいのちへの、いとおしさなのか

もしれなかった。

（二）

おかん婆さんが極楽草の苗を植えたのは、村の掟どおり、四十歳になったときであった。いまから二十年前になる。

苗は、長老さまのところから貰ってきた。

長老さまのところには、村人の人別帳があって、村人が四十歳になると、名前が短冊に書きぬかれて、座敷の襖に貼り出される。同時に、長老さまは、極楽草の苗木の用意をするのである。

苗木をもらいにいくのには、きまりがあった。

かならず本人が行くことと、家の後とり息子が付き添うことが、条件であった。おかん婆さんのときは、長男の又助が付いていってくれた。

その日のことを、おかん婆さんは、はっきりおぼえていた。

長老さまの家は山の中腹にあって、曲がりくねったほそい山道をのぼっていくと、折りしも満開の山桜が、風に吹かれて、二人のうえに花吹雪を散らせた。

苗をもらった帰りみちも、ふたたび二人は桜吹雪の下をくぐり、おかん婆さんは、

「いい木に育ってくれると、いいがのう」

と、両手で苗を抱きしめながら祈った。

「苗の威勢がいいで、きっと、うまく育つだよ」

と、親孝行の又助は、そう相槌をうった。だが、これから二十年後に、この極楽草で、母親の棺桶を作らねばならぬのかと思うと、又助の胸は押しつぶされそうだった。

夜になると、苗受けの念佛講のために、老人たちが念佛堂に集まった。

老人といっても、さんだの村には六十歳以上の老人はいなかったから、五十歳台の老人ばかりである。苗を受けたのが男であれば、爺さんが集まり、女ならば、婆さんが集まるときまっていたから、その夜集まってくれたのは、とうぜん婆さんばかりだった。

中央の阿弥陀如来像の前へは、おかん婆さんが今日もらってきた極楽草が、水にひたして供えられ、堂内には老婆たちが輪になって座っていた。老婆たちは、極楽珠数という、巨大な珠数の輪を手わたしながら、朝まで念佛をとなえるのである。

おかん婆さんもそのなかに混じって、右から左へと珠数を送り、念佛をとなえていると、

（これでわしも、極楽往生への第一歩をふみ出したのだ）

という感激に、次第に陥っていくのであった。

なんまいだ　なんまいだ
赤い花なら極楽草
この世とあの世の花あかり
極楽浄土の花あかり
なんまいだ　なんまいだ
赤い花なら極楽草
この世とあの世の……

念佛は、くり返し、くり返し、いつ果てるともなくつづいて、夜はふけていくのだった。

苗受けの念佛講がおわると、その翌日、おかん婆さんは、苗を、裏山の麓へ、自分の手で植えた。

おかん婆さんと、亭主の權助とは、三つちがいである。だから權助の苗は、すでに三年前に植えられていて、すらりとした若木が一本、棒のように、中空にむかって伸びはじめていた。

おかん婆さんはその横へ並べて、自分の苗を植えた。

極楽草は、将来、自分の墓になるのである。そうなったとき、おかん婆さんの墓は、權助の墓と並んでいなくては、ならないからである。

極楽草が二十年たって一本の木に生長すると、その木で棺桶が作られる。だが、極楽草を切り倒すとき、地上六尺ばかりの高さの位置で切り、根元を残す。その六尺の幹をみがいて墓にするのが、さんだの村の風習なのである。一種の立木墓といえばよい。

立木墓の作りかたは、幹の皮をはいで、みがき、正面を平らに削って、そこへ戒名をきざむのである。

しかし、墓によっては、立木墓を佛像の姿に彫り上げる場合もあった。息子が刻りものに達者だと、そのように仕上げて、両親への孝養を示すのである。

さんだの村を歩くと、どの家にも、裏庭や裏山に、祖先伝来の立木墓が並んでいるのが見られた。墓地は寺にではなく、それぞれの家の周囲にあるのである。

立木墓のほとんどは、長年の風雨にさらされ、枯木となっていたが、なかには枯れないで、墓の肌から枝が出たり、葉が茂ったりしている、生木の墓もあった。

立木墓の根は、そのまま地中に残っているのであるから、そんな現象がおきても不自然ではないのだが、それは埋められた佛が成佛できずにいるからだと、村人たちは考えていた。

そう言われてみれば、立木墓から生えた枝や葉は、たしかに、あの世で成佛できずに、その苦しみを必死に訴えている、死人のあがきの印のように見えるのだった。それは、佛への供養が足らないからだという。そうした墓を成佛させるには、枝や葉をていねいに切りとり、酒で洗って、丁重に念佛をとなえれば、立木墓の勢いはしだいに弱まって、枯れていくということであった。

家によっては、墓地のなかに、天にとどかんばかりの極楽草の巨木が、そびえていることがある。それは、山で事故にあい、不幸にして六十歳になる前に、死んでしまった人の墓である。

六十前に死ぬということは、〝花あかり〟のまつりを受けずに、死んでしまったということである。だから、棺桶作りはされずに、屍は極楽草の根もとに、そのまま埋葬されるのである。

極楽草は生命力にまかせて伸び茂り、なかには、百年以上も生きのびた巨木の梢から、茂りに茂った枝が身をよじるようにして垂れさがっているさまは、極楽往生できなかったことへの怨みを、訴えているかのように見えるのであった。

おかん婆さんの亭主の權助は、三年前に死んだ。

おかん婆さんとは三つちがいだったから、おかん婆さんより三年さきに植えた極楽草の棺桶に納められ、六十歳の極楽往生をしたのである。

おかん婆さんは、三年前の權助の〝花あかり〟のまつりのことを、思い出した。

そのときは、つれあいを失くした悲しみよりも、權助が極楽往生することへの祝福が、おかん婆さんの気持ちをみたしていた。そして、

（三年後には、わしもあのように極楽往生するのじゃ）

と思った。その気持ちは、いまでも変わっていない。

權助の立木墓は、もうきれいに枯れて、枝や葉が吹き出てくる気配はない。權助が成佛している証拠である。だから、おかん婆さんは安心して、毎朝、權助の墓まいりをしている。權助の冥福を祈るとともに、自分の極楽往生を願うのである。

權助が極楽往生した翌日、娘のおとりが男の子を産んだ。赤ん坊は權助そっくりの顔をしていて、

（これは權助の生まれ代わりにちがいない）

と、誰もが思った。

赤ん坊は紋太と名ずけられて、いま三歳である。

おかん婆さんの家族は、權助が死んでも、すぐ紋太が産まれたので、人数は変わらなかった。

おかん婆さんと、長男の又助、その嬶（かかあ）のおつめ、子供が三人。娘のおとりと、そのつれあいの和吉、その子供の紋太。それに、又助の弟の又一の、十名である。

又一はそろそろ三十になろうというのに、まだ独り身である。嫁をとりたいのだが、そこまで食わす力が、おかん婆さんの家にはないのである。

来年、六十歳の〝花あかり〟で、おかん婆さんが極楽往生すれば、一人減って九人になるので、又一に嫁をとる余裕が出てくる。それが唯一の希望なのだが、それを否定するかのように、また、おとりの腹が前へせり出しはじめている。来年の四月ごろには、おかん婆さんの生

まれ代わりの赤ん坊が、この世に顔を出すのにちがいないのである。そうなると、ますます又一の嫁とりは、遠のいてしまう。

「貧乏村のくせに、この村の女は、よく子を産むなあ」

と、長老さまはなげくのだが、こればかりは、どうしようもない。

村に食う余裕がなくても、こんな山奥の村へも、年貢は容赦なくかかってきた。お役人の取り立ては、きびしい。作った米はほとんど年貢に取り上げられてしまい、お上にかくれて、山の裏がわに隠し田などを作ってみても、そこから取れる米などは、たかが知れていた。

しかし、村に食う余裕がない、家には食う米がなくても、さんだの村では、他の村のように、口べらしに子供や娘を人買いに売らないのが、昔からの村の掟であった。

かわりに、そのしわ寄せが、老人へくる。

だから、老人がいつまでも長生きしていて、むだ飯を食っていては困るのである。

（だから、極楽草の〝花あかり〟のまつりが必要なのじゃ）

長老さまはそうつぶやいて、人には見せないさびしげな顔を、ときどき、ふっと、空にむけるのであった。

（三）

おかん婆さんの極楽草を切る日がやってきた。

二十年間、丹精した甲斐があって、木は立派に生長し、幹の肌もつややかだった。三年前に切り倒した權助の木にも負けないぐらいだと、おかん婆さんは思った。

「見事な木じゃな」

息子の又助がほめ上げると、

「そうだとも、この木を育てるには、苦労したもの」

この二十年間、おかん婆さんは、折りをみては草をむしり、枝を払い、害虫を殺し、台所のくず物を根元にうめて、木を育てたのである。それは苦労というよりも、おかん婆さんの生き甲斐といってよかった。

その日の朝、おかん婆さんは、前の晩から用意しておいた米の粉で草だんごを作り、これから切ろうとする極楽草と、權助の墓の、両方に供えた。

（どうか、無事に極楽往生できますように）

合掌して、梢を見上げ、この木で作った棺桶のなかで、極楽往生するのかと思うと、なんだかおかん婆さんは、死出の旅路を演ずる、村芝居の役者のような気分になってきた。

木を切るのは、息子の又助と、次男の又一、それに娘婿の和吉である。三人は頭に鉢巻をしめ、威勢よく家のなかから、とび出してくると、

「ばばの極楽草、ただ今から切らせてもらいます」

口々にそう叫んで、木を切りだした。

木は、おかん婆さんの背の高さで、切断する。切り残した幹を、おかん婆さんの立木墓にするためである。

ずいこ
ずいこ

鋸の音が静かな秋日和のなかに流れて、切り口から、清純なおがくずがはらはらと落ち、木の新鮮な匂りが、おかん婆さんのほうへも漂ってきた。おかん婆さんは、その作業を、身じろぎもせずに見つめながら、

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ…」

念佛を一生懸命となえた。

やがて、

ド、ド、ドーン、

地ひびきをたてて、極楽草は地面に倒れた。

男たちは鉈で枝を払い、木の皮をむき、裸になった大木を、日なたの草むらにころがした。

「やっと、終わったのう。ご苦労さま」

おかん婆さんは、木の肌の白さをまぶしげに見ながら、そう言うと、又助が、

「これでりっぱな棺桶ができる。おばばの極楽往生はまちがいなしじゃ」

ツンと漂う生木の匂りを嗅ぎながら、そう答えた。

その又助へむかって、おかん婆さんは、

「又助、おまえの極楽草も、ぼちぼち植えんといかん時期になったなあ」

言われて、ビクッと、又助は眉根を寄せた。又助も、あと、二、三年で、四十歳である。

「そんなことは、まだ先のことだ」

「うんにや、先だ、先だと言っているうちに、二、三年は、すぐたってしまうだによ」

「ふん、わかっとる。でも、そんなことは、おばばの〝花あかり〟がすんでから、考えればいいことじゃ」

切り倒した木は、草むらにさらしておいて、来年の春になってから板に挽き、棺桶を作るのである。

それと並行して、切り残された切株のほうは、皮がむかれ、正面が平らに削られて、磨きがかけられ、おかん婆さんの立木墓がつくられる。

棺桶作りも、立木墓作りも、家をつぐ又助の仕事ときまっていた。

おかん婆さんの極楽草が切り倒されると、空の一角がぽっかりとあき、そこから秋空がのぞいて、裏庭がいくぶん明るくなったようだった。

それを見ながら村人たちが、

「切ったのう」

とおかん婆さんに声をかけて、家の前を通りすぎていった。

「ああ、切った、切った」

「〝花あかり〟のまつりは、いつだよう」

「来年の四月じゃ。お花見の頃だによ」

「にぎやかな頃でいいのお」

「そう言えば、おまんさとこの、おろく婆さんも、もう近いだにや」

「うん、おらのとこは、来年の秋じゃ」

「そうだべなあ。このまえ、おまんさの家のまえを通ったとき、おろくさんの極楽草も、だいぶ大きくなってたで、そう思っただによ」

「うちとこも、来年になりや、切り倒しじゃ」

そんなやりとりをしていると、おかん婆さんは次第に、

（そろそろ、お別れの挨拶まわりをはじめにゃ、ならんな）

という思いにかられた。お別れ、といっても、ちょっくら旅をするのとは、わけがちがう。この世との別れである。極楽浄土へ旅立つのである。

（時間のあるうちに、ゆっくり別れを惜しみたい）

息子の又助も、

「それがいい」

と言ってくれた。又助にしてみれば、おかん婆さんの覚悟が、すんなり決まってくれるか、どうか、それがいちばん心配なのだった。

すでに極楽草は切り倒して、草むらにさらしてある。立木墓も彫りはじめた。もう、後へは引けない。ここでおかん婆さんの気持ちが、万が一にもゆらぐようなことがあれば、大変なことになってしまうのである。

それには、できるだけ早めに別れの挨拶に行って、おかん婆さんの覚悟が早めに固まってくれたほうが、いいのである。

「そうだな。そうすべえか。そのほうが、わしも早めにふんぎりが、つくでのう」

そう言うと、おかん婆さんは綿入れのちゃんちゃんこを着物の上にひっかけて、背戸のほうへ出ていった。

納屋のかげから、その後姿を見送る又助の眉間には、苦しい決断のしわが刻まれていた。

おかん婆さんが背戸の裏山をまわると、おろく婆さんの家はすぐだった。おろく婆さんは、庭で豆を干していた。

「あいや、よく精が出るのう」

「うんにや、いいお天気さまで」

「今日はお別れに来ただによ。おまんさのところが、いちばん先だあ」

おろく婆さんも、おかん婆さんとおなじ六十歳である。で、仲がいい。

「とうとう、木を切っただってねえ」

「ああ、切っただに。いま日に干してあるが、ほんにいい木だよ。おろくさんも、いちど、見にきておくれや」

「ほんに、そうさせてもらおうかの。わしのほうも、そのうち切らねばならんでのう。わしは、おかんさんよ

り少しばかり遅いでのう。切るのは、来年の春じゃ」
おろく婆さんはそう言って、背戸の山裾を見た。そこには、見事な極楽草が立っていた。おろく婆さんは、その木が切り倒され、音を立てて山裾に倒れる光景を、頭のなかに描いているようだった。
「ほんとうに長いあいだ、仲よくしてくれて、ありがとう。礼をいいますよ」
おかん婆さんは、地面に頭をすりつけんばかりに、深くさげた。
「礼をいわなきゃならんのは、わしのほうじゃよ。おたがいに、無事、極楽往生できるといいけんがのう」
「わしもそれを願っている。苦しむのはかなわんからな」
「おかんさんは日頃、行いがいいから、かならず佛さまが、そうさせてくれるじゃよ」
「そうなれば、ありがたいが。でも、お名残り惜しいのう」
「わしもじゃ。でも、わしもすぐ後から行くからに」
「そうだ、心配することはない。すぐ、また、極楽浄土で逢えるんだ。おらが先に行って、待っているだ」
むしろの上にひろげられた赤い豆が、おだやかな初冬の日をうけて、二人話を聞いている。
「お茶でもいっぱい飲んでいけや。からっ茶だがな」
「そうさな。よばれていくべえか」
おろく婆さんは家のなかへ入ると、くらい土間の奥から、土瓶と茶わんを持ってきた。
二人は縁側にちょこなんと座った。
おかん婆さんは、袂から干し柿を二つとり出すと、
「あんたと二人で食べようと思ってな、持ってきただによ」
「あんれ、まあ、これはごちそうなこった」
「わしの〝花あかり〟へは、きっと来ておくれ」
「ああ、かならず寄せてもらうとも」
二人は干し柿とからっ茶で、思い出ばなしにふけり、夕日が沈むのにも気がつかなかった。

（四）

おかん婆さんが、仲のよい友だちや、親戚、知人、近所の人たちへ、お別れの挨拶をしているうちに、冬は深まり、年が明けたかと思うと、もう早春だった。
梅の花が咲き、枯れた草むらからは草の芽がもえ出し、空をとぶ鳥の姿も、思いなしかふえたようである。
おかん婆さんの挨拶まわりはあらかた終わり、又助は棺桶つくりに取りかかっていた。
日にさらした極楽草の幹は、けっこううまく乾いていた。又助はそれを何枚かの板に挽き、鋸でけずって、上手に組み立て、棺桶の形がすこしずつ出来あがっていった。

軒下で作業にはげむ又助の姿を見た村人が、
「だいぶ出来たのう」
と声をかけると、又助は顔をあげて、
「おお、出来たよ。今年は雨がすくないで、木がよく枯れた。
「〝花あかり〟は、いつだや」
すると、板戸のあいだから、おかん婆さんの顔がひょいとのぞいて、
「はぁ、来月だによ」
「ちょうど、さくらの咲くころだな」
「そう、さくら吹雪のなかで、おらあ、極楽さまへ行くだによ」
「けっこうなことだ。婆さん、棺桶へは入ってみたかえ」
「ああ、入ってみたとも、このあいだ、寸法をはかるとき、ちょっくら入ってみただが、ちょうどいい按配だった。せがれは腕がいいでのう、いい棺桶を作ってくれただよ」
おかん婆さんは、まるで、うたいあげるような調子で、そう答えた。
その夜、おかん婆さんは村の共同風呂へ行った。
さんだの村では、どの家にも風呂はない。村に共同風呂があって、みんなそこへ入浴に行くのである。
それは山裾に建てられた、ほったて小屋に毛の生えたていどの湯屋にすぎなかったが、村の人たちには便利な存在だった。
毎日の湯当番がきまっていて、村人たちが交代で湯わかしをつとめるのである。水は、井戸水や、川の水が豊富にあり、薪は山からとってくればよかったから、経費はかからなかった。入浴料はもちろん無料である。
入口は男女別になってはいたが、なかへ入れば、脱衣場の仕切りは形だけのもので、ひとつの湯ぶねが、男湯と女湯に板で仕切ってあるだけなので、実質的には半分混浴といえた。
だが、村人たちは恥ずかしがるふうもなく、平気でわいわいさわぎながら湯に入り、開放的なものだった。
おかん婆さんが着物をぬいで裸になり、湯ぶねに入ろうとすると、背中から、おろく婆さんが声をかけた。
「棺桶もすっかり出来あがったという話だのう」
「ああ、出来たぞや。いちど見にきてくれや。せがれが器用なんでの、きれいに板をけずりよるわ」
「じゃあ、極楽さまはまちがいなしじゃ」
「だから、うれしいだによ」
そのとき、男湯のほうから、
「おかん婆さんは裸になると、若いのう」
という大声が聞こえてきた。
おかん婆さんが、

（えっ…）
と思って、そのほうを見ると、若い男が、二、三人、男湯のなかから、こっちをむいて笑っていた。
「なに言うだ。年よりをからかうと、承知しねえぞ」
「さっき見たけどよ、尻もぷりぷりしているし、あそこも黒い。棺桶へ入ってしまうなんて、もったいないぜ」
「ばかこけ」
「おれにいちど抱かれてみるか。そのほうが、ずっと極楽さまだぞ」
「なに、ぬかす。阿呆たらいうと、こうするぞ。ばち当りめが」
おかん婆さんは両手で湯をすくうと、男湯めがけて、ぶっかけた。
「あ、は、は…、気の強い婆さんだ」
たしかにおかん婆さんの身体は、男衆にからかわれても仕方がないように、まだ若い。身体のどこもむっちりしていて、肌もつややかである。まずいものを食って、毎日休むひまなく働きまわるのが、若さの秘訣なのかもしれない。腰も曲がらず、手足も丈夫、胃腸も丈夫、歯も丈夫、眼もよく見える。
おかん婆さんはひとりで洗い場のすみにうずくまると、自分の裸をつくづくながめながら、
（六十にもなって、こんな若い身体をしていて、恥ずかしいよう）
と、消え入るように思った。おかん婆さんは両手をにぎりしめると、
（早く、しわくちゃになってほしい）
やにわに、腹や腰のふくらみを、まるで折檻するように、めちゃめちゃに強打した。

（五）

棺桶ができあがると、又助には、やらねばならぬ仕事が、もうひとつあった。
六角堂まいりの準備である。
六角堂は村の山奥にあった。さびしい山道をずんずんのぼり、ほそい山道をわけ入った、山と山の狭間に、六角堂は建っていた。
村の掟で、六角堂へは、誰も近づいてはならないことになっていた。
近づいて、なかを覗くような者があれば、たちまち天罰を受けるという。もし、山のなかで道に迷って、六角堂の近くを通るようなことがあっても、そ知らぬ顔で、山を下りてこなくてはならないのである。
六角堂まいりを許されるのは、その家の後つぎに限られていた。おかん婆さんの家ならば、又助である。
さんだの村に伝わる〝花あかり〟のまつりは、正確にいうと、〝表の花あかり〟と、〝陰の花あかり〟と二つ

あり、二つが合体して、〝花あかり〟のまつりとなるのであった。
〝表の花あかり〟は、六十歳の誕生日に行われ、その日の夜に〝陰の花あかり〟が行われるのであるが、〝陰の花あかり〟のほうが、重要な行事なのであった。
六角堂まいりは、この〝陰の花あかり〟のための、準備だといえばよかった。
〝陰の花あかり〟は、誰にも知らせない秘儀である。その仕方を、ひそかに伝授するのが、六角堂まいりであった。
六角堂まいりのことは、誰に喋ってもいけなかったし、誰に相談してもいけなかった。
だから、又助も、六角堂まいりの準備は、ひとりで進めねばならなかった。
手間がかかるのは、供物の用意であった。
きめられた供物の種類を集めるのには、時間がかかった。又助は、棺桶作りや畑仕事の合間をみて、こまめに供物を集めた。
干し柿、干ししいたけ、かち栗、干しわらび、米、そば粉、豆、にんじん、ごぼう、干し魚、ごま……、
などと、十数種類を集めなくてはならないが、集まり次第、納屋の奥の秘密の場所に、鼠が餌をはこぶように、ひとつ、ひとつ、又助はためこんでいった。
ある日、おかん婆さんは準備の工合が心配になって、又助が畑へ出た留守に、そっと納屋の奥を見にいった。すると、いちばん奥の暗がりに、きめられたものが、だいぶ集められているのをたしかめて、
（仕度は着々と進んでいるわい）
と安心した。
六角堂まいりは、〝陰の花あかり〟より十日前の、深夜に行われる。
が、その日が近づくにつれて、又助の気持ちは、しだいに重苦しく沈みはじめた。
六角堂まいりの内容が、三年前の權助のときの経験で、又助には、その悲しさ、凄まじさがわかっているだけに、
（あれを、もう一度やらねばならないのか）
そう思うと、いくら村の掟とはいえ、家の後つぎに生れたことを、怨めしく思った。
だが、たとえそう思っても、それを顔に出してはならないのだった。〝花あかり〟のまつりは、おかん婆さんが極楽往生する、めでたいまつりなのである。母親にたいする、最後の親孝行なのである。
（しっかりやらねばならない）
又助は、晴々と、喜々として、やらねばならないのである。
いよいよ、六角堂まいりの日がきた。
夜になり、家のものが全員寝しずまると、又助はそっ

と寝床を抜けだした。
ならんで寝ている嬶のおつめは、気がついているようであったが、知らん顔で、眠ったふりをしていた。
耳をすますと、隣のおかん婆さんの寝床からも、ことりとの物音もしなかった。
又助は家の外へ出ると、納屋へむかった。
すっかり用意の出来ている供物を背に負うと、歩きだした。
月のあかるい夜だった。
月光の下で、黒々と村が眠っている。
こんな夜更けには、人っ子ひとり通っていなかった。
又助は月夜の山道を、奥へ、奥へと、のぼった。木の下の闇を通ると、春の匂りがした。
ホー、ホー
と梟がないて不気味だったが、六角堂まで行けば、長老さまが待っていてくれると思って、心をはげました。
やがて闇のなかに六角堂の灯が見え、又助の足ははやくなった。
六角堂のなかへ入ると、正面に長老さまが座っていた。
長老さまのうしろには、等身大の人形が、あおむけに、蒲団のうえに寝かされていた。
又助は、無言で、人形の前へ供物を供えた。
つぎに又助は、ねり薬のような固まりをふところから取りだすと、火をつけた。
黒い固まりは火にとけて、煙をたちのぼらせ、やがて、うっすらとした芳香が、あたりにただよいはじめた。それは、又助が極楽草を切り倒したとき、切り口から樹液を丹念にあつめて、固めたものだった。
芳香は甘美で、人の心を幻想のなかへ、いざなうような力を持っていた。
芳香が堂内にいき渡るのを待って、又助は、かわらけを、人形と、長老さまと、自分の前と、三つ置いた。
それへ、持参した酒をついだ。
長老さまは始終無言で、又助の動作を見ていた。
準備がすっかり出来上ると、はじめて長老さまは口を開いた。
「他言は無用」
それに答えて、又助も、
「他言は無用」
二人は静かに、かわらけの酒を飲みほした。
三年前の、父親の權助のときと、すこしも変わっていないと、又助は思った。三年前の夜のことを、又助は思い出していた。
三年前も、長老さまのうしろには、今夜とおなじように、人形が蒲団のうえに寝ていた。
人形は古びた人形で、ずっと昔から、この六角堂に横たわっている人形のようだった。
白木作りで、黒っぽい着物が着せてあるので、男なのか、女なのか、わからない。何十年、いや何百年というあいだ、さんだの村のきびしい掟にしたがって、人形は重大な勤めを果してきたのである。
人形は、あおむきに寝ている。
長老さまは、その上へ馬乗りになった。
そろそろと両手をのばして、人形の首の根もとを強く押した。
「又助、おまえも、やってみなされ」
長老さまに代わって、こんどは又助が、人形へ馬乗りになった。
そして、十日後の權助の〝花あかり〟の夜、又助は、それとおなじ動作を、寝ている權助の身体の上でやったのである。そして、權助はめでたく、極楽浄土へ行けたのである。
だから、今夜の又助の六角堂まいりは、二度目になる。
長老さまは、前回とおなじことを、もう一度くりかえして、又助に教える必要はないわけだった。それで、
「おとうの時で、もう、わかっているな」
今夜は、そう念を押しただけだった。
「へえ、わかっております」
今度は、父親が母親に代わるだけである。
「今度も手落ちのないようにな」
「へえ」
「手落ちがあると、家の恥じゃ」
「へえ」
「同時に、村の恥でもある」
「へえ」
こうして又助の二度目の六角堂まいりは、無事、終了したのである。
又助は六角堂の外へ出た。
ふたたび月夜の山道をくだった。
（手落ちがあると、家の恥じゃ。村の恥じゃ）
長老さまの言葉が、頭のなかによみ返ってきた。
父親の〝陰の花あかり〟よりも、母親の〝陰の花あかり〟のほうが、息子の気持ちは動揺するらしい。長老さまは過去の経験から、そのことを知っているのである。
又助のなかのその動揺を、はやくも長老さまは見抜いたのかもしれなかった。
山道を歩きながら、又助は、昨年起こったある事件のことを思い出していた。
三吉という親思いの若者がいた。その母親の〝花あかり〟のまつりが、昨年あった。三吉は村の掟どおりの六角堂まいりをしたが、そのとき、
（こんなむごい〝花あかり〟は、おらには出来ねえ）
と、長老さまの教えを受けつけず、〝陰の花あかり〟のまつりを、しなかった。
そのため母親は極楽往生できず、三吉はただちに村から追放された。次男が村に詫びを入れて、〝陰の花あか

り“をやり直し、無事、母親は極楽往生できたのであった。

（六）

おかん婆さんの”花あかり“のまつりが、日、一日と、近づいていた。

”花あかり“のまつりは、当人にとっても、家族にとっても、人生最大の行事である。まつりはしっかりやらないと、家の恥であり、なおざりにする者は、村に住むことができない。

”花あかり“のまつりは、いわゆる葬式ではない。極楽浄土へいくための、いわば前夜祭とでもいえばよかろうか。葬式は、”花あかり“の後に行われる。葬式よりも、”花あかり“のほうが、盛大なのである。

又助が六角堂まいりからもどった翌日、寺から、佛壇かざりの絵がとどけられた。

絵は、住職がじきじき持参した。絵をとどけるついでに、予定どおり”花あかり“のまつりの準備が進んでいるかを、ひそかに確認するためである。

佛壇かざりの絵は、釈迦涅槃の図である。

それは和紙に、三色ほど使って手書きしたもので、その都度、住職が筆をとって描くのである。

横たわる釈迦の横に、もう一人、おかん婆さんらしい人物が横たわって描かれていて、右端に、

願　おかん極楽往生

と住職の達筆で記されていた。

その日、又助は、一日かけて佛壇を清掃し、供花を新しくとりかえ、釈迦涅槃の絵をかざった。

おかん婆さんは居間のすみに座って、その一部始終をじっと見ていたが、かざり付けがおわると、又助といっしょに線香をあげ、念佛をとなえた。

すると、”花あかり“のまつりが、あだやおろそかにできない重大な行事であることが、無言の圧力となって、伝わってくるのであった。

やがて、待望の”花あかり“の日となった。

おかん婆さんは、深刻な顔でなく、すこし浮き浮きしているように見えた。わざと、そう振舞っていたのかもしれない。

おかん婆さんは朝はやく起きると、髪を洗い、珍しく髪油をつけて、櫛けずった。髪に油をつけるなんてことは、久しぶりだった。

髪の手入れがおわると、よそ行きの着物に着がえた。腰巻きから、肌着、着物、帯と、すっかり新しいものに取りかえた。

肌着をぬぎ、腰巻きをはずし、裸になったとき、おかん婆さんは、ふっと、自分の裸身に見入ったのである。

まだ張りのある乳房を両手で抱きかかえ、腹や腰のあたりをなでながら、まだ自分の肌がつややかなのを、しげしげと見た。

そこには、おかん婆さんの女が息ずいていた。

いつか共同風呂で、若い男衆から、

（おかん婆さんのあそこは、まだ黒黒としておるのう）

とからかわれたことが、頭をかすめた。

（おれに抱かれてみるか）

（馬鹿こけ）

湯のなかでの男衆とのやりとりが、急に身体のほてりのように、よみがえってきた。

おかん婆さんは、この身体が、今夜でこの世とおさらばするのかと思うと、自分自身がかわいそうになってきた。両手のなかの乳房がいとおしかった。

だが、すぐ思いなおして、

（そんなことを考えたら、いかん。そんな態度をそぶりに見せても、いかん）

と、きつく自分を叱った。

おかん婆さんは邪念を払うように首をふると、佛壇のうえに貼られた釈迦涅槃の絵を見上げた。

（なむあみだぶつ）

おかん婆さんは必死に祈った。

（極楽浄土へ行くのだ…）

（お釈迦さまが救ってくれるのだ……）

（極楽往生ができるのだ……）

おかん婆さんは一生懸命いのり、一生懸命自分に言いきかせた。

だが、どうしたことか、今朝のおかん婆さんは、自分のいうことがなかなか聞けないのだった。

涅槃図のなかのお釈迦さまの顔が、急に美男に見えてきた。

そして、お釈迦さまの白い手が、すーっと、おかん婆さんの黒黒とした谷間へむかって、のびてくるような気がしたのである。

（ああ、これがほんとうの極楽じゃわい）

と、おかん婆さんは一瞬にやりとした。

しかし、こんな妄想にとらわれているのは、いつまでも裸でいるからだと思った。おかん婆さんは、手ばやく、新しい腰巻をつけ、肌着に手を通し、新しい着物をまとっていった。

着物は、家に一枚しかない、銘仙の着物だった。これは家に代々つたわっているもので、おかん婆さんの母親も、”花あかり“のまつりのときに着た銘仙だった。いや、母親だけではない、その祖母も、またその祖母も、家代々の女たちが、”花あかり“に身を装って、家の血を受け継いできたのである。

最後に、さんごの玉のかんざしを一本、髪にさした。

このさんご玉も、家に代々つたわるものであり、銘仙

とともに、これから又助の嫁へと、つたえていかねばならぬものであった。
仕度が出来あがったおかん婆さんは、見ちがえるように若返って見えた。
「いつものおばばとは、ちがうみだいだ」
孫たちが珍らしそうに、代わる代わる、おかん婆さんをのぞきにきた。
「おばば、そんなにしゃれて、どうするの」
「しゃれて、いいとこへ、行くだによ」
「いいとこって、どこ？」
「とおーい、ところ」
「おらあも、いっしょに行きたいな」
すると母親のおつめが顔色をかえて、
「こら、バカぬかすでねえ。さあ、こっちへ来ているだ」
子供たちを、すさまじい勢いで、台所のほうへつれもどした。
台所では、近所の人々がきて、〝花あかり〟の料理作りを手伝っており、
ぷーん
といい匂いが、たちこめていた。
料理が出来あがるころになると、親戚の者たちも、おいおい集まってきた。
まだ陽も高いうちに、佛壇の前に、おかん婆さんが座ると、その左右に、家族、親戚がならび、料理がはこばれ、おかん婆さんの極楽往生を祈った。
酒を飲み、料理を食って、宴は夕方までつづいた。
こんな宴は、十年、二十年に一度のことである。たとえ、祭りや正月といえども、こんな振舞いをしたりはしない。
人々は、おかん婆さんの心のうちを思いやるのも忘れて、ひたすら、飲み、食い、そして唄った。

夕方になると、おかん婆さんと又助は、
「これから念佛堂へ行かにゃなりませんので」
と言って、宴の途中で席を立った。
「まだ、料理もたんとありますで、みなさん、ゆっくりやっていってくだされ。では、これでお別れです。ごきげんよう」
おかん婆さんが、さり気なく、この世のお別れの言葉をのべると、
「おばば、めかして、まるで嫁入りするみたいだによ」
酔った男の声が飛んだ。
「そうだよう、わしゃ、これから、お釈迦さまのところへ嫁入りするだもの」
そんな軽口で答えられるのは、すでにおかん婆さんの覚悟が、みっしり出来ている証拠だといってよかった。
二人は春の夜を、念佛堂へむかって歩いた。又助が料

理を両手に持っている。
「こうして二人で歩いていると、二十年前の、苗受けのときを思い出すなあ」
おかん婆さんは、極楽草の苗を、長老さまのところからもらってきた日のことを、思い出していた。
「あのときも、又助、おめえがいっしょに行ってくれたなあ。はやいもんだ。二十年はあっというまに、すぎてしまった」
二人の足音が、夜の山道にひたひたと聞こえる。おかん婆さんは、その足音をしみじみ聞きながら、
「最後まで、又助には面倒かけるのう」
「おっかあ、そんな言い方、やめてくれ。そんなふうに言われると、おらあ、涙が出てきて困るだによ」
念佛堂に着くと、堂のなかは、ろうそくの灯であかるく飾りたてられ、集まった婆さんたちで、大珠数の輪を廻す念佛がはじまっていた。
〝花あかり〟の念佛講も、苗受けの念佛講と、ほとんどおなじであったが、ひとつだけ、ちがう点があった。
苗受けのときは、おかん婆さんもいっしょに珠数の輪のなかに入って、念佛をとなえたのだが、今夜は珠数の輪の中央に蒲団がしいてあり、おかん婆さんはそのうえに寝て、念佛の合唱の波に身をひたすのである。
集まってくる老婆たちは、次第に人数がふくれあがり、念佛の声は堂内に立ちこめた。

なんまいだ　なんまいだ
赤い花なら極楽草
この世とあの世の花あかり
極楽浄土の花あかり
なんまいだ　なんまいだ
赤い花なら極楽草
この世とあの世の……

くり返し、くり返し、念佛の唱和は、いつ果てるともなく、つづくのであった。
その念佛の海に身をひたしていると、おかん婆さんの心はいつしか甘美にかすみ、念佛堂の天井のかなたに極楽浄土が夢のようにうかび、ふんわりと、昇華していくような気分になるのだった。
又助は堂の片すみにじっと座り、ろうそくの灯の消えるのを、手まめに取りかえていた。
夜もすっかり更け、念佛はおわった。
「ご苦労さまでござった。どうか、たべてくだされや」
又助は持参した料理を手ばやく老婆たちの前にならべ、まわし飲みのかわらけに、酒をついでまわった。

（七）

老婆たちが散会し、堂内のろうそくの灯が消され、あとにおかん婆さんと又助だけが残った。
（これで、〝表の花あかり〟のまつりは、おわったのだ）
あとは家に帰って、〝陰の花あかり〟のまつりをするだけである。そうすれば、念願の極楽浄土が待っている。
二人は堂内から、春の闇のなかへ出た。
「じゃあ、おっかあ、行くべえか」
「ああ、そうすべえよ」
おかん婆さんはさらりと言った。いつまで名残りを惜しんでいても、仕方がなかった。
これから家までの道のりは、互いにひとことも喋ってはならないことになっていた。
帰り道は、又助が、おかん婆さんを背負って帰ることが、しきたりになっている。
又助が中腰になって、背中をおかん婆さんにむけると、ふわっとした重みが、又助の背中にかかってきた。又助は両腕をまわして、おかん婆さんの尻を支えると、春の闇を歩きだした。
空にはおぼろ月が出ていたが、地面は闇で暗かった。
さくらの木の下にくると、そこだけはあわい光が空中にただよっているようで、夜目にも白い花びらが、おかん婆さんの背中に散りかかった。
歩くたびに、又助の全身の動きが、おかん婆さんの身体につたわってきて、自分の産んだ子供に背負われて、この世に別れを告げようとしている因果を、おかん婆さんは感じていた。
重なりあった黒い影は、まるで一体の魔もののように、どこまでも歩く。
村の掟で、念佛堂帰りの親子の姿を見てはならないことになっているので、どの家でもかたく板戸を閉め、夜道ですれちがう人もいなかった。
家に着く。
家のなかは、寝しずまっていた。
今夜だけは、奥の部屋には誰も寝ておらず、おかん婆さんの蒲団だけが敷いてあった。
その上に、おかん婆さんをしずかにおろした。
枕許に白い夜着がたたんで、置いてある。おかん婆さんは着物をぬぐと、その夜着に着がえた。
そのあいだに又助は、部屋のすみで、香をたいた。香といっても、六角堂まいりのとき又助がたいた、極楽草の樹液から作った、黒いかたまりである。
その匂りには、木の切口のあまい香りにくわえて、とろりとした、官能をくすぐるものがあった。
香りが部屋に行きわたると、又助は、用意しておいた土瓶の薬湯を茶碗へついで、おかん婆さんへ渡した。極楽草の葉をつみとって陰干しにしたものを、煮だした汁である。

おかん婆さんは無言で受けとって、ゆっくりと飲んだ。にがさの中に、ちょっとした甘みがあった。
やがて、蒲団のうえに横になったおかん婆さんの意識は、だんだん、ぼんやりとなっていった。
又助はしずかに部屋を出ていった。
おかん婆さんは次第に睡気をさそわれ、別の世界へ引きずりこまれるように、意識が朦朧となっていった。
……
ふかい眠りにおちいっていたおかん婆さんは、夜中に、ふっと、胸の上に重圧を感じた。
眠ってから、どのくらい時間がたったのか、わからない。部屋のなかには春の闇がたちこめていて、なにも見えなかった。すでに、極楽草の香は消え、その名ごりが、尾をひいているだけだった。
胸の上の重圧感が、現実のものなのか、夢のなかのものなのか、おかん婆さんには、はっきり区別できなかった。
おかん婆さんの上に、なにかが乗っている。
誰かが、馬乗りになっている。
胸がつよく圧迫される。
首が、強い力で、締めつけられている。
だが、不思議なことに、苦しいとは感じないのだった。
すると、胸のうえで、
（おっかあ、許してくれ）
誰かのしのび泣く声がした。
（ああ、又助の声だ）
おかん婆さんは夢のなかで思った。
（なぜ、泣くだ。泣くことなんか、ありゃあせんだに）
そう思った瞬間、おかん婆さんの目の前に、蓮の花の咲く美しい世界が、
すーっ
と、ひろがってきた。
つぎの朝、はやく。
又助は目ざめると、蒲団のなかから耳をそばだてて、おかん婆さんの部屋の気配いをうかがった。
いつもなら、ごそごそ物音がするのだが、今朝はしんと静まりかえっていて、人の気配いすらない。
又助は起きあがると、ひとりで、その部屋へ入っていった。
おかん婆さんの身体は、すでに冷たくなっていた。
（うまく極楽往生してくれた）
そう安堵したとたん、どっと、重い悲しみが、又助をおそった。
それは三年前の權助のときにも感じた、おなじ深い絶望感であった。
（このおれに、二度も、こんな辛いことをさせるなんて、ひどいよ）

と又助は思った。
だが、これは、さんだの村の、家の後つぎに生れた人間の、宿命なのだ。どの家でも、長男は、口には出さないが、重い悲しみにたえて、その掟を守っているのである。
又助は勇気をふるい起こして、
「おーい、おばばが、めでたく極楽往生したぞ」
と、家のなかへむかって叫んだ。
叫んだとたん、又助の両眼からは、涙がふきこぼれた。
ばたばたと家の者が、おかん婆さんのまわりに集まってくると、
「ほんに極楽往生だなあ、この安らかな顔は」
「〝花あかり〟のまつり、さまさまだ」
「いまごろは極楽浄土で、權助じいさんと仲よく手を取りあっているだによ」
口々に、おかん婆さんの極楽往生を祝福した。
しかし、口では祝福しながらも、誰もが、
（〝陰の花あかり〟の実態）
を知っているのだった。知っていて、それを口にしない。
おつめが手ばやく、おかん婆さんの顔にうす化粧をした。
さんだの村の女は、生涯に二度しか化粧をしない。嫁入りのときと、死んだときである。

うす化粧をしたおかん婆さんの顔は、朝の光のなかで、白い蓮の花弁のように見えた。
遺体は、かねて用意されていた棺桶のなかへ、安置された。
そして又助を先頭に、和吉、又一の三人が、鍬で、立木墓の下に穴を堀り、そこへ埋めた。
午後になると、親戚縁者や村人たちが集まり、寺の住職がやってきて、立木墓に戒名を書き、おかん婆さんの葬式が行われた。
又助は、立木墓の前で両手をあわせながら、
（おっかあ、どうか、安らかに成佛しておくれ）
と、いつまでも祈りつづけた。
葬式がおわると、おとりの腹のふくらみが、急に目だちはじめた。
そして翌月、おとりは無事、女の赤ん坊を産んだ。
（あの子は、おかん婆さんの生まれ代わりじゃ）
誰もがそう、ささやきあった。
おかん婆さんが死んでも、赤ん坊が生れたので、家族の数は結局かわらなかった。
（おれの嫁取りが、また遠くなってしまった）
又助の弟の又一は、自嘲的にそうつぶやいた。

（八）

一年たったころ、おかん婆さんの立木墓から、枝や葉が出はじめた。
立木墓から枝や葉が出るのは、佛が成佛していない証拠だと、さんだの村では言われている。
葬式のとき、又助があれほど、
（おっかあ、安らかに成佛してくれ）
と拝んだのに、どうしてだろう。
（おかん婆さんは成佛していない）
という噂が、村へぱっとひろがった。
（又助は親孝行なのに、どうしてかのう）
又助は一生懸命、立木墓の枝を切りとり、立木墓をみがき、花を供えて、
（おっかあ、たのむから、成佛してくれ）
と必死に叫んだ。
しかし、その甲斐もなく、次の年になると、またもや立木墓から枝や葉が出はじめた。
又助は、以前にもまして熱心に供養し、
（おっかあ、たのむから、成佛してくれ。そうでないと、村の衆へ顔むけできねえ。なあ、おやじのように、おとなしく成佛してくれ）
三年目の、ある夏の日だった。
いっときの夕立だと思ったのが、本降りになり、強い風が吹き、雷が鳴り、すさまじい嵐になった。

裏山の茂った木々は狂ったように揺れ、乱れ、折れて地面に散乱した。
その嵐の翌日。
おかん婆さんの立木墓に、異変が起きたのである。
一夜にして、おかん婆さんの立木墓は天をつく高さに生長し、その幹から出た枝々に、びっしりと葉が茂ってしまったのである。
又助は、
（あっ、立木墓が巨木に化けた）
と思った。
それは伐る前の極楽草の姿さながらで、
（立木墓が、もとに戻ってしまった）
と、又助はその場にへたばってしまった。
立木墓から群り茂った枝や葉は、重なりあい、よじれあい、伸びあがって、まるで立木墓が群青の炎となって、燃えあがったかのように見えた。
（立木墓が怒ったのだ）
又助はふるえ上った。
又助の全身を、おそれと、悲しみが、よじれあって刺し貫き、
（どうして、おっかあ、そう怒るんじゃ。おらあ、こんなに親孝行しておるのに…）
泣きくずれる又助の前で、おかん婆さんの立木墓は怒髪天を突いていた。

仏の墓から出た

丸ビル恋歌（こいうた）

ふと思い出す○○市を走っているチンチン電車
新幹線などにないあの風格こそ文化だ。
―朝日・素粒子―

大和禎人

朝日新聞の素粒子の筆者はここにいう○○市に富山市をあてている。なぜことさらこの都市を指したものか理由を明らかにしていない。郷土を恋うる発想ででもあったろうか。チンチン電車の健在する都市というなら、なお全国にその例をいくつか他にもひろえるはずに思う。だが、これを捨てがたい風格と感じ、またこれぞ文化とするこの筆者の真意をくみ、共感をよせ得る世代はおよそ限られるのではなかろうか。

SLファンの若者があり、ミニチュア模型を愛好し、蒐集に熱中するマニアが存在するとしても、およそ別趣の心情にベースをおく人々のように思われるのである。

新宿副都心とやら、都庁のあの不遜な高層、すでに周辺には三角、四角、個性を競うかに高層のビル群が存在していたが、いま、さらにホームレスを排除して動く歩道を作るとか。たまたま足をむけることがあっても、駆けて逃げ出したくなる気持ちに襲われるのは私だけであろうか、いまだ都庁舎ご自慢の展望台なぞ行く気にはまったくなれない人種に私は属する。高所恐怖症というケースではなく、高層蔑視症候群の仲間である。

旅行に出ても地方都市の大方がその例にもれず、おぞましく高層が街区を睥睨するかに聳えるのを見る。とくに京浜、京葉に向かう車窓ではため息の出るほど高層乱舞の景観が切れ目なくヒタ続く。これを高度成長とし、文化とするならばなんたるザマであろう。文化氾濫の修羅場としか思えぬありさまだ。素粒子氏ならずとも首を傾げたくなる。

さて、右のような感懐は別として、丸ビルの愛称で呼ばれた、＜丸の内ビルヂング＞がやがて姿を消す運命という。

「丸ビル　窓ごとに物語」、

「丸の内の象徴七〇年余」、
「建て替え、近く着工」、
などの見出しで平成八年一月十二日付、同じ朝日新聞夕刊の一面では八段抜きの大見出し記事がいきなり目に飛び込んできた。

日月忽々というべきか、はや十年ほど前、同じ朝日の紙面で「老朽の丸ビル」が話題になった折りも、私は懐かしさの衝動にかられ、足を向けて廊下を歩いている。その節の記事ではすっかりすり減り、凹んだ階段部の写真が掲げられていたのを覚えている。私の気まぐれなこのときの再訪はたまたま旧国鉄ビルの横、時計台のある野村ビルの階上、永楽クラブに同窓会があり、出席に先立つ時間をあてたものであった。

見るかぎり健在なりとはいえ、エアコンの器具を窓ごとに外に突き出すはなはだ奇異の風景がそこにあり、明らかに老残、老朽の話題を避けられない姿を見たことだった。私は一階の商店街に昔のままの冨山房に立ち寄って、「新潮45」の創刊号を買い求めている。同誌の購読はそれ以来だから、はや十年続くことになる。

東京駅前に聳える丸の内ビルディングはその宏大なこと名実ともに東洋一である。建物の延坪は一萬八千坪で地下を合せて九層の四角な建物である。一階と二階は店舗で地下室は食堂、三階から八階までは貸し事務所でその室数は約三百。事務員数は四千五百名。ビルディングに出入りする人の数は二萬乃至三萬に及ぶ。帝都の玄関を飾る大建築物として東京新名所の筆頭にあぐべきもの。

これは誠文堂新光社版、「日本地理風俗大系」大東京編による記事である。昭和十四年版だ。正面玄関の写真の下に、右から左へ横書きといういまは馴染めない説明が読める。「大東京編」という誇大、「帝都」という呼びにいささかの時代感覚のズレがあるにせよ、写真は大正十二年二月完工という同ビルの歴史からいえば青年期のものだ。そして玄関口を出入りする人々の風俗も注目に値する。男性が目立って多く無帽は一人もいない。往時カンカン帽と呼ばれた麦藁帽子に、白の麻服姿などが見える夏の風景である。

ところで、同年の私はこの写真と無縁でなく、同ビルに通勤するオフィスマンの時代が重なるのである。

昭和十年三月、ビル六階にあったNという損保会社の書記補という身分で任用され、同十五年三月まで過ごしているのだ。初任月俸三十円というサラリーマンであった。大阪に本社をおく東京支店で、重役支店長S氏が月俸五百円、大学出の初任給がたしか六十円ぐらいの時代だった。同ビル東南の角二室、広いスペースを占め、す

ぐ下には当時中央公論社があった。このころのオフィスは外窓のガラスに社名の金箔文字を麗々しく入れる慣いがあり、外国人の目にはそれが異様な風景として目に映り、日本の商社は倉庫に事務机を置いていると揶揄の対象になったりしたのも当時のエピソードである。

しばしば繰り返し書いていることだが……、

和田倉門近くの雪の朝、なお粉雪の舞う堀端にバリケードを張り、剣つき鉄砲を持つ兵士の姿を見た二・二六事件は昭和十一年、日支事変の最中、戦意高揚するがごとく角界では同十四年横綱双葉山破竹の六十九連勝があり、朝日新聞の神風号の訪欧飛行を成功させた飯沼飛行士の話題がこれにつづき、良かれ悪しかれ私の丸ビル時代を伴奏するのである。

「これじゃあ、税金の高いはずだねぇ」

轟音、空を圧する編隊飛行は陸軍記念日の三月十日のこと、ビルの窓に駆け寄って空を仰いだ仲間の言葉だ。皇軍と呼ばれた軍は健在、威風堂々の時代であった。

（南京陥落）は十二年十二月。

（漢口陥落）は十三年十月。

丸ビルは国旗を掲げ、祝賀の大額を玄関に飾りつけ、

「皇軍万歳」

「堅忍持久」

というスローガンを中央入口の左右に。

夜はまたそれらがイルミネーションに映え、さながら不夜城のごとく輝く光景を現出したものだ。

私の丸ビル時代を記録したカメラのことをここで書いておかねばなるまい、それは戦中、戦後にわたり長く愛用したバルダックスという蛇腹の旧式カメラなのだが、ドイツ製で、レンズは4・5、ブローニー半截というもの、もともと欲しかったところ、カメラマニアの幹部社員がライカとかローライコードといった高級カメラを持っていて、互いに作品を持ち寄り、出来栄えを競う風潮にも影響をうけて買ったものだった。

新橋の村上商会というカメラ店で、昭和十二年暮、賞与百十二円の中から、六十円を投じて買っている。それも中古品でこの値段だった。私の給与は前記のように三十円からスタートして、ようやく三十二円、副俸三円を加えて三十五円だったから、いかに高価であったかが知れよう。ともあれ、このカメラが丸ビルおよび、その周辺を写していまに貴重な記録を残している。

前記した南京、漢口の陥落の祝勝風景、皇居外苑風景では堀の土手に昼休みを憩う社員仲間を記録し、往時の東京駅については会社の応接室の窓から俯瞰撮影を試みて、遠く国鉄ビルを望む全景を写し、いまの三角屋根でないこれが本当の東京駅というドーム型の偉容を収めている。同様の俯瞰写真に東京駅南口からビル地階を結ぶ

地下道建設中の板囲いの脇を朝の光りを浴び出勤する人々を写したものがある。現状の広く、四通する地下道の先鞭をなす工事を写し、貴重な一枚になっている。また夜景をスナップして、数寄屋橋、日劇、この時期日比谷にオープンした「美松デパート」のイルミネーションに輝く塔屋など、そろそろ防諜上高所からの撮影禁止の傾向を免れるショットを残している。ビル四隅のコーナーには非常階段があって、屋上に出られたものだったが、やがて閉鎖されている。そんなわけで八階にあった精養軒の屋上小庭園、なにごとか日章旗が塔屋に翻る写真なぞ貴重に属するスナップに思われる。

ところで、右の非常階段の最上階のドアーが閉鎖されたことでその内側が密室の状態になり、だれも上がってはこない所になった。男女カップルが恋を語り合う恰好の場所を提供したのであった。いまのように大っぴらでない、忍ぶ恋路の幾組かがあり、ビルを管理する三菱地所の警備員の巡視でいきなり外の屋上側から開けられる気まずい始末もあった。

戦時中にかかわらず、一方には私たちの青春があり、

恋の丸ビルあの窓あたり、

といった風情にまだこと欠かなかった。

（青い背広）などの流行歌が口ずさまれ、

青い背広で心も軽く

街へあの娘と行こうじゃないか

といった浮き浮きする情緒がまだ許されていた。

小津安二郎、内田吐夢、溝口健二、田坂具隆、豊田四郎らの輩出による日本映画の黄金期が到来している。私たちは映画劇場の暗やみに息をひそめ、スクリーンの映像に酔うことができた。巷に数多く存在した映画館とはひと味違う映画劇場「日劇」が丸ビルからは遠くない数寄屋橋にあった。輸入映画もまだ上映を許されていて、ロングランのあたりをとった「オーケストラの少女」はこの劇場で見たことであった。

新宿にくり出せば外国映画の武蔵野館があって、名画「モロッコ」を見ることができ、またムーランルージュがあって、軽演劇に左卜全、明日待子、外崎恵美子らが人気をあつめ、浅草では榎本健一、古川緑波など、時代をチョッピリ諷刺する、やはり軽演劇が人気を呼んでいた。だが、ムーランの劇場に来ていた出征兵士が、

「明日待子バンザイ」

を呼んだ出来事もあったりして、一方に忍び寄る戦時色の同居した複雑さを覆いがたい世相であったことは否定できない。

平成八年、その一月二十七日、この日は土曜日であったが快晴、私は丸ビル名残りのロケを行うための足を運

んだ。いよいよ取り壊しの運命を聞いては、黙視できない心情につき上げられた行動であった。「現状有姿」を眼に焼き付け、カメラに収めるために好晴の日を待っていたのだ。

この日が土曜日であることは承知の上だったが、和田倉門からビルに向かい、昔のままの北西の角店（かどみせ）・鰻・日本料理「竹葉亭」という格式の看板を、その真下のビルのプレートとともにまずスナップした。昔のまま、白地の毛筆体の貫祿で懐かしいものだ。これと同様に北東の角、東京駅側には「明治屋」のものがある。やはり丸ビルのプレートを下にし、こちらは黒字に真鍮文字、よく手入れされていて、燦然とした輝きを見せ、テナントの経営に対する心意気を見る思いがした。駅真向かいの格好の場所とあって、観光バスツアーなどの集合目印にもされてきたものだ。取り壊しの話題を知らぬ気の貫祿は「竹葉亭」と同様に見受けた。同じビル内にオフィスマンとして過ごした五年間はなにげなく見過ごしてきたものが、これほど存在感をもって目に迫ろうとはその場所に立つまで思っても見ないことであった。南側の東西にはこれほど鮮明な印象の広告看板はなかったはずだ。

郵船ビル側の入口から入って見て、

（ああ、やはりまずかったな）

と、ビル内部のひそとしてほとんど無人のありさまに悔いが胸にのぼった。オフィスの休日だった。人気（ひとけ）のない商店街では店を閉じているものが多い。そうした中、テナントがどれだけ取り壊し事情に対応して移転の措置を講じているものか、ひとつには関心があったが、一巡した限り、そうした気配はまだまったく見受けられなかった。

エレベーターで六階へ、私の青春五年を過ごしたN社は六八七、六八八号の二室である。が、いまは二室とも三菱地所株式会社のネームが扉のガラスに読めた。このビルのオーナーにあたる会社である。私は遠く距離をおいて社名を読み取れぬ工夫をしてシャッターを切った。

（いま一度倚（よ）らしめよ）というほどの思いであった。

このあと、休日再訪の悔いはさておき、思いがけない目撃をすることになる。

玄関ホールになにやら表示スタンドが置かれていて、

＜一月二十七日は国旗制定の記念日です。国旗を掲げ祝意を表しよう＞

という趣旨を読み取れた。

（国旗制定記念日？）

あとで気づいてみると、凱旋道路と呼ばれた昔のある北側の広い道路の中央分離帯の、海上ビル前あたりにはさらに大きい同様の趣旨の広告塔も見かけられた。そうした記念日の知識が私にはなかったから、少々目を見張る思いであった。そしてはたせるかな丸ビルでは中央玄関の左右に日の丸旗が掲げられているのを発見した。

この光景はあの南京、漢口陥落の祝勝風景のイメージに重なるものであった。私はその今昔感を映像に収めるため、かつてと同じ角度からカメラのシャッターを何度か切った。戦前の市民には戸ごとに「旗日」と呼んで日章旗を掲げる昔があった。私の家の近隣にいまも祝日掲揚を守る家庭が一軒だけあって、なぜかそれは今日にあっては一種の異様として目に映るのである。敗戦の汚辱にまみれた日章旗を国民が敬遠する意識の潜在に根源をたどれるのではなかろうか、ふとそういう思いが浮かんだことだった。この日、周囲のビルでは銀行協会にそれを見たにとどまり、公的機関である中央郵便局、東京駅では掲揚を見かけなかった。

国旗制定記念日という根拠はなにに拠ったものか、調べてみると、

王政維新の後、明治三年正月二十七日、令して
国旗を定めて、大中小旗とし、西洋形商船には
常に掲げて、取りはづすを禁じたりき

という記事をようやくある資料に探りあてた。

快晴のもと、ほとんど無人であることで、丸ビルの外観はドッシリと威容すら感じさせ、以前、醜いと感じたエアコンの機器を窓に突き出す風景は解消していた。規制して本来の風格を取り戻したに違いない。廊下を歩いてみて、それは天井に這わせた夥しいパイプでそれと気づくのである。　かつての日本人好みの「東洋一」の衿持を保つために丸ビルは能うかぎり、涙ぐましい努力をはらってきたのだ。ヒビ割れた廊下の充塡補修のあとの痛々しさにもそれは察せられる。

ビルの開館当初、「安全第一ビルヂング読本」という出版物があり、男子、および婦人の別の便所の使用についての注意などの記載があったようだ。現在なおニュアンスとしては古風を感じる「男子手洗所」という表示に添えて横文字のトイレット・ジェントルマンとある外観を写すことにした。各階中央ロビーの左右に男女を分けていて、呼称も男子の一方を婦人としているあたりに特色を見出す。往時、ビルに働く女性は和服にお被布姿が多く、これを婦人と呼ぶのがふさわしい時代だった。

ロケの事後、ある友人から、

「きみ、あそこのトイレを写したか」

と聞かれた。

「あのトイレと洗面の広さは贅沢のかぎり、おそらく絶後のものだろうよ」

と言うのだった。

私は私なりオフィスマンの昔、当然かかわりをもち、反対側の婦人手洗いでは退出時に女子事務員が混雑して洗面の鏡に向かいバフを叩く姿を垣間見る生活のあった場所として懐かしさからカメラを向けたのだった。

このビルには当然ながら中央ロビーで振分けて左右一対四つの吹抜けがある。その内側の窓々を写しておきた

かった。くだんの洗面所の方の窓から写すことにした。新聞のタイトルにいう「窓ごとに物語」というテーマそのもの、ここからの眺めに懐旧の情はいっそうかき立てられる。N社はこの内側にも一室をもち、分室と呼んで古い帳簿や保存書類を保管し、かねて社員の休憩室にあてていたのだ。私はその窓のあたりに焦点をおく構図を選んだ。そこは上級社員たちは決して足を入れない言わば治外法権区域になっていた。給仕と呼ばれる諸君や若い社員が昼休みに集まって、食事をとったり、碁将棋を楽しむなどの、息抜きの場所であった。

二階の商店街を歩くうちに、三菱地所のガードマンに出会った。昔は制帽をかぶり、受付のいかめしい案内係を勤め、エレベーターの操縦も任されていたものだ。

「おたく、そのお勤めはいつごろですか、取り壊しと言ってもねぇ、そうですなぁ、結局八月ごろでしょうか」

かつてのオールドオフィスマンと聞いて親愛を示してくれた。

「カメラをもってお写しなら、この階段のステンドのガラスの照明器具、それにあの踊り場の「江戸古地図」など、どうですか」

と、教えられた。それらは私のオフィスマン時代の記憶にはないものであった。若者の関心をひかなかったそれらは二階へ上るメイン階段の踊り場を飾るシャンデリアであり、ショーウインドーに飾られ、およそ幅四mもあろうか、凝ったガラスの切り子細工で、江戸古地図を浮き彫りにした珍しいものであった。

二月八日、さらにロケを継続した。こんどは新丸ビルのレストランに同窓の会合があり、先立つ時間を当てたのであった。今回は木曜日で往時さながら、オフィスマン、レディーが行き交う活気に満ちて、私自身もそうした雰囲気に溶けこむ不思議な安堵感を覚えた。

この日のねらいの一つには物好きながら、その昔、各階中央ホールの定位置に設けられていた郵便ポストを写すことがあった。八階から直通して郵便物が地階へ舞い下り、中央郵便局の集配をうけるものだ。配達の方は律儀に各室ドアーの郵便受けにという覚えがあり、今は各階一室のポストルームを設ける変貌に気づいたが、くだんのポストは健在で、真鋳プレートの蒼く古びた貫禄を写すことができた。富山房はじめ、丸善、はいばら、また千疋屋、森永と私はこの日も撮りまくり、懐かしくも健在を発見した「モーリ飯店」という安さで親しむことの多かった店までで、この日のロケは撮り納めにした。

帰り来ぬ青春と知りつつ、記録せずにはいられない思いはきわめて卑小な個人的なものだが、「丸ビル恋歌」の素材は青春多岐の思い出の中に生き、恋情を逃れ得ない。取り壊しの厳然とした運命をひかえながら、現状はいまだ自若泰然の姿に見受けても、その姿を見失う日の

訪れはもはや消しようもない未来である。二〇〇〇年には丸の内地区の防災拠点の機能をもつ再生を期されるという。冒頭に引用の素粒子氏の言う一つの文化の滅びを迎えるのだ。やりきれない思いである。

大正九年七月六日着工、十二年二月十日完工という丸ビルは当年七十三歳になる。設計は三菱合資会社地所部だが、アメリカのニューヨークの名門プラザーホテルを建設したフラー社が優秀な現場監督と最新鋭の建設機械を送り込み、当時としてはざん新なカーテンウオール工法をもって、驚異的な二年八カ月の工期で完成したのであった。ビルは直後に関東大震災の洗礼をうけ、一部の損壊はあったが、耐震性を立証し得た建物である。

地震国日本の高層建築は八階まで、丸ビルは少なくとも範を示し、長く日本の代表的建築であった。その風格こそは紛れもない文化でもあった。いま頽齢をもって取り壊しにあい、やがてその姿を見失う日が来る予見は一時代を限った文化の葬送を意味する。

開館当初、六階に大丸呉服店があり、そこへ行く客がエレベーターの珍しい時代のことで、「大丸までいくらで行くか」と聞いたという話が残っている。私も小学生の時、その大丸へビル見物がてら、家族連れで行った覚えがあって、食堂から吹き抜けのビルの内側を望み、「窓のある風景」が珍しく、印象を刻んでいる。その時は三共の薬局が何階かにあり、外国製のモスキトーというその名どおり蚊などの虫刺されに利くチックをもとめて帰り、しばらく宝物のように愛用したことが思い出される。

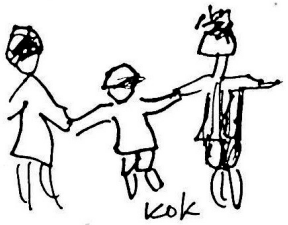
八階建ての高さは昭和四十三年霞が関ビルが完成する超高層時代の幕開けまで、全国に共通する計量マスになり、「丸ビルをマスにして何杯」という慣用語さへ生んだが、その座は霞が関ビルに奪われた。

ところで、マスに例えられた由来は四角い丸ビルの愛嬌に乏しい容姿にもよったのであろう。すべてアメリカ式で、ヨーロッパ風の将来に保存すべき時計台があるとかの、何ら様式美をもたない建築である。だが、なにより今日となれば八階建てという高さこそ貴重であって、ホッとするような安心感さえ与えられる。ビルと同世代を呼吸してきたもののノスタルジアであろうか。

私のロケ計画の今後には丸ビルの背後にあって、すでに高層化し、のしかかるかに聳える郵船ビルの、できれば屋上から丸ビル全景を俯瞰するショットを試みたいと思っている。

丸ビル七十三歳の歴史から見れば、わずか五年に過ぎない束の間の自分史への恋着かくある未練は笑止に値しようが、貴重なわが青春への挽歌として「丸ビル恋歌」を歌い続けることは私にとって止みがたい執着である。

（八・三・二六）



「彦太樓」

柴田富佐子

或る必要があって、永井荷風の「断腸亭日乗」を読んでいた。

この本は、昭和十年代の、特に私が求めている浅草周辺の世情を知るには格好の本だと思う。それは荷風は男性ながら一人暮らしなので、戦時色が濃くなるにつれ、次第に生活必需品が払底し生活が窮屈になっていく様が、意外と細かく記述されているからである。

巻十九（昭和十年）を読み、巻二十（昭和十一年）、巻廿一（昭和十二年）と読み進んで、「六月初二日。」の中に、

「……薄暮銀座に飯し北里に遊び彦太樓に登る。……」

という一行を見つけた。

「彦太樓」――どこかで聞いた名だ、と思った時には、私は乱雑に積み重ねられた昭和十年代の記憶の中から、簡単にその名前を探し当てていた。まるで、その名前には、目印の赤いリボンがついていたようにである。

その赤いリボンこそ「井利和子」であった。

昭和一桁生まれの私の年代には、「和子」という名前が多く、クラスにも七人いた。その中で、井利和子は私と背の高さが同じだったので、入学以来ずっと最後列の机に並んで座っていたから、一番縁が深かった。

昭和十二年といえば、その前年に脱稿した「濹東綺譚」が朝日新聞に掲載され好評を博していた時期で、荷風五十九才の年である。

前出の「六月初二。」の記述には、

「曾て九段坂上の妓街にて見知りたる女の娼となれるに逢ふ。其女のはなしをきくに藝妓より娼に轉じたる女猶二三人この家に在りと云ふ。現代の遊郭のことも何やら筆にしたき心地するなり。……」

と続いていて、娼妓を主人公にした小説を書くために、

この後二か月間に十数回、彦太樓に上っている。六月の七日からは七夜居続けてさえいる。六月十日の記述に、

「今宵は江戸一の彦太樓に宿す。北里を描くべき小説の腹案成る。」とあり、更に十一日には、

「夜十二時家を出で、今宵もまた彦太樓に宿す。今月六日の夜より毎夜北里の妓樓に宿するに今は妓楼が余の寝室の如く我家はさながら圖書館の如く思はるゝやうになりしもをかし。」

とまで書いている。娼妓を主人公にした小説を仕立てるために、その生態を執拗に観察している五十九才の男の根性に、プロとはすさまじいものだと私は素直に感じ入ってしまったが、何故「彦太樓」だったのか、という疑問が残った。

というのは、私の記憶にある「彦太樓」は、間口こそ並びの他の店より広かったが、決して目立つ店構えでも、入り易い場所にあったという訳でもなく、日記の記述を見る限り予め馴染みの娼妓がいた様子もない。單なる偶然に過ぎなかったのだろうか。

井利和子は「彦太樓」の女主（あるじ）の孫である。

二つ三つ年下の弟と二人、女主（あるじ）に引取られ、御内所の奥の部屋に暮していた。女主（あるじ）の息子夫婦、つまり姉弟の両親は別な所に住んでいるらしかった。若い頃に父親は家業を嫌って家を出、パイロットになっているという。

今考えると、パイロットという職業がその頃にあったのかどうか信じ難いが、とにかく和子は父親をパイロットだと言っていた。その現代的な響きを持つ職業から、私は長身の恰好いい父親を想像し、それに相応しいモダンな美しい母親を思い描いていた。

その頃、吉原一帯は待乳山小学校の学区だったので吉原に住む子はそこへ通っていた。

少し離れた私の住んでいた町も同じ学区だったが、吉原の子が多いという理由で、寄留して学区外の小学校へ子供を通わせる親が多く、私の家もそうだった。

そしてどういう訳か、井利和子もそうだった。

和子は外へ出て遊ぶ場もないし、遊ぶ相手もいない。広い店の中で、当てがわれている六帖一間だけが行動範囲では、家に帰ってもつまらないだろう事は、和子の話を聞いているうちに私にも判って来た。

「ねえ、遊びに来てよ」

毎日のように和子に誘われて、一学期も終りに近い日、私は和子のために一緒に「彦太樓」へ行った。

毎年「お酉様」の日だけは近所の子供達と吉原を通り抜けて向う側の大鷲神社へお詣りに行く事が許されていた。似たような店構えの店が何を商売にしているかも知らず、しかし、親達がいつも「行っちゃいけない」と言っている場所に入り、人混みに混って、あっちこっちと目を移しながら通り抜けるのは、なかなかのスリルがあ

った。矢張り「違う場所」という意識は強かった。
昼下りの通りには人影はなく、私は和子の手をきつく握って道の真中を急ぎ足で歩いた。
「お酉様」の時は昼間でも人通りが絶えず、私はいつもそういうものと思っていたので、変に静まり返った両側の大きな建物の列が恐ろしかった。
「彦太樓」は、江戸一と呼ばれる区画にあり、両隣りの店の倍はありそうな間口の大きな店であった。私達が「彦太樓」の前に着いた時、紺の印袢纏を着た年寄りが店先を掃いていて、和子が「ただいま」と声をかけると、手を止めて顔を挙げた。
「おや、お帰んなさいまし。お友達ですか」
私はやさしい目を向けられ、慌ててお辞儀をした。和子は店へは入らず、私の手を引いて建物の脇の細い通路へ入った。その通路の奥に小じんまりした内玄関があった。廊下を上ってすぐ右手が和子達の部屋で、片側に机、本箱、整理ダンスが並んでいる。
和子は初めて迎えた客を精一杯もてなそうと、何種類もの菓子を盆に載せて持って来た。
「食べようよ」
と坐りこんだが、私はこの広い家の中を歩き廻ってみたかった。
「ねえ、あっちへ行っちゃ駄目」
私はさっき和子が盆を持って入って来た襖の方を指した。
「行っても何にもないよ」
「見たい」
「つまんないよ」
「でも、見たい」
大事な客にねだられて和子は仕方なく立上って襖を開いた。
「今日はおばあさんが居ないからいいけど、居る時は怒られるからね」
思った通り襖の外の広い廊下は、真直ぐ店に通じていた。右側に「おばあさん」の部屋があり、その先が御内所になっている。
左側は内庭で奥の方に岩石を組んだ滝があり、滝の水はその下の池に流れこむようになっている。よく見ると、流れ落ちる滝の水の奥に、赤い不動明王が祀ってあった。磨きこまれた広い廊下は口の字型に内庭を囲んでいた。私はつまらなさそうな顔をしてついてくる和子に構わず廊下を一周した。和子の部屋とは庭を挟んで真向いの側に風呂場と便所があった。
お湯屋のような広い脱衣所や温泉のような大きな湯舟、二帖はありそうな広い便所が五つも並んでいるのに私はびっくりした。便器を跨いで据えつけられている浅葱色の瀬戸物のスリッパは仁王様が穿くようだと思った。
「井利さんの家のものは、何でも大きいね」

尚もあちこち見たがる私を引張って和子は部屋へ戻った。
「もう、おばあさんが帰って来るから」
「おばあさんて、そんなに怖いの」
「お店は子供がうろうろする所じゃないんだって」
私は母の母である自分のおばあさんを想った。一年に一度逢うか逢わないかではあっても、おばあさんとは決して怒らない、やさしい人、という認識しかなかったから、おばあさんを怖がる和子が不思議であった。
尤も「断腸亭日乗」六月十三日に
「昨夜は土曜日なるに彦太樓の娼妓お茶をひくもの過半なり。余が相方とし子は晝遊の客一人ありしのみにて大引に余の來るまで客なかりしと云ふ。彦太はむかしより暴利屋の噂高かりし店にて今に至るもその風失せず。抱にも随分無慈悲なる様子にて、今朝は女主人昨夜の不景気を憤り十時を合圖に抱の女をはじめ奉公人一同を呼び集め小言をいふ由。……」
と記述されているから、奉公人にも、和子姉弟にも厳しい人だったのだろう。私はその後も和子に誘われ、何度か遊びに行ったが、おばあさんに逢ったのは、一度きりである。どうやら和子はおばあさんが連れてでかける事があるらしく、部屋に居ない時もあったが、いれば和子以上に私の訪れを喜んだ。一緒にトランプやゲームをし、倦きると内玄関の方の廊下から上れるようになっている中二階の部屋で遊んだ。天井の低いその部屋は物置として使われているようで、部屋の半分は積み上げられた荷物が占領していた。それでも疊が見える場所が結構広くて、よく一抱えもある茶筒を転がして玉乗りをした。太い茶筒は茶が一杯入っていると、乗っても凹まない。両手を拡げてバランスを取りながら窓まで行って、戻ってくる。順番にそれを繰り返すのだが、弟はこの玉乗りがお気に入りで、和子や私が倦きて止めてしまった後も一人で黙々と続けていた。
窓からは内庭が見下せた。閾に両肘をついて私は池の鯉を見、和子は三階の屋根の上に拡がる空を見ていた。
半年も経つと、私は和子の家へ行くのにも慣れて一人で遊びに行くようになった。
その日も私はランドセルを家に置くなり、違う友達の名を言って、「遊んでくる」と家を出た。和子と二人で部屋一杯にお人形さんの家を作って遊んでいると、襖がすらっと開いて、おばあさんが顔を覗かせた。
「和子、左内さんのお詣りに行くから、一緒に来なさい」
和子はおばあさんの顔から私に目を移した。
「一緒に来なさい」

おばあさんも私を見た。おばあさんの目には有無を言わさぬ強い光りがあった。私は頷いた。おばあさんは店先から、和子と私は内玄関から外へ出た。渋い色合いの着物と対の羽織を着たおばあさんは、私が思っていた以上にきりりと背が高く形が良かった。背筋を伸し足早に歩いていくおばあさんの後から、和子と私は半分駆け足でついていった。

「左内さんて、だれ」

私は小声で和子に尋ねた。和子は息を弾ませながら首を左右に振った。

かなり歩いた。初めての道なのでどこを歩いているのかまるで判らなかったが、やがて都電の通りに出た。線路沿いに歩いているうちに、私はこの道は「南千住」へ通じる道だと気がついた。母の実家へ行く時は、いつもこの都電に乗って「南千住」まで行き常磐線に乗換えていた。「南千住」の大踏切りを越えてすぐ左側に古い寺があった。門柱に「回向院」と書かれた白い表札が嵌め込まれている。おばあさんは門を入り、左手の茶屋で火のついた線香を買って出て来た。左内さんの墓は入口近くにあった。御影石のお堂に入っていて、墓石の表面は削り取られたように石の地肌が剝き出しになっている。字らしい字は読みとれなかったが、お堂の右脇に「橋本左内之墓」という墓標が立っていた。

線香立てには横に置いた線香そのままの形の灰が残っていて、お堂の内にはきつい線香の匂いが籠っていた。おばあさんは線香立ての灰を懐紙で払い除けた後に持って来た線香を横たえると、口の中で何やら唱えながら、和子や私の存在を忘れてしまったように、一心にいつまでも拝んでいた。

陽が落ちて墓の通路を吹き抜けてくる風が少し冷たくなった。和子と私はお堂を離れその脇にずっと続いている墓の列を見に行った。並の墓石よりだいぶ小ぶりな墓石が二列に並んで続いている。墓石には「伊藤軍兵衛之遺墳」というように人名の下に「之遺墳」という字が刻まれていた。読める字だけを読んで次々と墓を移っていると、おばあさんの呼ぶ声が聞えた。

「さあ、今日は左内さんのお命日だから、あんた達も拝みなさい」

和子が拝み、訳も判らないまま私も手を合せた。十月十二日の命日に、何故おばあさんが橋本左内の墓を拝みに行ったのか、これも私には謎である。

三年生になって組替えがあり、私は和子と別々のクラスになった。和子は色白で一重瞼の可愛らしい顔をしていたが、言葉少なで引っ込み思案の性格だったから全く目立たない存在だった。だからクラスが別になると、その噂を聞く事もなく一年が過ぎた。四年生の夏に臨海学校で全員が橋丸に乗って館山へ行く事になった。竹芝桟

橋でクラス毎に整列し、一組から順次一列になって乗船する。和子は二組、私は四組だったから、当然和子の方が早く乗船した筈だが、二組の生徒の中に私は和子を見なかったのに気が付いた。船が動き出してから、私は二組の部屋へ行き和子を探した。

「だれ探してるの」

もと同じクラスだった子が聞いた。

「井利さん、井利さんどこ」

「やあだ、知らないの。井利さんは一学期に転校しちゃったわよ」

「どこへ」

「知らない」

和子の転校先を知ってる子はいなかった。

和子との縁は、それで終った。和子の行先を詮索するには私はまだ幼なすぎたし、和子に対する私の思い入れも、それ程深いものではなかったのだろう。新しい友達との付合いの中で、私は和子の事をじき忘れてしまった。

それから二十年近く経った昭和三十年代に、あの吉原一の大籬であった「角海老」の跡がサッポロビールの倉庫になった、という新聞記事を読んだ。

「あの角海老が」という感慨は、すぐに「彦太楼はどうなったろう」という興味に繋がり、私は別れて以来初めて和子を想い出した。

その年の秋に開催された同窓会に、私は和子の消息を知りたくて出席した。同じクラスだった友達に和子の消息を尋ね廻ったが、和子は学区外の生徒で下校後遊んだ友達は私一人しかいなかったし、おとなし過ぎて影の薄い生徒だったしで、その存在すら覚えていない友達が殆どだった。中途で転校した事も理由の一つだろう。会が終る頃には私はすっかり諦めていたが、帰り際に「さっき思い出したんだけど」と言って同じクラスだった一人が、思いがけない情報をもたらしてくれた。

「米田さんのお父さんが、確か井利さんの店で働いていた筈よ。米田さんは嫌がって隠していたけど、あたしは家がすぐ近くだったから知ってるの。米田さんのお父さんが、井利さんを自転車の後ろに乗せて学校へ送って来たのを何度か見た事もあったわ」

私はクラスが違っていたので米田を知らなかったが、米田に電話をすれば何かは教えてもらえると思った。疎開したまま居ついてしまったという米田は群馬に住んでいた。

翌日私は米田に電話し、和子の事で何か知っていたら教えて欲しいと頼んだ。

「わたしは、父が彦太で働いてた事が恥しかったし、父も子供に彦太の話はしないようにしてたから、何も知らないのよ。父でも生きていれば、何かお役に立つんでしょうけどねえ」

米田は何か思い出そうとしている風で、会話がしばらく途切れた。

「わたしが知ってる事は、井利さんが四年生の時に突然転校したのは、お母さんが迎えに来て連れていったからだって事と、お父さんは戦死したって事位よ」

「おばあさんは当然もう亡くなってるわよね」

「そうでしょうね」

「彦太樓の後はどうなったのかしら」

「さあ、わたし疎開してこっちへ来てから、一度も東京へ行ってないから」

米田の話からは「彦太樓」そのものについては何も判らなかったが、井利姉弟が母親に引取られたと知ってから、温かい風が少しずつ胸の中に流れ込んでくるような気がした。

この原稿を書く前に、私は「彦太樓」のあった江戸一へんを歩いてみようと思い立った。

吉原は戦後いち早く焼野原に進駐軍相手のバラック街を誕生させ、進駐軍の撤退後は赤線地帯としていわゆる特飲街に変身した街である。そして昭和三十三年に売春禁止法が施行されると、その宿泊施設を使って旅館街に姿を変え、修学旅行で宿泊した高校生が、家へ出した手紙の住所を吉原何丁目と書いたため親達がびっくりした、という話が新聞種になったりした。

戦後五十年経った今、どんな街になっているのか、自分の目で確めたい気持ちであった。

本来が性を売物にして誕生し発展して来た街は、しぶとく甦ってきらびやかな胡散臭い街を形成していた。戦前は四囲を塀で囲われ、外の世界とは隔絶されていたが、今は何の仕切りもないので、この辺が入口だったかな、と思って立止った所は、すでにソープランド街の真中だった。

雨模様の肌寒い昼下りの街に通行人らしい人影はなく、気がつくと、店の入口に一人、二人と立っている黒いスーツ姿の若い男達がさり気なく私の方に視線を走らせている。私は怖くて道の真中しか歩けなかった。江戸一がどこで、「彦太樓」のあった場所がどこなのか、全く見当がつかなかった。自分の位置を何とか確かめようと立止まった時、私の脇を掠って黒塗りの立派な車が通り過ぎ私の前で停った。私は車から離れるように歩く向きを変えた。停った車から三人の男が降り立った。それが制服であるかのように、三人とも真黒なスーツ姿で、ドアが開いた前の店へゆったりと入って行った。

私は早くこの街を出たくなった。矢張りここは「違う場所」なんだ、と思った。井利和子の事も、「彦太樓」の事も、謎は謎のまま忘れてしまうしかない、と思いながら足を早めた。

今見えているものの奥に

山根三枝子

TVは「老人の介護」という題のもとで放映をしていた。毎朝のように見る男女二人コンビのアナウンサーの他にきょうは男性俳優が一人とあと看護や福祉関係の仕事にたずさわる人が二人位並んで会話をはこんでいた。

NHKその他の局でよくあるような番組なので番組自体に殊更、目新しさとか面白さがあったというのではなかったが私にとっては何か人生の面白さ奥深い味わいを感じさせてくれる眺めであった。それはその俳優（T氏）と今ではベテランの中堅女性アナウンサー（Kさん）の父親達を私が知っていてたまたまその二人が並んですわっているということゝそして彼等は私を全然知らないということがおもしろかったのである。人生もこの位まで生きていると自分と色々な人とのつながりが以外に多く又深いところでのつながりは面白いものだ。

今からかれこれ二十年位も前のことになってしまいました。近所にNさんというクリスチャンの老夫婦がおられ月に一回第三金曜日の午後に自宅で家庭集会を開いて下さっておりました。今では二人とも亡くなってしまわれましたが。普通、家庭におりますと讃美歌ならずとも大声を出して歌をうたうようなこともあまりなかったので歌うことの楽しさにも大いに引かれてお隣りの奥さんといつも出かけておりました。お祈りをして讃美歌を歌い聖書を輪読し牧師のお話が終ったあとではお菓子やお茶をいたゞきました。聖書の話に対する質問疑問などの語らいから日常生活の雑談になる頃にはそろそろ夕方近くになっていてお開きになるという具合でした。

その牧師先生は四十代も半ば過ぎ位であったかと思われますが或日のこと何かのきっかけから御自分の半生の

ことを話して下さいました。

「僕は若い時代ずっと結核で長い療養生活を送りました。家内が小学校の給食のまかない婦となって一家の生活をずっと支えてきてくれました。どうにか健康を取り戻してからは思うところあって神学校に入り牧師になったのです。僕は大学は慶応の経済だったものですから、同期会などに出てみますと皆それぞれバリッとしていて実社会で立派な職場にいて活躍していることがよく分かるのです。僕とは随分違う世界にいるんだなということを思わされました。今は団地に住んでおりましてね、でも聖日には近所の方達も何人か集まりましてせまい一部屋で主を讃美し礼拝を守っております。」

私達は「あゝ　そうなのか　そしてウィークディにはこうして福音（よき知らせ）を宜べ伝えるためにクリスチャンの家庭で集会をもったりしているのだな」と考えたりしました。

それにしても「まかない婦」という言葉が少しばかりショッキングに響きました。学校給食のほうの仕事とかもっとボヤかせば地方公務員と言ってもよかったでしょう。牧師は色白で目鼻だちがどちらかといえば貴公子タイプでした。それで何かしらそぐわない感じでした。年の割には世間知らずの私達に少しばかりあった偏見は「まかない婦」と堂々と話す牧師によって正されたような気がしました。

一月に一回だけで三年位もその集会は続けられましたかしら。遠方の自宅から奉仕で来て下さっていたそのK牧師はやがて来なくなりました。その替わりに近くのA教会に新しく着任した牧師がその集会を引き継いでくれることになりました。

その時から数年位がたちましたかしら。或日のこと教会の友人でもと集会につどっていた人が嬉しそうな顔をして「百万人の福音」というキリスト教関係の月刊雑誌を持って来てくれました。そして表紙を飾っている大写しの美人の写真を見せながら

「これK牧師の娘さんよ。みてごらんなさい。素敵な人ね」

と言うではありませんか。東大を出てこの春NHKに入ったアナウンサーという紹介が裏側に小さく出ておりました。

K牧師にもすっかり御無沙汰しておりましたが娘さんの立派な成長を皆で喜び合ったことでした。

K牧師と彼の奥さんが祈りのうちに育てたのが彼女なのだなとTVでKアナウンサー（旧性もK、結婚してからもKさん）を見る時にはK牧師のことを思い出すのです。

今、その女性アナウンサーの横に坐っているのが誰でもおそらく知っているはずのS・Tという俳優なのです。彼はこんな風に話しておりました。

S.T 滝田栄

「僕の母親は、寝たきりになった僕のおばあさんの介護を長いことやっておりましてその苦労を子供ながらも理解出来ました。それで最近母親がたおれた折には、子供達皆んなで絶対に母は寝たきりにさせないようにしましょうと手を盡くして介護をしました……」

この俳優と私は一面識もないのですが彼の父親のことをよーく覚えているのです。三十数年も昔の或る些細なことがこの俳優の父親を私に印象づけているのです。

T氏の父親は千葉県の田舎（地名は忘れてしまったのですが）に住んでおりました。それで勤務個所である国分寺の職場（当時は鉄道教習所、のち中央鉄道学園となり現在は跡地を公園にするとかいう話）に通うには驚く程の時間をかけていたことを覚えております。往復で五時間位であったかしら、とにかく驚いたことだけ覚えているのです。

或日のことでした。私は未だ四十才になっていなかったかも知れない頃のことです。そのT氏が水を入れたバケツに数匹の大小の生きた鯉を入れて社宅である鉄筋アパート四階の私宅までプレゼントとして持参してくださいました。

「うちの池でとれたのでね」とか言いながら。

眼鏡をかけて幾分あか黒く陽やけしていて背は高くどちらかと言えばやせ型だったようです。色々な人達の顔はだんだん記憶がうすれたようにボヤけていきますのに何故か彼の顔付は今でもはっきりとやきついたように鯉と共に記憶から消えないのです。私は勿論通り一ぺんの「ありがとう」は申しました。でもその「ありがとう」は年を経るにしたがって不十分だったように思えるようになったので余計忘れられない人になっていたのでしょう。

「きょうね、Tさんがこの鯉を持って来て下さったの」と帰宅した主人に言いますと

「ふうん、そうか」と言って一寸だけ鯉を見ていて何も言わなかった主人。

私は鯉の調理に困り近所の魚屋に切って貰いに行ったこと、忙しそうにしていてあまりいゝ顔でない表情で切身にしてくれた魚屋さん。

食事の時主人はこんなことを言いました。

「彼の奥さんね、とても出来た人だということだよ。千葉の田舎で和裁教室を開いて農村の娘さん達に和裁を教えたりしているんだって」

誠実そうな彼の目付など思い浮かべ何んとなく彼の家庭の様子など分かるような気がしました。

「あゝ、そうなの」

と私は口では簡単な答をしました。

当時の食糧事情は今日のようではなく家族五人で週一度来るかつぎ屋の小母さんから一・五キロの卵を買いそれをどうにか七日間持たせるようにしたことをその頃の

時代に結びつけて覚えているのです。蛋白質の食糧は有難いものだったはずです。

私はT氏には以後会っておりません。でも特異なプレゼントのせいか彼のことは忘れないでおりました。或いはプレゼントのうらにこめたやさしい気持ちが彼を私に印象づけたような気もするのです。

あの時以来、随分月日が流れました。老境に入った私達夫婦は或日のことTVで芝居を見ておりました。その時主人が言いました。

「ホラ　見てごらん、今出ているS・Tはね、あの鯉を持って来てくれたTさんの息子なんだってさ」

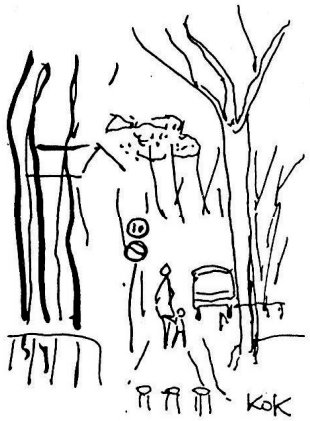
昔の職場関係の集りで仕入れてきたニュースでした。

「へぇー、そおー」と私はびっくりしました。

実直で地味な存在だった父親と華やかな場にいる息子のコントラストに一寸ばかり驚いたのでした。そしてその俳優の顔の中に父親に似た所はないかと探すのでした。

昔、T氏がバケツ入りの鯉を持参下さった頃この俳優はやっと小学校にあがる位の年令だったかも知れません。鯉のいる沼か池の辺りで或いはドロンコになって遊んでいたのかも知れません。そして父親も我が子の立派な俳優の姿など思ってもみなかったと思われます。

Kアナウンサーと T俳優が並んで話しているのを眺めながら昔のことを思い出す私でした。T氏は健在であられるかしら、鯉の御礼ももう一度言いたいようです。又あのK牧師は今どうしていらっしゃるかしら、などと。



蔵のある小さな町の中で

伊澤敏久

白壁のはげ落ちた大小の蔵が、家並の間に何か趣を投げかけている小路を歩いている桃山愛子は、近くの小さな料理屋に住み込む素人芸者で、子供の頃からこの小さな町に住んでいた。

今日も客を送っての帰りである。左脇に袋に包んだ「三味線」をかかえていた。

三十八才の愛子は、小学校の頃から通いなれた道なので足取りも軽く、白壁の蔵が自分のことは何でも知っていて、自分の過去が蔵の中にしまい込まれているような気がした。

中学校の頃は、勉強は出来る方ではなかったが、なぜか男子に好かれるタイプだった。だから学校に行っても男子に相手にされたり、からかわれたりすることが、楽しみであった。そんな持って生まれた天性が、何とか私立の高校を卒業すると、親の反対をおし切って、愛子を芸者にしたのである。

小さな町なので、若者は町を出て行ってしまい、若者を見かけることは殆どなかった。この町にも以前は数軒の料理屋があったが、近年は愛子の居る料理屋のほか、二、三軒に減ってしまった。

男好きのする愛子の店には、何故か客がよく出入りし、地方に働きに出ている同級生も町に帰った時は、愛子の店で酒を飲んでは、話に花を咲かせていた。

愛子の収入は同級生の中では最高であった。

愛子は三味線で毎夜の様に客を相手に歌いまくったので、彼女は町で有名だった。田舎の町では、酒場もないため、床屋、菓子屋、茶店の主人、会社員、あるいは議員までがやってきて、おそくまで大声で歌ったり酒を飲

んでは、町のことなどを論じ合っていた。
数年間で愛子は、三味線一つで、サラリーマンでは想像もつかない様な金を貯えていた。
この町には、江戸時代に質屋が数多くつくられ、全国各地からの旅人が持ち物を質に入れたため、それを入れておく蔵が現在までも残っているのだった。
愛子が住んでいる料理屋の近くにも大きな蔵があったが、蔵の中を見ることはなかった。子供の頃から、古い白壁の蔵を見上げて過ごし、今では酔った客を送ったり、迎えたりして、蔵が年月を重ねるように、愛子も年齢を重ねていった。
彼女は独身を守っていた。その方が気ままで、気がねなく、三味線片手に客を相手に生きていこうと、決めていたからである。
四月は年度変わりで、勤め人等の宴会が続いた。
十九歳をスタートに、今日まで、酒も次第に強くなり、三味線は一段と味が出てきて、客とよくおどったりした。
男の多くは、何とか愛子を口説こうとしたり、あきらめたり、或いは再度出入りしたりする者が多くなった。
愛子が今夜送った客は、高村幹雄と村山真一であった。町には下請け会社があって、会社が終わって帰る途中に愛子の店に寄る者が多く居て、その中の二人であった。
二人は愛子に何とか近づこうとよく店に来た。
「今夜の愛ちゃんは何時になく美しかったな」
幹雄が話しかけると、真一が、
「明日も来ようか」
と愛子の手を握った。彼女は、
「お待ちしていますわね…」
と言いながら握り返した。真一はより強く手をはなさなかった。
十分位歩いた所に電車の駅があり、二人を送って愛子は別れた。愛子が店に帰ったのは十一時であった。
彼女は、会社に勤めるより、芸者で稼いできたことが、自分でもよかったと思っている。親も愛子には、もう何も言えなくなっていた。父親は下請けの小さな会社に働いていたが、愛子の収入にはとても及ばなかった。
愛子は年齢と共に客の扱いが上手になり、愛子が居る為に料理屋が生き残れていることを、主人は知っていた。
だから愛子と客との関係については、一口も文句は言わなかった。
時に慣れた客などが、彼女が一人で居る部屋に入って行くと、どんな客に対しても、
「おそいわね、何をしていたの…、○○さん」
などと、抱きついてきた。
ところが四月半ばの或る夜、思いがけない事件が起きてしまったのである。
馴染客の西山雅夫、山口正和、高谷幸雄が、愛子と四

人で、二階の部屋で飲んでは歌っていた。
愛子の大声が三人の声と相まって、階下の客まで調子を合わせて杯を重ねていた。
高谷幸雄が愛子の三味線に合わせて、踊り出したのである。酒に酔ったほかの二人も、ダンスの様に呼吸を合わせて、歌の声も次第に大きくなり、

霧の晴れたるロンドン町でよ
高く上った鯉のぼりよ、　チョイナチョイナ

春が来たかよ小さな町でよ
愛ちゃんを待ってる蔵の中よ、チョイナチョイナ

万里の長城で小便すればよ、
ゴビの砂漠にニジが立つよ　チョイナチョイナ

山口と西山が裸になり、パンツ一つで、身ぶり手ぶり面白く踊り、彼女を真ん中に輪となって、踊りも一段と力が入っていった。
愛子も三味線を部屋の隅に置いて、着物をぬぎ、下着で土人の様に踊り始めた。
春の夜も次第に更けて行き、四人が手をつないで踊りに興じていたとき、
「ポン」
と大きな音がした。四人は我にかえり、すかさず部屋の隅に目をやった。すると、愛子の大事な三味線の竿が、根本で真二つに折れていた。
愛子は急いで三味線を取り上げたが、もう使用できる状態ではなかった。
四人の顔色は赤味から蒼白に変わった。踊りどころではなくなってしまった。
二階が急に静かになった為か、主人が昇ってきて
「どうしましたか」
と言いながら、座り込んでいる愛子を見た時、愛子が、
「誰かが私の三味線を踏んだのよ、どうしよう、ずっと今まで使っていた三味線なのよ。三味線は私と姉妹の様なものなのよ」
彼女は、頭が混乱していた。二十才過ぎた頃に買った当時としては、最高の物であった。主人は
「困ったことをしてくれましたね」
三人は愛子と主人の傍に来て、平身低頭した。
「誰が踏んだのよ」
愛子から聞いたこともない強い口調が飛び出た。三人とも黙り込んで答えなかった。
「踏んだ人がわかれば、弁償して頂く他にはありませんね。若し御返事がないとすれば警察に知らせることになりますが、宜しいですか」
主人の声も荒々しくなってきた。

三人は頭を垂れ神妙にしていた。
愛子が、
「明日から仕事が出来ないわ。どうしたらよいの」
主人は三人に向かって、
「どうしたらよいか考えてみて解決して下さい」
主人は愛子をうながして下に降りていった。
二階に残った三人は、互いに、
「西山、お前が踏んだんだろう」
「おれではない、山口ではないのか」
「おれも踏んだ記憶が無いんだ」
と足をみながら山口が答えた。暫くして山口が、
「ジャンケンできめたらどうだ」
「踏んでいないのに、負けたら困るな」
西山は逃げ腰になった。西山がすかさず、
「ひょっとすると、愛子が踏んだのかもしれない」
「愛子に聞いても、絶対踏んだということは言わないと思う」
高谷が言った。
「一体、三味線って、どの位するのかなあ」
高谷は値段について聞いてきた。
西山も山口も黙っていた。
「今夜は高いものになってしまったな」
と高谷がつぶやいた。
西山は酒の色はさめて青白くなっていた。

「おれは、今迄、何回も会社の帰りに飲んで帰っているが、女房は何も知らないんだ。残業だと思っている」
「おれは、へそくりで飲んでいる」
と山口が続けた。
「どうしたらよいかなあ」
高谷も顔が青ざめていた。
話をしている間に、時計は午前一時を廻っていた。
そこへ主人と愛子が上ってきて、
「どうですか、誰が弁償することになりましたか」
三人は相変わらずだまっていた。
「今夜はもうおそいので明日返事をして下さい」
と主人が声を大にして言いながら下へ降り様とした時、
高谷が、
「愛ちゃんの三味線はどの位するんですか」
「今持っているのは二十年前に買ったものなので値段は忘れたわ。一度どなたかと、三味線の店に行けばわかるわよ」
「明日行くことにしたらどうですか」
と主人が言った。西山が、
「明日と行っても、会社がありますから……」
愛子は、
「早くしないと私　仕事が出来ないの」
（大変なことになってしまったな）
と三人は思った。高谷が、

「明日の夜、三人できて話をしたら……」
西山と、山口は何も言わなかった。そして店を出た。
見上げた星は美しかった。すると、涙が出てきた。
小さな下請けの会社の勤めでは、三人ですぐ三味線の代金を出すことはできない収入の状態で、女房の顔が浮かんできた。
（他人が聞けば笑い話で終わるだろう）
高谷は思った。
電車には三人が乗っているだけで、春の夜を、西に向かった。
車窓からは桜を見ることは出来なかった。

（未　完）

「まんじ」季刊発行内規

	（発行日）	（原稿締切日）
春季号	二月一日	十二月三十一日
夏季号	五月一日	三月三十一日
秋季号	八月一日	六月　三十日
冬季号	十一月一日	九月　三十日

漢詩

潮哢録（九）

鯨遊海

看會津磐梯山有感　　平成六年五月

遙望孤高雲海間
仰觀風骨紫烟閑
穿天蟠地不微動
莞爾相看吾與山

韻字・間閑山

〈会津磐梯山を看て感有り〉

はるかに望る孤高雲海の間
仰ぎ観る　風骨(1)紫烟(2)閑かなり
天をうがち地にわだかまりて微動せず
莞爾(3)としてあいみるわれと山とは

〔口語訳〕

はるか高く雲海の間から望まれる孤高。
仰ぎみる風骨には紫のもやが閑かに立ち昇る。
天を穿ち地に蟠居して微動だにしない。
にっこり笑って互にみつめ合うのは、私と私の故山である磐梯山。

〔補　足〕

(1)高尚な風格。姿。かたち。
(2)紫のもや。烟＝煙。但し漢語では靄や霞、霧をも云う。李白・望廬山瀑布「日照香爐生紫烟　遙看瀑布挂長川　飛流直下三千尺　疑是銀河落九天」香爐は固有名詞である山の名（香盧山）と香を焚く炉（香炉）の両方にかけた言葉。
(3)にっこり笑う形容。論語・陽貨「夫子莞爾而笑」

☆天穿ち地に蟠まり微動かざる
　磐梯巨峰われにほほえむ

游京都洛北　　平成七年盛夏

古刹生苔松下眠
融和泉石忽千年
夢中蝴蝶別天地
老鯉游來説坐禪

韻字・眠年禪

〈京都洛北に游ぶ〉

古刹苔むして　松下にねむる(1)
泉石に融和してたちまち千年
夢にみる蝴蝶の別天地(2)
老鯉およぎ来たりて座禅を説く

〔口語訳〕

こけむした古寺が松の木の下に眠っている。
山水の泉石に融け込んで何時の間にか千年が過ぎた。
私は蝴蝶となってこの別天地を夢みていると、
年老いた鯉が寄って来てしきりに座禅せよと説く。

〔補　足〕

(1)松は柏と共に隠者や仙人に欠かせない添景。高雅、節操、超然のイメージ。賈島・尋隠者不遇「松下問童子　言師採薬去　只在此山中　雲深不知處」
(2)荘子・斉物論「荘子が夢に蝶となって楽しみ、彼我の別（自分が蝶か人間か）を見失った」故事。

☆蝶と化し古刹に雅たずぬれば
　老鯉寄りきて参禅を説く

歸去來（華年）・芳山人先生作詩漢譯二　　平成七年三月

華年往往索青山
偶見高峰自獨攀
縱極頂邊空漠漠
老來萬物向鄉還

韻字・山攀還

〈帰去来（華年）・芳山人画伯作詩の漢訳二〉

華年(1)おうおう　青山(2)をもとむ
たまたま高峰を見て自ずから独りのぼる
たとい頂辺を極むといえど空は　漠漠(3)
老らい万物郷に向って還る

〔口語訳〕

若者は意気盛んでしばしば青山を求めるものだ。
たまたま高峰を見れば自ずと独りで登ろうとする。
仮に頂上を極めたとしても空は漠漠として空しい。
老いて来ると万物は結局故郷へ還っていくのだ。

〔補　足〕

(1)少年。若者。漢語では日本の語感よりやや年長。

(2)①眼前に連なる青々とした山＝茫漠とした行く手（希望のイメージ）。②墳墓の地。ここでは①。
(3)①広大なさま。②ぼんやりととりとめないさま。

☆芳山人先生の原詩・帰去来（かえりなんいざ）（華年）

力一パイ働いて　峠の道に来て見れば　誰も知らない忍ぶ川　ビルの谷間で黙々と　人知れず咲き実を結ぶ　夢と恋との蜃気楼

夕焼け一パイ背に受けて　下り坂道帰去来の　誰も知らないこの涙　ポッケにつめた想い出を　一つ二つとかみしめる　何故か悲しい里の土

明日（老年）・芳山人先生作詩漢譯三

平成七年三月

問君明日有耶無
沈黙幾瞬雙眼濡
忽起秋風黄葉舞
飛來愛撫我霜鬚

韻字・無濡鬚

〈明日（あした）（老年）・芳山人画伯作詩の漢訳三〉

君に問う明日ありやなしや
沈黙いくしゅんぞ双眼ぬるる
たちまち起こる秋風に黄葉舞いて
飛び来たりて愛撫すわが霜き口髭（くちひげ）を

〔口語訳〕

君に明日と云う日の有無を問いかけたら、君はしばし沈黙して両眼を涙で濡らした。するとたちまち秋風が吹いて黄ばんだ一葉が舞い、飛んで来て私の白くなった口鬚を愛撫してくれた。

〔補　足〕

※君は秋風である。秋風も間もなく老いることを自覚していて老いた私を慰めてくれる。二人にはもう明日はなく唯空しい。それ故に限りなく優しい。

☆芳山人先生の原詩・明日（あした）（老年）

あしたがあるかとたずねたら　あしたは無いと秋風が　寂しい音をたててていた　はなればなれに散って行く　落葉かぞえて何としょ　あしたはあした人の道

あしたがあるかと聞く人は　遠い昔の想い出もねむれぬ夜のサザナミか　あれもこれもが消えて行く　影をかぞえて何としょ　あしたはあしたの風が吹く

新宿摩天樓偶感・東京百景十二

平成七年二月

西望靈峰東太洋
通天雲閣競姈廂
月驚日憶長安塔
此國文明脅大唐

韻字・洋廂塔

〈新宿摩天樓偶感・東京百景十二〉

西のかた霊峰を望み東に太洋
通天(1)の　雲閣(2)けんを競うひさし
月は驚ろき日は憶う　長安の塔(3)
この国の文明大唐をおびやかすと

〔口語訳〕

西方に霊峰富士を東方に太平洋の海原を望みつつ、天に通じる楼閣群が美を競い廂（ひさし）を接して聳えている。月は驚き太陽は憶う長安の慈恩寺の大雁塔を。更に、この国の文明が偉大な盛唐のそれに迫りつつあると。

〔補　足〕

(1)漢の武帝が築いた天に通じる高楼「通天臺（閣）」
(2)秦の二世皇帝と後漢の明帝が築いた雲を凌ぐ高楼。
(3)唐の太宗が長安の慈恩寺に築いた塔「大雁塔（だいがんとう）」

☆太陽（ひ）は憶う雲居に競う玉楼に
　この文明の唐に迫るを

題東京國立博物館・東京百景十三

平成七年三月

銅鏡玉壺神氣浮
雲烟書畫祖靈留
訴何甲骨繪文字
肅肅窮兮涕泗流

韻字・浮留流

〈東京国立博物館に題す・東京百景十三〉

銅鏡玉壺　神気(1)浮かび
雲煙の書画　祖霊(2)留む
訴えしは何ぞ甲骨の絵文字
しゅくしゅく(3)窮（きわ）まりて涕泗流る

〔口語訳〕

古墳時代の銅鏡や縄文時代の壺には自ずから万物を生み出す不思議な力が浮かんでいる。
雲か烟（かすみ）か神技の書画には先人の霊魂が留（とど）まっている。何を訴えているのか、この甲骨に刻まれた絵文字は。厳粛な感動に圧倒されて私は何時か涙を流していた。

〔補　足〕

(1)①空中に雲のようになびく不思議な氣。②心、精神。③万物を生み出す不思議な力。ここでは③。

(2)祖先の霊魂。みたま。ここでは先人の芸術的な魂。
(3)①おごそかなさま。②つつしむさま。ここでは①。
※結句の兮は音調を整え語勢を強める音読しない字。

漢武帝・秋風辭「秋風起兮白雲飛　草木黄落兮
雁南歸　蘭有秀兮菊有芳　懐佳人兮不能忘　汎楼
船兮濟汾河　横中流兮揚素波　簫鼓鳴兮發棹歌
歡樂極兮哀情多　少壮幾時兮奈老何」

☆この感情刻み伝えん甲骨に
　太古の叫びまぼろしに聴く

北之丸御苑觀吉田茂翁像・東京百景十四
平成七年四月

北丸御苑花吹雪
緑樹鬱蒼幽徑横
中興神州宰相像
春風不忘此翁名

韻字・横　名

〈皇居北の丸御苑にて吉田茂翁の銅像を観る・東京百景十四〉

北の丸御苑花ふぶき
緑樹うっそうたる幽径の横
神州を中興せし宰相の像
春風忘れずこの翁の名を

〔口語訳〕
皇居北の丸公園に桜花が吹雪のように散りしだく。
緑の樹木がうっそうと茂る林間の人氣の無い小径。
そこに、戦後日本の中興の祖吉田茂翁の像があった。
春風は翁の名を忘れはしない（人間共は忘れるが）。

☆北の丸みどりあざむく花吹雪
　国をにないし汝が肩に降る

上野有情・東京百景十五
平成七年盛春

紛紛飛去蝶
片片舞來櫻
露店溢風趣
酒壚充笑聲
垂涎參鮑翅
呑唾蛤蜊羹
上野有安息
下街無薄情

韻字・櫻聲羹情

〈上野有情・東京百景十五〉

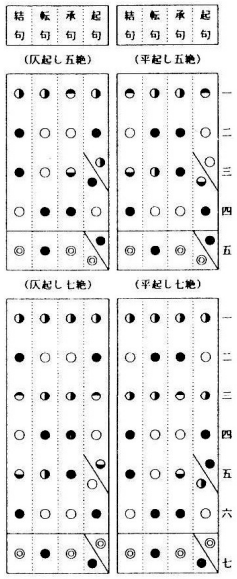
ふんぷんと飛び去る蝶
へんぺんと舞い来たる桜
露店には風趣あふれ
酒壚には笑声みつ
涎を垂るる参鮑翅
唾を呑む蛤蜊のあつもの
上野に安息あり
下街に薄情なし

〔口語訳〕
無数に入り乱れて飛び去っていく蝶々の群、
ひらひらと舞って来る桜の花びら。
露店に風趣が溢れ、
居酒屋には賑やかな笑声がみちている。
参や鮑や翅のとび切りのご馳走にみとれて涎を流し、
蛤や蜊の匂いに思わず唾を呑む。
上野の界隈には安息がある。
下街には薄い情はない。

☆発つ友と蛤蜊の匂う横ちょうに
　落花あびつつ酒壚決めかねつ

《漢詩の常識7》平仄について㈡

平仄についてその他の留意事項、特例事項等を述べる。
①転句の五言と六言に限って平仄の転倒が許される特例がある。二六対ではなくなるが可。この結果四孤平となってもよい。李白・越中覽古の転句「宮女如花滿春殿」満春は本来なら平仄とすべき所が仄平となっている。
②押韻した韻字と響きが類似している韻の字同志を共通して一句に使うことが特例で認められる。通韻と云う。
③贈られた詩の韻字をそのまま（又は同一韻の字を）使って返詩を作る慣わしがある。次韻（又は和韻）と云う。
④押韻を仄聲で作る詩もある。七十六韻に分類される。
⑤平仄両用の字がある。看且望忘聴聞潛唯譽漕患知和漂…。又意味によって平或は仄になる字がある。重長強先相當盛過應調不勝分令占正行衣更治信要將教荷鮮振興…。
※最後に近体詩の平仄式と云う。平仄式と云う。



近体詩の平仄ルール
1. 二四不同、二六対。一三五不論（七言）
　二四不同、二九対。一三不論（五言）
2. 下三連同韻禁。（七言、五言共通）
3. 四孤平禁（七言）。二孤平禁（五言）
4. 冒韻禁。起句冒韻厳禁。
○平字、●仄字、◎平韻字、◑平仄不論。
◓◒平仄不論だが相互の関係で決まる。

唐人館同窓譚（五）

鈴木昭三

滝川先生は入院しました。村の診療所で医師から検査入院をすすめられると、ひとり暮しの気軽さから、診療をおえて町へ帰る病院の車に便乗し、そのまま入院してしまいました。

二、三日して山ノ下が、入院中の知人の見舞いをかねて、滝川先生の所にも顔をだすからと誘いにきてくれました。

滝川先生は六人部屋のいちばん奥で、窓際のベッドの頭上から黄色い点滴のビニール袋がぶらさがっていました。

「笑わせるじゃんか。このおれは、昔なつかしい栄養失調だとよ、終戦直後ならいざ知らず」

苦笑しながら、前立腺の病気のうたがいがあるのだが、体が衰弱しているので、今はもっぱら栄養をつけるのが先決で、検査も体力がついてからの先の話だといいました。

点滴の透明な管でマリオネットのようにつながれた、自由のきかない左手首を、かけ布団の上におくと、伸ばした右手でベッドの中程の手すりをつかみました。

「どっこいしょ」

声をかけると、丸くかがめた上半身を一気に起しました。

「お元気じゃぁありませんか」

「あたりまえだよ。家にいるときとちがってさ、栄養士の考えたおかずつきの三食で、おまけにこのじゃまっけな点滴まであるだで。欲をいやあ、これがあればもっと元気さ」

滝川先生は右手の三本ゆびを丸めると、口にもっていきました。山ノ下がさがしてくれた二つの丸椅子をならべました。

「おまいさん、この頃唐人館のソノ女に興味があるそうだな」

「はい、悌三のことから」

先月の滝川先生をかこんでの同級会で、一同還暦は越したが、余命はいくばくもないし、ぼけない中に生きたあかしを残すために文集をつくろうと意見がまとまりました。

私は何を書こうかと考えてみました。同級生の男も女もみな一様に、戦争中のかけがえのない体験を綴るといいました。私も過去をふりかえりました。子供の頃の記憶は意外とはっきりしていて懐しいことがよみがえります。

家の中、山の中、或いは隣町でも、その時どきの情景の中にいろんな顔がうかぶのですが、悌三だけはどの場面にもいるのです。悌三のことを書いてみようと私はきめました。悌三のことをもっとくわしく知るには必然的に唐人館のこと、それからソノ女のことにつながってしまうのです。

悌三とソノ女の二人にまつわる思い出が、私の記憶の源流だと位置づけられる一つのシーンがあります。

ランニングとパンツの私は唐人館のはなれで畳の上にころがっていました。私のよこには悌三が眠っていました。ときおり、ぶうんと蚊の羽音がして、時計の振り子のように規則的に、やわらかなうちわの風が私の体にそよぎました。ゆび先が触れている誰かの膚からたえず私に心地よい安心感がつたわっていました。きづなつまり生綱（きづな）、そんなゆたかな情感でむすばれているようでした。私はしらず、しらずにその膚に顔を寄せていったようです。近よっているのは乳房だとわかり、そのにおいが母のではないと感じ、あわてて目をあけました。汗ばんだ私の首すじに掌をおいたソノ女のその顔が、視野いっぱいにひろがりました。幼な心に、はずかしくなって又、目をとじましたが、ソノ女ならあまえられると思いこんで又、ねむってしまいました。

同級会から暫くして、私は鳥居下のデパートにいきました。デパートのおかみさんは常づね唐人館をよく思っていないことを、私は承知していましたが、ソノ女の九十余年の気の遠くなるような人生の、全部はとうてい不可能としても、ある部分を側面から実地に眺めることができたのは、ソノ女にひってきするような長命の人に限られるわけです。小田郷村で私のみる限りでは、デパートのおかみさんしか見当らないわけです。

二、三日前、デパートの店さきで、ソノ女のゲートボールに関しての、老人会での不評を語った時のおかみさんとは違って、あの時はライバルに対するような片意地はったような所もなくて、意外に淡たんと話してくれました。

「わし流のおソノちゃだで、ふんとおのおソノちゃの姿ではない点もあるづらと思うよ。村のおんな衆の中でのおソノちゃは、きよほうへん相半ばする人物だったわけだで。そこん所をあんたは公平に考えておくれね」

このような前おきをして彼女は語りはじめました。

奥山ソノは大正末期、隣町の県立女学校の音楽と体育の教員となり、同じ町にある小田郷会館に寄宿しました。

この小田郷会館には他にも村出身の教員や郡役所の職員や、中学校に通学する生徒等十人前後がいつもいました。農学校を卒業してこの町の小学校の代用教員になった滝川龍之進がここに入りました。ソノは龍之進と恋仲になり、身ごもると、龍之進の父、小田郷村の村長虎之介のはからいで、東京の親戚で男児を出産しました。虎之介と親しかった花廼家の養子になった滝川太郎です。ソノはそのまま東京で教員をしました。龍之進は徴兵で静岡連隊に入ったのですが、外出日には東京からソノがかけつけてこっそりあっていたそうです。その後唐人館では、生来病弱だった後とりの兄が亡くなり、父の乙松が、不行跡のソノを呼び戻すと、子飼いの板前兼吉と強引に夫婦にさせました。トウジンカンハ、ハイビョウカンの陰口どおりにソノが肋膜炎にかかり、その最中に、難産で双子を産んだのです。母子共に心配な状態でしたから、皆で相談の結果、双子は里子に出すことに決まったのですが、ソノのたっての望みで、一人だけ手もとに残しました。それが悌三です。もう一人の子は、死産で乳のはって困っていた隣町の郵便局の電信技士だった若夫婦にひきとられました。この夫婦はじきに郵便局をやめて、満鉄に移りました。ところが満州の風土にあわなかったのか、旦那さんがなくなり、奥さんも間もなく子供をつれて隣町へ帰ったという噂です。くわしい事はわからず、育てた子も二卵性だった筈だから悌三とは似ていないかも知れないそうです。

悌三が五歳の時、父親の兼吉は結核で亡くなりました。この兼吉はある時悌三達双子は、おれの子じゃぁないと、デパートでしゃべったそうです。つまり龍之進の種だったわけです。この龍之進は軍隊から戻ると、再び教員として、郡下の小学校を勤めつづけました。ソノのことが忘れられないからか今もって独身です。

ソノは後家をはって唐人館のおかみさんとしてよく働きました。村の婦人会にも積極的で、戦時中は村の青年学校で、なぎなたや竹やりの教員をして、そのわざのさえを郡下にとどろかせたものです。龍之進が、口ぐせで、ソノを顕彰したいといいだすのは、この頃のソノの姿が

今だに頭にこびりついているからだそうです。

以上がデパートのおかみさんの話の大略です。悌三が双子でその片われがいたということと、滝川先生の子だったと知りおどろきました。

同級会の文集にごく気軽に悌三のことを書こうとしていたのに、デパートの話で、今は筆が重くなっているのです。

「先月の先生との同級会で、文集を出すことになって、悌三のことを書こうと思いまして」

「そうだってな。この間、デパートのばあさんが来て、いってたぞ。お前さんはなあんにも知りやせんって、ちょっと不思議だな、いや不自然だな」

「不自然、ですか」

私はこの言葉の意味をはかりかねました。唐人館や滝川先生のことをくわしく知らなかったことが何故不思議で不自然だというのでしょうか。

「いや、それはそれでええ。お前さんのご両親が、何もいわなんだだけだからね。もう、みんな昔のことだ」

滝川先生はその昔を思い出しているのか、笑いを浮かべたまま両眼をとじました。私は不思議、不自然にこだわっていました。

「昔」

滝川先生は目をとじたままいいました。

「昔、唐人館のはなれで悌三の予科連の話でさ、集まった連中のこと、覚えているかや」

私はあの夜の、滝川先生が悌三をなぐった驚きと、生れてはじめてのどぶろくの酔いの苦しさが蘇りました。

「あのメンバーのこと、考へたことがあるかや」

「はい、あの時なんとなく気がつきました。私をのぞいて、みんな親戚だったんじゃないですか」

「えっ、お前さんをのぞいてかい。そうかなあ、ふんとうに、そう思ったのかい、あの時」

滝川先生はくぼんで小じわのよった眼窩を見ひらきました。ちょっと驚いた表情です。私は、しし鍋のまわりの人達を思いうかべてたしかめてみました。

「先生とおかあさん」

「うう」

「乙松爺さんとソノ女と悌三と妹さん」

「うう、それから」

「それから、花廼家」

「そのとおりだ。デパートがお前さんに、そのへんのこと、何かいってやしないかな」

私は即座にいいえと答えながら、もし私がこの七人の仲間とすれば一体誰とくっつくのだろうかと想像してみましたが、誰とも結びつかないのです。

滝川先生は又目をとじてだまってしまいましたが、次の言葉を考えている風で、右手の指を折ってみたり、人さし指で空になにかえがいたりしていました。

山ノ下が友人を見舞うからと室を出ました。滝川先生は山ノ下の背に目をやりながら、
「乙松爺さんがあの山ノ下の婆さんに惚れやがって、村の在郷軍人の会長とはり合って話題になったもんさ。そんなとるに足らない村の出来ごとで面白くもない話、それからおれの、学校での務めのこと、戦地での感懐、そんなものを思いつくままに当用日記帳に何冊かに記してあるんだがね、読み返してみると、總じて唐人館に関することが多いのにびっくりしてしまったよ」
「先生の恋人だもん」
「今、南北堂に頼んで、抜き書きを清書して貰っているんだよ」
南北堂というのはこの町の薬局のおかみさんで滝川先生の妹の娘さんです。入院してから毎日、身のまわりの世話にやって来ているそうです。
「小田郷村で育ったお前さんも、山ノ下も、このおれも、村民の大多数は唐人館のやっかいになっているんだ。やまんわらべ達にとっては、唐人館の存在は一家の生活がかかっていたといえるんじゃないかな」
「なんでも買ってくれましたからね、乙松爺さんは」
「村の人達は、小学校入学と同時に唐人館にも通い、卒業と共に唐人館から去っていったのだよ。いいかえれば、唐人館の卒業生みたいなもんさ。そこでおれは日記の抄本に命名したのさ、唐人館同窓譚とな」
「ほう、唐人館の同窓生のおはなしということ」
「お前さんが悌三のことを書きたがっていると聞いて、この唐人館同窓譚をお前さんにおくりたいのだよ」
「ぜひ、おねがいします」
「村のこと、唐人館のこと、おれのこと、それに、お前さんのことも全部わかるんだよ、覚悟していろよ」
「はい」
その時、南北堂の姪ごさんが風呂敷包みをかかえて室にやってきました。三時の検温だから、下着を着替えるというので、私は室を出ました。
滝川先生の体調がよくなり、検査もおえて、手術が一週間後に決まった頃に、山ノ下から電話を貰いました。
南北堂に薬を買いに寄った山ノ下におかみさんは、唐人館のソノ女が病院に滝川先生を見舞ったと告げました。ソノ女と滝川先生が唐人館同窓譚という書きもののことでいい争いになったというのです
「唐人館同窓譚がソノ女になにかまずいことでも書いてあるのかな」
「そう、それがお前のことだそうだぜ。ソノ女が先生に今頃になって、人の心を騒がせることはやめてと力んで、しまいにはそんな書きものは燃してしまえといったそうだよ」
「まるで焚書じゃないか」
「南北堂もそういってたよ。知られたくないことでもあ

ったんだろうな。でもお前のことなんだよ、わかるか」
山ノ下にわかるかと問われても、私はわかりません。とも角、滝川先生の唐人館同窓譚を早くみたいと思うばかりでした。
その後私は滝川先生を数回見舞ったのですが、ゆっくり話をする機会もなく、唐人館同窓譚の進渉状況も全くわかりませんでした。
手術後の経過もよいと聞いていましたので、滝川先生の退院を楽しみにしていた矢さきに突然肺炎で亡くなってしまいました。
私は入院中の滝川先生から謎をかけられたようで、釈然としなくて、なんとなく憂うつな毎日でした。五十年も昔に、唐人館のはなれで、しし鍋をかこんだ人達と、私を結びつける糸が見えないし、又、今更そんなことを思うのです。せまい村の中で、あいつとおれは身内だなんていわれても、一瞬は驚きこそすれ、六十余年の私の人生はすでにゴールが見えていますから、この先影響はないとわりきったつもりが、おかしなもので、ふらふらっと、唐人館にソノ女をたずねてしまったのです。ソノ女は床にふせっていました。
「今日は寝たままだよ」
ソノ女は、二、三日前、トイレの前でころんでしまい、足腰が痛いと、掛布團をはねのけて、腰のあたりをさすってみせました。包帯もギブスもしてないようでした。
「医者にみてもらっただかね」
「指圧の先生にみてもらったよ。あんた、今日はわしの見舞いかね、それとも何か用事かね」
ソノ女の表情がいつもと違って、構えているような感じでした。私は單刀直入にたづねました。
「滝川先生の唐人館同窓譚を知っているかね、読んでみたいだけどなあ」
ソノ女は一瞬私に笑顔を見せると目をとじました。
「ぼくが読んだじゃあ、まずいかね」
ソノ女は私が何をいっても、目をつむったままで、口をきいてくれませんでした。
その足で私は隣町の南北堂にいきました。店番の息子と入り違いに奥からでてきたおかみさんは、くどくどと、滝川先生の入院中の見舞いや会葬のお礼をいいました。私はもしよかったら、唐人館同窓譚をみせてもらいたいのだがと頼んでみました。彼女はさも困ったように、ワンピースの上のエプロンの端を握りながらこういいました。
「メモをわたされて突然清書しろっていわれましても、用事のある身ですからすぐには書けません。それに伯父のあのくせ字は、わたしにはよく読めなかったのです。ですから清書は一頁もしていません。それでよかったのです。だって、そのメモも、何冊かの当用日記も全部燃せってどなられて、そのとおりにしてしまい

現代語も併記する

ました。唐人館同窓譚だなんて、名前は立派でしたが、わたしは全く見てないんですの」

南北堂のおかみさんが、メモも日記も全部燃してしまったという話で、私は内心ほっとしました。

最近になって、悌三の双子の片われは、私かも知れないと漠然と考えることがあります。唐人館のはなれでし鍋をかこんで、私のすわった位置からも、なんとなく納得のできることです。

ところがある夜、私は両親の筋から唐人館を詮索したことが一度もないことに気づいたのです。両親の出自といえば、母は隣町の米屋の娘で、父は店の住込の店員でした。これではあの七人の身内に結びつくものは見当りません。私は横になってテレビをつけました。画面は歴史もので満州事変から始まって満州国の誕生になりました。軍人姿のめがねをかけた皇帝が大写しに出ると満州国の国歌の斉唱が始まりました。私はごく自然にその歌声に和していたのです。

てんていね　ゆりょしまちよ　しまちよ
びししんてんてい　てんていりってい
うくゆうは　ちゃんてい　わこおちや
こいち　ちゅわいほちゅ

はてな、これは聞いたことがあるぞと、自分の口からついて出た言葉にびっくりしてしまったのです。このおかしな歌詞、でたらめに覚えているのかも知れないこれは、一体いつ覚えたのだろうかと、急に気になりだしたのです。

暫くしてやっと思いだしました。唐人館のはなれで、ソノ女の顔が大写しにあらわれたのが記憶の源流ならばこれも又、源流といえるものでした。母は私が寝入るまで、唱歌をうたってくれました。「てんていね」で始まるこの歌詞はまぎれもなく母の歌ってくれたものです。四、五歳の私が耳づてに覚えこんだ歌詞でした。

国歌、満州国、満鉄、隣町、郵便局、電信技師、母、双子、悌三、ソノ女、滝川先生。

私の連想ゲームは、全身をかけ巡る血流の高鳴りと共に、記憶の源流のその又向うの、模糊とした霧の中をさまよいはじめました。

私は熱にうかされたようで重心を失い、気持が不安になりました。どこかで読経が聞こえます。いや、満州の国歌でしょうか。それも違うようです。

闇夜の　お手込め
にげいくさの　ててなし子
せめいくさの　ごらくいん
はて　さて
ゆんべの　とん様
どっちやら

滝川先生が歌っています。「おまいのうただ、うたえ」といっています。

（終）

マンション管理人（三）

太田和貞

その日は朝からポリグラフのことが気になって仕方がなかった。

（私は潔白だから反応が出るはずはない）

と思ってみても、午後から受けるポリグラフのことが頭から離れなかった。

係長の失言で、私は三十万円が盗まれたことも知っていたし、その上、布団が二つ敷かれてあるのを見たのは私だけの秘密だった。

佐伯京子は最初の事情聴取のとき、男のことを隠していたに違いなかった。

「部屋には盗られるような物はなんにもありません」

と京子がいったという私の証言と三十万円もの大金の所在の矛盾をつかれて、初めて男のことを話し始めたのかも知れない。

秘めて置きたい男と女の関係を言わざるを得ない羽目になって、盗難届を出したことを後悔したのだろう。

マンションの掃除をしていても、管理人室の椅子に座っていても、そんなことがいろいろと頭に浮かんできた。

午後二時四十五分、私はいつでも出掛けられるように帰り支度をして椅子に座っていた。

ちょうど、三時に係長がマンションの前に姿を見せた。

私は立ち上がり、管理人室から出た。

「お疲れのところを申し訳ありません」

という係長と一緒に、通りを歩いた。

反対側の舗道寄りに停っていた自動車のドアを係長は開けてくれた。
助手席に座わった係長が、ハンドルを握っている刑事を「重田刑事です」と紹介してくれた。
先日、私が怒鳴りつけた刑事ではなかった。
「検査に約二時間は掛かると思います」
助手席の係長は体をよじって、私に話し掛けてきた。
（えっ、二時間）
二時間という時間の長さに、私は一瞬、ひるんだ。
その不安が引き金となって、私は管理人室の鍵を掛けてきたか、どうかが気になり始めた。いつもなら、管理人室を出て、受付の窓ガラスから中を覗き、蛍光灯が消えているのを見てから、ドアの鍵を掛け、把手を回して鍵が掛かっているのを確認していた。
それを、係長の姿を見て、すぐ管理人室を出たため、私には蛍光灯とドアの鍵を確認したか、どうかの記憶が残っていなかった。
迷い出すと、ますます不安になった。しかし、係長に、
「鍵を掛け忘れたかも知れないので、戻って欲しい」
とは、言い出せなかった。
自動車は皇居のお濠沿いに走っていた。これも私の予想とは違っていた。
（こうなりゃ、どうともしてくれ）
そんな気持ちで、私は足を広げて後部座席でふんぞり返った。
自動車は警視庁の高層ビルの地下駐車場に入った。
係長に案内されて、私は中庭を歩いた。
二つの高層ビルに遮えぎられて、空が狭く感じられた。
（さすが、警視庁だ）
私は感心した。建物も広々として立派だったし、そこを歩いている人たちの態度もキビキビしていた。
エレベーターに乗った。うちのマンションのエレベーターの三倍の広さはあった。
小部屋に案内され、私は椅子に座わった。重田刑事が私の横に座わった。
「連絡してきます」と一礼して、係長は次の部屋に入っていった。
私は口の中が乾いた。隣りに座わっている重田刑事に何か話し掛けようとしたが、話題が浮かんでこなかった。
「随分、立派な建物ですねえ」
私は刑事の顔を見て言った。
「ええ」と刑事はうなずくだけだった。
「私は初めて、この建物に入りました」
と言ったが、そのあとが続かなかった。
係長が、白衣を着た男を連れて小部屋に戻ってきた。
「こちらは科学警察の研究所の方です」
と紹介したあと、「検査には重田を立ち合わせます」
と言った。

次の部屋に案内された。部屋は薄暗かった。
「どうぞ、こちらへ」
白衣の男に手をとられて、床より一段高くなっている場所の椅子に私は座わらせられた。
壇に上がるとき、そこがゴムマットで絶縁されているのに気付いた。
（まるで、電気椅子だ）
私は、なんとなく、そう思った。
「装置をつけます」
白衣の男は、私の右腕の上腕部に血圧帯を巻き、腹部にゴム製の蛇管を巻き付けた。さらに、左手の人差し指と薬指に指サックをはめた。
私の体に巻き付いているコードを白衣の男は、うまく床に整理した。
「それでは、これから検査を始めますが、私が質問したことに、『いいえ』と答えてください」
白衣の男のことばに、私は黙ってうなずいた。
私の右手の機械の後ろに白衣の男が座わり、その奥の隅に重田が座わって私を見ていた。
私は左手の指先にはめられた指サックを見詰めていた。
ポリグラフは嘘をついたときの発汗の相違で、嘘を見破るのだとは知っていたが、まさか私が検査されようとは思ってもみなかった。
名前、年齢、職業、出生地などが質問されて、私はすべて「いいえ」と答えた。
質問の途中で、
「こちらを見ないようにしてください」
と注意された。私が「いいえ」と答える度に、白衣の男が記録装置用紙に鉛筆で、しるしを付けていたのを見ていたからだった。
このときだけ、私は「はい」と答えた。
「こちらを見てください。ここに1から5までの数字を書いたカードがあります。この数字のうち、一つだけ選んで覚えてください」
白衣の男は、ゆっくり番号札を私に見せた。
私は3を選んだ。
白衣の男はカードを切ってから、「これですか」と番号札を見せて聞いた。
「いいえ」と私は答えた。
3の数字を見せられたときも、同じように「いいえ」と答えた。
私が答える度に、白衣の男は記録用紙に鉛筆で、しるしを付けていた。五枚のカードが終った。
「3ですね」と白衣の男が言った。
私は、うなずいた。3の番号札を見せられたときも、私はほかの番号札と同じように平静だったと自分では思っていた。
しかし、私の心の動揺は、はっきりと記録用紙にあら

われて、3と当てられてしまった。
「それでは、もう一度、検査をします」
白衣の男は、先程と同じように私の名前などを聞き始めた。同じ質問だったので、私は油断していた。
「マンションで盗まれた物がありますが、知っていますか」
と、急に質問が変わった。
「いいえ」と私は答えた。
「それは、本ですか」
「いいえ」
「それは、お金ですか」
「いいえ」
「そのお金は、どこにあったか知っていますか」
「いいえ」
「お金は、テーブルの上にありましたか」
「いいえ」
「お金は布団の下にありましたか」
と、聞かれたとき、私は二つの布団をチラッと思い出したが、「いいえ」と答えた。
「お金は、銀行通帳の間に挟まっていましたか」
「いいえ」と答えて、質問は終った。
検査が終り、白衣の男が私の指や体から取り付けていた器具をはずす度に、私は呼吸が楽になる思いだった。
隣の小部屋で、係長が待っていた。
「どうも、お疲れさまでした」
私はねぎらってくれた係長が白衣の男と一緒に奥の部屋に入っていった。
（すぐ戻ってくる）と思っていた係長が、なかなか出てこなかった。待たされる時間が長くなるにつれて、私も不安になってきた。
「お金は布団の下にありましたか」
と、聞かれたとき、私の心臓が急に早く鼓動し始めたのを私自身も気が付いていた。
盗まれた三十万円の札束が布団の下には無かったことを私は祈るしかなかった。
盗まれたのが三十万円という金額だったこと、布団が二つ敷かれていたことを知っていることが、私にとっては不幸だった。
それにしても、1から5までの数字を見せて、一つだけ選ばせた数字を言い当ててから再質問していく中で、警察がいちばん知りたい事実をポンと質問してきた巧みな方法に、私は感心させられた。
「三人のうちの一人に反応が出た」
という係長のことばを私は実感した。
やっと、係長が戻ってきた。
「ポリグラフで先生が白だということが実証されました。盗まれたのが三十万円ということを知っていらっしゃるので、ポリグラフに乱れがありましたが、先生は白

です。長時間、本当にご苦労さまでした」
白衣の男と係長は私に頭を下げてくれた。
「あっ、いいえ。私もポリグラフという貴重な体験をさせていただいたので、ありがたいと思っています」
「そう言っていただくと、私も助かります」
と係長は頭を掻いた。
外は、もう夜になっていた。
「有楽町駅までお送りします」
係長のことばに甘えて、私は自動車に乗った。
「先生が白とはっきり分かりましたので、これまで以上に、きびしく追求していくつもりです。ポリグラフという情況証拠だけですが、最近では検事さんもポリグラフを証拠と認めてくれるようになりましたから」
係長は自動車の中で、雄弁だった。
駅の近くで降りるとき、係長は私に菓子折を手渡してくれた。遠慮する私に、「ほんの気持ちですから」と係長は頭を下げた。
菓子折は堅焼煎餅だった。生まれて初めて警察から貰った堅焼煎餅を家内と食べながら私は三十万円の札束を置き忘れたのは、京子の男だと思った。
京子が男に給湯器のガス工事があることを言わなかったために、工事をした三人のうちの誰かを犯人にし、私と家内が警察から貰った堅焼煎餅を食べる結果になったのだと思った。
翌朝、私がアコーディオンカーテンを開けて台所に上がりかけたとき、受付の窓ガラスを誰かが叩いた。
後ろを振り返ると、管理人室を覗き込んでいたのは天菊の下働きだった。
「鍵を忘れた。天菊の鍵を貸して」
と男は言った。私には、その意味が分からなかった。
「えっ。なんですか」
「鍵を忘れてきたので店の裏口のドアが開かない。前の管理人さんのときに、店の鍵を預かって貰っていたので、その鍵があるはずだから貸して欲しい」
と言われて、私にも男の言っている意味が呑み込めた。
「鍵はありませんよ」
私は無愛想に言った。
佐伯京子の件で、「鍵は一切、預からないように」と会社から指導された。そのため、前任者の矢島が預かった鍵を私は持ち主に返した。
「前の管理人さんのときには、よくって、今度の管理人さんは、なぜ預かってくれないのか」
嫌味を言われたが、「会社の規則ですから」と私は押し通した。
キィボックスを調べたとき、天菊とメモされた鍵は無かったので、男から「キィボックスを調べて」と言われても、

「前の管理人さんが預かっていた鍵は先日、全部お返ししました」
と、言い張ってキィボックスも見せなかった。
キィボックスを見せることにためらいがあったし、先日の朝、私の挨拶を無視した男に対する反感もあった。
「ほれ。このように鍵を返したときの受取のサインも貰ってあります。前の管理人さんが鍵を預かったことがあったかも知れませんが、現在は預かっておりません」
日誌に書いて貰った鍵の受取のサインを男に見せた。
「キィボックスに、うちの鍵があるはずなのに」
と、男はなおも、言い続けた。
「お店の方に聞いてみてください。私と交替したとき、矢島さんは預かっていた鍵をお返ししていると思います。返し切れなかった鍵は、先日、私が返したばかりですから」
私も私の考えを押し通した。男はブツブツ言いながら帰っていった。
（きょうは縁起が悪い）
私は作業服に着替えながら、そう思った。会社が禁止していた「鍵を預かること」を矢島が実行し、引き継ぎのときに私に連絡してくれていたら、京子の件も起こらなかったし、きょうの天菊のことも無かったはずだった。
キィボックスを最初に調べたとき、入居者の名前が書いてある荷札が付いている鍵をみつけて、私自身も鍵を預かることを安易に考えてしまったのが、いけなかった。
「管理人さん、大変だよ。エレベーターの中が臭くて、臭くて堪らないよ」
水産会社の兄弟が管理人室のドアを開けて、和室にいる私に怒鳴った。その声に、私は靴下のまま管理人室を飛び出した。
エレベーターの中が、げろで汚れていた。すえた匂いが鼻についた。
「臭い」と、私は鼻の前を手で煽いだ。
「教えてくれてありがとう。すぐ掃除して置きます」
私は兄弟に礼を言って管理人室に戻り、すぐゴム長を履いた。
昨夜、泥酔して帰ってきた入居者がエレベーターの壁に両手をついて、ド、ドーッと一気に吐いてマットを汚したのだろう。
（もしかしたら、橋口柳子の旦那かな）
と私は思った。
柳子が私に、ひょうたん型のとっくりを見せてくれたとき、
「うちの主人はお酒が好き」
と言ったのを思い出していた。
（部屋に入ってから吐いてくれたら良かったのに）
恨んでみても、げろの跡始末は私がするしかなかった。
私はマットを両手で引きずり出して、天菊の店の角の

排水口まで持っていった。
未消化のラーメンや赤いニンジンが青いマットにへばりついていた。水を勢よく噴射して、マットのげろに当てても、げろは流れ落ちなかった。
私は自転車置き場の道具入れからデッキブラシを探し出した。汚れたマットをデッキブラシでこすった。マットから離れたげろが白いふわふわとなって水と一緒に流れ落ちた。
洗い終ったマットをガードレールに掛けた。先程までマットから漂っていたすえた匂いが、やっと消えていた。
玄関に戻り、エレベーターの掃除を始めた。濡れたモップでエレベーターの床を拭き、乾いたモップで床の水分を綺麗に拭きとった。
私は鼻を鳴らして、エレベーターの匂いをかいだ。
（まだ、すこし匂いが残っているような気もするが、何も知らない人は気付かないだろう）
と思って、私は満足した。マットの仕末に時間をとられたので、マンションの廊下の掃除は簡単にすますことにした。
五〇一号室の谷口三男のドアに鍵束が差し込まれたままになっていた。
私は、しばらくその鍵束を眺めていた。
先日、六階の斉藤虎造の部屋のドアの鍵穴にも矢張り鍵束がぶらさがっていた。
私はドアをノックした。すぐ斉藤が出てきた。
「鍵が盗まれるといけませんから」
と言った私のことばに、
「今、出るところだったんだ」
と、斉藤は不機嫌な顔をした。
あのときの斉藤の顔の表情を思い浮かべながら私は五〇一号室のドアの前に立って迷っていた。
私はドアをノックした。応答が無かった。チャイムの押しボタンを押し続けた。
（鍵束を鍵穴に差したまま、寝込んでしまったのだ）
と私は思った。
ようやく、部屋の中で人の気配がした。ドアが開けられた。まだ酒の気が抜けていない谷口が片目をしかめながら顔を出した。
「ドアに鍵束が差し込まれたままになっていました。盗まれたら大変ですから、お知らせしました」
私は谷口の顔の前に鍵束をぶらさげて見せた。
「あっ。ありがとう。ゆうべは大分、酔っていたので大事な鍵を忘れてしまって」
と谷口は喜んでくれた。
私はエレベーターで四階に降りた。
（泥酔した谷口はエレベーターの中で吐いたのも覚えてはいないだろう）
と思った。

四階の廊下にダスキンを掛けながら、
（私がよく吐いたのは、いつごろだったろうか）
と昔のことを思い返していた。
教頭になった最初の学校では、毎晩、先生方と飲んでいたが、若くて体力があったせいか、あまり吐くこともなかった。
私が吐き始めたのは、五十五歳の坂をくだり始めた頃だった。
酒を飲んだあとは、二日酔いどころか、三日酔い、四日酔いになり、その後遺症に苦しめられたので、到頭、酒を止めてしまった。酒を飲んで楽しかった時間よりも三日酔い、四日酔いで苦しむ時間の長さに、私が閉口したと言った方が当っていたかも知れなかった。
天菊の前の舗道を掃いていたとき、台車が停って積んでいた発泡スチール箱を天菊の裏口に運び始めた。
七十歳を越えていると思われる男はゴマ塩頭にねじり鉢巻きをし、腰にゴム引きの前掛けをかけ、足にはゴム長を履いていた。
「ほらよ」とガードレールを越えるとき、男は威勢よく声を掛け、トットと天菊の裏口へ発泡スチール箱を運んだ。
私は男の機敏な動作にみとれていた。
（もう、隠居して二、三人の孫たちに囲まれていてもおかしくない年齢だ）
と私は思った。
「社長、きょうのタコは本場もんで、生きがいいよ」
低くて、暗い声で誰かが返事をしていた。その声の主を確かめるために、私は天菊の横の路地を覗いた。
けさ、管理人室に鍵を借りにきた天菊の下働きがドアに片手を掛けて、男と話をしていた。
（俺が下働きだと思った、あの貧相な男は社長だったのか）
水産会社の社長の斉藤も専務の長男も作業服にゴム長を履いていた。私が下働きだと思った天菊の社長もゴム長を履いて、誰よりも早く店に出て、仕入れた食材をこうして毎朝、受け取っていたのだった。
築地の男たちにとって、ゴム長は男の甲斐性をあらわしているように私には思えた。
十一時頃、谷口がエレベーターから降りてきた。
私に会釈をした谷口の顔が昨夜の深酒のために、はれあがっていた。
緩慢な谷口の動作から、
（二日酔いで、会社を休んだ）
と私は思った。
しばらくして帰ってきた谷口が受付の窓ガラスに顔を近付けた。
「けさは、ありがとう。これをどうぞ」
管理人室の机の上にビニール袋を置いた。

「こんなことをしていただいては」
と私が押し返そうとするのを、
「私の気持ちです」
と谷口は頭を下げた。
ビニール袋には弁当とウーロン茶が入っていた。
「管理人さん、あんな看板を立てられるのを黙って見ていたのかね」
斉藤の声に、私は弁当を見ていた顔をあげた。
「早く、あんな看板は、はずしなさい」
斉藤の声はきびしかった。
私は通りに出てみた。ユリノキの下に、築地教会への道順を示す立看板が立っていた。
「こいつは、ゆうべから立っていたんだ。気が付いたら管理人さんがはずしてくれなくちゃ」
斉藤は私を叱った。
「いや、けさ私が出勤してきたときには無かったと思いますよ」
私は反論したが、自信はなかった。
立看板の文字を読み直してみた。きょうの午後三時から築地教会で告別式が行なわれ、会場への道順が矢印で示されていた。
「管理人さん、その看板を取りはずしてよ」
斉藤は、もう一度、私に言った。
「でも、きょうの三時からの告別式ですから……」
私はやんわり言った。
「告別式の看板をうちのマンションの前に立てられては、縁起が悪くてかなわない」
告別式がきょうの三時からと知って、斉藤は立看板を取りはずすことをそれ以上は私に強要しなかった。
管理人室の椅子に座わり、改めて立看板を眺めた。立看板の半分が見えるだけなので、私が気が付かなかったのも無理はなかった。
（社長があんなに怒ったのは、きょうの日付をきのうと見間違えたのだ）
告別式がきょうの三時からと私が言った途端、斉藤は急にしゅんとなって、くるりと私に背中を向けて玄関に入っていった。その後姿を思い出して私はニヤニヤした。
発泡スチロール箱を担いだ男がエレベーターから降りてきた。
「管理人さん、荷物を預かってください」
「生物（なまもの）は駄目だよ。預かれないよ」
「二階の山田水産のドアに管理人室に預けてくれって書いてありますよ」
「えっ。それ、本当」
私はエレベーターに乗って、確かめにいった。男も重い荷物を担いで、私についてきた。
山田水産のドアに、「配送品は管理人室に預けてください」と書いたメモが貼ってあった。

「仕様がないなあ。本当は生物は預からないことになっているんだけど、あんなふうに書いてあれば、預からない訳にいかないね」
私は男に恩を売りながら、受領書に判を押した。
「山田水産から私に何も連絡はなかったんだよ」
受領書を渡すとき、私は男に不満をぶつけた。
午後二時を過ぎても、山田水産の社員は管理人室にこなかった。山田水産の部屋に電話を掛けても、ベルが鳴るだけだった。
私は慌てた。配達伝票には冷凍マグロと書かれていたが、発泡スチロールの白い箱に密閉されているので急に腐るという心配は無いにしても、あしたになれば、どうなるかが心配だった。
私の勤務は午後三時までだったので、それまでに受け取って貰わなければ私が困ったし、生物と知っていながら預かった私の責任にもなった。
「宅配便の受け取りは管理人の業務ではない」と会社は言っていた。しかし、毎日、顔をあわしている入居者の留守に宅配便が届いたとき、「預かれない」と拒否するのは、入居者と私の間にきまずさが残るだけだった。
そのため、私は生物以外は預かることにしていたが、ドアのメモにまどわされて冷凍マグロを預かってしまい、困ったのは私だった。
入居者名簿から山田水産の本社の電話番号を探して、電話を掛けた。電話に出てきた女性に事情を説明して、
「私の勤務時間は午後三時までだから、それまでに引き取って欲しい」
と念を押した。
「それは申し訳ありません。早速、連絡を取ります」
女性は恐縮していた。
「私は宅配便が届きますから預かって置いてくださいと頼まれて預かったんじゃありませんよ。私に断りなしに、管理人室に預けてくださいと書いたメモがドアに貼ってあったんですからね」
私は怒りを爆発させて語気も荒くなった。
「三時までには、本人に引き取りにいかせます」
電話口の女性は、あくまでも低姿勢だった。
三時十分前に、ようやくメモを書いた社員が現れた。
「私に断りなしに、管理人に預けてくれなんて書かないでください」
最初から、私は喧嘩腰だった。
「いや、お願いにきたんですが、管理人さんがいなかったので」
「今後一切、お宅の会社の宅配便は預かりませんから、そのつもりでいてください」
私は社員に引導を渡した。
「どうも、ご迷惑をお掛けしまして」
と言って、社員は冷凍マグロを引き取っていった。

午後三時に、ドアの鍵、ガスメーターの格納庫の鍵を確認して、私は通りに出た。
一日の勤務から解放されて、太陽の光の中に出る瞬間だった。
横断歩道の信号が赤に変わった。
私は満ち足りた気持ちで、まわりを見廻した。天菊のレジ係の女性が、天菊という暖簾を店の中に取り込むところだった。
私の顔を見て、会釈をしてくれた。私も軽く会釈を返した。
信号が青に変わった。私は横断歩道を足早に渡った。
前任者の矢島が私に詳しく教えてくれたのは、天菊の洗い場係とレジ係の二名の女性のことだった。
天菊には五十年輩と三十年輩の女性が務めていた。
「若い方は愛嬌がいいが、年をとった方は無愛想で、いくら私が挨拶しても知らん顔をしているので、私もババアのことは無視することにした」
私に教えてくれたと言うよりは、それは悪口だった。
私が玄関や舗道を掃いているとき、年輩の女性は出勤してきた。玄関の脇の郵便受けから新聞や郵便物を取り出してから天菊に入った。
天菊の社長と同じように、私がいくら挨拶しても眼鏡越しに私の顔をジロッと見るだけで、無言のまま私の脇を通り過ぎた。
郵便受けの扉が開けっ放しで、下にちらしが落ちているのも、社長と全く同じだった。
（社長が無愛想だと、使用人も無愛想になるんだ）
と私が思うほどだった。
年輩の女性は、やや腰が曲がり、上体が前に傾いているため両手をせわしなく動かして歩いていた。いつも、ズボンをはき、左手に黒い買物袋をぶらさげていた。
三十年輩の女性は、よく遅刻をした。タクシーから降りてきた彼女はガードレールを大股でまたいだ。そんなとき、私に向かって、ニコッと笑った。
遅刻したのを恥ずかしがっているのか、ガードレールをまたいだのを照れているのか、私には分からなかったが、私に親近感を持っていたことは事実だった。
休憩中という木の札を店先に吊るすとき、私が帰るのをみつけて、「もう、お帰りですか」と声を掛けてくれるようになった。
三十年輩の女性はスカートをはき、年輩の女性はズボンをはいていることから、若い方は配膳やレジの仕事で、年輩の女性は洗い場で汚れた食器を洗う洗い場さんだろうと私は想像していた。
矢島が言ったように、洗い場さんは私の朝の挨拶を無視していた。
しかし、一月経ち、二月するうちに、無表情だった洗

い場さんの顔に笑みが浮かび、彼女の方から「おはよう」といってくれるまでになった。
その日は朝から雨が降っていた。
私が裏の自転車置き場を掃除していたとき、両手をせわしなく前後に動かして洗い場さんがやってきた。
「管理人さん、見てちょうだい。気味が悪い変な生きものがいるの」
洗い場さんが指差す繁みの中に、何か蠢くものがいた。
ピィ、ピィと鳴いて、盛んに頭を振っていた。
「あっ。これ、鳩の雛ですよ」
私は洗い場さんが怖がっていた雛を掌に乗せた。体が赤裸で目もあいていなかった。黒ずんだ二つの眼球が頭部に盛り上がっていた。
鳩の雛は一生懸命、体を動かしピィ、ピィと鳴いて餌を欲しがった。私の掌に雛の体温が、じわっと伝わってきた。
洗い場さんは鳩の雛を初めて見るらしく、驚きと気味悪さで声も出ないようだった。
「可哀相に、誰かに捨てられたんですよ」
私は彼女に説明した。
親鳩が雛をここまで運んでくる筈もなかった。
「どうしましょう」
彼女が、やっと口を開いた。
「そう。育つか、どうか分からないけど、私が育ててみます。私は旧制中学校のとき、鳩部でしたし、私も家で鳩を飼っていました」
彼女に、私が雛を育てることを承知させた。
管理人室に戻り、雨で濡れた雛の体をタオルで拭いてやった。雛は餌を欲しがって、ピィピィ鳴きながら私の指のまわりを嘴で探した。
雛に与える餌は何も無かった。
私は机の引き出しから、まだ使っていないスポイトを探し出し、茶碗に入れた水をスポイトで吸い上げた。
頭を振って嫌がる雛の嘴を無理にこじあけて、スポイトの水を嘴に流し込んだ。
私が使っていた電気座布団にタオルを置き、その真中に雛を乗せて、その上から箱をかぶせた。
ピィピィと鳴いていた雛がおとなしくなった。
「がんばれよ。三時になったら連れて帰るから」
私は箱の中の雛に、そう言い聞かせた。
私は旧制中学生のとき、二羽の伝書鳩を飼っていた。しかし、戦局が悪化するにつれて、私たちの食糧も乏しくなり、鳩の餌までは手が回らなくなってきた。折角、私になついた鳩だったが、新聞社の鳩部に引き取って貰おうかと考え始めたとき、その鳩が二個の卵を産んだ。
ある日、餌をやっていたとき、ピィピィとかぼそく鳴く雛の声を聞きつけて、雛が孵ったことを知った。
親鳩の腹の下にかくれていた小さな雛が次第に大きく

なり、まんまるい目をあけたのをみつけたときは本当に嬉しかった。
親鳩の嘴に、雛が頭を突っ込んで親鳩から餌を貰うようになると、雛はみるみる大きくなった。赤裸だった体にチョボ、チョボと羽毛がはえ、小さかった前肢に翼がはえ揃った幼鳥になるまでに二月とは掛からなかった。
次第に大きくなる雛を見ながら私の気持ちは複雑だった。さんざん迷った末に、雛が一人前になるまでは育てることにした。
雛は親鳩に似て、二羽とも二引(にび)きだった。そのうちの一羽は嘴の左の根元に、こんもりとした凸起物ができていた。
親鳩と全く同じ大きさに育った若鳩と親鳩の四羽は鳩舎の二階の遊び場に出て、高い空を見上げていた。
親鳩が卵を抱き始めてから、私は鳩に飛行訓練をさせていなかったし、若鳩も空に放してはいなかった。
四羽揃って、空を見上げている姿に、鳩たちの気持ちが私には痛い程、分かった。
最後の餌を与えた朝、私は父に、
「鳩を新聞社に持っていって欲しい」
と頼んで家を出た。
学校から帰ってきて、からっぽになった鳩舎を見て、ひとりでに涙がにじんできた。
私の姿をみつけると、金網に両足を掛け羽根をバタつかせて、「早く餌をくれ」と騒ぎ立てた鳩たちの姿が目の底に浮かんできた。
(戦争だから、我慢するんだ)
と自分に言い聞かせるより仕方がなかった。
からっぽになった鳩舎を見ても、それほど心が痛まなくなった頃、一羽の鳩が鳩舎にとまっていた。
私は家のかげから、そーっと覗いた。
嘴の左の根元に、見覚えのある凸起物があった。
私が育てたあの雛だった。新しい飼い主が飛行訓練のために、空に放したとき、古いこの鳩舎をめざして飛んできてくれたのだった。
涙があふれて鳩の姿が、にじんで見えた。
「わーあっ」と大声を挙げて、私は鳩に突進していった。鳩は驚いて、飛びあがり、うちの屋根にとまった。
私は冠っていたカーキ色の戦闘帽を鳩をめがけて抛った。鳩は隣家の屋根に飛び移った。
「帰れ。新しい飼い主のところに帰るんだ」
私は大声でわめいた。
鳩は羽音を立てて舞いあがり、大きく弧を描いて、私の視界から消えた。
こんな悲しい思い出があったので、雨に濡れた赤裸の鳩の雛を見殺しにすることはできなかった。
「雉鳩(きじばと)の雛だね。こりゃあ、育てるのは無理だ」
小鳥屋の主人は、私が掌に乗せた雛を見て、すぐそう

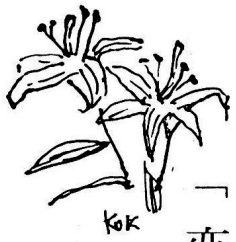
言った。
「いや、無理でも面倒をみてやりたい」
という私のことばに、
「一合もあれば、当分大丈夫だろう」
とアワを一合枡ではかり、ビニール袋に入れながら、
「アワをお湯に浸して人肌になったら、口に押し込んでやればいい」
と教えてくれた。
私は文鳥の雛が生まれたとき、手乗り文鳥に育てる方法をこの主人に教わりにきたので、餌のつくり方、餌の食べさせ方は知っていた。
「無事に育ったら、見せにきます」
主人に約束をして私は小鳥屋をでた。
家に帰り、私はバックから雛を取り出して家内に見せた。
「私はいやですよ。そんな気味の悪いものの世話はできませんからね」
赤裸の雛を見て、家内は尻ごみをした。
みつけたとき、水を飲ませただけなのに、雛は割りと元気でピイピイと鳴いて餌を欲しがった。私の指の間に嘴をもぐりこませた。
お湯に浸したアワを給餌器に入れ、雛の嘴を軽く叩いたが、雛は嘴をあけなかった。
文鳥の雛は給餌器の細い管を嘴に触れるだけで、嘴を大きくあけた。親の文鳥が雛の大きく開いた嘴に餌を差し入れていたからだった。
これに対して、鳩の雛は親鳩の嘴の中に頭ごと入れて、餌を貰っていたので嘴を開けることを知らなかった。
鳩の雛の嘴の先が丸いのも、親鳥の口の中を傷つけないためだった。
私は雛を押さえつけて、無理にこじあけた嘴の端から給餌器の細い管を差し入れて、餌を押し込んだ。
餌を与えたあとは保育箱の底にホカホカ懐炉を入れ、その上のタオルに雛を乗せて冬の寒さから雛を守った。
本当ならば親鳩のあたたかい胸の下に抱かれていた筈なのに、誰かのいたずらで親鳩から離されてしまった雛があわれであった。
私は鳩舎に戻ってきた鳩のことを思い出していた。
生まれ育った鳩舎をやっと探し当てたのに、私から無情にも追い払われた鳩の悲しみを思った。
私は鳩たちが鳩舎に戻ってこないことを願って、鳩を一回も空に放さなかった。
それなのに、この広い空の下の、それこそゴマ粒よりも小さな古巣を探し出したあの鳩の執念を私は思った。
折角、戻ってきてくれた鳩を飼いたくとも、飼えなかった私の悲しみを思い出していた。
(無事に、大きくなってくれよ)
と願いをこめて、私は保育箱の蓋をしめた。

夜中の十二時と朝の四時に起きて雛に餌を与えた。
保育箱の蓋をあけ、掌に雛を乗せてやると、盛んに鳴きわめきながら胸の小さな前肢を動かした。
雛の体は懐炉で、じゅうぶんにあたためられていたし、元気でもあったので、
(育つかも知れない)
と私は希望を持ち始めた。
保育器の中の糞で汚れた小さなタオルを仕末しながら、
(こいつは案外、利口な奴だ)
と感心した。
粘液状の糞を雛は尻を高く持ちあげて噴射して排泄しているらしく、保育箱の壁面を覆ったタオルだけに、糞がこびりついていて雛が座っている場所は綺麗だった。
家を出る前に雛に餌を与えたとき、雛の目が遮光器形土偶のように、横一直線に、かすかにあいているのをみつけた。
「ほら。パパだよ。見えるかい」
私は瞼のすき間をのぞき込むようにして、声を掛けた。
(目をあけ始めたから、もう大丈夫だ)
と私は安心した。
保育箱をそーっとバックの底に入れて、私は雛を連れて駅に向かった。
家内がグロテスクな雛を嫌って、世話をしてくれないので、マンションへ連れていくより仕方がなかった。
家を出たとき、雛はバックの中でピイピイと鳴いた。
(電車の中で鳴かれたら困るな)
と思ったが、そのうち鳴かなくなった。
私が心配したように、電車の中で雛が鳴き始めても、電車の騒音に掻き消されて、雛の声を聞き馴れた私の耳にだけバックの中で鳴いているのが分かった。
マンションに着き、私はすぐ雛を保育箱から出した。
「元気かい。ここが築地のマンション。パパが働いているところ」
私は雛に話し掛けながら餌を与えた。けさ、見たときより瞼のすき間が、ややひらいていた。
「パパ、これからお仕事。おとなしくしていてね」
雛を保育箱に戻し、座布団の上に置いた。
マンションの掃除をしていても、私は雛のことを考えていた。
近くの築地本願寺の境内、あかつき公園や築地川公園に鳩が群をなして飛んでいた。
「ご近所の方々がフン公害で迷惑していますので、鳩には餌を与えないでください」
という立札が建てられていたが、人なつっこくチョコチョコと寄ってくる鳩のかわいらしさに負けて、人々は弁当の飯粒などをやっていた。
その野鳩の巣から、まだ目もあいていない雛を取ったものの、その始末に困って天菊の植え込みの中に捨てて

いったのだろうと私は思った。
マンション内外の掃除が終わると、私は急いで台所に入り、お湯を沸かして雛の餌をつくった。
私の足音を聞きつけて、雛が保育箱の中で鳴き始めた。保育箱の蓋を取ったとき、丸い目をいっぱいにみひらいて、首をぐーっと伸ばしている雛の姿が目に入った。
「目があいた。よかったね。私がパパだよ」
雛を両手で抱いて、私の顔に近付けた。
パッチリとあいた二つの丸い目に私の顔が映っていた。
「早く大きくなるように、ご飯をたべようね」
雛に語り掛けながら、雛の嘴に給餌器で餌を押し込んだ。雛はいやがって首を振ったので、殆どの餌が嘴の外に、はみ出してしまった。
「たべなきゃ、大きくなれないよ」
私は雛を叱った。
昼休みは、何処にも出掛けずに私は雛と遊んだ。私の掌に乗った雛は丸い目をキョロキョロさせて、私の顔を見たり、部屋の様子を見たりしていた。
これまで赤裸だった雛の皮膚から白い和毛(にこげ)がピョロ、ピョローンと生え始めていた。
雛と遊ぶ楽しい時間は、すぐ終わってしまった。雛を保育箱に入れようとすると雛は嫌がって私の掌の上で、もがいた。
嫌がる雛を保育箱に入れて、蓋をするときが悲しかった。雛はピイピイ鳴いて、外に出してくれとせがんだ。
私は保育箱をバックに入れて、チャックを半分しめた。明るい和室よりも暗いバックの中の方が鳴くのを諦めると思った。
しばらく鳴いていた雛がおとなしくなった。
（眠る子は育つ）
自分に、そう言い聞かせて管理人室に戻った。
雛を連れて出勤していることを、私は天菊の洗い場さんにも話ししてはいなかった。大きく育った雛を見せてびっくりさせてやろうという思いがあった。
いつものように、私は椅子に座り、受付の窓ガラスから外を眺めていたが、私の頭の中は雛のことでいっぱいだった。
午後三時、雛の入ったバックを提げて私は管理人室を出た。ちょうど、郵便物を取りにきた天菊の洗い場さんと玄関で出会った。
「もう、お帰りですか。いいですねえ」
「ええ。女房が早く帰ってこいと、うるさいので」
私は笑って答えた。前任者の矢島のように、洗い場さんと口をきかなければ管理人室も格子なき牢獄になってしまうと私は思った。雛が元気でいることを話そうと思ったが、私は我慢した。
この雛にしても、洗い場さんと会話を交わしていたからこそ植え込みにいたのを私に知らせてくれたのだった。

家に帰ると、私は家内に雛の目があいたことを知らせ両手で包んだ雛を見せた。
「やめてください。私に近付けないで」
と私から逃げ廻っていた家内も、私の「かわいいよ」ということばにつられて、雛をこわごわと覗き込んだ。
丸い目をクリッとさせて、雛は家内を見た。
「目がかわいいわね。でも、私はいやよ」
家内は雛の世話を拒否した。
雛を連れての出勤は楽しかった。幸い、マンションに何も起こらなかったので、私は雛の世話に専念できた。
それは、戦闘帽を放り投げて、追い払ってしまったあの若鳩に対する私の贖罪でもあった。
しかし、八日目に急変が起こった。
（けさは元気がないな）
と思いながら家で保育箱に入れた雛は、管理人室でその蓋をあけたとき、首を投げ出して、ぐったりとしていた。
私は急いで、雛を保育箱から取り出した。目をとじて、雛は死んでいた。
涙が瞼から溢れてきた。
（八日間という短い期間だったけど、楽しかったよ）
私は雛に礼を言った。雛の体をタオルで包んで、菓子箱に納めた。
（築地で生まれ、このマンションで育ったのだから）
と思い直して、その菓子箱を道路に出ているゴミの山の頂上に、そっと置いた。
十一時頃、清掃車がゴミを集めにきた。私は管理人室を飛び出して通りに出た。
青い頑丈な清掃車が、私には黒い霊柩車に見えた。
係員がポンポンとゴミを清掃車に放り込んだ。
清掃車が動き出した。
私は静かに頭を下げて、
（サヨナラ）
と別れを告げた。
その日は管理人室に座って、ぼんやりと半日を過ごした。
三時になり、雛のいないバックを提げて、築地、銀座の雑踏を歩いても、私の心は空(むな)しかった。
（雛が元気だった、きのうと較べて、きょうは本当に淋しい）
雛の鳴き声が聞こえる筈もないバックを顔に近付けて、私は耳を澄ますのだった。

（つづく）



「恋人たち」

フランス映画

ルイ・マルー監督
ジャンヌ・モロー主演

有香（アリカ）六月（ジューン）

ブラームスの二つある弦楽六重奏曲の最初のほう、第18番の、第2楽章がテーマとなって、この曲全体のアンダー・トーンとなっている。ことに肉身で結ばれる場面のエクスタシーを描写して最高に甘味なシーンを浮彫りする。明るく輝く月光の小舟の中で、激しく抱擁し合う、若い男女の姿態。

月光に隈（くま）なく照らしだされた広大な庭園の中央の池に浮ふ小舟の中で、二つの肉身をくねらせて、絡ませて、ほんの一寸の隙もないように抱き締め合う男女の裸像。フランスの鬼才ルイ・マルーは、惜しみもなく、その男女の赤裸々の姿を、ライトの中に大写しとした。太古以来の人間の官能の営みが、そこでは、この上もない見事な息をのむほど美しい芸術品に昇華していた。ジャンヌ・モローは神々しいまでに肉感的であった。

「恋人たち」のストーリーの舞台は、フランスの北、パリからはやや南に下るが、小都市ディジョンの広大な邸宅。そこに地方新聞社の社主夫婦が住んでいる。社主はアラン・キュニーによって演ぜられる。地味な渋い、手堅い名優で、ヲランスの当時の有名な俳優たちがそうであったように、俳優生活が長い。「ノートル・ダムのせむし男」で、エスメラルドに横恋慕する副司祭の役目を彼がしていたと思う。若い「恋人たち」の中で、彼は中堅から、すでに初老にさしかかる夫として登場し、（たとえば六十才とすると）三十才ほども年下に見えるジャンヌ・モローが妻として潑剌とした肉体の魅力を滴らせて登場してくる。当然、夫は新聞社の仕事に忙しく、また家にいたとしても、妻の若い肉体が求める沸（たぎ）りたつ欲求には応じてやれない。肉体上も、スポーツにも、趣味にも、妻は夫に不満である。典型的なシュニッツラーの作品のバック・ボーンを形成する状態。時代は一年代（三十年）以上、此方が新しく、しかも、とかく男性が保守的なオーストリアと異って、女の自己主張の強いフ

ランスである。時折、この広大な邸宅でパーティーが催おされ、パリから車を連ねて、招待客たちがやってくる。その中には多くのパリの文化人たちも混じる。妻の情人（アミ）もいる。それはパリの伊達男（ダンディ）で、文芸家もしくは文士の仲間である。始めは夫に欠けている文芸上の教養に惹かれていたジャンヌであるが、もはや、彼女のあまりにもエネルギーの迸ばしる肉体の要求を充たしはしない。彼はあまりにも、月並みのパリの文士の端くれにすぎない。

その夕べの我が家のパーティに間に合うよう、用事で出かけていたパリから車がディジョン目ざして走っている。その車が故障したのか、ともかくジャンヌはオートバイで走ってきた若い男に助けを求めることになる。その男らしい、見るからに精悍な、ピチピチした男性を演じた俳優の名は忘れた。ただいかにも彼女のお相手にふさわしい肉体美の男性であった。しかも彼はそれだけでなかった。夫より、おそらく情人（アミ）より、知性の高い階層に属していた。ふしぎな魅力をその男性に感じたジャンヌはそのまま彼を連れて邸に戻る。パーティに招待したのである。彼はたしか考古学関係者で、あちこちを駆け廻り、発掘に立ち会うとか、自ら調査に当っている少壮の研究者である。確かな記憶ではないが、それはここではそう必要でない。問題は彼が若き探求家であり、車など乗り廻す人種でなく、なにより虚飾の大事な「腐敗している」種族に属していないこと。彼には本来の生命への強い意欲があり、考古学という目的があり、そのための強靱な実行力がある。――こういう男性にとって、女など、行きずりのアヴァンチュールにしか過ぎないだろう。彼に必要なのは自由独立であり、ほんの一時の気紛れとしか、女を考えていないだろうに……こういう型の男性には造巣本能はない。結婚して何年も経た女性は、しばしば結婚生活の退屈さをこぼすことが多い。しかし男性の側だって同じであろう。結婚して数年してなお妻に捲きない場合は少ないだろう……「造巣本能」を有している男と女が番（つが）いになれば問題はないが……男女のこのような形態がある限り、「小説」はまだ滅びないだろう。

この「恋人たち」のフィルムでは、ジャンヌの連れてきた未知の男はパーティも果てたあと、その夜更け、他の遠来の客はそれぞれの部屋でみな寝静まったあと、庭園で、予期していたように彼女と肉体的に結ばれる。その水々しい二つの裸身の結びつきの場面は恍惚としか言えない美しさに輝く。肉体の抱擁の場面を描いて、これ以上すばらしい芸術作品はないであろう。それは肉体の愛の極致である！

宏壮たる館、公園並なみの庭園、水の上、月光に浮かび上がる白い裸身！　ロダンの彫刻もこれに比べると冷たい石像にしか見えない。

全篇を通して、あの燻し銀のようなブラームスの六重奏曲作品、18番、第2楽章が流れている。しかし彼の地味な、北海の潮の匂のする曲が、このような華麗極まりない肉体の演技を伴奏するのに選ばれたとはふしぎな気がする。それは鬼才ルイ・マルーの発想なのだろうか。そういえばこの傑出した監督は、今年世を去った。

「ブラームスはお好き」

イングリッド・バーグマン（スウェーデン）、イヴ・モンタン（イタリア出身フランス人）、そして英国人の若いアンソニー・パーキンスの三人が演ずるこのフィルムのテーマ曲もブラームスで、第3交響曲から主テーマが選ばれている。この荘重な、しかし暗い情熱に充ちた調べが、フィルムの伴奏となって活きていた。当時私が住んでいた国際大学都市、パリの南外れ、第14区の二つの広い公園内にあるアメリカ館（学生、研究者寮）で、みんながよくこの曲を口ずさんでいたので、始め、アメリカ人は意外にクラシック・ファンが多いと思っていた。しかし出所はこのフィルムであることを知った。

ブラームスのこの六重奏曲第1、作品18番は、当然初期の作品である。次は私の想像にすぎない――彼は尊敬する師シューマンの若い妻のクララを慕い、その憧れがこの曲になったとしたら……私にはそう思ったほうが、この曲の持つ暗い情熱、若々しい憧れ、しかし最初から諦念に裏打ちされていた恋の焔の説明がつく。一生彼女を愛しながら、そして、精神の薄命に晩年を送らなければならなかった夫シューマンを看る彼女を助けつつ、また六人の子供と未亡人になった彼女と親しくしながら、しかし師の妻と結ばれることを躊らったブラームスの血管を流れ出る血そのもののような曲でもある。紅血の芥子の花が、暗い激しい山間の流れのほとりに無数に開花しては散花してゆく。たえざる開花と散花と……

ロバート・シューマン（1810－1856）
クララ・シューマン　（1819－1986）
ヨーハン・ブラームス（1833－1897）
弦楽六重奏曲　第1、作品18番　変ロ長調
作曲年　1858－60
初　演　1861ハノーヴァ

この曲はブラームス25才から27才にかけて作曲されている。クララは39才から41才。

「ユモレスク」

アメリカ映画

若いヴァオリニストとそのパトロン となった富豪の婦人

このフィルムは、数少ないアメリカ映画の名作の中でも特に傑出した作品であり、しかも同時にアメリカの市民生活を見事に描きだしている。アメリカ映画といえば、私は「カサブランカ」を絶賛に値いするものと思っているが。共に第二次大戦頃の作品でないかと思っている。ここでは私は研究論文を書いているのではないので、わざと記録を省く。このフィルムはNHKテレビで、一九五六年頃に放映されたと思う。少なくとも私はここの家に移ってから二度は見ている。それは鮮明に頭に灼きついた、というよりも主人公のヴァイオリニストの指から流れ出る「ユモレスク」　ドヴォルザークの旋律が耳についてて離れないと言ったほうが適当である。

フィナーレ、海辺の別荘の一室、煌々と月光に照らしだされている、すぐ目の下に砂浜が拡がる海。

ヴァイオリニスト、当然背が高く、渋い、おちついた深味のあるマスクの芸術家、カールとしておく。しがない食料品店を営む父親、しっかり者の母親、何人もの兄弟。カールは音楽の才能に恵まれ、いつかヴァイオリンに打ちこんでいる。同じような境遇のピアノの学生ハンスと、音楽学校に入学しているものの、ヴァイオリン一筋に打ちこむ生活はできず、二人ともども夜はカフェやナイトクラブで音楽のアルバイトをしている。そういう彼とあるクラブで知り合った富豪の夫人スザンヌ・スミス（としておく）は、彼の才能を見込んで、彼に学資を保証し、かつ、彼を音楽界に売り出すことに力を入れる。このハンサムな、人間としてはナィーヴな青年を、夫人は次第に愛し始める。カールのほうは、キャフェのアルバイトから解放され、その友人のピアニストと共に音楽の道一筋に精進し、次第にヴァイオリンの世界で頭角を表わしてゆく。

スミス夫人は益々熱を上げ、いつしかこの青年音楽家を恋し始めている。彼に伴い高級服店で洒落た洋服を誂える。そして高級住宅を彼のために調達し、彼と同僚であり、伴奏もつとめるピアニストのハンスも住まわせる。彼女は時折り、彼の居室を訪ねる。一流のオーケストラを斡旋し、超一流の指揮者を招く、しかしカールは、甘やかされた芸術家でなく、本物の才能を磨き抜いて一流のヴァイオリニストとしてふさわしくデビューしてゆく。

スミス夫人の夫は、成功した実業家であるが、豊かな人間性を備えていて、感受性の強すぎる夫人の性質をよく承知していて、ありのままの彼女を受け容れている。世の酸いも甘いも噛みしめた実業家は、子供のない妻を、我がままな娘のように愛おしんでいる。彼には分かっている、自分は彼女にとって、いわば良き父親にしかすぎないことを。鋭い芸術への感性に恵まれている彼女に、自分のような平均の取れた実業家は、そう面白い存在ではないことを。といって、自分という保護者の温い手を離れたら、彼女がどうなってしまうかを。彼はよく承知していた、芸術家という人種、それもエセでない、本物の芸術家の本質を。彼に恋してしまって、それにかんたんに反応してくれないヴァイオリニストに苛立って、ヒステリーを起こす妻を宥めて彼は言う。

「あちらに行きたければ行きなさい。しかしあの男の頭には、自分のヴァイオリンしかないのだ。彼はヴァイオリンと結婚しているのだ。」

温かい父親のような夫のもとで、好き勝手に暮らしても、心の空虚を埋められない、どんな素晴らしい宝石も衣裳も、一流の文芸家たちを集めるパーティも。今では彼女の心には、貧しかった環境から、いわば自分が手塩にかけて、全米一流のヴァイオリニストの階段を登りつめさせた、素朴な、音楽一途の、生真面目なカールのことしかない。

オーケストラとの練習のため、自分とのランデ・ヴーに応じられないカール、ある時レストランで彼が音楽学校時代の級友の女性と食事していたからといって、いちいちヒステリーを起こす。

そこには富豪の夫人として、何一つ不足のない驕慢のアメリカ女性の、教養の足りなさが見えすく。しかし彼女はそれに気づいていない。かえって、夫の寛大な態度が、彼女の心理を追いつめる。

留まっても落ちつけず、飛び出してもカールに彼女を受け容れるほどの大きな愛情はなく、結局、彼女は自らを追い詰めてゆく。自分をコントロールできない。

海辺の別荘にきた彼女は、二階の寝室で、ラジオから流れてくる演奏会場中継のヴァイオリンの流麗な旋律に憑かれたように立ち上がり、ふらふらと階下に降り、浜辺に飛びだしてゆく。夢遊病のように彼女は、月光に輝く海の中にどんどん入ってゆく、たしかに発作的に波の中に入っていったのである。

その旋律は、始めて彼女と知り合ったまだ学生の彼が弾いていた「ユモレスク」の調べ！

翌朝、彼女の死を知ったカールはその海辺に駆けつける……彼は彼女を恋していたわけではない、しかし十分すぎるほど、彼女の愛は感じとっていた……。

彼の気落ちは激しく、その後の演奏会のスケジュールはすべて取り消す……。

1995.12.30

ノクチュルヌ No. 4

Nocturne

―夜の底で―

私は夜の中で　あなたの声をきいている
あなたの声は　夜の中で　いっそう
私の耳に　さやかに伝わってくる
昼間の噪音が消し去っている
あなたの声は　夜にこそ　ふさわしい

それも夜半の境界線を越えると
いっそうよく聞き取れてくる
粉れようもなく　私の耳に
じかに伝わってくる音声

そう　たしかに此方の午前3時は
向こうの夕方の7時
でもそのような物理的時間を
意識して考えたわけではない

月の光が冴えて　中天に
その最高の光を放つ時
梔子の香りが一番強く
香りを放つのも夜半をすぎて

何故か　私たちのメッセージは
そのような時間を経なければ
そのような時間を得て始めて
お互いに伝わるような気がする

私達の魂の唇と唇が
ひそかに触れ合う時
多分二人は肉身を抜け出て
はるかな天空の彼方に
二つの星となって光っているだろう

― ユーリエの唄 ―

一九九六年三月六日

夜の底で私はまたあなたに呼びかけている、ふしぎに時刻が夜半零時の境界線を越えると心が鎮まり、魅せられたように夜の魔力に捉えられる。丁度満月の夜、冴えた月光がいっそう心を駆り立てる、どこに・・・涯しのない海の中を漂っているような気持、そういえば、あなたと知り合った初めの頃、私はあなたの声のふしぎな響きにほとんど異星人を感じた、何か普通の人と波長が違っているのである、それは低音で、ゆっくりしていて、一音づつ明瞭ではあるが、その抑揚が何か異なっている、だんだんに考えて、それは深海の底で母貝の中に夢を見つづけている真珠の顆粒（つぶ）から、遙かな大海の深みを越えて発せられる特殊の磁気を帯びた発信音のように感じられていた、地上で、空中でそれをキャッチできる人か、やはり異星人かの耳にのみ聞き取れる音だと。フェリシアンの声から発せられるメッセージは、いずれも特殊の意味を伝えているように思われる、それはどんな日常の会話の中でも単に表向きの用事だけでなく、その裏になにか秘めた意味を匿しているように思われる。

もちろん、こういう異星人型の人と長時間一緒にいたら此方の神経は耐えられないだろう、まして生活を共にしたり、共同の仕事をしたりすることは不可能であろう、考えて見たら・・　　どんな名曲でも、それを同じ緊張で二時間以上動かずに聞けといっても、それはできない・・・・

オーケストラ・コンサートは普通休憩二十分間を挟んで二時間である。

オペラは一番長いので五時間半という「ニュルンベルクの名歌手たち」があるが、間に三十分の休憩を二回おいて、その間に煙草も吸えば、サンドイッチもつまめる。しかもオーケストラは取り決めで、はじめの部、二回目の休憩前で終えて、最終幕は別な人と交替できる。耐久力のある人が、終わりまで通して弾けば、一回分の夕べ休みが取れる。これは主として弦楽器に当てはまるので、管の場合は違う規則かもしれない。ことにヴァイオリン、ヴィオラと出ずっぱりで、絶えず楽器を肩の高さに構えて弾いていなくてはならない、たまったものではないこともある。オペラの伴奏は舞台下のボックスで弾くからまだいいかもしれない、しかし、唯の一音だってミスできないし。、グループで同じ間をおいて揃えて弾かなくてはならない。思えば神経の消耗の激しい職業の一つである。精密機械工も同じ条件、百分の一ミリの誤差も許されないこともある。その他大部分の職業に、集中力と精神の緊張が要請される。

どんな職業でもプロに徹すれば、神経は磨り減るほど使わなくてはならない。全身に充電させ ―― たえず補給して ―― 外部に対して発光してゆかなくてはならない。

たしかに「健全な肉体に健全な精神は宿る」

しかし健全ならざる肉体から、必ずしも、世の常の標準を越えた発光現象が起るわけではない。

ただ、ドストエフスキー、ニーチェ、ゴッホ、モーパッサン・・・・病体を抱えていた、先天的、後天的のもあるだろう。

ショパンは病身だったから、あの月光の青冴えた光の糸で織りなしなやかな織物を作り上げたとは言えない、しかし彼がしんから健全な肉体と精神の持主だったら、あのような精緻な作品を仕上げられたかどうかは疑問である、

フェリシアン　身長185㎝はあり、しっかりした体格なのに、背骨が歪んでいる。彼は一九三九年四月ウイーンで生まれた、三九年九月一日ドイツ、ナチス軍が、無謀にもポーランドのダンツィッヒ（グダンスカ）にドイツに通ずる回廊を欲して侵入した年の数カ月前である。その頃はまだ食料事情はそう悪くなかった筈、ドイツは上昇気流に乗って、破竹の勢いで翌一九四〇年六月にはパリを陥落させ、フランスの半分を占領した。しかしドイツは図に乗りすぎた。一九四〇年九月日独伊三国同盟。枢軸同盟といっても、イタリアは結局は頼みにならず、日本ははるかなアジアの果て、おまけにドイツの意に反して、こともあろうに超大国アメリカに戦争を挑んだ（挑まれたという人もいる）、一九四一年一二月八日。日本には読めなかったのだろうか、戦線を拡大してゆくドイツの破滅は目に見えていたのに。ドイツは協定を破り一九四一年九月にソ連に攻め入る。アメリカはすでに、四一年十二月に宣戦布告。四二年二月ドイツ軍東部戦線で大攻撃。九月スターリングラード攻防戦、四三年二月スターリングラードの悲劇 ――しかもそこに袋のネズミのように包囲された大部分の軍隊、二師団までオーストリア軍団で、この時絶滅した。そしてそれがドイツ・ナチ帝国崩壊への第一歩であった。北アフリカ戦線に広がった厖大なドイツ一国に対してヨーロッパ連合軍プラス、アメリカの新しい血。日本も無謀ならドイツも無謀。一九四五年四月三十日にベリルンの防空濠でヒトラーは新夫人エファとピストル自殺。五月八日はドイツ全面降伏。

幼いフェリシアンが生まれてから六年間、疎開もできずウィーンの市内で食料難の中に育ったが、さらにウィーンは四列強に占領され、ことにフェリシアンたちのソ連地区の食料難はひどかったという。アメリカの缶詰やミルクが配給された東京はまだよかったのであろう。

当時の母親たちの多くは、限りない困難のうちに赤子を育てなくてはならなかった・・・

戦後十年占領下のオーストリアで、アメリカと英国地区はまあまあだが、ソ連地区となおフランス地区が相当ひどかったことを居住民から聞いた。ナチスにパリを占領されていたフランス人は、オーストリアとナチスを同一視して憎んだと聞いた・・・

今五十五歳前後の小児期をウィーンという都会で送った人たちは、何らかの意味でそれ以前に青年期に達していた人たちと身体のコンディションが異なると聞いている。たとえば有名なウィーン・フィルハーモニーの元楽団長で、二冊のオーケストラ関係の著作者であるオットー・シュトラッサー氏は九十六歳の現在、なお健在で、ことにその頭脳の明晰なことは驚くほどである。

フェリシアン

あなたの背骨の弯曲は先天的なものか、いづれにせよ、五、六歳の頃から五十年以上弾き続けているヴァイオリンとヴィオラの楽器のために、その弯曲には悪い影響が与えられているに違いない。外見はいかにもキレイで恰好のよいプロのオーケストラのメンバーということが、当事者一人にとって、どんなに大へんなことであるか・・・・・

フェリシアンの神経の過敏さが、その背骨の弯曲に少なからず関係している、その上、彼にはリューマチ体質があり、雨の降る前、低気圧を敏感に反応して肩から背中に痛みを覚える。日本の梅雨など耐えられないだろう。湿気は厳禁である。ヴァイオリンの名器も日本におけばたしかに音に曇りが生じる。日本の高価な漆器がヨーロッパにゆくと、割れることがあるように。大体中部ヨーロッパをさしているが。

フェリシアンの肌が異常なほど柔らかいのに気づいていた、まるで皮膚の表皮が用をなさないほどに・・・

それも彼の神経の過敏と関係あるであろう。

彼の友人たちは彼をミモザのようだという、お天気屋とも。つまり彼は世にも誠実な人間であり、意思の強い決して約束を違えない人であるが、こちらが気をつけていないと、気分が変わり易い、それをよく此方が計算しておかないと彼の気分が壊れる時危ない。こういう人間

と生活を共にはできないであろう、よほど大らかな清濁合せのむ人か又は全く鈍感で平気な人でないと。

美食家であり ——決して度が過ぎてはいないが ——かなり凝った装飾の部屋を好む人、お料理の上手な、家事のまめな高等ハウス・キーパーがいて、広大なお邸に、全く別棟で、分を守って暮らして、いわば見えないヘルパーの妖精となって、おいしいお料理をテーブルに出して、知らないうちに邸の清掃をして・・・・一日中姿を見せない家事手伝い人だけが彼の我慢できる存在である。

女という異性の生物が年がら年中、うろちょろしていたら彼にはとうてい耐え難い。見えない手で彼のサロンに花を活ける。ついでに見えない手が彼のデリケート極まりない肉身を愛撫したら最上だろう・・・・

ユーリエはもう悟りきっている。

世の常の男女関係が彼にはまるで通用しない。

しかも二人の間にあり余るほどの共通性

ユーリエ自身もそうまともな神経の持主ではない、対人関係にはひどく苦労する、よけいな神経を使う。第一好き嫌いが激しい。それはお互いさまで虫が好かないのでなく、星が好かないと言わなくてはならない。つまりヨーロッパ流の星の配置である。二十～二十一日ごとに季が変り十二の星々に動物が支配される。

フェリシアンは牡羊座（ヴィッター、ベリエ）、ユーリエは魚座（フイッシュ、ポアソン）。本来はぴたりと合う星座ではない、火星と海王星だろうか。彼は「火性」で、ユーリエは「水性」、フェリシアンの相性は「ライオン座」、ユーリエは、「カニ座」。

しかしこの二人には宿命的な共通点がある。

フェリアアンがヴィオラ奏者なら、ユーリエはヴァイオリン奏者である。そして二つの楽器のデュエットはよくマッチする。モーツアルトのヴァイオリンとヴィオラのための交響的協奏曲作品番号三六四変ホ長調。

あの四月六日の夕べユーリエを捉えたのもこの曲で、この曲が弾かれ終ったあと、舞台裏で、始めて彼の顔を意識して視た、それはまた目の一撃 Un coup d'oeil であった、稲妻が瞬間光ったような・・・

薄暗い舞台裏にそれは昏く沈んだ青白い面輪だった、今まで見たことのない、その全体が、限りない憂愁に閉ざされていた、自分の中に閉じ込められているものが、どうしても表に出てこられないで、嘆きの声を発しているような・・・・白薔薇の顔・・・

人間の言葉ではそれは表現できない・・・・ただモーツアルトの、ことにあの調べだけが、代って表現できる、

私たちはよく湖に出かけてゆく、モーツアルトの生地の近く、彼の名と同じヴォルフガンク湖や又近くのモント・ゼー（月の湖）に。

この名称は私たちにとても気に入っている。月光の湖、夜半、全く人気のない、山々に囲まれた湖、ただもの凄いように青白い月光だけが晃々として湖面に光を投げている、動くものの気配は全くない、風もパタッと止まって、ひたすら沈黙がこの湖の世界を支配する。

昼間の明るい湖の畔りに華やかに若い人たちが群れている。真夏の太陽、泳ぐ人々もあり、ボートが走る、すぐ湖畔の宿屋をかねたレストランその戸外で木のテーブルを囲んでお魚料理がおいしい、

リンデンの大きな樹が影を投げている、

昼間とまるで異なった夜半の湖を私は描く、その森閑とした風景が、私の心を捉える、一切の物音がしない、人間の姿はない・・・・水中に魚も眠っている、ネグラに鳥たちも眠っている、

夜半の湖だけが私たちの愛の証言
それは白い貝の宝石筥の中に秘められて
水底深い地に眠っている
永久にその鍵は開けられることはない
ただ仄かに届く月光のみが、
私たちの魂の婚姻の保証人
いつか私たちは月光の翼にのって
原故郷に戻ってゆく

ノクチュルヌ No. 5
Nocturne 作品二十五.
― 詩曲　ポエーム

エルネスト・ショーソン　一八五五 ― 九九
フランスの作曲家　セザール・フランクを崇拝、
リヒアルト・ヴァーグナーの影響も濃い、

ポエームは一八九六年、つまり四十四歳で世を去った作曲家の四十一歳の時の作品。一八九七年パリで初演。彼を高く評価していたベルギーのヴァイオリニスト、作曲家ユージェーヌ・イザイに献呈されている。イザイは、フランスの産んだ最高のヴァイオリニストといってよいジャック・チボーが十歳頃の初デビューの時、賛助出演して、幼いチボーに負けん気を起させている。「ヴァイオリンは語る」のチボーの自叙伝にその時のエピソードがほほえましく記されている。此の世紀末から二十世紀にかけて、フランスで目ざましい音楽の開花を見ている。そしてこのチボー兄弟が、いかに音楽の天才を産み出していたか目を見張るほどである。長兄がそれでも一番並みで、、音楽院の学長に収まっている。次兄のアルフォンスは超天才ピアニストであったが、二十歳年上の女性と熱愛し、父親に引き裂かれて、南米ブエノス・アイレスに追われ、そこでもピアニストとして超大成功を納めるが、まるで、別れさせられた女性の呪いにかかったかのように、男盛りですべてを抛って世を去る。

というのはブエノス・アイレスで、彼は別れた恋人に酷似するアルゼンチンの女性と知り合い結婚する。しかし彼女はまもなく病で世を去る。たった一人の忘れ形見の娘をアルフォンスは、亡き妻の妹の献身的な助けを得て育てる。美しく成長した娘は結婚する、しかし、まもなく母と同じに早逝する。そこでアルフォンスの気力は尽きてしまう。彼は有名なピアニストで、音楽学院を創設、その院長であり、頼まれていくつもの音楽学院をアルゼンチンにも開き、いずれも大繁盛する。しかし巨万の富も、名声も、才能も、愛する妻と二十年を経て娘にも先立たれたアルフォンスには何の意味も持たない。彼はフランスの父と兄の所に手紙を書いて、直ちに引揚げて故里の土を踏みたいと訴えている。莫大な財産の処理も人任せ、というよりすべて投げだして彼は故国目ざして船に乗ったのか、乗る前に力尽きて、世を去ったか、そこまでは記されていないが。

何か読む人の身内に、ぞうっと冷たい風が這入りこんでくる。何か人間には図り知れない大いなる意志の存在を判然と看てとれる ――とジャック・チボーも記している。

天才音楽家の男子四人も育てたヤモメの父親も、人間のハートの問題については理解できず、超天才の息子をだめにしてしまった・・・フランスに残っていれば、ヨーロッパ中にその名は広まり、愛する女性と幸福に暮らせたろうに・・・男性が女性を愛する場合の多くは、結局は女性の中の母性を愛するのだから二十歳年上で何故

いけないのだろう。現に五十歳年下の女性と結婚している男たちだってかなりいるのに・・・・

そういう時代であった。男たちは恋のために、富も名声も才能も捨てられたのだ。ジャックの音楽学院の名教師マサリックは、ほんのしばらくチボーを教えただけで教壇を去った。そこに明記していないが、恋愛事件のためであった、彼は恋人を取ったのだ。

そしてこの詩曲（ポエーム）も、ショーソンの伝記によれば、彼の恋の経過を寫しているとされている。

そこに二つの要素が渦巻いている。噎び泣く官能の声。つまりヴェヌスの姿と、地上のイザコザを超えた遙かなもの、人間の手の届かないものへの憧れの声。つまりマドンナの像である。

やるせなさ、もどかしさ ——望んでいるものを手に入れたようでいて、本当は魂の渇望は、少しも充たされていない。魂の内奥に潜む憧れは、肉体の分泌物、体液などでは決して満足させられない・・・・

この情感に身を顫わせながら唄いつづけるヴァイオリンの調べが教えてくれる。聖堂の中に、薔薇窓（ロザス）を透かして落ちてくる、昏い中にさす一筋の光りのように・・・・何かを求めて人々は聖堂に集まり、聖壇の前に跪まずく、そして祈る。地上の人間たちの間では決してもとめられないものをお授け下さいと・・・・

その一筋の祈りがこの曲に託されている、それは天上に、まっすぐに向かう矢であり、この地上では、憧れとしてでなくては表現されないもの。

フェリシアンの誕生日のプレゼントは この曲にしよう。

C'est l'incarnation d'un corps féminin,ses gémissements,l'extase d'un instant,après la consommation corporelle. Le soupir de langueur, de tristesse et de regret après l'échange charnel.

近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（十）

第一章 重蔵大空に羽搏く

六、東蝦夷地の難路を行く

金子正義

（一）

絵鞆湊は、蝦夷本島から大蟹が螯を伸ばして内浦湾の海を抱え込んでいるような半島の内である。

半島の中程の形の良い母恋富士を眺め乍ら絵鞆岬の先を廻って入った澗に港があった。更にその奥は室蘭で湾内の何処にも漁船が出入できる。

渡島半島砂原からの渡し船は白鳥台地の真下にある絵鞆に入った。

六月一日夕刻の上陸に当っては、蝦夷全島何処の港でも厳しい船手形、人改め、荷物改めがあるが、既に先触れによって近藤隊の入港は知れていると見えて、案内役の余利与助と港役人の申し送り、引継ぎと手早く済んだ。

元元、渡島半島を離れると東蝦夷地は殆ど松前藩の、家老、重臣の知行地となっていて、沖の口関所や会所の場所は大番役や寄合などが治めているが、実際は下役の番所詰役、会所立会役が取り仕切っている。

交易取引場所は場所運上金を年百両から二百両程を納めた、本土の大商人廻船問屋の代理人か支配人、番頭手代が実務に当っている。

だが、絵鞆港は寛政八年八月英船プロートン号が海図作成の為に絵鞆、室蘭の近海を測量したり、更に寛政九年七月再び出現して室蘭湾内に入って碇泊し、付近の測量のみか、其処を基地として樺太と大陸との海峡を探りに行く等の我が国法を無視した狼籍をなし、沿岸の漁民を脅かし、絵鞆、室蘭、虻田等の住人を不安に陥れた。

松前藩の通報で動揺した幕府は、慌てて「異国船漂着の事により重ねて防備の強化をせよ」との令を発した。

其れに依り絵鞆湊は知行地なれども、寛政九年十一月より松前藩直接の支配地となっていた。

近藤隊は白鳥台地と幌萌山の峡間に在る陣屋に入って、陣代の酒井五左衛門の出迎えを受け、早速五左衛の案内

で陣屋内外の見分をした。
陣屋の前面は一町程は石積みの防塁となっていて、見張台もあるが砲撃用台地は築いていなかった。
酒井五左衛門に依れば
「大型異国船には陸上よりの大筒などは効果なく、石積み防塁も上陸に備えての銃床に過ぎません。尚内浦湾に突き出た絵鞆岬の岩山に展望台と烽火台を設け、昼夜交替で外洋より内浦湾へ入る船舶を見張っております」
と述べ、
「其の後、今年は何事も無く平穏ですが、昨年プロートン号が引揚げた同じ頃、択捉島に露人の植民団が上陸したとの急報が、国後島のアイヌの酋長ツキノエよりありました。直ちに探索の者を向けましたが、今は引揚げた模様との報告でした」
と露人の動静を知らせて呉れた。
重蔵は、プロートン号の乗組員が絵鞆に上陸した時、土地の者が恐る恐る遠方から物見高く眺めていると、異国人達も身振り手振りで話しかけ次第に狎れると、飲料水や薪炭、野菜や午馬の肉迄も求めるようになった。と聞いているので異国船員に接した者から直接様子を尋ね度いと思ったが、此度の目的は其れよりも択捉島の露人の消息を糺すことにあると思って口に出さず、陣屋に戻ると、酒井五左衛門に翌二日絵鞆を出立し度いと告げ、
「資材、食糧、重装備は箱館から厚岸へ荷船で先送りしてあるが、択捉島のことが気にかかるので道中を急行するにも更に身軽にしたい、旅荷物を宿駅通いの船で送る手配を頼み度い」
と申し入れ、長島新左衛門を呼んで其の旨を告げ、
「今後の行程仲々の難路のようだ、其処許は船便と共に行く輜重隊の長となって、陸路を行く本隊と宿泊地ごとに連絡を取り乍ら進んで貰い度い、尚、下野の源助と良助を配下とし必要な荷負人夫召連れて上船するが良かろう」
と伝えた。新左衛門は内心喜び乍らも年長者を煙たがって何時も本隊から切り離そうとしている、と不服の呈であり、下野の源助も同じように、
「手前は船は苦手で、山歩き岩登りの方が得意ですが、他に代わる者なければ己むを得ません。」
と此れも不服顔であった。新左衛門は更に、
「近藤殿、出発はもう二、三日遅らせたらどうか、前途の難路を案じ、拙者と余利与助で陣代の酒井五左衛門に、アイヌの荷負人夫の手配を頼んだが、十人程の屈強の若者を集めるには近くのコタンからでも二、三日はかかるそうだ」
と重蔵の性急の出立を難じて苦い顔をした。重蔵は、
「其れは結構、船の荷積み、荷下しに役立つであろう輜重隊は其等を連れて後から船便で来れば宜しい」
と取り合わなかった。

六月二日、重蔵はアイヌ人夫の徴募のこともあるので、卯の下刻の早立ちを巳の四ツ迄待って出立したが、新左衛門との度々の意見の相違と反目が前途に暗い翳りが生じたように気になったが、陣屋を立って砂地の径を東に十五、六町行く裡に太陽が中天に輝き始めて気も晴れた。
母恋富士を右手に見乍ら室蘭の漁港を過ぎて、北方の来島山系の鷲別岳が海へ伸びて鷲別岬となる山続きの道は滑り易かったが程なく峠に達したので、穏やかな内浦湾とは違う波立つ北太平洋の外洋を見下し乍ら昼食を摂って暫く休憩し、再び海岸沿いの道に降って幌別に向かい、申の下刻七ツ半には幌別の会所屋敷に入った。
村上島之烝の歩測によれば絵鞆より六里程の行程であった。
幌別会所の寄合番役には、箱館の番所奉行白鳥彦右衛門、絵鞆陣屋の陣代酒井五左衛門より幕府の見分役人に諸般協力せよとの先触れが相次いで申し継がれているので、万事手抜かり無き応対で近藤隊は一泊で充分疲れを癒した。
六月三日は卯の下刻六ツ半には出立となった。前夜半相当の雨であったらしく雨水が残っていたが、道中案内役の余利与助は
「却って行程内の砂地が踏み締められて歩き易い、だが、今日かかる白老迄の八里は東蝦夷道中の難所の一つで、山坂に大河、膝も没する砂原道で困難ですぞ」
と一同を励まし警告した。
会所屋敷から海岸寄りの砂道は、暫くは雨後の湿りで踏み締め易く歩けたが、北方の登別原始林続きの山林が海に迫る岩山道は滑り易く、樹間に硫黄の異臭が漂い流れ、近藤隊は咽び喘ぎ乍ら苦しみ歩いた。
漸く山道を抜けると草原となって丈余の葦茅が視界を遮り、草鞋は泥土に減り込み下半身泥塗れとなって漸く通過すると、次は赤膚の岩壁の間を抜ける岩坂道であった。異臭は益々激しくなって隊員の誰もが咳込み泪を払い乍ら、ツルツル滑る岩山を這い渡り、岩坂の狭間を抜けると目前に、硫黄の塊り岩を縫って湯煙りをあげて谷川が流れていた。余利与助が、
「登別前川です。此の川の奥一帯は至る処熱湯の吹き出ている焦熱地獄ですが、此の川を渡ると風向きが変って異臭も弱まります。湯煙をあげてない浅い処を選んで跳び渡って下さい」
と先に立った。
渡渉してから更に赤砂混りの山坂を越えると幅広い岩石河原の大川に出た。登別川の本流であった。蛇行する流れに膝迄漬り乍ら渡渉し、前方を遮る岩山を攀じ登ると四方嶺であった。余利与助は、
「天気が良ければ四方嶺の名の通り四方が展望されま

すが生憎霧がでましたなァ」
と残念そうに言った。
重蔵にも越えて来た難路も北方の山々も見えなかったが嶺の直ぐ真北に鏡のように輝く湖が見えた。余利与助が倶多楽湖と云う温泉湖であると言った。
一同が難路に喘いだ疲れを癒し乍ら昼食を摂っていると、時折り吹き去る霧の間に四方嶺の南真下に広々とした海が開け、岸辺に白波の立つのも見えた。
四方嶺を下りると二里程で白老と余利与助に励まされたが、それが大変な砂地の難行であった。
海岸に迫る山裾の下道は平旦な砂地に見えたが、砂は粉の様に軽く前夜の雨で多少は湿ったと言うものの、丈余の深雪の中を歩くようで山坂道や岩登りよりも足腰の負担が重く、のめり倒れようものなら躰が砂に埋没しそうになる。
一刻程も難行して漸く砂が浅くなり荻の茂る野の道に這い上って息を着き、更に一里程進んで白老川の河口近くに達した。
余利与助の指図で道踏み分けの足軽二人が対岸への渡し場探しに行く間、一同は河原に引っ繰り返って曇り空を仰いで休んでいた。
重蔵は傍に並んで横になっている村上島之烝に、
「今日の行程は長島新左衛門などには到底歩けるものでない、船便にさせて良かったのう」
と言い乍ら躰を起し
「然し、北辺に一旦事ありて異国の来寇ある時、兵馬の動員往還に道なくしては如何せん。速やかに人馬車輌の通行し得る幅広き道を開鑿しなければならぬ」
と呟き乍ら矢立を取り出して見分野帳に筆を走らせた。村上島烝も亦、地形の見取絵図を次々に描いた。
白老の渡船場は近くに在ったが、渡し船が一艘しか無く、向う岸から荷と旅人とを運んで船が来れば、此ちらから入れ替って船を出す掟だ、と渡し守りの頑な老人が乗船を許さないと言う事だった。
未だ日暮れ迄には間があるが対岸の船は仲々見えず、假令渡り来ても、其の船を含めて二艘では近藤隊の二十数人を一度に渡すことは困難であった。
道踏み分けの一人が、此の近くのコタンの乙名を知っていると云うので、余利与助を案内してアイヌの舟を頼みに行った。
小半刻程すると川上から余利与助と足軽を乗せたアイヌのバイダル（皮舟）とポンチブ（小舟）が流れに乗ってやって来た。
余利与助は渡し守りの老爺を揶揄するように、何にかアイヌ語で言い乍ら重蔵以下の隊員を三艘に分乗させて岸を離れた。
余利与助は重蔵に、
「白老の奥一帯の胆振りの原野、山林はアイヌの良き

狩場で白老川を始めどの河川も、此れから秋口にかけて鮭が産卵に河上りをするので、コタンでは漁用の舟を用意し始めていました」
と説明した。
アイヌの若者は櫂を二本交差して両手で巧みに舟を操つり、流れを利用して難なく対岸に舟を着けた。
重蔵は従者の金平に手荷物の中の携帯の米袋から五把程の包みを渡させた。
白老の聚落は付近の漁場の集散地でもあるらしく、小澗の港には何隻も漁船が舫っていた。
港の岸にある白老の会所から慌てて出迎えた会所番役は、先触れのあった公儀役人は船便で来るものと思っていたと、言い訳をして急いで町内の会所本陣へ案内した。
六月四日、隊員は前日の難行の疲労が残っている様であったが、良く晴れた朝となったので辰の刻五ツ前に勇仏に向って出発した。
会所本陣から海岸沿いの道を東に十町程行くと、北側の樽前山の山続きの崖が海に切り落ちる海岸段丘の下道となって、僅かの道幅の砂地の岩道が帯のように続いていた。前日の白老の砂道と同じように歩行困難で隊員は喘えぎ喘えぎ岩根伝いに辿って行くと、程なく樽前山山系の勾配も緩くなり山裾の海岸段丘は消え、樺、蝦夷松の林道となって、漸く踏み締める足に大地の確かな反応が感じられるようになった。
豊かな緑の木の間を透して遙か東の果て迄勇仏平原の縁の広がりが見えて来た。
秋の紅葉が美しいのであろうか。錦丘と和人が名づけた展望の佳い丘を越し、有珠川、小物川の二川を渡渉し小糸川と名のある海岸辺りの漁村に出て、村長の綱元の家で昼食となった。
庭先の仕事場で休憩している一同に余利与助が、
「勇仏の会所まで四里程あるが、此れからは海岸沿いの蝦夷松の道だから黄昏までには着くぞ」
と励ました。
処が、半里程海岸沿いの蝦夷松疎林の砂道を行くと、河口が海の入江のように拡がり向う岸まで十町もあるかと思う大河に出た。
余利与助は此の勇仏河には渡し船がある筈だと言って先に立って岸辺を遡行したが、上流も細長い湖のように幅広く渡し場も見えず到底徒渉できる深さでは無かった。
然も上流に行くに従って蝦夷松も這い松も少なくなり丈余の葦の茂る湿原となった。
道踏み分けの足軽二人は名の通り、湿地に沈み込まぬように葦の根方を踏み分け飛び渡り、渡河点を探し乍ら一里程北上し、漸く渡し場に辿り着いた。幸い和人漁師の艀舟があって対岸に渡ることが出来たが、次は逆転して南に向うと大小の湖沼が至る処にあって、斃れた獣の

白骨や枯れた古木、喬木の古根が岸辺に寄り集っていた。
日射の良い大沼の岸辺には一面の水蓮の葉が重なり合い、白い花茎を擡げた沼沢もあったが、近藤隊は湿原に沈む危険を防ぐに精一杯で必死になって湿原を通り抜け、道踏み分けの後に続いて漸く海岸筋の蝦夷松の疎林に出た。
漸くの思いで勇仏に辿り着いたのは夕刻酉の六ツ半であった。
勇仏会所の番役人は疲労し切って到着した近藤隊が、陸路を難行して来たと知って驚き、陣屋裏の宿泊棟に案内し、番役一同下働きの男女迄総出で泥塗れ、汗塗れの着衣の取替、入浴の世話と犒い尽くした。
宿泊棟は江戸より来る見分隊の為に急造したらしい丸太、厚板造りの三棟の宿舎で、土間の囲炉裏に古木の根株を焚き、大きな南部鉄瓶が自在鈎で掛けてあって、屋内の板壁に濡れ衣を乾かす吊り棒まで打ってあった。
近藤重蔵、村上島之烝は陣屋の奥座敷へ案内され、会所番役人阿部十郎兵衛が下女に酒肴を持たせて挨拶に出て、
「ご公儀の見分のあることは継送の先触れで承知して居りましたが、船で来るものと思い出迎え申さず失礼いたしました」
と白老の会所役人と同じことを言い、
「松前の藩役人や絵鞆の知行役人ですら、陸路は余り取りません。特に湿地帯などは土地の者ですら舟を使います。勿も冬期は犬橇がありますから冬の荒海を渡航するより安全ですが、和人は犬橇は好みません」
等と述べ沼沢地帯の夏草の美しさや底無し泥土の恐しさを話したが、重蔵達の疲労を慮って引き下った。
六月五日の朝は、水無月と云うのに霜風の吹きつけるように膚寒かった。出立の六ツの卯刻、東の山々は霧に閉されて見えず、地表は靄が立ち篭めていて、唯潮騒ばかりが盛んであった。
見送りに立った阿部十郎兵衛が、
「寒気は近くの弁天沼や、厚真、鹿沼の湿地から吹き渡って来るのです。今日の行程は湿原を避け専ら海岸沿いであると宜しいと思います」
と言った、重蔵が昨夜来の厚意を謝し別れの言葉を述べていると阿部十郎兵衛の背の後の空が薄く紅花色に映えて来た。
近藤隊の一同も歩く程に活気を取り戻した。然し砂浜伝いの進行は決して歩き易すそうに見えても、固い岩道を行くより足腰を疲れさせるのは変わり無かった。
三里程行くと幅広い厚真川の渡河点に至り、先触れでアイヌの渡し舟二艘が待っていた。五人乗りのバイダル（皮舟）とポンチブに無理して十五人程が乗り、ポンチブ小舟で重蔵と従者の金平、島之烝が乗った。いずれも

漕ぎ手のアイヌが長い櫂で立って櫂たり、船尾で櫓にしたり、巧みに船を操り進めた。
渡り着いた厚真の丘の下の道は固い道で歩き易かったが、二里程行くと再び大河であった。
北方遙かのハッタオマイ岳を水源とする鵡川（むかわ）と云う水量の豊かな清流で、此処もアイヌの渡し船が待っていた。
未だ産卵の盛期では無いが、背鰭を見せ乍ら遡行する鮭も多いが、アイヌの渡し船は巧みに鮭群を避けて触れもせずに対岸に着いた。
渡し場からは、蝦夷松林の岡の中の道で林の切れ目の丘よりの見晴らしが良いので、南の海を展望し乍ら昼食を摂った。
休憩後、丘から下ると砂浜伝いの歩き難い道であったが、再び大河であった。
其の名も美しい金沙を運ぶ大河らしく沙流川と云う、と余利与助が言った。更に
「上流の谷間や瀞には古より砂金が採れて、今でも生命知らずの流れ鉱山師が入り込んでいるようですが、此の河の流域より奥地一帯、日高の山林原はアイヌのキムンイオル（狩場）で、アイヌモシリ（アイヌの土地）としてコタンが散在しています。海岸には昆布が群生して春先には鰊が産卵に大群をなし、洋上には鯨が遊泳し海豹などの海獣も寄ってくるレプイオル（漁場）です」
と説明し乍ら渡し場に至った。
其の河も又、頬髯の黒々と豊かなアイヌの船頭であった。
河を渡って間もなく紋別の聚落であった勇仏よりの行程八里であったが、日のある酉の上刻には紋別の会所に到着した。番役人が重蔵と島之烝を会所内の控えの間に案内し、隊員人夫達を假屋の宿棟に導いた。
重蔵が旅袋を解いていると初老の番役が、夾算の書状を持って挨拶に見え、
「昨五日午後、絵鞆よりの荷送り船が入江に入って碇を下し、江戸の役人長島様の御一同が上陸して一泊し、今朝早く出航致しましたが、近日中に同じく江戸よりの役人近藤重蔵様が来られるからお渡し致せとお預かり致しました。と夾算書状を差し出した。巻き糸を解いて披見すると達筆で
「蝦夷人夫の微募に手間取り候共荷負、道踏み分けの人夫和人を含め十二人を得て、三日未の刻過ぎ絵鞆湊を出航　四月巳の亥　白老に寄港致すと近藤様本隊出立後にて　直ぐ勇仏に向うも　風向き潮流の都合もあって紋別湊へ入り申候共　本隊未着との事　仍て当方は新冠に直航し　其の地にて本隊と合流致し委細報告申上度存候……　敬白」と簡約されてあった。
六月六日、朝霧が深く卯の刻六ツ半を過ぎても薄暗く曇っていた。番役が、次の新冠までは僅かに六里足らず

で、道も海岸寄りのアイヌの古道で歩き易いと云うので霧の薄らぐのを待って辰の下刻に出立した。

紋別の聚落の中を流れる富川の木橋を渡って椴松が美しく茂る湾入した海岸沿いに二里程行く裡に青空が見え始め、左手には百丈程の賀張山の裾野が緩やかな勾配の高原状に拡がって、ミズナラ、樺などの青葉が美しく続いている。

其の疎林の間に十五、六戸程のアイヌコタンが見える。

「ガバリコタンです」

と余利与助が言った。更に二十町程行って小山を一つ越すと山懐に十戸程のコタンが二つ三つ望見され、道に近いコタンの中に一際大きい茅葺のナセも見える。

「あれはコタンのエカシのポロナセ（大家）です。此処等一円は、昔の大酋長シャクシャインの流れをくむ、アイヌの名族が多く、松前の殿様も一目おく処です」

と余利与助が説明した。

海岸程丘辺りの道から北に廻って椴松の林の中に入ると、アイヌの聚落アツベツ（厚別）があって、右手の海岸近くの道筋から離れて十二戸程のコタンが在った。

どのナセの屋根も昆布や鯡などが干され、中には丸切り屋根が昆布で葺かれているのも見える。

近藤隊が差し掛るとコタンの彼方此方から犬が吠え立て、黒斑の大きな蝦夷犬が地を這うように唸り声を響かせ、児犬が飛び出した。ナセの後から半裸の子供達も出て来て近藤隊に好奇な眼を並べ立てたが、中の一人が大きな蝦夷犬の首根を抑えて呻きを制止させ皮の首輪を掛けた。喧しかった犬吠も一斉に止んだ。

蝦夷犬は春秋の狩猟には鹿や兎を追い立て、羆を吠え囲む猟犬となり、冬の橇や河川の積荷船の曳船には大役を果す、数頭が腹に皮帯をつけ川岸を走って遡行する船を引く等の業は一人前以上の働手をなすのである。

そうした蝦夷犬にとっては今は休養の時期でもあるが、屋根に干す乾魚や昆布などを攫う鷹や鳥の番犬となっているのである。

アツベツコタンから海岸通りを十町程東に行くとアツベツ川の河口であった。

アイヌの渡し船もあったが折よく干潮で、対岸の岩から結び渡してある麻綱を伝って浅瀬を渡り得るので隊員は渡渉し、重蔵は金平に手荷物を持たせ余利与助、村上島之烝等は道中器材等を持ってアイヌ舟で渡った。

アツベツ川を渡ってからは、左北方の加張山から続く丘陵が海まで延びて海岸段丘をなす崖上の道を一里半程行くと、再び大河であった。鵡川程ではないが河水に厚みがある深さの流れであった。

直ぐ向う側が新冠の廻船の寄港する小湊であるから、渡し船も出ていて近藤隊は足腰を濡らさずに申の刻には新冠に入った。

幸いにも長島新左衛門等の輜重隊の荷送り船も船着場

に入っていた。

会所に行くと新左衛門と源助等が喜び出て、

「海上は濃霧に悩まされましたが、折よく昼過ぎに霧の吹き間から新冠が見えて入港できました。先刻漸く積荷を宿舎に運び終えたところでご座る」

と新左衛門が珍しく笑顔で迎えた。

数日振りで本隊と輜重隊が一緒になって、三十六名の近藤隊は久しく会わなかったようにお互いに名を呼び合って談笑する声に賑わった。

会所詰所の大番役黒田重兵衛の手配で、会所詰所の裏の会所屋敷と海岸に面した廻船問屋の長崎屋の出張所に隊員が振り分けられ、会所番役の世話で身の廻りの始末衣服、具足の取替などに暫くは忙しかったが夕食迄には間があるので重蔵は新左衛門から絵鞆以降の行動の報告を受け絵鞆陣代酒井五左衛門の尽力で、呼び集めた道踏み分け人夫二人、荷負人夫和人二人、アイヌ八人を接見した。

アイヌはいずれも背丈は重蔵の肩にも及ばないが、短軀、頑強で、松前より砂原迄来た渡島半島のアイヌと違って漆黒の乱れ髪で口の周わりに入墨もしている。胸も素足の臑も毛深く、真直ぐに大きな眼を重蔵に向けている。

新左衛門が、

「二、三人は片言の言葉が出来ますので全部名をつけました」

と言って一人一人孝助、弟助、唐助、勘助、只助、と名を呼ぶと、それぞれハイ、ヘイ、ハ、アイ、等と返事をした。重蔵は新左衛門の意外な人使いの旨さに感じ入った。

続いて案内役の余利与助が

「今後の行程について大番役の黒田重兵衛より行路の説明を受けた方が宜しいかと思います」

と言ったので望むところと重蔵は夜食も共にすることとして、早速会所詰所に長島新左衛門、村上島之烝、下野の源助、良助を呼び、余利与助は勿論、道踏分けの足軽をも入れて夜食前の談合を始めた。

重厚であるが好人物らしい黒田重兵衛は、始めは遠慮して固くなっていたが、幕府役人が謙虚に道を尋ね請うと云うので気を許して話し出した。

「此処、新冠から先は今迄の道中と違って大分厳しくなりますぞ。昔は新冠川や此の先で越されたシベチャリ（新内）川が東西蝦夷地の境でした。東のメナシクルアイヌと、西のシムクルアイヌは、二つの河に産卵に登る鮭の漁場争いを度々やっていましたので、此れから秋口までの産卵の最盛期には普段は大人しいアイヌも気が荒くなりますので、人夫のアイヌ扱いにも充分注意が肝要です。」

と土地柄を前置してから

「此れから東は山は嶮しく海も雲霧に閉ざされることが多く、土地のアイヌですら岩場で波に浚われます。特にオンネエンルム（老人の突き出した頭）とアイヌの云う襟裳岬を越えるのは容易ではありません。岬の沖合で親潮（寒流）と黒潮がブチ当って海霧が発生し、夏は南風に押されて陸へ吹き登り、一面の濃霧に包まれて一寸先も見えません。然かも海岸は日高山脈の激しい起伏が海へ落ち込む断崖をなして、波打際は鋭岩礁になっていますので、引き潮の刻限に岩から岩へ張った縋り網に頼って渡るのですが、到底老人女子供には渡り切れるものではありません。」

「襟裳岬を越さずに迂回する山道は無いのか」

と長島新左衛門が訊くと、

「襟裳岬にかかる手前の幌泉より山越で庶野、猿留へ出る山道がありますが、密林の中の獣道で狼や羆が出るので土地のアイヌでも日が暮れると通りません。

やっと岬を越して海岸に出ても更にビロウ（広尾）に出る迄のトセップ岬からルベシベツ岬の海岸が、襟裳岬以上の奇岩、絶壁の岩場です。

従って陸路よりも海路を行くのが一番です。襟裳岬沖は、先程申し上げたように親潮、黒潮のぶつかり合う危険な海ですが、夏の間は日和、風向き、潮流をよく知る土地のアイヌは、二、三人の小人数でバイダル（皮舟）ポンチブ（刳り抜き舟）で往来します。勿も此処だけではありませんが、国後島渡りの海岸船イタオマチブネがあります。一枚帆の柱の巨木の刳り抜き船ですが、コタンの乙名に依頼して出すこともあります。乙名がコタンの連絡、急報に使う二本帆柱に扇状の帆を張るカリンバテシカチップ（板綴舟）もありますが、和人には危険で乗れません」

長島新左衛門が自分達が乗って来た荷送り船はどうかと訊くと、

「小湊ごとに乗り継ぐ荷船ですから、此処迄は便利でしょうが襟裳岬の沖は一寸と無理でしょう。潮みち、風向きを心得た秋田屋、浜田屋等の廻船問屋の帆船や、箱館から厚岸、根室に通う長崎屋の大型船で行くのが一番安全です。

時には松前から厚岸まで往還する高田屋を始めとする北前船を利用することも出来ます。何故箱館で乗船なされなかったのでしょうか。

二、三日後に長崎屋の白神丸が寄りますが、其れで厚岸まで行かれるのが宜しかろうと思います」

と強く船便利用を黒田重兵衛が勧めた。

長島新左衛門は直ぐ我が意を得たりとばかり、

「二、三日出発が遅れても、白神丸を待って厚岸に直航すれば却って早く先へ行ける。場合に依っては其の船で国後島の渡り口根室迄行ったらどうか」

と主張した。直ぐ重蔵が

「道中の難所が如何なるものかを見分するのも肝要じゃ。現地のアイヌや和人が船待ち日和見で徒らに日時を過ごしている訳は無かろう。陸路を往還する必要と利点があるのじゃろう。一体此処新冠より襟裳を越えて十勝のビロウ（広野）までどれ程か、何日程か」

と訊くと、黒田重兵衛は下役を呼んで絵地図を持ち出させ、

「部外秘なれども、先年寛政初年の国後一揆の後でご公儀へお届け申した図面なれば、特に今後の見分御用の近藤様にはお見せ申し上げます」

と巻き拡げて説明し始めた。

村上島之丞は

「然らばご免」

と絵地図野帳に写し絵描きし乍ら耳を傾けた。

「当地新冠より三石まで約六里、三石よりムクチ（筑地）浦川とも申す宿駅へ五里、筑地よりシャマ（砂馬）様似とも書きますまで三里、砂馬より六里で幌泉・襟裳岬にかかる手前迄三日、通して三十里でしょうか。

幌泉からは愈々難路のオンネエンルムとなります。始ず歌別川に沿って山道に入り、追分峠よりショヤ（庶野）トセップ岬迄出るのに四里程ですが、岨道獣道ですから一日がかりで庶野より日高のサルル（砂流）へ三里ですが百人浜の難所がありますから此れも一日がかり、サルルよりビロウ（広尾）に出る迄はベシベツ岬の難所があって四里程です。どうしても幌泉よりビロウ迄、難行六日と云う処でしょうか。宿舎はありませんが假小屋はあります」

と大要を説明した。重蔵が直ちに

「其の様な行路があり、途中の泊り小屋もある以上如何に難路と云えども越せない筈はない。義経の鵯越えではないが獣の道があるならば人馬も抜けられるであろう」

と重蔵は陸行踏破を強く主張して、今迄通り、輜重隊は海路、本隊は陸路を行くと断じた。

行路の難渋なるを聞いた長島新左衛門は敢えて反対せず黙っていたが、下野の源助が、

「手前は船は苦手で足腰が萎えて仕舞いますので陸路にして下され」

と言った。

近藤隊が陸路を行くと決まったと見て黒田重兵衛は、土地に明るい新冠の番役安藤三郎他一、二名の案内役をお役に立てましょうと申し入れた。乗用馬、駄馬をも用意させましょうと言った。

談合が終わると長島新左衛門は夜食もそこそこに、長崎屋の詰所に行き、船から運び込まれた未だ梱包された侭の船荷から、装具、用具、食料等を人夫に取り出させ、山中踏破に必要な物資を集め出して、明日の出発の準備に取りかかった。

夜中に迄かかる作業となったが、見事に和人、アイヌ

の人夫を使い捌いていて、忽ち山越えの装備を整えた。
重蔵は夜の二更近く迄燭光の下に働く新左衛門を見てともすれば家禄に安んじて惰眠を貪る者の多き泰平の世に、自から進んで今度の蝦夷地見分隊に加わった者だけあって一角の人物であると感じ入った。

続く

今見

社告（内規）

☆ 同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎しております。「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆ 維持会会員へのお誘い

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出でがあり、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座　〇〇一二〇－四－九〇八一五
加入者名　作家群編集部

掲載作品総目次

五十一号～五十九号

◇五十一号（平成六年二月）
九郎兵衛翰晦　大和禎人
詩「デュエット」
「寡黙」ほか四編　青木昭成
【連載】前橋公園殺人事件（四）　佐々木一郎
近藤重蔵・富蔵の生涯と（一）　金子正義
病葉の青春譜への返し歌　井上二三男
芭蕉のこと（一）
一句ひねる
詩「もう久しい」ほか　青木昭成
漢詩「潮哨録」（一）　鯨田遊海
カラオケ　大柴富佐子
侍マラソン始末　和田禎人
【連載】前橋公園殺人事件（五）　佐々木一郎
幻妖城異聞（一）　三戸岡道夫
近藤重蔵・富蔵の生涯と（二）　金子正義
◇五十三号（平成六年八月）
ついていない男（二）　佐々木一郎
漢詩「潮哨録」（二）　鯨田遊海
詩「ついばむ」　青木昭成
母の修学旅行　大和禎人
病葉の青春譜・終章　井上二三男
【連載】近藤重蔵・富蔵の生涯と（三）　金子正義
幻妖城異聞（二）　三戸岡道夫
◇五十四号（平成六年十一月）
きもないさん　佐々木一郎追悼号　鈴木昭三
かまぼこ　柴田富佐子
患者輸送　井上二三男
漢詩「潮哨録」（三）　鯨田遊海
詩「吊り革」をめぐる詩　伊澤敏久
流転　大和禎人
ミニ・カツラタロウ伝　三戸岡道夫
【連載】近藤重蔵・富蔵の生涯と（四）　金子正義
幻妖城異聞（三）
～～～佐々木一郎追悼特集～～～
青木昭成・井上三男・入田紹一・大和禎人
金子正義・柴田富佐子・三戸岡道夫・山根三枝子
◇五十五号（平成七年二月）
乾いた道の果てに（一）　柴田富佐子
詩「風の眼で」ほか　青木昭成
融資・赤信号（一）　三戸岡道夫
漢詩「潮哨録」（四）　鯨田遊海
自作自解わが作品余話（一）　大和禎人
【連載】近藤重蔵・富蔵の生涯と（五）　鈴木昭三
きもないさん　金子正義
近藤重蔵・富蔵の生涯と（平成七年五月）
◇五十六号（平成七年八月）
唐人館同窓譚「潮哨録」（五）　鯨田遊海
漢詩「ときどき風の眼で」ほか　井上二三男
梅雨の病室にて　青木昭成
詩「ときどき風の眼で」ほか　伊澤敏久
霧中水人　柴田富佐子
尻尾の先に繋がるもの　大和禎人
自作自解わが作品余話（第一部）（二）　有香和六月
レクイエム（四）　三戸岡道夫
幻妖城異聞（四）
近藤重蔵・富蔵の生涯と（六）
◇五十七号（平成七年八月）
自作自解わが作品余話（二）
梅雨の病室にて（二）
唐人館同窓譚（三）
詩「土いろに」ほか（六）
漢詩「潮哨録」（六）
赤い煉瓦塀の家　山根三枝子
世の中おかしなこと　東山高夫
レクイエム（第二部）　有香六月
出口のない部屋　伊澤敏久
すずかけの並木道　柴田富佐子
ごめんなさい　三戸岡道夫
幻妖城異聞（五）
近藤重蔵・富蔵の生涯と（七）　金子正義
◇五十八号（平成七年十一月）
マンション管理人（一）　太田和貞
公園から溢れて　鈴木昭成
長屋物語（白い裸像）　柴田富佐子
詩「三つの仮想」（七）　三戸岡道夫
漢詩「潮哨録」（三）　鯨田遊海
唐人館同窓譚（四）　青木昭成
自作自解わが作品余話（四）　伊澤敏久
すずかけの並木道（二）　大和禎人
近藤重蔵・富蔵の生涯と（八）　金子正義
ノクチュルヌ　有香六月
～～～井上二三男追悼特集～～～
大和禎人・入田紹一・青木昭成・金子正義
紺野秀治・山根三枝子・伊澤敏久・三戸岡道夫
柴田富佐子
◇五十九号（平成八年二月）
マンション管理人（一）　太田和貞
唐人館同窓譚（四）　鈴木昭成
自作自解わが作品余話（五）　大和禎人
詩「ふかい谷間」　鯨田遊海
漢詩「潮哨録」（八）　青木昭成
すずかけの並木道（三）　伊澤敏久
近藤重蔵・富蔵の生涯と（六）　三戸岡道夫
幻妖城異聞（六）
その時代（九）　金子正義
カルディニア　有香六月
梔子の花　香子正義

（註・スペースの関係で五十九号までに限りました。）

編集子メモ

「まんじ」が六十号を迎えた。

一年に四回の発行であるから、十五年つづいたわけである。「よくぞ六十号までつづいたな」という感慨もあるし、また、「やれ、やれ、やっと六十号にたどり着いたわい」という思いもある。しかし考えようによっては、「まだ六十号か」という見方もある。

「持続は力なり」という言葉がある。何事であれ、持続させることは、偉大なる力である。「まんじ」六十号を迎えて、ますますその感を強くする。

さて、これからの「まんじ」である。

いま「脳内革命」という本がバカ売れしているようである。その要点は、物事を積極的に考えていくと、脳の中に積極を促進する物質が増大し、消極的に考えていくと、積極促進の物質が減少してしまう、ということらしい。

どちらを選ぼうと、その人の勝手であるが、

「やっぱり積極的の方へ脳内革命した方がいいよ」

と、電車の内でも、茶髪のお兄ちゃんたちが喋っていたから、「まんじ」もそれにならったらどうかと思う。

すなわち、「これから何号までつづくやら」というのではなくて、「まだ、やっと六十号だ。七十号八十号、いや、百号目ざして頑張るぞ」である。

（み）

「まんじ」　第六十号

平成八年五月一日発行（非売）

編集　三戸岡道夫

発行　柴田富佐子

〒一〇一　東京都千代田区神田駿河台二―九
柴田方
「作家群」
（まんじ）編集部

☎〇三（三二九三）〇〇九四　柴田方

郵便振替口座　〇〇一二〇―四―九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　ミナミ印刷
東京都千代田区飯田橋一―六―四
☎　〇三（三二六一）一六一〇